創作

新しき農夫

伴野大聖著

創作

新しき農夫

伴野大聖著

創作

新しき農夫

伴野大聖著

第一章

宇宙は神のみ心である。靈魂は君のものだ。宇宙は君の心の中にある。（大聖詩篇）

田園は冬枯れて、今は一人の勞働する者もない。烈しい北風が、苅り取られた稻田の上を凄さまじい勢ひで、進行してゐる。空は千切れ千切れな斷雲が、やがて時雨となるだらうやうに飛んでゐる。東方に富士山は天空高く聳え、眞白い雪はその麓の方までも垂れ被さつてゐる。遠い禿山は、赤く又は紫に連らなつてゐる。山の根の茅屋の、裏籔の笹葉が白く光る。時々パッと白埃の舞ひ上る田の中の一本道は、一匹の犬も通らない。畠の所々にある、柿や桑は、葉が落ちて瘠せた幹がつゝるんつゝるんと立つてゐる。

この冬景色の上に、すつきりとした大氣を透して、冬の日の薄ら弱い陽光が射してゐる。

かくて大見原裕道は唯一人、唯一人で、この田の一隅に立つて黑土を耕やしてゐた。

「自覺せる自由の勞働よ！　勞働は神聖にして犯す可からず！　双手に打振るこの一つの鍬よ！

この廣々とした荒野は次第に起されて行く！　而してこの汗と自信との幸福よ！　あゝ、私はこの與へられたる大地に跪づき、涙と共に熱い感謝の接唇をするのだ！」

若い農民としての裕道の頬には、勞働の力强さから來る快よい微笑が浮ぶ。

蛙は冬籠りの夢を破られて時々外氣へヒョイと刎ね出される。何處からか渡つて來た小鳥の鳴聲が聞える。あの風に吹かれた堤の枯薄の蔭に居ることだらう。

ふと裕道は、鍬を手に突き、腰を伸して川の向ふへ眸を送る。と、部落持ちの共同墓地が、淋しく儚ない丘をなして見える。石碑は嵐の間に立ち、枯芝は風に吹き倒される。

裕道は、ふいと死の認識に思ひ當る。何もかも、何もかも、儚なく、憎むことは出來ないやうな氣になる。寂しく眸を瞑つて呟やく。

「曾つて地にありし亡者よ！　今は地の下に痩せ崩れた骸骨となつて、この寒冷な木枯を忍んでゐるのか？　あゝ、若しも生きてあるならば、お前等は、この淋しい枯薄に同情するだらう？何故答へないのだ？……春になつたら、枯薄も又若芽を出すだらうけれど」

この時、路を老いた女が一人、霜枯れた稻を負うて、よぼ／＼と辿り來る。貧しい虐げられた

第三階級農民の女房だ。腰は曲つて、脚は蹌踉と、顏色は蒼褪め、眼光は力無い。この女には縋がる何物もないのだらうか？　着てゐる衣物まで薄つぺらな破れかゝつたものだ。彼女は時々立ち止つては水洟をすゝり込んで居る。

「せめて、どうぞ、家へ歸つて、感冒を罹かないで呉れ！　神よ彼女の上に照覽あれ！」

　彼女は裕道に挨拶もしないで、田の中の一本道を、部落の方へ午飯に行くのだらう、消えて行つて了つた。

「彼女の家は、部落でも一番の貧乏な家庭だ。彼女の夫は病氣でもう二月も床に就いてゐるさうだ。それに彼女には子供が多い。彼女一人が働いて、どうして生活して行くだらう？……餘りに虐げられた時、人間は虚無的になり、罪を犯すのだが、……俺れは明日彼女の勞働を援けてやらう」

　裕道はふと仰いで日脚を見る。充分に午飯を食つてもいゝ頃だ。で、用意して來た辨當を取り出し、日當りのいゝ道の芝草の蔭へ行つて食ひ始める。

汗が冷えて來て氣持ち悪い。が、係はずに飯を喰ふ。旨い！　實に淸しい勞働の後の食欲は愉

快だ。又、先刻の女のことを考へる。

「彼女等は、もつと幸福にならないものか？……さうだ！　確かに幸福な時が來る！」

この時、裕道は氣が付かずに居たけれど、女が歸つて行つた部落の方から、一人の浮浪者らしい姿をした若者が歩いて來てゐた。裕道は彼の跫音が、耳に聞える程近く歩いて來た時ふと振り返て彼を見た。そして、突嗟に浮浪者であることを直覺すると、暗い表情をして、俛首れるやうに反對の方へ顏を反向けた。

「文明になる。都合のいゝ場所へ人間が集まつて都會を造つて住む。田舍の人も都會へ出て行く。野は荒れる。都會に不自然な罪惡が行はれる。太集の神は怒る。都會に不景氣が押し寄せる。失業者、浮浪者が出來る」

加速度を以つてこんな考へが、裕道の頭腦を通り過ぎる。實際今年の不景氣で、村をば毎日毎日一人や二人の浮浪者が通らないことはなかつた。浮浪者が出來る。しかしそれはその人間のみの罪ではない！　といふことを彼はよく知つてゐた。從つて、彼は毎日通るそれ等の浮浪者を睨視するに忍びなかつた。

今も裕道は、俛首くやうにして、自分の食ひ掛けの辨當を見詰めて小さくなつてゐた。
浮浪者の歩んで來る跫音は益々速く強く近づいて來る。裕道は益々小さく憶病に謙遜する。
浮浪者は彼の直ぐ前まで來た。と、急に立ち止つたやうな氣配ひ――裕道は、はつとする。
「今日は！」
その人が言葉をかけた。裕道は震へる。
「今日は！」と、徽かに答へて、眞赧な顔になる。
「よくお働らきになりますね！」その人の太い力强い聲が裕道の頭上で確かにさう言つた。
「エ」だか「へ」だか判らないやうな返事をし乍ら、裕道は恐る怖る顔を上げてその人を見る。
と、全身の血が一時に顔へ押し上るやうだ。その人の顔は引き締つてゐた。權威があつた。
目、口、眉、鼻、そして顔面の筋肉、それは、裕道の直感に一種言ふべからざる魅力を通ずる
彼れは鋭どく底光りのする眸で、裕道を見下ろしてゐる。裕道は見上げる。沈默！　氣味惡い凝視！　そしててれた狼狽の感情！　が、彼れはその太い聲で叫ぶやうに言つた。
「君！……僕に午飯を惠んで吳れ給へ！」

あゝ、何んて言ふ吃驚することを言ふ男だらう？　俺れが勞働するために、否勞働したために持つてゐるこの辨當を呉れろ！　つて言ふ。

「エ？」

「僕に飯を惠んで下さい！　僕は空腹で死にさうです！　僕は饑ゑてゐるのです。君！　失禮ですが：：：」さうだ！　彼れの眸は烙き付くやうに自づと裕道の辨當へ焦點されてゐる。彼は通りすがりに裕道の辨當を見たのだ。そして立ち止つたのだ。裕道は震へ出した。

「飯？へ！」

裕道は立ち上る！　と、彼れの顔が裕道の目の下へ見えるやうになる。彼れは蒼白い沈痛な顔を上げて決然とした口調で言ふ。

「失禮ですが、僕に貴下の辨當を惠んで下さらないでせうか？　僕は流浪の旅を續けてゐるものです。僕は昨日で持つてゐた錢を費つて了ひました。今日の旅路の費用はないのです。僕はまだ朝から何も食ひません。僕は饑ゑて居ります。失禮ですが：：：」

彼れはよろけるやうに裕道から一寸立ち離れる。十八九才の職工風の青年だ。彼れの眸は未だ

裕道の辨當を覗んでゐる。裕道は次第に落ち付いて來る。

「失禮ですが……」と、彼れは又言ひ掛ける。裕道は急いで手で彼れを制する。彼れの樣子は失禮や虛榮を飾るやうな考へさへもつかぬ程饑ゑに苦しんでゐるらしい。

「村で貰つて來るとよかつたね！　君！」

「イエ！　イエ！　村の人達は一粒の米も惠んでは吳れません！」彼れは恨らめしさうに裕道の顏を見る。天を見上げる。辨當を見る。何處かでキユーと音がしたやうだ。彼れの腹が鳴つたのだ。この饑ゑた青年の腹が鳴つたのだ！　と、忽ち裕道の眸に熱い淚がこみ上げたやうだ！

「君！　食ひ給へ！　早く食ひ給へ！　さア！」

「エッ！」彼は見上げる。二人の視線が會ふ。

「君！　食ひ給へ！　早く！速く！　さア！」

裕道は叫び乍ら夢中のやうに辨當を摑み上げて彼れの手に差し出す。

「さア！　君！　早く食ひ給へ！」

裕道は二十才の青年だ。彼れは十九才位だらうか？　彼れは受け取らない！　彼れは裕道の狂

人染みた興奮に吃驚した。彼れはじいつと裕道の顔を見上げる。
「サア、食ひ給へよ！」
裕道はやさしく言ふ。二人の視線が會つてる。この視線の會致よ！　これこそ人と人との感情を傳播する機械ではないか！　一分、二分。
彼れの沈痛な蒼白い表情に血潮の赤味が射して來た。彼の腹が又鳴る。彼れの瞼の裏に涙が溜る。熱い雫が頬を傳ひ流れる。
「有難う御座います！」
彼の右手が裕道の差し出した辨當箱を握る。木箱の中には麥飯に梅干の赤いのが一つ殘つてゐた。彼の手は小さく震へてゐる。
「これでもよかつたら、僕の食ひ殘りしかないのだ！」
裕道は、彼れが自分より年下であるらしいのを見ると、急に兄のやうな温情を覺えてきた。
「結構です！　結構です！」
彼れは、チラリ恥かしさうに裕道の顔を見る。

「ぢや、早く食ひ給へよ！　安心して……」

そして、裕道は何んと言ひ、何うしていゝか判らなかつた。

「食ひ給へ！　食ひ給へ！」

あゝ、さう言ふより他裕道には言へなかつた。

「有難う！　有難う！　ぢや戴きます！」

青年は改らためて裕道を禮拜した。そして裕道の見差すやうに道の枯芝の上へ蹲んだ。そして裕道を見上げた。裕道も枯芝の上へ再たび尻を下ろす。

「早く食ひ給へよ！」

「エ、……ぢや戴きます！」

彼はもう一度禮をした。そして裕道がやつたその箸で食ひ始めた。裕道は成る可く彼れの方を見ないやうにしてゐた。が、直き彼れの上へ視線を投げかけてゐた。彼は始め遠慮深さうに食つてゐたが、次第に堪へられなくなつて、軀を前へ曲げるやうにすると、一生懸命で貪り喰ひ始めた。彼れは裕道の顏をさへ見上げなかつた。裕道はその樣を見てゐ乍ら、急に彼れが、可愛さう

になつた。氣の毒で堪らなくなつた。自分がかういふ境遇になつたらと自省した。そして、ふと、曾つてこんな場面を見たことがあるやうな氣がした。さうだ！　十餘年前の、田舍の生活の安樂であつた頃は、村へ浮浪者が流れて來て食を乞ふと、一錢か二錢の金を呉れたり、又、飯時であれば、甘藷の蒸したのを呉れて慰めてやつたものだ。乞食等は殘飯を貰ふと、路傍の石垣へ腰かけて旨さうに貪り喰つて居た。あゝ、しかし今は、村人の生活さへ脅やかされる世の中だ。乞食には何物も與へなくなつた。共に生きて行くといふことが無くなつて來た。自分の身を守らねばならなくなつた。それでも乞食は次第に增加して行つた。罪も增へて來た。

（俺れ達は何んのために生きてゐるのだらう？　何故？）しかし答へるものはなかつた。

裕道は、遠く富士山の上の蒼穹を見上げた。

「御馳走樣になりました。」

突然浮浪者は、さう言つて辨當箱を草の上に置いた。そして感謝するやうに裕道を見た。

裕道はその眸を感ずると、急に彼れが親しい後輩のやうな氣がしてきた。裕道はもう一度よつく彼れの顏を見た。彼れには必然な元氣が恢復してきてゐた。

「どうだね、腹がクチクなつたかね？」

「エヽ、有難う御座います。お陰樣で生命を助かりました。實際飢ゑと言ふものは苦しいものです。苦しい絶望の中からは一つの光明を見ることも出來ると言ひますがね……。實に僕は飢ゑてゐたんですからね。貴下は、僕の食ひやうを見て面白かァなかつたですか？　飢！　飢は恐ろしい者です。飢のために心弱い人間は種々の罪を犯すのです。……實は、若し貴下が、僕に飯を與へるのを拒んだならば、僕は貴下を殺してまで貪り喰つたかも知れませんよ。」

そう言つて、彼れは裕道を凝視した。裕道は震へる。彼に力を與へたことが恐しいやうだ。

「君は何を言のだ？」

「僕は正常なことを言ふんです」

「君は何處から何處へ行くのだ？」

「僕ですか？　僕は東京から故郷へ歸ります。僕の故郷は近江の琵琶湖の東岸です。僕が生れ度くなくても、其處で生れた以上は、仕樣がないぢやありませんか？　しかし、僕の故郷は割合いゝ所のやうです。東京より餘つ程いゝです」

彼れは遠く西の空を見た。此處は富士山から十里程西方の南駿河の田舍だ。さらばこの青年は未だ數日の旅路を續けなければ、その故郷へ歸れぬであらう！

「何故に、故郷へ歸るのかね？」

裕道は、さう聞き乍ら、微かに東京からこの故郷に歸つて來た自分のことを思つた。都會の虛僞に誘惑され易い生活を遁れ、又故郷の自然と共に暮すための希望を以つて――。

「僕ですか？　僕は都の生活が否になつたのです。僕は人間がいやになつたのです。世が、社會がいやになつたのです。が、僕は死にませんぞ。決つして死にませんぞ！」

彼れは、さう鋭どい口調で反抗的に言ふと、きつと眸をすゑて、蒼白い顏の筋肉をピクピクツと痙攣させた。

「世の中がいやになつたら、最後の一線を飛び越すことが第一ぢやありませんか？　社會がいやだつたら改造すればいゝぢやないかね。僕の見る處では、君は隨分意志の强固な人のやうに感ずるが……」

「いや、僕は死にません！」彼は尙更ら反抗的に焦々して、

「僕は死にません。決つして死にません。そうです。僕の父は死にました。みんな死にました。あゝ、みんな死にました。しかし僕は死にません。死ぬもんですか？　僕は故郷へ歸ります。そして山奥へ隱遁します・・・。

社會改造と言ひましたね。ハハ、そんなことが・・・僕はやつて見ましたよ。東京で相當活動した心算ですよ。しかし、それもいやになりました。倦怠しました。そうです。僕が、故鄕を飛び出して東京へ行つたのも、實はその目的のためにだつたのです。社會改造のためでした。が、駄目です。何があります。永遠なる改造です。神はその路を敎へました。あゝ、僕は神と言ひましたね。ですけれど、僕は未だ一度も神を信じたことはありません。神があれば、僕をしてこんなには苦しめない筈です。ハハ、僕の言ふことはお可しかァないですか？」

「お可しくはないよ！」そう言つて、裕道は、次第に血走つて來る彼の瞳を氣味惡く、しかし慰めるものゝやうに見遣つた。

「君、神はありますよ。君は信ずることが少ないのではないのかね。君が信じなくとも、神は君の上に照覽して居るよ。僕は思ふに、君は餘程虐げられた人間のやうですね！」

裕道はよく東京の友達同志で、こんな議論をしたことがあつた。が、裕道は直ぐ彼れが社會主義者であることを知つた。これは始めの樣子で直感しては居たが、

「君は故郷の山奥へ隱遁するのかい？　何故此處の山では惡いのだい？　假令へばあの富士山の麓なぞは？　ア、そうそう、僕は思ひ出したが、山奥へ隱遁すれば、神を信ずるやうになるかも知れないよ。――僕は經驗がある」

裕道は、再び慰めるやうに彼れの顏を見遣つた。彼れの表情は次第に和らいで來た。一時の昂奮が靜まつて來た。そこで、彼は聲調を落して言つた。

「僕の故鄕へ歸るのは生れ育つた所を好く人間の自然の情からです。僕は小さい時、その湖の邊りの山で育ちました。貴下もそんな經驗があるんですか？」そう言つて彼れは、泌々と彼の顏を見上げた。そして怯々言つた。

「失禮ですが、貴下は一般の百姓とは變つて居られるやうですね。僕は先刻からさう思うて居たんですが？」

裕道はさう言はれると、眞赧な顏をした。

「いやそんなことはないんですよ！　僕は只の若い百姓なんですよ。しかし、君の言ふことが判る程の經驗があるのです」無意識で、言葉の調子まで變へた。
「僕も君が、普通の浮浪者とは一寸異つてゐると思つてゐるんですがね。君は社會主義者ではないですか？」
彼はハッと驚ろいたやうだつた。が、直ぐ眞面目になつた。そして決然として言つた。
「そうです。奴等がみんなでそう言ひます」
「失敬ですが、君はなんと言はれるんですか？　僕も社會主義者なら知つてゐる人もあります。僕も幾分この近所の人々からそんな目で見られてゐる者なんです」
「僕ですか？　僕は日本明治と言ひます」
「日本明治、日本明治、聞かない名前ですね。どんな團體（グループ）へ入つてゐたんですか？」
「グループ？　そんなものへは入りません。そうです。一寸ＭＳへ入つたこともありますが、駄目です。僕は僕の路を行くより他ない」
「それで故郷の山奥へ歸るんですね？　至極いゝことです。僕には君の言ふことが解るやうな氣

がしますよ」

「有難う！」

期せずして二人の胸に一種の親愛の情が湧いた。ふと裕道は足の疲れを感じた。木枯は彼等二人を吹いてゐる。向ふから一人の農夫が歩いて來た。で、裕道はやさしくはぐくむやうに彼れを見て言つた。

「君、君は急ぐんですか？」

「エヽ」

そして一寸彼れは考へたが、

「イヤ、急ぎはしません。何故ですか？」

「さうかね。急がなかつたらもつと話して行き給へ！　かういふと失敬かも知れないが、僕は君に同情してゐるのだ。君には何か深い事情があるらしい。よろしかつたら僕に聞かして行つて呉れないかね？　僕のやうなものでも、君のためになることがあるかも知れない。僕はもつと君と話し度いやうな氣がする。初めて逢つたやうではない」

「僕もそうですよ。僕も、もつと話しをして居たい氣がしますよ。僕の旅路は急ぐものではありません。それに私は旅には馴れて居ります。……が、貴下の仕事の邪魔になりはしませんか？」

「いやそんなことはない。若し日が暮れたら僕の家へ今夜泊つて行けばよい」

路を歩いて來た農夫は、益々彼等の近くへ來た。そこで裕道は言つた。

「君、尻を下ろして緩つくり話そうぢやないか？」

「有難う！」

二人は腰を下ろす。そして默つてゐる。そうして裕道は彼れが、「僕の父は死にました。みんな死にました。しかし僕は死なない！　僕は決して死にません！」といふたことを想ひ出し考へてゐる。その言葉が强かつたからだ。

「今日は！」農夫はやさしく言葉をかけて通る。

「今日は！」裕道は返事をする。そしてふと田の中の自分の鍬を見る。働らかねばならぬ。農夫は又、路をずんずん歩いて行つて了つた。ふと彼れは深い溜息を吐いた。

裕道は軀を動かして說き始める。

「君は先刻言ひましたね。僕の父も死んだ。みんな死んだ。が、俺は死なゝい、と。それはどういふ譯ですか？　人間はみんな死にますよ、君の父がどうかして死んだんですか？　でなかつたら……」

「エッ！何んですつて？　僕がそんなことを言ひましたつけか？」彼れは上身をつき出し、瞳を光らし、聲を喘まして言つた。

「言ひましたよ。君は大變激昂して言ひましたよ！　君の父は……」

「そうですか？　アヽ、そうです。そうです。僕の父は自殺しました。僕の父はみんな殺して自殺したのです。アヽ」

彼れの顔は又痙攣を始めた。

「何故？　恐ろしいことだ！……何故、君の父はみんなを殺して自殺したんですか？　みんなとは？」

「みんなとは母に僕の妹達のことです。アヽ、アヽ、アヽ」

彼れは狂ほしいやうな溜息を吐いた。そして身を悶へた。彼れの頰を熱い涙が流れた。裕道も驚いた。そして兩手で胸を支へた。

「聞く程恐しいことです。どういふわけで君の父はそんな慘劇を遂行したのです？　エ？」
「ア、、ア、、ア、、貴下！　僕の父は前科者です！　あゝ」彼は益々身悶へする。
「前科者！　前科者！」裕道は叫んだなり、ふと言へなくなつて了つた。そして三度び彼れを凝視した。彼れは泣いてる。沈默が流れる。少時して彼は重々しく話し出す。
「初めつから、よつくお話ししなければ、わかりません。僕の家は先刻も言つたやうに、近江の琵琶湖の東邊にありました。僕の村は百戶程ありました。可成大きな部落です。その村は貧乏な村でした。貧乏！　貧乏は悲しいものです。僕の村には三軒千俵宛も年貢米の入る地主がありました。それ等の家も昔しはそんなに財產家ではなかつたと言ひます。が、長い間に狡い人間が出來た時、村の土所を自分のものにして了つたのです。村には中流の家が無くなつて、その三軒の家と、貧乏な九十何軒かの小作人が出來ました。そしてその中で一番貧乏だつたのが、私の家だつたのです。
私の父が罪を犯したのもその貧乏からだつたのです。
私の父は、善良な人間だつたと信じます。それだのに何故罪を犯したか？

私の父が、青年の頃は、それでも私の家は相當に生活してゐたそうです。私の祖父といふのは早く死んだのだそうです。で、僕の父は、長い間私の祖母と一緒に暮してきたのだそうです。

私の父が何故罪を犯したか?

私の父が二十五で妻を貰つた時から、祖母が急に病氣で床に就いたのです。それでも、父は私の母と共によく働らいたので、私の家は暮らして行けたのです。祖母は三年半程休んで、遂々死んで了ひました。祖母が死ぬ前の年の暮れに私は生れました。そして、祖母が生れた年の來年一人の妹が生れました。その頃は未だ私の家もよかつたのです。その年私の家へ不幸が來始めました、母は妹を生むと、急に身體が衰へ始めました。母は父と同じ年でしたが、軀の小さい女でした。僕は氣の張つてゐた女のやうに思ひます。母は遂に肺病になりました。そしてずつと寢込んで了ひました。父は一人で働らき乍ら、母の看病をし、私達二人の兄妹を育てゝ行かなければならなくなりました。半年程しても母の病氣は癒りません。妹は隣り村の母の在所へ遣られました。私は四才になつてゐました。私は晝は母と遊び、夜は父と寢ました。父は實によく働らいたやうでした。その頃のことで今覺えてゐることが一つあります。何んでも晝間、父が寢てゐる母の頭

を毆つたのでした。母は烈しく泣きました。何んのためにそんなことをしたのか判りません。その時私も泣いたのでした。多分父は、一家の不幸に對する懊惱のために、可弱い母に八ツ當りしたのでしたらう。人間にはよくそういふ悲しいことがあるものです。

一年經つても母の病氣は捗々しく療りません。遂ひに父は罪を犯すやうになつたのです。父は多くの借金をして了ひました。母は働らかずに寢てゐて毎日お金を費つてゐるのです。醫者は無料で診ては呉れません。藥は無代で買へません。その他種々費るのです。一人病氣して寢てゐれば經費は案外かゝるものです。それに私と妹の世話もかゝります。父が一人で如何に一生懸命働らかうとてどうして食つて行けませう？　それに見遁すことの出來ぬのは、時代の勢ひです。日本は次第に文明國になる。華々しい文明の果實の蔭には、その文明の興隆によつての弊害に泣くものも出來るものです。日本は一等國になつた。が、私の父のやうな百姓には不幸であつた。百姓を虐める政府の政策が出來た。税はかゝる。生活の費用は急激に增加する一方です。が、百姓はそれだけの收入がない。私の家には一坪の田地もない。隨つて取れた米は半分は地主の所へ作米として貢がなければならない。そうです。彼等は土地は自分の所有だと思つてゐたのです。却

つて、人間が土地の上に附屬してゐる寄生動物だといふことを知らなかつたのです。
私の父は滿足に生活して行くことが出來なかつた。私の父は村で嫌はれ乍ら威張つてゐるKといふ地主から家を低當に百圓借りてゐました。そのKOといふ地主は、當主の祖父が高利貸をして財産を作つた家です。で、その當主といふのは、皆からよく祖父にそつくりだと言はれる程の人間でした。矢張り高利貸をしてゐました。その家の人々は毎日吾々より贅澤をして生活し乍ら毎年毎年金が出來て行くのでした。
私の父はその家から金を借りたのでした。一年經つても私の母の病氣は療らないので父は又、Kの家へ行つて金を貸して呉れと言ひました。その時Kの主人は言ひました。
「お前には家を低當に百圓貸してある。あれを返濟してからでなければ貸すことは出來ない。」
「でも私は今金が欲しいのです。どうしても」
「欲しいつて低當物がなくつては！　一體幾ら欲しいのだい？」
「二百圓ばかり欲しいのです。もうお盆になるのだから種々の拂ひをしなければなりませんのです。どうぞ旦那樣貸しておくんなさいな。私を信川して：：：」

私の父は嘆願しました。Ｋの主人はニヤ〳〵微笑み乍ら考へる振をしてゐました。

「どうしてもお前が欲しいなら、それぢや適當な保證人を連れて來れば貸して遣らう！」

「貸して呉れますか？　では石藏さんではどうですか？　駄目？　それぢや金作さんでは？　駄目？　ぢや一體誰れならいゝのです旦那？」

「乾さんはどうだね？　あの人ならいゝ」

「旦那、冗談を？　あれは村で一番の地主さんではありませんか？　どうして私等のやうな小作人の保證人になつて下さいますものか？」

「なつて呉れるさ？　お前がしやうとさへすればね」

「旦那樣、私等には判りません」

「お前は馬鹿だな。お前がその氣にさへなれば出來るのだよ！」

「どうして？」

「證文の下へ乾の姓名を書いて假印を押せばいゝのさ！　ハハハハ」

「イエ、旦那、どうしてそんな、そんな恐ろしいことが出來ますものですか？」

「出來なかつたら止めるだけさ。俺れは金は貸せないよ。そしてあの貸してある百圓も返して貰はうよ。それがいやだつたら家を貰ふだけだよ！」

「あゝ、あゝ、あゝ」

そうして私の父は罪を犯して了ひました。Kの主人のために唆かされて、乾の似非證文を書いてKから金を借り出しました。實際は百七十五圓しか受け取らなかつたそうです。利子を先に引いたのです。

私の父はそれから毎日〳〵恐ろしい悔の日を過しました。只一つの希望は母が壯健になることです。で、父の手厚い看病で母の病氣も少しはよくなりましたが、まだ起きて働らく程にはなりませんでした。時日は早く經過するもので、母が病みついてから一年半經つて、恐しい年の暮が迫りました。私の父は、毎日毎日焦々した狂ほしい日を過したことでせう？　Kの主人から借りた合計三百圓の金をどうしてもその節期には返さなくてはならなかつたのです。私の父には、無斷で他人を保證にしたといふ後れ心があつたのです。そうすることは、大變重い罪であるといふことを、私の父は罪あるものゝ過敏さを以つて、聞き知つて居ました。日は私の父の願ひを容れ

ずにずんずん進行します。

「あゝあゝあゝ――あゝあゝあゝ」

彼れはそこまで話して狂ほしく叫び身悶へした。彼の筋肉の痙攣は益々烈しくなつた。

「母は起つことさへも出來ません。私の父は決心してKの家へ行きました。

「どうぞもう一年借金の返濟を猶豫して呉れませんか？」と嘆願したのです。

「出來ない？　どうしても今年返せ？　お前が返せなかつたら保證人の乾から貰ふばかりだ」

「あゝ、何んとして善良な私の父が他人に迷惑を掛けることが出來ませう！　Kの家と乾の家とは仲が惡かつたのです。つまり私の父に似非證人を書かせたのは、Kの主人の卑劣な謀計だつたのです。私の父は泣いて許しを乞ふたがKの主人は聞き入れなかつた。そしてKの主人は最早私の家から何物も絞り取ることの出來ないのを知つてゐたのです。憎む可き奴です！　實に憎む可き奴です！」

「あゝあゝあゝ」彼れは泣きそうに激してきた。裕道は彼の手を握り締めて遣る。

「Kの主人は僕の父を告訴しました。詐僞取財です。すべては村人の上に判明しました。乾の家

では毛頭關知せぬことでした。隨つて拂ふ可き義務はありません。私の父は正月の寒い日の夕方家から巡査に縛られて拘引されました。母は絶望と恐怖のために、死ぬのではないかと思ふ程泣き叫びました。

三月になつて父の罪狀は確定しました。私書僞造、詐僞取財、そして一箇年の懲役を言ひ渡されました。そして彥根の監獄へ收監されました。

その時は、私の家はKの主人によつて競賣に附せられ、私と母は妹の預けてある母の在所へ行つて居ました。どんなに幼な心にも悲しかつたでせう？　私は母の胸に抱かれて共に寒い夜を泣き通しました。

私は近所の子供から、「懲役人の子」と言つて侮辱されるのでした。で、滅多に外へ遊びに出ることはなく、家にばかり妹と遊んで居ました。又、一人室內の暗い隅でつまらなくうづくまつてゐることがありました。私は五才にして貧のつらさを知る境遇に生れたのです。不幸でなくてなんでせう？」

「試練かも知れませんよ！　絶大な！」

「イエ！」

そして、彼は又、話を續ける。

「長い一年であつたが、父は眞面目に努めて出獄しました。私達は、母と妹と三人、そして母の在所の家の人々と一緒に赤飯たいて父を歡迎しました。父は蒼白い顏をして役場の人と一緒に歸つて來ました。私は家の門口で三時間も待つて、待ち切れなくて一寸家へ入つた時でした。父が出獄したのです。君！　どうして忘れるもんですか？　父は突然僕を抱き締めて號泣しました。みんな歔きました。……みんな歔きました。

三日の後に、私達親子三人は住み馴れた故郷を後に、在鄕の人々に別れを告げて淋しく東京へと旅立ちました。

私達は品川の木賃宿へ宿つて、父は毎日毎日仕事を求めて歩きました。母は幾分身體は恢復してゐました。

東京は大都會だ。種々の職業がある。前科者でも安樂に生活が出來るだらう？　そう確信して上京して來たのでした。

しかし貴下！　駄目でした。駄目です。駄目です。僕の父は戸籍謄本に赤字で書かれてあつた。それがみんな影響したのです。種々の職業紹介所へも行きました。しかしそれ等の所に居る人々もこの前科者に對してはいゝ顔をして周旋の勞を取つては與れません。新聞の廣告を見て探ねて行つても、前科者で妻子を連れて居ると聞くと、みんな無情にも拒絶せられて了ふのでした。或る日父は、市街の電柱に、大々的に出されてある東京市電氣局の電車の車掌、運轉手募集の廣告に接しました。父は、どんなに喜んだでせう？　一時に、何百人といふ人間を募集するのです。きつと使つて與れるに違ひないと考へて、品川の車庫へ出掛けて行きました。が、矢張り駄目でした。前科者は最早使ふ所がないのです。私の父は失望の極に達しました。そして、私と母が、頸を長くして待ちあぐんで居る薄暗い木賃宿の二階裏へも歸つて來ませんでした。私達は餞別に貰つてきた有金も殘り少なくなつて了つてゐたのでした。それで、二階のいゝ室から二階裏の暗い陰氣な部屋へ移つてゐたのでした。私達が如何に待つて居ても父は來ません。母はくよ〳〵物思ひに沈んで、果ては激しく咳をして咽び泣くのです。故郷の自分の實家が戀しくなつたのです。そこには自分の年老いた父母がまだ健在で野良仕事をしてゐるのです。利己的なものでも實際の

兄が居ます。そこへ歸つて行つたなら、當分どうかして與れるであらう！　母は女の他力本願な人に頼らうとする考へを持つてゐました。一層前科者の夫と別れて了ふかと思つたことがあるに違ひないのです。母は私を抱き緊めて歔欷し乍ら言ひました。

「あゝ、何んて因果な子だらう？」

　それに妹は、故郷の家に預けてきたのです。母は妹に逢ひ度くもなつたのです。このなり東京に居れば餓へ死んで了ふのではないか？　さうも思つたでせう？　そしてどうしても故郷へ歸らうと決心したのでした。

　一方父は、宿へも歸らず、失神したやうになつて東京市中を彷徨して歩いて居たのです。俯向いて裏通りや電車路を歩き乍ら、人に打突かりさうになつて、怒鳴られたりしたさうです。ふと父は一年入つてゐた監獄を想ひ浮べました。何んといふ恐るべき苦痛な檻であらう？　そして又自分がそこへ行つたのはあの憎むべきKの主人の仕術だと考へました。さうだ憎みても餘りあるKの主人奴！　と、思はずも齒切りをして唸りました。そして社會も惡いのだと考へ及びました。さう考へるのが當然です。社會が呪はしくなつた。世の中の何もかもが餘りにも味氣なく苦しく

辛かつた。父は死を考へました。そして思はずも絶望の涙を流しました。

氣がついて見ると、父は何處をどううろついて居たのか神田の水道橋の上を歩いてゐました。急激なけたゝましい太い氣笛の音に立ち止つて顔を上げました。眼前には巨大な工場が立ち並んで居ります。高く堅固な煉瓦塀、眞黒い煤煙を噴き出す煙突、それこそは政府の事業である砲兵工廠であつたのです。恰かも今は午後四時の退廠の折りでした。一日働らき疲れた數多の從業員連は、解放せられた勇氣を以つて、四方の營門から吐き出されるのでした。ぞろぞろそれ等の人達は幸福そうに自分の巣へ歸つて行くのでした。私の父は橋のたもとに佇ずんで、羨やましそうにぢいつとそれ等の人々を見送つてゐました。國民の幸福を計るべき政府の工廠でさへ、今は自分を使つては呉れないのだ。さらば俺れは何んのために生きてゐるのだ！……あゝ、死なふ、それより他に道はない！　死ぬより他に。さうだ。可愛いゝ妻や子と共に死なふ。愛するが故に殺さう。そして俺は死なふ。父はそう悲痛な決心をしてとぼとぼと夜遲く品川の宿へ歸つて來ました。が、母は一途に歸郷を說きました。泣いて故郷へと言ひました。で、父の決心もにぶりました。遂に私達は父、故郷へ歸ることになりました、私達は漸やくにして、旅費を拵らへたのでし

た。失意の中に故郷へ歸つたのです」

彼れはそう話してきて、憑かれたやうにふいと言葉を切つて了つた。そして呪はしいやうに天の一方を仰ぎ見遣つた。そして獨言のやうに語り續けて行つた。

「誰れしも、これ程苦しんだならば、最早いゝ道が展らけて來るものだと思ふでせう。しかし、それは未だ淺い考へです。人間には一生涯呪はれ通すものがあるのです。何んのためだ？　何んのためだ？　解れァしない！」

あゝ、私達、親子は都會に敗慘して再たび故郷へ歸りました。あゝ、しかし不運は何處までも蹤いて廻つた。新らしいよい道は認められなかつた。何處も何處も暗迷であつた。遂に私の父は最後の手段を取るより他なくなりました。

私達は、歸郷した後、ずつと母の在所に世話になつて居たのです。私達は以前のやうに激しく侮辱されはしなかつたが、何か折がある度に、「懲役人の子」と言はれるのでした。私は七才になつて小學校へ入學したのであつたが、みんなからそう言はれるのが辛らさに、始終學校を休みました。私は小さい時から割合感じ易い子であつた。隨つてだんだん人前へ出るのを嫌ふやうにな

つた。そして、必然に陰鬱な氣屈な少年となつて了ひました。環境は本性よりも力强いことがあるものです。私は生れる以後ずつと不幸でした。

その頃父と母は、母は病氣が一寸よかつたのです。父母は、母の實家の仕事の手傳ひをしてゐました。私達は親子四人そこに寄食してゐたのです。が、そういふ境遇は不自由なものです。まだ、母の兩親が生きてゐる頃はよかつたのですが、兩親が同じ年に死んで了ふと、母の兄達夫婦は、よくしないのです。それに伯父達のも、次第に子供が增へて來るものですから、寄食を置いたんでは、生活していけないのです。そして伯父の脊後には伯母が尻押しをしてゐるのです。時々母と伯父と喧嘩するやうになりました。伯父達も貧乏な小作人だつたのです。遂ひに私達は伯父の家を出ました。私達は村の端れの堤の蔭に、乞食小屋のやうなものを建てて、そこに住むことになりました。そして私達は少しばかりの田を借りて作りました。父も母もよく働らきました生存競爭の激烈なこの世に於ては、兎に角、働らくより他ないのです。それでも、私達一家は、その時は幸福でした。他人から如何に迫害され侮辱されやうと、一家四人が、眞に愛し塊り合つてゐる時は幸福なものです。父母は、實に私達兄妹を可愛がりました。若し私達兄妹が他家の子

供達に虐められてゐる泣聲でも聞かうものなら、父は狂人のやうに血相をかへて飛んで來るのでした。そして私が十才になつて、そろ〱父の手傳ひも出來るやうになつた時、父は幾度も幾度も自分達が如何に迫害され侮辱されて來たかについて語り、そしてきつと言ひました。

「なァ明治！　俺れ達はこんなに虐められて來たのだ！　そしてようく聞いとけ！　俺はお前一人に望みを繼いでゐるのだ！　俺達は迫害されて來た。だからお前が大きくなつたら、きつと、きつとこの仇は返して吳れ！　俺はそればつかりをお前に言つておくのだ！」

「あゝ、今でも、その父の聲が耳朶に殘つてゐるやうな氣がします。虐げられ盡したものの恐る可き反抗の叫びですぞ！」

　彼は一寸鋭い眼光をした。そして奥齒をキリッと鳴らした。

「一寸の間、幸福であつたと思つたのは、水の流れの一寸した淀み位ゐに過ぎなかつたのです。父は時々激しい咳をして仕事が出來なくなりました。一箇年の監獄生活や、失意の流浪の折に、軀の凡てを痛めてゐたのです。それが、母の肺病に感染してから、急に芽を萌き出してきたのです。父が働らかなければ、直ぐ生活に困るのです。で、どうしても私が母の手助けをしなければな

りません。隨つて學校は尚更らに休むばかりです。

「義務教育だ！　學校へ出ろ！」と、毎日のやうに役場や學校から手紙が來ました。しかし働かねば、生きて行けないものに取つて、教育がなんだらう？　學校が何んだらう？　そして、それがどうなることだらう？

妹も學校へ上つて居ました。そして私同樣みんなから、迫害され、侮辱されたのです。

「前科者の子！」「懲役人の子！　馬鹿！　お前の親はなんだい！　お前も親のやうだらう？」

そして、突いたり唾をひつかけたりする。

或る年、私の妹の組の一人の女生徒の下駄が、見えなくなつたことがありました。敎師は全級のものを集めてきびしく責めました。ところが一人の生徒がきみさんが盜んだ、と言ひました。きみ子とは僕の妹の名です。敎師はほんたうにお前が盜んだのか？　と言つてきつく責めたそうです。私の妹は、知らないと言つて、泣き出しました。すると一人の生徒は、懲役人の子が泣くと言つて笑ひました。敎師はそれを聞いたのです。そして私達兄妹が前科者の子であることを知りました。先入主的な一つの固定した觀念が頭腦の中に入つてゐると、見るもの聞くものがその

色眼鏡に作用せられて、偏見されるものです。その教師は、前科者の子であるといふ所からきみ子が下駄を盗んだのだと思ひ込んで了つたのです。そして終日責め惱ましたのです。私の妹はいつまでも泣いてばかりゐたが、餘り教師が責めるので、遂々私が盗みました、と、僞りの白狀をして了つたのです。何んといふ不合理な憎むべき行爲です。妹は多くの敎員達に依つて、夜まで叱責され、遲くなつて泣き乍ら、堤の小屋へ歸つて來ました。父はその話を聞くと狂ひ立つて怒りました。そして憤怒の涙を流し乍ら叫びました。「讐を取り度い！　讐を取り度い」

何んといふことでせう！　その明日になつて下駄を無くしたと言つた生徒が、他の場所へ置き忘れてゐたのだといふことが判明したのです。それでも、昨日叱責した敎師は少しも私の妹に謝罪しなかつたんです。

私達はかうしてみんなから苦しめられ虐げられ通して暮らしました。そして、遂ひに恐る可き最期の時が來ました。母が姙娠すると共に、その肺病が、再び威を振ひ出したのです。それでも母と父は、何方らか身體のいゝ方が無理にも勞働を續けて行きました。時には二人が枕を並べて寢てゐることがありました。父は再び死を考へるやうになつた。そして時々自殺だ！　自殺だ！

と叫びました。遂ひにその日が來ました。母が難產をしてその上澤山の血を咯いたのです。母は最早死を待つばかりの重態になりました。父も又、起つことさへ不可能なのです。私達兄妹がどうしやうがありませう？　たゞうろ〳〵泣くばかりです。こんな時にさへ、村人等は少しの救助をも與へては呉れませんでした。私は十三才の少年でした。私は夜道を醫者の所へ駈けて行きました。しかし、私の家であると聞くと、醫者は晝間の疲れで眠つてゐるから行けぬといふて拒絕しました。私は泣き乍らどうしやうもなく又、冬の寒い夜道を堤の小屋へ歸つて見ました。空には無數の星が光つてゐました。私が、家の前へ行くと家の中から、奇態な物凄い唸り聲が聞えて來るのです。私は何故か急に恐ろしくなりました。そして家の中へ夢中で飛び込みました。と、あゝ、父は物凄い死物狂ひの顏をして土間に立つてゐました。

「明治！」と唸るやうに叫んで、つか〳〵と私に押し被さるやうに近附いてきました。私は恐ろしい氣がした。そしてアッと言つて逃げやうとしました。あゝ、そのまゝです。父は私を殺さうとしたのだ！　私は肩を斬られた。頭根を切られた。無我夢中であつた。しかし私は恐ろしかつた。どんなに恐ろしかつたか、どうして忘れることが出來やう。私は無意識で逃げやうとした。

しかし駄目であつた。私は何もかも見えなくなつた。あゝ、私は眞暗い闇の中へ入つて了つたのです。幸福でもなく不幸でもない幽迷の中へ行つて了つたのだ。あゝ、殺されたのだ！　何もない！　何もない！　あゝ、あゝ、あゝ」

彼は兩手で長い髮の毛を掻きむしつた。

「恐る可きことぢやありませんか？エヽ、何んといふ、何んといふ！　ウム！」

彼れは、裕道に喰つてかゝるやうに、唸り聲で、きつく叫んだ。そして激しく呼吸をした。彼れは苦しそうであつた。そして益々身悶へした。顏色は蒼褪めて、紫色の唇がぶるぶる震へてゐた。彼れは惱ましそうに沈默して了つた。

裕道は、急に彼れの瘠せた身體を抱き緊めたくなつた。裕道自身變んな壓迫を感じた。

「君！　苦しかァないのかね？」

彼れはふつつり默つて俯向いて了つた。

「苦しいのかい？……ア、、君、それからどうしたの？　え？」

裕道は握つてゐた彼れの兩手を尙更ら強く握り締めた。

彼は深く重い溜息を吐いた。そしてふいと顔を上げた。おゝ、彼れの兩眼には涙が一杯溜つてゐるのだ。彼れはどんなにか悲しいだらう？人生の一番大きな悲慘な經驗をした彼のその時の追憶だもの！　泣くがよい！　泣くがよい！　泣くことだけがせめてものなぐさめだ！　裕道は、忽ち彼の掌に熱い接吻をした。そして、すゝり上げて泣き出した。

木枯はまだ吹き荒んでゐるが、このだゝつ廣い曠野に、相擁して嘆く二人の青年の熱情よ！それこそは虐げられし人々の上に濺く涙だ！　冬の寒冷を征服する炬火だ！

「もうと語つて呉れ給へ！　え！　ねい！」

「僕、これ以上話すのは心苦しいのです」

そう言つて彼れは掌で涙を拭いた。

「僕にも、君の苦しい心は判る、君がかうして生きてゐるのでも…………」

「ぢや、簡單に話しませう？」

そして彼は少し考へるやうにしたが、少し早口で語り始めた。

「何時間かの後、僕は眼が醒めたのです。すると、全身が棨り附けになつたやうで動かされない

のです。僕は又、何か言ひ續け乍らうと〳〵して了つたのです。成るべく簡單に話しませう！日も大分下りましたから」

彼は又、一寸言葉を切つて、大分西へ廻つた太陽を見遣つた。

「數日の後に、私が全然確かな意識に返つた時、私はすべてを知りました。父は最早長い間自殺を決心してゐたのです。で、母が重態に陷つた時、父は機會を見出したのです。私が醫者へ驅けつけた後で、母と妹を殺したのです。そして私の歸るのを待つてゐたのです。若しかしたら私をば殺さないつもりだつたかも知れません。といふのは、私が歸つて行つた時、父は最早自殺をしやうとしてゐたのでした。それに私の留守の間に母や妹を殺したのですもの。が、私が歸つたので、父は急に私を殺す氣になつたのです。私は今だにあの恐ろしさを知つてゐます。實に殺されやうとする刹那の恐怖は言語に盡せません！　人間は死ぬのはいやに違いないのです。だから私は今でも自殺しやうとはしません！

僕は逃げやうとしたが二ケ所斬られたのです。肩と頭を。……私が倒れたので、父は私が死んで了つたものと思つたのです。そして自分も咽喉を掻き切つて自殺を遂げたのです」

そこで彼は、唾をぐつと飲みこんだ。
「私だつてひどかつたのです。肩と頭を！　これ」と言つて、彼れは急に袷を衣た肩をづらして裕道の前へ差し出すやうにした。そして襟元を右手で押し展げて見せた。あゝ、肩と頸根へかけて、鎌で引掻いたやうな傷痕が、鮮明にのこつてゐる。
「ひどかつたね！　が、頸根の方が小さいね」
裕道は尚も傷痕を見詰め乍ら言つた。
「あゝ、その頸根のが小さかつたから僕は生命を助かつたんですよ！」彼れは衣物をよく合せ乍ら語り續ける。
「僕は町の外科醫院の病室で寝てゐたのです。で、この事情を、その伯父から話したのは兇行が行はれてから、一ケ月程經つて、僕の傷痕も、大抵附着した頃でした。私は、大抵のことは感ずいてゐましたが、改らためて父の兇行を聞くと、身も世もあらせず泣き崩れました。そして自分も一層のこと死んで了へばよかつと思ひました。で、私は殊更らに傷痕を引掻いたりしました。
　しかし、私は一人で泣き乍ら涙に沈んだ中で考へた。「俺れたちは長い間苦しめられてきたの

だ！ だからお前が大きくなつたら、きつとこの仇は報いて吳れ！ きつと讐は取つて吳れ！」と、沈痛な表情をして言つた父の顏を思ひました。「そうだ！ 父さん！ 父さん！ 俺ァきつと讐を討つぞ！ 俺ァきつとお前等の讐を討つぞ！」私はきつとそう叫んだ！「世の中の奴らァ呪、ひ殺してやるぞ！ 憎い奴だ！ 憎い奴等だ！」

私は退院した。そして伯父の家へ引き取られたが決して、愉快に笑はなかつた。勿論學校もそれなり止して了つた。只私には、復讐といふことばかりがあつた。私は第一に私の家を苦しめたKの家を呪つた。私は冬の初めの夜Kの家の納屋へ放火したが大事にならずに發見して消し止められて了つた。私は今でも覺えてゐる。マッチの火が、よく乾いた藁へ燃え移つてパッと燃え上つた時の氣持ちを。私は一生懸命であつた。私はさして恐ろしくはなかつた。「仇を報ゆるのだ！ 仇を報ゆるのだ！」そう叫んでゐた。

私はその夜故鄕を出發して上京したのです。幸ひKの家で警察へ屆けなかつたので私は追跡せられなかつた。

私は東京へ行つた。私はそれから新聞配達をした。三年した。その間に功名心に驅られたこと

もある。しかし仇を報ゆるといふ考へは抜けなかつた。前科者の子が何んだといふのだ！　馬鹿者共！　俺れは今にお前等をみな殺しにしてやるぞ！　と、何度考へたか判らない。私は十七才になつた。私は砲兵工廠へ職工に行かうとした。出來得べくば、火藥の方の職工にならうとした私は火藥を盗まうと思つたのです。が、駄目でした。僕の父が前科者であつたので、保證人になつて呉れる人さへなかつたのです。僕は始めて沁々と僕の父が如何にこの法律の下で苦しんだか？　といふことを考へたのです。僕も水道橋の上で泣いた。そして改らためて決然と叫びました。

「〇〇を持つてゐる奴等よ！　俺れはきつと、お前等を打ち殺して見せるぞ！」

〇〇を持つと、如何なる者でも罪を犯すものです。が、彼等の勢力のある中は、その惡をも押し通すことが出來るものです。が、倒さずにおくものか？

（何んのために人間は生れて來るのか？）

僕は、みんなみんな可愛さうになつた。自分自身可愛そうになつた。何をしやうとやがては自分も死んで行くのだ？　しかし、自殺することは決して出來ない。

僕は、忽然として山奥へ隱遁することを考へたのでした。圖書館へ行けといふのですか？　駄

目です。人間は考へれば考へる程自身の無知なことが判つてきます。
そこで彼れは改ためて重々しく言つた。
「僕の父の悲慘な事件は、未だ解決がつきません！　僕が先刻、神に對して未だ信じてゐないといつたのはこれです。
僕はこれで話して了ひました。東京の生活を話し度かつたが、要するに結果は同じことです。
君！　僕は山奥へ行きますよ！　そしてきつと何物かの解決を得るつもりです」
彼は急に立ち上つた。そして、衣物の襟を合せたり帶を締め直したりした。
裕道も立つた。そして、ぢいつと彼れの惱ましそうな眸の下を見据ゑて言つた。
「君が奥山へ入ることについては、僕は至極賛成する。どうぞよい解決を得るやうに！」
そして固く彼れの手を握つて、
「だが今夜僕の所へ泊つて行き給へ！」
「いや、僕は旅路に馴れてゐますから。では左樣なら。また逢へるかどうですかね」
「あゝ。だが、健全にね、健全にだよ！」

かくて二人は互ひに禮拜し合つた。そして彼れは、曠野の一本道を山の蔭へ薄闇の方へ歩いて行つた。裕道は鍬をついて立ち、遠去り行く彼の姿を見送つて呟いた。

「虐げられたものも虐げたものも、みな一つの道へ歸るのだらう?」

裕道は仰いで宏大な空を見た。そして自分の心にしつかりとうなづいた。

日は落ちた。そして彼の姿も消えて行つた。

其夜裕道は村の青年會館へ行つた。正月で新年宴會があるのだ。

「やあ裕道さん！　おめでたう」裕道の顏を見ると其の場の年頭である小山は立つて挨拶した。そうして更に言葉を續け「君、もう病氣は直たんですかね?」と聞いた。

「イヤ！　が、有難う！　もう直ぐいゝでせう！」

「もう東京へは行かないのですかね?」裕道の曾つての親友、高田が、眞面目に座り込んで言ふ。

彼は見る。「東京へかね?　東京?……どうして?　君！　僕ァ此所で生れたよ！」人衆は耳を澄まして靜肅に聽いてゐた。で、今の言葉を聞くと、急に、何故かぞくぞくつと嬉しくなつて、

そこに居る人が慕はしくなつた。彼等は俯向いて彼の衣の端を見た。

「故郷はいゝものだよ！」……彼は、瞳をこらした「兎角他郷へ放浪した者にはね――」

人衆は益々小さくなつた。顔が少年のやうに熱くほてつた。

(何んて力のある、あゝ、すばらしい人だ！) 小山は何か言ひ度かつた(俺れが年長者だから)

「君……君は、何をしました？　その、何を？……」

「僕ッ？……」彼は胸へ双手を犇と當てゝ「……何んでもしましたよ！　あゝ、何んでも、おそらく……見給へ！」彼は白紙を一枚指し出した。「讀めますか？」彼は睨つと見下ろして微笑む。

「エ、」小山は手に取つた。高田は膝を摺り出して覗いた。と、その拍手にみんな顔を集めて驚いた。血が火を與へられたやうに飛び上つた。

大見原の面が、まさしく神の示現のやうに清純に溫情を持つてゐた。瞳は秀麗に靜かに嗳かな涙をたゝへてゐるやうに見詰める。黑髮は房々と後ろへ垂れてすつきりした姿勢と渾融するやうである。然も、元旦の清新な宵の光りは斜面から彼の容姿を射し下つてゐる。

(あァ、貴下……此の人の衣にさへ縋つたなら)

小山は兩手の四本の指先きで白紙を擴げた。パツと光りが反射して過ぎた。

山上の日昇祈

われ、朝早やに起き出で
有度山なる高原に立てば
日は未だ伊豆山なる地球の突起に妨げられ、たゞ、そのま上なる層雲は眞紅に燃えたり。

されど、清新なる大氣は流れ
曉霞は次第に靜まり
確かなる夜明けに
物皆なは歐歌せんとす。

おゝ、幸ひなるかな

一人山上に立ち
物、皆に親しみ
ものみなを愛する吾れ。

吾れおもむろに地に座し、
天空に向つて祈りつゝあれば
聖書を讀み
おゝ、眞宗なる光りは赫々として上れり。

「おゝ、いゝですね！……實際」
「あゝ」彼はみんなの手を見た「僕はその時、鍬を持つて行つたよ！」
「眞個……」不思議に疑惑は起らない「耕作したんですか？」
「あゝ、何處かの畑をちよいと耕したよ！　黒い土が氷りついてゐてね」

小山は彼の下げた手を見た。白くしなやかである。人々は二度と熱くなる感激を覺えた。冬の冷たい風が流れて來た。彼が立つてゐる土間は、陰氣にうら寒むかつたので、彼は始終足を動かしてゐた。彼は煤けた障子や殊に低い天井を見た。と、懐かしい氣になつた。で、彼はニコリ優しく微笑んで青年等の眸に映つた。その微笑みが、微妙な力を持つて人々の心の奥へ傳はつた。と、みんな微笑みたいやうな氣がしてきた。

(何んだつて、そんなに他人振るのか？　たつた五月前に離れたばつかりの青年ぢやないか)

「君、上つて火にでも當つちや」高田は彼の方へ顔を上げて言つた。

「有難う！　有難う！」

火は切り抜きの居爐裡の中で、赤く燃え上つてゐた。「實際、外は寒いばかりだからね！」

彼は座敷へ上つて行つた。

「サアサアどうぞ！」みんなは席を開けて呉れた。彼は虔ましやかに爐邊へ座つた。暖かな火熱が柔らかな彼の頬に觸れた。で、上氣したやうに頬が赧く美くしくなつた。

「隨分酷い目に逢ひましたね！　相當寢たでせうね？」小山は矢張り氣取つて言ふ。

「あゝ、休みましたよ。脚氣つて奴、長くつてね・・・失戀病よりは短かいがね、高田よ！・・・何しろ七十日寢たんだ！」彼は脚を見た。瘠せて蒼白く細い脛を見た。

「七十日？　そんなに？　苦しいだらうね？」

高田は無意識にさう言つたが、何故か裕道が言つた(高田よ！　失戀病よりは短かいがね！)を忘れられない。

「あゝ、苦しんだよ！　而し、病氣するもいゝさ。僕ァ死なない氣があつたのでね」彼は靜かに胸を撫でた。「病氣すると徹底するよ！」

「何故だらう？」小山は指先きで火箸を持つた。

「何故つてさ」彼は高田を見た。彼と若い人々は熱心に聞いてゐた。彼等は瞬きしない。

「病氣すると死を考へるよ！絶望を考へるよ！　そこで神を――信仰――を求めるのだよ！　何故なら、病氣は犯せし罪の酬ひだからね！」

彼は、ずつと若い靑年達の表情を讀んだ。

(理解に苦しむ)彼とて、それを察つし得ない程、鈍感な代物ではなかつた。

「要するにね！　病氣になると、お祈りするやうになるつて言つたんだよ！」

人衆は考へ始めた（病氣と神樣と、どんな關係があるだらう？　犯せし罪の酬ひだつて。はて？‥‥。何しろお祈りだな。昨夜俺れが宅の室で、年の暮を歎いてゐた時、あゝア、俺れも一夜で十九になるのだつて、悲しく思つてゐた時に、恰かもその時、前の方から、病人の唸り聲が聞えて來たつけが。そしてお祈りの念佛が響いて來たつけ。‥‥それだ！　お祈りだ、きつと！）

奥平はやつとそれまで考へた。そして顏を上げて裕道を見た。二人の視線がバツタリ宙で逢つた

彼は裕道の滿眼に涙を湛へたやうな眸に引きつけられた。

「君！君は隨分變つたね！　急に」

彼れの横顏を見遣つてゐた高田は言ふ。

「あゝ、變つたらうよ！‥‥變らずにや居かないよ！」彼は一寸全身赤くなる「君等は、言はなくつても、僕の三年以前を知つてるだらう！」

燃え上る火を見詰め乍ら、靜かに言ふ。人衆の上に期せずして甘美な追憶が甦る。

「俺れが如何に、反逆的なエゴイストだつたかをね！‥‥知つてるだらう？‥‥が、人間は、他

人の心を、全部摑むのは容易のことぢやない！」
高田にはハッキリあの頃が考へられた。
「僕が一番よく知つてるね！僕はよく君のお供して海岸へ行つたよ！」彼の眸は輝やく。
「あゝ、そんな話しは止めよう！　それは只僕を樂しませる思ひ出に過ぎないよ！僕だけで考へてゐればいゝ……。それを君等に強ひるといふことは慘酷だね」彼は寂しい表情をして眸を潤した。「所で、村には何か面白いことがあつたかね？」
「何にもこれつて、不景氣で駄目だよ！　米は取れなし。賣るものは安く、買ふものは高くて迚もやつて行やァしない。百姓は實際駄目だよ！」小山は淋い顏になつた。裕道は、ぢいつと彼の目の下を見詰めた。
「百姓程虐められてゐるものはないよ！　もうこのなり行けば百姓は滅亡して了ふより外はない。一體、僕は、農商務大臣××××は何をしてゐるのかと思ふんだ。あんな奴、止めさせた方がいゝんだ。第一、現内閣を、崩さなくては駄目だ！」
「君は、政治をやつたね」彼は脅ぐむやうな表情をした。「政治は、神の位置に立つて、民衆のた

めに働らかねば嘘だよ！　貴族のために、そして空洞のやうな一つの權力のためのはね。そこには虚僞があるよ！　壓制、暴虐が行はれるよ」彼の美くしい眉は上り、眸は血の氣を帶びて輝いて來た。「眞個に、農民は餘りに虐げられてゐるよ」

「百姓は駄目だ。僕も町へ行かうと思ふよ。‥‥東京へでもね！」小山は平氣で言つた。

「此頃村には工場の職工が增へたよ」

「仕樣がない、仕樣がない、そりや‥‥田園は市街の侵入を受ける世だ。町には人間の中の又、人間らしいずるい奴が住んで居るよ」

彼は悲しく恥かしくなつた。彼は瞼の裏が熱くなるのを感じた。「如何に百姓が虐げられてゐるか？　善良なる農民が壓迫されて居るか？ね、君は知つてるだらう？　昨年の秋、伊豆のＫ川が大洪水のために氾濫したことをね。あの廣い田が、一面漂渺たる湖に變じて了つたんだよ。慘虐！　實に自然の人生に與へた慘虐だよ。ね、若し科家者が偉大なら、文明が大いに喜ぶべきものなら、何故あれを救ひ得ない？　又、僕は言ふよ。政治家がね、國會議員がね、選良なら何故速やかに改修しないか？　中學や高等學校や、大學を、一つ建てる變はりに何故改修に著手しない

か？　僕は最早あんな小さい、淺薄な無力な政治家には期待することは出來なくなつた。僕は文明にさへ飽きてきた。」

彼の赤い双頰を涙が光つて流れた。

「が、現在農民が虐げられてゐることは事實だ。このまゝ行つたなら、農民は自分は米を取つて米を食へない時が來る。あゝ、僕は言ひ度いのだ！　僕は言ひ度いのだ！　世界の農民よ！　世界の農民よ！　起つて同盟罷業をしろ！」……すべての沈默……「曾つては、僕は理想的に除々なる改良を思つたが」「起たなくちや駄目だ！　起つてこの制度を破壞しなくては駄目だ！　そして新らしいのを建設しなくては駄目だ！　世界の農民！」

みんな靜かに熱心に聞いてゐた。彼等は自己の胸中にすばらしい思想の芽生へるのを感じた。

やがて、人々が遣つて來た。即ち、その日は靑年會の新年宴會であつたのだ。準備が出來、式は始められた。靑年達は、三十疊間程の室の廻りに行儀よく坐つた。裕道も宴席の隅に居た。彼は、若やいだ、力の包臟された靑年達の顏を見ると、堪らなくいぢらしく、親しくなつた。

(このものこそ、俺れが引下げて立つものだ！）が、彼れは始終俯向いてゐた。(何故農民が虐げられてゐるか？　何故農民が不幸であるか？　そのものとして神聖な勞働をさへ、何故に掠奪せられやうとしてゐるか？。文明――現代の文明こそは、その原因であつたのだ。彼等農民に與へるものは、只宗教があるのみではないか？）

演壇には、青年團長石上が立つて挨拶してゐた。彼れは普通な言葉で、逝きし年を言ひ、この年の覺悟を述べた。それが了へて、青年團長が下つた時、期せずして人衆の眸が裕道の上へ注がれた。(この人に遣つて貰ひ度い。祝つて貰ひたい！）彼れはそれを犇々と感じた。立つて祝つて遣らねばならない。この虐げられた人達のために一時でもいゝ、眞實な安心を與へてやらねばならない）

彼は靜かに虔ましやかに立つて演壇へ進んだ。彼は全身の血が跳り上るのを覺えた。

「諸君！　(彼は最初に感激した）新らしい時が來ました。新らしく太陽が昇りました。私はこの日、この時を謹しんで諸君のためにお祝ひします。で、私は、今日、この輝やかしい演壇に、この胸に燃え上る生新な感情を抱いて立ち得たことを、無上の光榮とします。

私は諸君に言ひ度い！　今日此の時は、無意義に私をこの演壇に上せたのではないことを、然らば私は諸君に何を言はうか（彼の全身は震へ始めた）

兄弟よ！　さう言はして呉れ給へ！　兄弟よ！　僕は堪らなく君等がいぢらしいのだ！　あゝ諸君のためには死んでもいゝやうな氣がするのだ。兄第よ！　吾れ〱は一緒にぴつたりと喰附いて、生きて行かなければならないのだ。我々は同じ一つの神の子ではないか？　我々は、同じ一つの神の子ではないか？　一人一人歩いて行くといふことは、どんなに淋しいことだらう？　吾々は一緒に神樣にお祈りしよう！　あゝ、吾々がどうして神なしで生きて行かれやうか？　曾つて、私は病氣で長い間寢てゐました。その時、我は人生、宇宙なぞといふことを考へました。私はどんなに寂しかつたでせう？　遂に私は絕望に達したのです。私は死なうと決心しました。自殺を考へて、幾度あの鐵道線路や木の下を彷徨したことであらう！　或る晩でした。私はいつもの通り死を憶うて外へ出ました。ふとみると宏大な大空には星が一溢神秘的に輝いてゐます、私はその時、ふと神を認めたのです。おゝ、その時、私はどんなに嬉しかつたでせう！　思はず胸に手を當てゝお祈をしました。私はそして泣きました。

私は諸君のために幸福をお祈りします」

人衆は寞として聽いた。そして奥平は强固な自分の心を彼の前に跪づかし度くさへなつた。彼は壇を下りた。

やがて酒宴が始められた。裕道は一滴も飮まなかつた。飮めば浮付く、だから彼は近付かないみんなは淫欲的な雜談に遂には奇態な歡聲を上げた。

「おい、君、飮めよ、飮めよ！　今夜××へ遊びに行かう！」彼の肩を叩いたものがある。見るとそれは赤い顏をし、蹌踉とした小山の姿であつた。彼は何故かなさけない氣がした。

彼は外へ出た。夕暮近かつた。寒い木枯しが吹いて、西の空が血で彩つたやうに赤く夕燒けしてゐた。彼は遣瀨なかつた。

「みんな！　みんな駄目だ！　あゝ、しかしどうしやうもない！」

彼は入日に向つて步いた。「自殺より他にないのか？」彼は心内に燃え上る苦悶を捧げて、入日に向つて步んでゐる自分の姿を見た。彼は無上の哀傷に捉はれた。彼は思はず聲を上げて泣いた。

第二章

寂しい道は、夕闇の中に灰白く山邊の方へ消えてゐた。裕道は激しい嗚咽の後、涙の中に打ち沈んだ、心で考へた。

彼は。明治三十六年一月十五日に、富士山に程遠くないS灣に近い田舍の中流の農家に生れた彼も、矢張普通の子のやうに生れた。只、産聲が、響き鳴るやうに大きかつた。年取つてから始めての子であるが爲めに、家内は跳り上つて喜んだ。

「まア、この子は、強さうな男の子だね！　もうニコ〳〵してゐるよ！　この目がこんなに大きく光つてるね！　どうだね、この口をきつく締めて睨む所は……ホヽ……どれ！　私に抱かせてお呉れ！　どう！　此方へ！」

三日目から、みんなして抱き上げつこした。彼はさうした平和な幸福の中に幼年期を了へた。

若し、強いて誰れかゞ追憶を迫るならば、

（三才の時母の脊に負はれて、日露戰爭の凱旋祝ひを見に行つて、その華麗に燃え上る火に見入つたこと。四つの時の三月、姉の脊に負はれて、雪が一面降り積つた上を、或る家の横の道を歩いた時、何故かさわやかに明るく、しかしいた〴〵しかつたことを、その二つ位を語り得る位なものである。）

彼の少年時代も、平坦な道であつた。

只一つ、彼の生涯に取つて、最も悲しい物語りがある。

――それは、彼が小學校の五年生の時であつた。彼が一番好きで、毎日連れ遊んでゐた、四才の妹のS子が、裏の溜池へ落ちて死んだのである。

姉とS子の二人は宅の外から歸つてきた。S子はそれまで、近所の男の子と、土細工をして遊んでゐた。丸い團子を拵らへたりして、

「姉ちやん！　あたい手を洗つて行つてよ！」

姉は家の中へ入つて行つたので、彼女は一人溜池の邊へ行つて蹲んで、手を洗ひ始めた。暗く

なつて、いつまでも手が綺麗にならないやうである。‥‥で、彼女は、もつと、手を差し延べて水を掻いた。瞬間、足の底がずるッ！としたと思ふと、視界が眞暗になつて、胸がずーんとした‥‥。

五分程經つて、鍬を洗ひに行つた母が、怪訝な表情をして歸つてきた。

「何か黒いものが水に浮いてゐるよ！」

「木の代ぢやないかい？　あの邊にあつたから！」

父は答へる。母は不安さうに戻つて行く。

「あッ、‥‥Sが！　Sが死んだよ！」

叫聲を上げた。母は無中で水の中に飛び入つた。「S！　S！　アア‥‥‥‥‥‥‥‥」

ぞつとした恐怖が家内中の心へ泌み込んだ。瞬間みな驅け出した。

「Sが死んだ！‥‥Sが」母は叫びつゝ、狂氣したやうに死骸に取り縋り、泣き崩れた。

「死んだ！　死んだ！」父が唸つた。女達の泣聲が起つた。一勢に女達は、死骸に取り縋つて、身も世もあらせず泣き入つた。裕道も泣いた。彼は、腹の底の底からこみ上げて來る嗚咽を靜め

ることは出來なかつた。「S！　S！　あゝ、俺れが、俺れが可愛がつたのに……」そこで彼は、暗の池の邊の雨戸に身を靠せて泣いた。

泣き聲が隣りへ走つた。やがて人々が駈けつけた。

「おゝ、お氣の毒な！」

或る人は醫者の家へ走つた。火は點けられ、火は炎々と燃され、Sの小さく冷たくなつた軀は火に暖められた。醫者が來た。絕望である。きつい檢視吏が遣つてきた。

（肉身は微妙なるかな）

彼が、妹の死骸を、灯の下に見出した時、今まで蠟のやうに白かつたその顏が、サッと赤味差したやうであつた。そして鼻口から出る白い腦汁のやうなものゝ中に、血が赤く滲み上つた。

その明日、彼女の小さい白い棺は、少しの人々に送られて野邊の道を墓へ行つた。裕道は、拭いても拭いても湧き上つて來る熱い淚を、止めることが出來なかつた。そしてその後、彼が、裏の溜池の邊に立つ時、彼は在りし日の妹の幻を忍び、悲しい溜息と共に、「S子！　S子！　S子！」と叫ぶのであつた。そしてぢいつと瞑目して憶ふのであつた。

（こんなに、小さい、淺い池水の中で、S子は死んで了つたのだ。まア、何んて人間は、こんなにも、一寸した壓迫で息の根を絕たれて了ふ程、か弱いものであらうよ）

――が、しかし、その中にも、彼は人以上に早熟な少年であつた。性的にも精神的にも。

（十三才にして、自宅に下宿してゐる、小學教員に戀し、それが酬ひられずして、遂ひに彼女は、遺書を認めて、鐵道自殺をした）

彼はさういふローマンスに、趣味を持つ、恐るべく、悲しむべき早熟な少年であつた。

しかし、彼は、甘美な幸福の中に、その少年期を過したのである。

――そしてその次ぎの時代に、悲痛な蒼黑い運命が彼れの前に現らはれた。その頃、彼は小學校の前の家へ行つて、夜はその家の從兄に英語を教はつてゐた。彼は、當然、小學校の九ケ年を了はれば、その上の中學から大學の法科へ行くつもりでゐた。

が、その頃、ふと、彼等の仲間に、海上者熱が靡亂した。彼もよく商船學校の規則書を取り寄せたりした。
「お前は、商船學校へ行くつもりかい？　規則書を取り寄せたりして？……」
　或る日伯父は言つた。
「エヽ、勿論！　僕、××へ行かうと思ひます。島ですよ！」少年の眸は希望に輝やき燃えた。
　それは、恰も丘の家の緣側でのことであつた。
　その日から、彼と父との間には、幾度も、幾度も交渉が始められた。案外にも、父、及び家族の者は大反對であつた。
「持つての外だ！　今まで九年も學校へ遣つたではないか？　早く家へ來て百姓になれ！」
（彼は、彼の生れた時の社會では、百姓はつまらなくなるから、勉強して偉くなるぞ！　と考へてゐたのであつた。それだのに、あゝ）
　彼は絶望した。日も、月も、山も、川も、草も鳥も、すべて見えなく灰色の中へ消えて了つた。
「何故遣つて呉れないのか？　もう一度行つて下さい！　伯父さん！」彼は涙の眸を据ゑて言つ

た。

「お止しよ！　お前！　迚も駄目だよ！　温なしく百姓した方がいゝだよ！」此の家へ嫁してゐる彼の眞實の伯母と、姉は言つた。しかし彼は「どうぞ、もう一度お伯父さん！　お願ひです」と嘆願した。

「さうか？　それでは、もう一度行つて見るよ！　實際、今の世ぢや、學問が第一だからな……軍隊でも判るよ……」兵隊上りの伯父はさう言つて出掛けて行つた。

　裕道は學校へ行つた。そして、二階の窓から、自分の家の空を見た。彼は太陽を見た。

「あゝ、どうぞ學校へ行かれますやうに」彼は新らしい學校の姿を幻に描いた。そして、ニコリした。永遠なる學生生活！

　その夕方、遲くなつて伯父は歸つてきた。彼は、道へ出て、待つてゐた。「伯父さん！　伯父さん！　どうでした？」彼は、一散に其方へ飛んで行つた。伯父は答へないで、地を見詰めて歩いてゐた。

「伯父さん！……ど、どうでした？」

伯父は、家の中へ入つてから、始めて口を開いた。
「駄目だよ！」
「エッ？」―彼は、クラ、クラッと眩暈がして倒れさうになつた。「何故です？　何故です？」
彼は、目に一杯涙を溜め、泣き聲になつて言つた。
「親父は折れて來たがね。女棄が頑强でね。殊に母は絕對に不贊成だよ。(長い間待ちに待つて來た子だ！　それに父は老いてゐる。お前を學校へ遣るには、宅の地所を賣り拂はねばならない！)さう言つて泣いて了ふんだよ(恩知らずめ！　今になつて親に心配掛けるなんて)(然しね、土地を賣つても、學校へ行けば立派な知識を買つて來るんだから。それに今ぢや學問第一の世だからね！)さう言つてね、隨分わしも勸めては見たのだがな、迚も駄目だよ。どうしても母が言ふことを聞かないんだよ！」
「………」―彼は何も答へ得なかつた。彼は低く首垂れて泣いてゐた。淚が、熱い淚が、心の底の方から、湧き上つてきて、止處なくたらたら流れた。(あゝ、絕望！　絕望だ。學校へも行けない生きてゐたつてどうなる？　死んで了はう。死ぬより他に何があるのだ！　それにしても母が憎

い。一層、一層母を殺して、俺れも死なう」彼は、實際悲痛な涙の中に、そのやうな慘虐な決心さへした。世の中に母を持つものであつて、一度たりとも、父を殺さう！　母を殺さう！　俺れの親は早く死ねばよい！　と、考へぬものが、一人でもあらうか？　考へる筈だ！　それは、肉身から生れる強度な愛の反映ではないか？　憎惡ではないか？

（刃を研いで、母の胸に突き差してやらう！）彼は、その光景を落ち沈んだ心に描きもした。

　しかし、彼は悲しく儚なくなつた。彼はそつと家を拔け出した。彼は闇の中の道を、泣き乍ら何故ともなく歩き出した。

（死なう！　死なう！　希望に破れたのだ！　死ぬより他に何があるのだ！）涙が、新らしく熱く流れ落ちた。彼はふと、歩いてゐる自分を見詰めた。（このまま、何處までも、何處までも歩いて行かう。そして死なう）彼は後から追ひ掛けてきた義兄や從兄に連れ戻られた。

　彼は、姉が敷いて與れた寢床へ寢た。頭が昂奮してゐて、どうしても眠られなかつた。腦の中をば、今夜のことが目狂ましく驅け廻つてゐた。悲しさよ、悲しさが又、新らしく湧き上つてきた。「遂には學校へも行けなくなつた。あゝ、そして死ぬことも出來なくなつた。何んのためだ？

何んのためだ？　罪もない俺れが、こんなに虐げられるといふことは……あゝ、何んのためだ！　俺れはもう行けないぢやないか！……」

彼の頰に冷たい涙が感じられた。

「さうだ！　おゝ、俺れはぢいつとしてはゐられない！　憎い奴等だ！　みんな、みんな憎い奴等だ！　俺れは呪つてやらう！　父も母も、人間共も、社會も世界も。何奴も此奴も、みんな片つ端から呪ひ盡してやらう！」

涙は冷たく頰を橫に流れた。彼の心は悲痛に、而も、大きな渦を卷いて、氣味惡く流れて行つた。彼は血走つた悽絕な眸をして、闇の中にすべてを睨み付けた。

——彼の性格は急變した。餘りに虐げ壓迫せられた時、（しかもそれが青春初期の影響に於ては尙更ら）人間は還境の支配を受けて、虛無にまで陷ることがある。彼れは習慣を踏み躙つた。そしてその性格は急變したのである。

呪咀！　呪咀こそはこの世の中に於て、彼れが依るべき唯一の武器であつた。彼はその最とも恐るべき武器を引下げて、故鄕へ、宅へ歸つて來たのである。が、母に一言も言はなかつた。彼

は射るやうな眼光をして母の老いた顔を睨み付けた。母は疊へ上つた。そして彼女は激しく泣き出した。「あゝ、恐ろしい！　恐ろしい！」彼女は息を喘ませて叫んだ。

彼は決して野良へ出なかつた。勞働をしなかつた。「いやしい野良犬共、くたばつて了へ！」

彼は、女のことを考へた。（そうだ！　女、女こそいゝ餌食だ！）彼は、自分の知つてゐる女を考へて見た。彼は美くしい女を物色した。美くしい女は、その美感によつて、どんなに人々を快よくするものであらうぞ！。

彼が見た多くの女（彼等の小學校に併設せられてゐた女學校の生徒等）の中で、一人の美しい女學生を見出した。彼女は丸顔のふつくらとした曲線美を持つた、男生徒達に、黒板へ名前を書かれる程の美人である。彼女はその年四年生になつた。十七才になつた。彼れはその時、十六才であつたが、曾つて、彼れも、彼女の美くしい姿に見惚れたことがあつた。そして不良學生達が黒板へ書くその名前を見逭さなかつた。

「中條文子！」今や、彼の心は、その美くしい幻を焦點として、炎々と赤く燃え上つた。彼は左のやうな手紙を書いて送つた。

親愛する孃よ！ 我れ御身を愛す。吾れ御身を思ひ初めてより、旣に三年、その間實に煩悶懊惱せり。今や、吾れ御身なくしては生くること能はず。御身我れに同情せよ！ 御身若し我れを愛さば、いとなつかしき文を賜へ！ 孃よ！ 我れは期待す。亂筆失禮

四月七日　　大見原裕道

中條文子樣 御許に

しかし、返事は來なかつたのだ。彼の胸は潰れ、彼は自分の無能を怒つた。或は二通目に戀詩を書いて出した。彼は、實に、今度こそは、と思つた。

四日目に返事が來た。彼は花の畫いた白い角封を見た時に、全身の血が、一時にサツと煮え上るやうな狂喜を感じた。彼は、童貞者が操を破る時のやうに、ブル〳〵と震へ乍ら封を切つた。

御手紙確かに拜見しました。そして貴下のみ心、嬉しく感謝致します。然し、私は何んと言つても未だ女學生の身分で御座います。男の方と御交際するやうなことは、學校で許して呉れ

ません、先日も私の級(くらす)の生徒が一人、男と關係して退學されました。私はそれを考へると、貴下と御交際出來ないやうに思ひます。今日も私、二階の窓から、貴下の家の窓を眺めて、思はずもホロ〳〵と熱い涙を流しました。「あゝ、何故私は窮屈な身の上だらうと思つて」そんな譯ですから、どうぞ惡く思はないで下さい。私から貴下に御手紙差し上げることば出來ませんのです。くれぐれも失禮を御許し下さいませ。失禮

四月十五日　　　　文子より

戀しき裕道樣へ

彼は、三度續け樣に返み返した。彼は天に向つて、わアと怒鳴り度い氣がした。
(きた。これこそ俺れが長い間待つたものだ！)
彼は、文の中に學校を恐れてゐることを思ふと、腹の底から笑つて、涙を流して遣り度くなつた。そこで、彼は直ちに返事を書いた。

「御身よ！　吾れ御身のために祈る。御身我れのために祈れよ！　學校がなんです、敎師が、吾々の愛の結晶は、學校、敎師、そして學制位踏みにぢることが出來るのです！」

さア堪らない。四日目毎に二人の間（港町と彼の村）を、手紙が舞ひ交つた。彼等は、あゝと、有頂天な喜びに捉へられた。彼等は每晚、活動小屋の暗い二階や、又は海水浴場の水光の下などで逢つた。しかし一度も言葉は交はさなかつた。何故か恐ろしくて。

或る日女の所からの手紙を見ると書いてあつた。

「私は貴下以外の三人の方と交際してゐるの。一人は帝大生、一人はW大生、今一人は水產試驗所にゐた方で、今は軍隊に行つてゐる少尉。みんな、一週間に一度宛手紙を吳れるわ」

「おゝ、此奴！　俺れを弄んだな！　よろしい、俺れはお前を殺さう。……いや、つまらない。一人の女と生命の交換なぞは下らない。それはニキビ靑年のすることだ！　さうだ！　俺れはすべての女を呪ふつもりではなかつたか？　俺れは、あの女と絕交しよう！」

その次ぎに、女から（〇〇橋の上へ來て吳れ）と書いて寄越した時、彼は行かなかつた。

――彼には實に恐るべき不良者の時機がきた。六月！　それは人肉の糜爛する時である。
彼れは、自分の知つてゐる女の美くしいのを選つて、手紙を投げつけた。しかし一人も返事するものはなかつた。彼には、又もや必然的な春の自殺がやつて來た。彼は山の森へ行つて縊死しやうとした。しかし、幸か不幸か紐が切れて死ななかつた。
彼れに一人の乙女が見出された。その乙女は、矢張り港町の酒屋の娘であつた。文子と同じく女學校の生徒であつた。唯彼女は三年生であつた。
何故彼れが彼女を知つてゐるのかといふなら、(彼れは庭球の選手であつたが故に、)放課後も校庭でも、生徒達がやさしく打ち合つてゐた。彼れの相手の打つた球が、女の方のコートへ飛んで行つた。彼はラケットを持つたまゝ駈けて行つた。球は一人の若い女學生の足下で止つた。
「濟みませんが球（ボール）を拾つて下さいませんか？」彼は腹に力を入れて言つた。
「エ、」彼女は眞赧になつて、球を彼の手に持つてきた。「どうぞ！」サッと耳朶まで紅くなつた彼女の美くしさつたら、彼れは恍惚としてラケットを落した）――それからである。
「前野英子！」

彼は、彼女の所へ三度手紙を送つた。しかし十六才の彼女は、まだ返事を寄越さなかつた。彼れは激烈な呼び出しの手紙を投げつけた。八月の酷暑の頃であつた。

「來いと言つて遣つたんだから」そう思つで彼は工業學校へ行つてゐる大島と共に川邊の神社の祭典に行つて見た。娘がゐたのだ！。

歡聲は人々の間からどつと上り、花火は間斷なく天に爆ぜる。しかし彼の心は燃えるやうに跳り、心臟の動悸は早鐘のやうに高鳴つた。

（英子よ！よく來て呉れた！　おゝ、いふことをきいて、よく來て呉れた！　僕はうれしい。僕はこんなに喜こばしいことはないのだ！。）

（生涯の記念だ！）彼はさう強く叫んで、乙女の全身を素裸體にして抱き締めてやり度かつた。しかし、彼女の側らにはその友が居り、自分の側には又その友が居る。どうかして、どうかして一言感謝の言葉を捧げ度い！」

彼は焦々して考へた。時は進んで行く。懷中時計のセコンドはチクチク刻み進むのだ。

時計が十一時半になつた。彼は最早全身がぶる〳〵震へて來るのを感じた。「今しなかつたら、

今晉はなかつたら？」

「妾歸らねばなりませんわ！　Hさん！　私一人で行くのは寂しいわ！」あゝ、彼女は最早さう言つてゐるではないか？（どうしよう？・・・苦しい。一體これはどうしたことだ！）

「左樣なら！」彼女は悄然として、人衆の中に彼女の家の方へ消えて行つて了つた。

（駄目だ！あゝ　英子も、あの美くしい英子もおしまひだ！）彼れは緊張し切つた絃を切られたやうに疲れた。彼は暗い道を矢張り唯一人、歩いて歸らねばならなかつた。

——その三日目であつた。突如として英子の手紙が、彼の家に福音をもたらした。

「愛する裕道樣。私は貴下を愛します。今まではどうしても書けなかつたのでした。何故昨夜は言葉を掛けて下さらなかつたの？　私眞個につまらなかつたわ。どうぞ眞個にいつまでも可愛がつてよ！　御返事まつてゐるわ！　さよなら！。

八月五日　　　　　　　　　　　　　　　　君の英子より

愛しまゐらす裕道樣へ

その十五日には、彼女は、遙々港町から、彼れの居る部落の畑まで逢ひに行つた。彼は、彼女の熱烈さに恐悅した。そして、又童貞者の一圖な感謝から、どんなに震へて物語つたことであらう？　彼は只、彼女のみが彼と逢ふために此の世の中へ生れて來た女であるやうな氣がした。そしてその幸福な少年の日の眞質なる戀は、一生涯記憶する光景であるやうに思はれる。

二人は、曠野の端の桃園の中の草の上に、長々と寢そべつてゐた。木々の葉は綠滴るばかりに小鳥は樂しく囀づり、蒼穹はよく晴れ渡り、日光は直射して白日をなしてゐる。

すべて、周圍にあるものが、二人の早春を賛歌して吳れるもの丶やうだ。

「英ちやん！　僕は何んと言つて君に感謝してい丶か知らないんだよ！　まつたく」

二人は熱い握手をしてゐた。

「わたしこそ、ほんとに貴下が氣にいつたの。よう貴下や！」

綠なす堤の上を赤い電車が通つた。

「アラ！　電車が通るのね！」彼女は立ち上つた。そして周圍を見た。期せずして二人の胸には

もつと生新な、もつと濃密なライフを要求する衝動が突き上つた。

「いゝ、いゝわね！　貴下！　いゝわね」彼女は白い肥つた暖かな腕を、ずつと奥まで露出した。

「何するの？」さう言つた裕道の聲は低く口籠つた。

「いゝことよ！　何んだつて、かんだつて」

（生新な濃密なライフよ、來れ！）彼女は急にブル〳〵震へ始めた。彼女は寢てゐる男の顔を見た。と、ぞつとして眼が暈みさうであつた。彼女はよろけた。その部厚な軀が、彼れの胸へどしんとしなだれ掛つた。

「いゝ、いゝのね！　あゝ――……」彼女の白い腕が、彼の頸に卷きついて、強く緊めつけた。三度熱い接吻が行なはれた。彼女は、急にすゝり上げて泣き出した。

彼女が歸つてから後、一ケ月の日が經つた。その時、彼等の戀は、遂に破綻の運命に逢着した。

女からの手紙！

（先日の貴下の手紙が、遂々母に見出されて了つたのよ！　そして、私酷く叱られたのよ！　し

かしもういゝの。けれど私、家で手紙書くことは出來なくなつたの。ですから此の手紙も今、學校でそつと書いてゐるのよ！）

あゝ、遂ひに戀には侵入者、妨害者が入り込んだ。實に熱烈な戀ではあつた。しかしこのまゝ續けることは、決つして彼女のためでない。彼れは悲壯な決心を固めた。

（よろしい。俺れは、彼女を諦めやう、男性的にな。そして彼女の幸福を祈らう！）

「貴女よ！ 信ずる英子よ！ 我はこゝに貴女に宣言する。どうぞ今後は、僕と貴女との間は、普通の兄妹に進んだことを思つて下さい。僕は君の幸福を祈るよき兄として、君と長く交際致します……」

英子はそれを讀んだ。そして絕望を考へて身も世もあらせず泣いた。（薄情男め！ お前は、私の魂を弄そんだ後、捨てるつもりか？）

彼女は男の仕打ちを恨んだ。しかし一年經ち、二年經ち、學校を卒業し、結婚し、不幸肺病に犯されて、今や死なうとするその時に於て、彼女は初めて、男の熱誠な壯快な、情けを身に泌み

て嬉しく感謝したのである、

――かくして、大見原裕道の青春の第一期は了へた。十六才の少年が、かくもすさまじく荒れ廻る姿は、又、悲しくもあつた。

呪咀！　呪咀こそは俺れの手段だ！　さういふ彼の個人本位の暴虐――。

――彼は十七才になつた。で、その時、彼は何を爲そうと考へたか？（金！　金こそは俺れが弄そぶに最もいゝものだ！）

彼は急に相場の講義錄を取つた。經濟原論に讀み耽つた。金錢利殖法の原理といふ本を買つた。一萬圓貯蓄法を人から借りて讀んだ。經濟雜誌を數種取つた。彼は三四月の間に可成りの經濟通になつた。相場の智識も得た。

（株！　會社の株に限る！　小賣商人を眞面目にやつて居たつて、いつ百萬圓の富豪になれる？みんな、今、どうかこうか言はれる富豪は、株で儲けたのだ！　親父！　東株を百買はうよ！

一株で百圓宛儲ければ、一萬圓ではないか？）

彼はさういふことを主張した。

やがて、株券が、すばらしい勢ひを持つて騰り始めた。戰爭成金が其處にも此處にも現らはれた。これを見ると、彼れは躍起となつて口惜しがつた。「親父！　あの時買つておけばよかつたんだよ！」彼には親が馬鹿に見えて仕樣がなかつた。「百二十圓の東株が、二百五十圓まで上つたんだ」

そこで、彼の善良なる父は考へた（ほんとに買つとくと儲かつたな。百株で一万圓！　千株十萬圓！　惡い筈がない、後悔は先に立たずかな）

その次ぎに裕道が目をつけたのが土地であつた。それは株の高い絕頂の頃であつた。（親父！　株を買つたつて仕樣がなくなつたよ！な、だから地所を買ひ占めやうよ。あの原でもいゝ。町の港の思惑地でもいゝ。又はあの濱の地所でもいゝ。工場の立ちさうな田でもね！　地所だつて倍ぐらゐには樂になるよ！　親父、何處か買つて置かうよ！）が、彼の父は、顏を縱に振らなかつた。彼は絕望した。案の條、その暮近くなつて、地價は大變な騰りやうをした。

――彼には十八才の日がきた。彼れは未だ向上する心を捨てなかつた。そして、今の世の中にあつては、成功するには矢張りどうしても、學問しなければ駄目だと思つた。

私は土から土へ行く。
太陽の光りのある中に
若い百姓で日を暮らす。

裕道は、自分の志望を諦らめて、そんな悲しい歌を唄ふことがあつても、矢張り向上する野望を捨てゝ了ふことは出來なかつた。若いそして力の充満されてゐる彼に取つては、その向上心を捨てることは、即ち生を拒絶するに等しかつた。彼は多くの人から、あの人は偉くなつた、と言はれるやうにならうと考へた。そうなるには、どうしても、他人より以上の苦勞と努力とをしなければならないとは自覺してゐた。彼は實によく勉強した。見てゐて凄さまじい氣のする程の烈しい勉強をした。彼は徹夜することが少なくなかつた。又町の基督敎の牧師の所まで、夜只一人

で英語を習ひに行つたこともあつた。彼は、先づ第一に、專門學校の入學檢定試驗（之れは、彼れのやうな中等學校卒業の證狀を以つてゐない者で、高等の學校へ行かうとするもの丶ために、檢定の上中學卒業程度の資格を與ふる國家試驗である）を、受ける心算であつた。そのためには彼は實に多くの參考書を讀んだ。夜、一人で室の机に向つて本を讀んでゐると、後頭部がガンガン鳴り出して堪へられないことがあつた。本が讀めなくなることがあつた。「駄目だ！」彼は沈痛に叫ぶと、思はずも涙を流すのであつた。

「お前のやうに、頭腦を使ひ過ぎては、お前は神經衰弱になつて了ふぞ！　何事でも適當な使用はそのものを發達させるが、過度な使役はそのものを疲勞衰頽させるばかりだ！」

何物かがさういつて嘲笑してゐるやうだ。

「あ丶、しかし、試驗の日は最早この二月に迫つてゐるではないか？　勉强しなければならない。俺れはまだ若い。が、時の經つものは早い。今！　今、合格しなければ、その機會は永久に來ないだらう！　お丶、勉强することだ。そのために俺れが死んだとて、俺れは本望ではないか？　遣らう！　何處までもやらう！　出來ないことはないのだ！　俺れ以前の人々も遣つて來たのだ

遣れば出來るのだ。出來ないのぢやない。遣らないのだ！）
彼は、さう決心しては、又起き上つて、机に向ふのであつた。
その熱誠を何人が拒み得やう！　その二月靜岡縣の中學で行なはれた、專門學校入學檢定試驗に、大見原裕道は最後から七番目で合格したのである。
彼の前途には、一つの光明が發見せられたと思つた。再びより以上な學問欲が湧き上つてきた。
彼はそれまでに、二度程東京へ行つてきた。若い彼には、華麗なその表面がどんなによきものとして、映つたことであらう！　そして、その魅力は、彼に三度目の逃走を考へさせる程の誘惑を與へた。
（どうしても東京の學校へ行かねばならない。心がこんなに退屈になつては仕樣がない！　高等教育を受けるには、どうしても東京でなければ……）
彼は、その四月になつて東京へ出奔した。そして或る法律大學に入つた。が、彼れが、歸郷した時、親戚の者は寄つて集つて、彼を田舍の家に押へ付けて了つた。後には又、狂暴な反抗自棄

がやつてきた。
彼は隣り村から毎日女學校へ通ふ。「小順賀梅子」といふ三年の優等生に激烈な文を投げつけた。彼女は始め少しも言ふことを聞かなかつたが、遂ひに屈服した。
夏の祭りの夜であつた。その時、遇然出會つたのであるが、彼女は彼の姿を見ると、忽ちピリッと顔面を緊張させて了つた。で、殊更らに醜く見えた。
遂ひに彼女とも別れる日がきた。初秋の頃から、手紙がピッタリ切れて了つた。
彼はその頃から、眞劍に文學をやり始めた。そして一つの長篇を創作し始めたのもその頃であつた。彼は文學の中にこそ、自分の適した寄るべき何物かを認めたのである。
「藝術！　藝術こそは實に意義ある精神の糧ではないか？　藝術は歪的だ。藝術による生活！生活による藝術！　文學は實に、人生に力を與へ、華々しくするものだ！」
——彼は遂に第三期の運命に逢着することになつた。彼は十九才になつたのである。

彼れはその年の始めに關西地方を旅行した。

名古屋の金鯱閣、伊勢の神宮、二見浦の風景、奈良の大佛、大阪の工場、京都の古曲的な風趣琵琶湖の明眸。

……彼れがそれによつて得たものは何んであるか？（それは自己の大聖である。自分こそは、神宮以上に、琵琶湖以上の景の所に、凡ゆる精を盡して祭られねばならぬ）

彼は、實に長い間、人生といふことについて考へてきた。幼ない十才の少年の頃から、否、彼れが生れたその頃から、彼れは、その必然の嚴肅渾融したる人生に就いて懷疑してきたのである。彼が（人間は何故生れてきたのだらう？　何んのためにかくは生きてゐるのであらう？　と、考へる時は、彼はすべてのものを疑ふ心に苦しんだ。彼れの懷疑が强烈なれば、それだけ彼れは苦しんだのである。）

彼は解決を得たかつた。目的を知り度かつた。眞理を摑み度かつたのだ。

彼は、雨の降る日に山の中へ入つたこともあつた。又、月の淸い夜、一人野に立つて月を眺め

てゐたこともあつた。彼はさういふことについて、實に多くの本を讀んだ。が、人生は遂ひに開かれぬ扉であるやうに思はれた。しかし、彼れは、未だそを放擲して了ふことは出來なかつた。彼れはそれなしでは生きてゐられない人物であつた。

彼れは妹が貰はれて行つてゐる港町の叔父を頼んで、「大學へ遣つて呉れ！」と家へ申し込んだ肉身は面を向けて話すと、憎惡に驅られるものであることを、彼は知つてゐた。

「若し遣つて下さらなかつたなら、僕には只自殺があるばかりです！」

彼れの三ヶ年の忍苦は酬ひられた。(あゝ、忍耐はすべきものなるかな)

彼れは哲學的の大學へ行く決心をしてゐた。(あゝ、俺れは愈々勉強することが出來るのだ！何んといふ壯快な驚くべき幸福だらう？)

彼れは、八月末日の夜、故鄕の停車場を立つた。(偉くなつて來ます！)

「身體を大切にな！　東京は寒いつて言つたから、風を罹かないやうにな……」

父の眸に、涙がキラリ光つた。

「あゝ、父よ！」

父の慈愛こそ、今始めて感ずる父の慈愛こそ、何んと根深い系統の血ではないか？

彼は遂に大學生となつた。

彼の下宿はＡ川近い山の手の長屋の一軒であつた。そこには、去年の春、夫に死に別れたといふ二十七才の砲兵工廠へ通つてゐる娘と、その娘の父だといふ頑丈な軀の所有者と、娘の叔母との三人住んでゐた。三人共、實に善良な人々であつた。しかし、世の中に、長い間虐げられてきた彼等は、すべて感じの惡い人間になつてゐた。娘は實に神經質であつた。彼女は、彼女の父が、或る富豪の未亡人と關係して出來た子であつた。父は何年かの後、女から子供を押しつけられて、その家を追出されたのであつた。今でも父は、六十才にもなつて、毎日一番の電車で郊外まで勞働に出掛けて行つた。彼れの樂しみは二合の酒を飲むことであつた。叔母といふ女は、力ない黝んだ表情のお人好しであつた。しかし彼等は、裕道を大層よくして吳れた。彼は感謝し氣の毒にさへなつた。彼が明るい三疊間を占有して了つたので、家内のものは、六疊間に三人雜古寢をしなければならなかつた。實にそこは暗い陰氣な惡蟲が湧きそうな室であつた。で、此の家に

は、この他に上り端の二疊と臺所があるばかりであつた。

（この善良な人々が、もつと日當りのよい、大きな家に安定出來ますやうに）と、彼は祈り度い氣になつた。しかし、そこには四十軒もの同じやうな（惡くともよくはない）長屋が、ぎつしり建てられてあつたのだ。

大學は、H山上にあつた。彼はそこまで、動搖の激しい電車に乘つて毎日通學した。そこにはみんな彼よりも年上の口髯を生やしたりした連中が、眞面目に机にかじりついてゐた。女子も二三十人やつて來た。彼女等は恐るべき勉强家であつた。彼女等は一つの集團を作つてゐた。講師はよく彼女等の質問に丁寧に返事をした。が、教授等の顏は、大抵寂しさうな陰影をひいてゐた即ち、インテリゲンチャの空虛に攻められる悲哀である。

彼は沁々東京へ來て了つたことを考へた。そこは喧騷と鬪爭と混雜との塵境であつた。彼の正しい弱い心は戰慄をさへ覺つた。

今、外をば祝賀會へ行く人々が、浮いた表情をして通つて行つた。汚ない川を越して電車が走る。煙火が間斷なく上つてゐる。日比谷に人が泣いてゐるやうだ。

彼は自分の室で勉强してゐると、沁々淋しくなつた。それは都の初秋から來る孤獨者の寂寥であつた。朝からの崩れるやうな烈しい雨が止んで、夕暮れの青い澄んだ空に凪いだ雲が白く映る。窓の前にある朝顔の葉が、黄ばんでひえびえする風にゆら〳〵搖れた。窓のすだれが、バッタンと格子へ突き當る音がした。彼の家の前にある井戸端へ、長屋の女が寄つてきて、水がばしやばしや音立てる。赤子を負ふた女の子が二人、その青い裳が飜へる。

彼は泣き出し度いやうな氣がした。そして今夜も、都の夜を漂泊したい氣分に誘はれた。前の家から、三味線の音が聞え始めた。彼には白木屋へ通ふその娘の幻が見えるやうであつた。彼は昨夜の詩を出した。

流彷の夜

私は今こつそり歸つてきた。
まだ前の家から
三味線彈きのペンペラメンが聞える。

ぢいつと立つたまゝ合音を聞けば
引ぎ入れられさうな遣瀬ない氣がする。

先刻、三味線の音を嫌つて家を出た私、
暗い闇に包まれた家と家との間の路
そして水が音もなく死のやうに流れてゐる
川の横道を行けば、遠い對岸の行く途に
いくつかの明りが仄見える。

歩いて何處までも行かふ。闇がずつと續いてゐる。家が地上にいつぱい、ぴつしやり喰付いてゐる。明りが見える。が全體は闇だ！　眞暗だ！　空は雲つて星もない。

止つてそして家へ歸らう！

そこには安易な火が燃えてゐる。知つた人が遊んでゐる。泣いてゐるのか？笑つてゐるのか？
低いその屋根は何んにも見えない。

何かないのか？　何か？
暗闇の中に手を振つて見る。
冷たい！　が、何んでもない。
何處まで行くのか？　走つて行く電車よ！

雨が細々と降る——
祭りの夜の町。
街路上は泥濘の仄明り
私の前に傘を差した女の影が一つ
やがて暗い闇の中にすつと。

新らしい座臺の上に町内の人が何人か、
どゞん、どんどん太鼓を叩く。
響きは道を越して電車路を流れて、
黑い川の水に沈んで行く。
步く私の後ろ影にもそつと潜む。

暗い闇の中の黑い流れよ、
當途ない旅人の袖を濡らす。
步いて行つたなら？　このまゝ、
暗い闇の中を黑い流れにつれてふらく、
都會に住む十九の男のなげき。

彼は堪へられない煩らはしさ寂しさに捉へられてきた。前の家の三味線が堪へられなくなつて

きた。彼は家を出て川の邊に歩いて行つた。川の流れは黑く、それに映る火は赤い。あゝ（無限なる一つの流れ——空に星が輝やいてゐる。なぞかくはしゞまなき？　心よ！　心よ！　それあるが爲めに）現らはれのライフよ！

川邊の櫻の木の葉が、カサコソ散つた。

彼は寂寥——宿命を考へた。しかし、彼のかうした境遇は、彼の心を、實に本然な淸純なものに淨化して行つた。

反抗（惡魔的）から、純愛、熱誠へ進んだ。實在と意識について考へた。神天——涅槃を思索した。彼には光明の閃光が見出された。彼れはその夜、故鄕の高田と妹に、手紙を書いて送つた。

（愛するみんなよ！　私は東京へ來て了つた。愛するといふこと、信ずるといふこと、で正しいことは、人間として、何處へ行つてもうれしいことなのだ！　力强いことなのだ！　百人の友を得ることよりも、己が正しい心を見ることが望ましい。私は、今目を冥つてゐる。動かないのだ。いつも底を流れてゐる、暗の中にチカリ閃めく鱗——見てお吳れ！　俺れ達の時代も來るから。

ぢや、みんなよ！　健全にね！）

彼は、大學へ行つても、講堂へ出席せずに一日圖書館へ籠つて、古への大哲學者、大聖人の全集を讀み通すことがあつた。

内と外とから、彼は次第に偉大へ成長して行つたのである。彼は遂に、人類を愛し愛る勝利者の榮冠を得るやうになつた。

彼は、都會の子供が可愛さうであつた。彼等はみつちり遊ぶ場所さへない。公園があるといふのか？　公園は餘りにもせゝつこましく人工的ではないか？　都會には喧嘩が多いのだ！　で、彼は一篇の詩を作つて、或る雜誌に掲げた。

或る街の子等

瘠せた格子戸、
黝んだ戸箱、

亂雜な流し元
長屋町の狹い小路に
子供等は遊ぶ。

雨だ！　雨だ！
昨日も今日も降り續ける。
長屋の井戸には水汲みがしつきりなし。

廂の出た雨陰！
ギッギッの格子戸の前
子等は寄り添うて遊ぶ。

乳だ！　乳だ！

赤子の聲は火のやうに空へ！
母は工場に
子守女の眸は冷たい。

子等の目元は溝渠か？
唇は枯れたけしの花か？
かくても子等は囀づり續ける。
唄へ！　子等よ、パンなしに。

父母は工場
高い煙突
固い煉瓦塀
かくてもたらせしものみなは冷たき手に・・・。

雨だ！　雨だ！
裏長屋の小路さびしゆう
通るものは稀に
子等は集つて呟やく。
脊には火がついた赤子！

寂寥の夕べ
赤子の手は暖かい乳房を求む。
母は暗い臺所に
父は赤い酒場に
また起る暗の泣聲。

或る日彼れは、伊豆から流れて來た女乞食に、一圓の金を惠んでやつた。それは父が送つて呉

れた學費であつたが、どうしても、その破れ三味線を彈いて、唄ひ乍ら家から家へ、乞ひ歩く老女を見捨てることは出來なかつた。

又、或る日曜日に、彼れは千葉縣の成田山へ參詣に行つた。汽車が市街を離れると、前方には涯しなき曠野が展ろがつてゐた。

（おう！　何んたる悲慘、永遠の沼澤か？　田だ！　立派な田であつたのだ！　しかし今は水だ！）彼の心に連日の降雨が想はれた。

（愛さるべき百姓が、半年の長き日に、烈日の下に流した汗、それが、あゝ、今は皆無だ！　神よ、それを言はずに居られやうか？）

汽車はぴつたり停つた。今來た線路と、それから行く線路と、四邊は涯しなき水――。やがて驅る汽車の中の限られた窓から、見返す彼の眸には、熱い涙が光つてゐた。

（流され了へし百姓よ！　昨日の食物は？　今夜の眠りはどうするのか？）

彼は宗吾堂へ詣つた。古い時、しかし續く流――よき多くの民衆のために、犧牲となつた人よ

！　彼は何か新らしいことを考へた。彼れは湧き來る力を授けられるやうに覺えた。

（農民のために、この虐げられし農民のために！）

彼は歸京すると、故郷の父へ手紙を書いた。

彼は病氣になつた、心臓性脚氣であつた。彼は絶望を宣告せられて、歸郷せねばならなくなつた。

（俺れは故郷へ歸るのだ！　俺れは故郷へ歸るのだ！　そして二度出てこられるか不明だ！　病を得て故郷へ歸る――）彼は、ひた／＼と、離別の哀愁を感じた。

（故郷へ歸つたら、人々をよく愛そう！）

「早くよくなつて、歸つてきて頂戴ね！　お身體を大切にね！」停車場まで、送つてきて呉れた下宿の娘の淋しい顏が見えるやうな氣がした。赤い都會の灯が波打つてゐた。しかし、其等の燃ゆる火、及びその下に歡樂を盡す都會の夜の人達とも、最早遠く離れてきて了つた。

汽車は長い／＼線路を驅り續けた。田舍の小さい驛の火が、後の方へ消えて行つた。

—故郷へ！　そこには父母や弟が、どんな夢を見てゐるだらう？　あゝ、もう近附いてきた」

彼は時計を出して見た。もう午前五時近かつた。前にゐる紳士を見遣つた。紳士も、矢張り寂しさうに、寝もやらで窓の外を眺めてゐた。

「何故今の人間は、みんなかう淋しい表情をしてゐるのだらう？　文明の最盛期にあつて、人々は何故に斯う空虚に悩まされてゐるのだらう？……人民は、最早進むことに就いては餘りに疲れて了つたのだ！……」

ふと、外を見ると、見覺えのある灯の街が見えた。彼はバスケットを取つて立つた。そして、又、淋しい紳士を遣つた。

「左様なら！　私は此處で下るのだ！　あなたはまだ遠く西の方へ送られて行くだらう！　あなたは、又、幸福に暮らして呉れ給へ！　左様なら！」彼は紳士の手を握つてさう言ひ度かつた。

しかし今の世には、そんな習慣はなかつた。

汽車はプラツトホームへ着いて停つた。

彼は、角帽を冠り直してから、寒いプラツトホームへ下り立つた。東を見ると、何故か海の上

がギラギラ光つてゐた。
彼は改札口を出ると、其處にゐる老いた車夫を呼んだ。
彼は乘る時（こんな老いた車夫でも、食ふために働らかねばならない）と、思つて氣の毒になつた。
車は勢ひよく寢靜まつた淋しい町の街路を走つてゐた。
（老いた車夫よ！　お前は尊い勞働者だ！　お前はその老いた身體で車を挽いて、自身生活を營なむのみならず、又、お前の何人かの家族を食はして行くのだ！
しかし、私は、親の財産を當にする大學生だ！　澤山の金を消費して、毎日變な勉强をしてゐるのだ！　そして今夜、病を得て歸鄕するのだ！
何といふ笑ふことも出來ない現代だ！）
車夫は默つて走つた。そして時々汗を拭いた。彼は寒くつて、身震ひをし通した。車は町を端れて、秋枯れた田舍の道へ出た。又、激しい咳が突き上つて來た。彼は胸を押へる。車が、小石へドシンドシンと乘り上がる度に彼は尙更ら苦しく顏を蹙めた。

（何故人間は病氣になんかなるのだ？）しかし、それは不可知な問題であつた。

彼は顔を上げて空を見上げた。高い秋の空を、切れ切れな斷雲が飛んでゐて、消えかゝつた何日かの弦月が出たり隱れたりしてゐた。……彼は急に崇嚴な神秘の氣に打たれた。

「神樣！　神樣！」

彼は心で祈つた。そして清い澄んだ氣分になつた。

車は彼の村へ入つた。彼は懷かしい育くまれるやうな氣がした。と、そこの家から、突如として、生れたばかりの生々しい赤子の力強い泣聲が聞えた。彼は索きつけられるやうに耳朶を欹てた。新鮮な、赤子の聲は、強く闇を破つて流れた。

「生だ！　生……！」

彼の眸はらんらんと輝やいた。彼の息は熱く喘んだ。彼はぢいつと聞き惚れた。

車は彼の家へ挽き込まれた。

彼の心は急に緊張して胸の動悸は高鳴つた。車夫は戸を叩いた。家の中で父の答へがした。彼は車から下り立つてゐた。

父は起きてきて戸を開けた。
「誰れ？」さう言つた。
「僕です！　父さん！」
「おう、お前か？　どうして？」
「病氣になつたのです。それで夜行で歸つて來ました」
「まア、ほんとに？」
彼は、父の老いた顔を見た。堪らなく濟まない氣がした。
彼は車夫に錢を拂つた。車夫は禮を言つて歸つて行つた。
彼は家の中へ這入つて行つた。父はなほ、
「病氣はなんだ？」と、彼の顔を見て言ふ。彼はさう言はれて、堪らなく悲しかつた。眼の中が自然に熱くなつて、涙が湧き出るのを感じた。
「心臟性脚氣です！　心臟性……」
「ほんとに、まア！」

突差に父は暗い顔をした。
「われは病氣になつたつて?」
母が戸を開けて顔を出した。彼はその心配した表情を見ると、今は、堪らなくなつた。そして大きな聲を上げて泣いた。
七十日に渡る病床が、試練の鞭としてやつてきた。彼は絶望の中に、神への祈りと感謝を知つた。
(たしかなる時は流れ、たしかなる日はあれど、吾が心かくもうれしきは、今、父と子と呼ぶあらはれた。吾が心十九の春を踊り、父の頰、五十餘の秋を紅葉し、かくて凍るらし冬は迫れど、父と子よ、消えやらぬ灯の影。若人は故郷の家に、神による受難のふせり、消え去るかよ! 身體のいたみ。あゝ、人はされどさからはず。
父は子を思ふなさけ、くすしよ、そして枕邊のみとり、その頰は勞働にくすめども、あゝ、すべてが神にしたがふつとめ。

さて、神の攝理はすなを、光りよ露よ、何處も、神のすがたが一つぱい、父と子はひたすらに祈る）――彼の手記にはさう書かれた。彼は父に感謝した。母にも弟にも祖母にも、近所の人にも感謝の眸を向けた。

（同じこの地上に生れた人間ではないか？　獨り歩くといふことは、どんなに淋しいことだか？みんなのために盡さう。いかに辛らくともみんなを愛し切らう！・・・・」

彼は兩手を胸に合せて、祈り乍ら決心した。

××××　　　×××

彼は自分の今までを考へた。闇は最早濃くなつて、彼の周圍を取り卷いてゐた。東の方から、わァ――うといふ歡聲が聞えてきた。彼の頬を涙が流れた。闇の中を通して、世界の虐げられた人間の切ない魂が聞かれるやうだ。

（どうしても、この虐げられた人達と生きねばならない）彼は改めて、悲痛な決心をした。

西の空に、星が一つ、光つて見えた。

第三章

――神近きに在るものよ、
爾等、眞理の前には正斷なるべし。
即ち、是と言ひ非と言へ！――（大聖詩篇）

一月二日の朝、裕道は朗らかな空氣の中を隣り村の姉の家へ歩いて行つた。霜は雪かとまがふばかり美くしく白く一面に降り積つてゐた。寒冷な脊氣は、犇々と彼の病み上りの細い身體へ沁み込んだ。彼はぶる〳〵と震へた。しかし彼れは考へると微笑んだ。（雪も霜も、永遠なる唯一のものから生れて來る）

彼はその表はれの華麗さを微笑んで眺めやつた。細い田の中の小路を、犬が一匹走つてゐた。田は廣々と遠く展けてゐた。田の面には水がひた〳〵と溜められて、氷が一杯はり詰めてゐた。畦には、數羽の渡り鳥がチロチロ鳴いてゐた。

（田は今や休眠の時を與へられた。捲土重來の準備をしてゐるのだ！）氷の割れる音が何處かでミチ〳〵鳴つた。

姉の家の前へ行くと、何んだかトンカン、トンカンと高い鐵槌の打ち合ふ叫音が聞えた。

（何んだらう？　正月つから！　それに不思議はないが）義兄は工場へ入つて、ハンマアを打ち下ろしては鐵棒を伸してゐた。

「何にするんですね！　曲つたなり使へないのですか？」彼は窓から覗いて、ニヤ〳〵微笑み乍ら、低い聲で言つた。

「やア、裕道か？……新年でお芽出度う」

兄は立つて、窓際へ來た。

「お芽出度うもないよ！　が、矢張りお芽出度うを言ひに來たんだが、正月の朝つから何してゐるんだね？」彼はきつとして涼しい眸をこらした。「勞働の法則が狂ふぢやないかい？」

「まアさ、みんな居るから上れよ！」

「さうかね！　ぢや失敬しようか。が、ほんとに義兄としちや素的なことだね！　正月つから働

らくなんてことは」
「ぢや、誰れとしては普通なことだね？」
「僕としてだらうさ！」彼は白い歯並を出して「恐らくこの大聖としてはね！」
彼の力強い自信に充ちた執念い聲音は、義兄の耳に異様に聞えた。
（こいつ、隨分變つたな！）と、氣付いた。
「上れよ！」
「あゝ」
姉が出てきた。
「裕道！　裕道ぢやないかい？　どうしたの？　病氣は？」
「病氣ですかい？　病氣にも癒る時があるものでね！　要するに只今儘全なんです」
「さう、それやよかつたわね！」
彼女は、房々とした髮の中の澄んだ彼の顏を見た。
「お上んな！　恰度火が出來てゐるから！」

「有難う。が、僕ァ此頃寒さにや强くなりましたよ。夏、暑さに負けないやうにね！」

彼は敏捷に四邊を見た。其處には鐵製の機械が何臺も置かれてあつた。

「之れは何んですね？　姉さん！」

「それは機職の機械だよ！　お前！」

「機屋を始めたんですか？　機屋を！」百姓を止めた位は直ちに思ひ付く。そうして資本のために土地を賣つたこと位は。

「之れを買ふには、餘程地所を賣つたでせうね？　先祖の買つた地所を！」

「地所を五反歩賣つたよ！　後は借金をしたさ！　この家を抵當に入れてな！　土所を賣り度いつてもうないよ！　アハハ……」義兄は空虛な聲を立て、笑つた。

「何んとも思ひませんか？　地所を賣つて」

彼は悲しさうな哀れみたゝへる表情をした。

「だつて仕樣がないよ！　百姓では喰つて行けなくなつたのだ。まつたく子供が增へるとどうにもしやうがなくなるのだ！……誰れだつて人前の生活はしたいと思ふからな」

義兄は當然の誇りを以つて言つた。「たまには肉も食ひ度いよ！　芝居も見に行き度いぢやないか？」

「農村へそんな工場が出來ると駄目だね！」

「駄目だつて仕樣がないよ！　今にみんな始めるだらうよ！」義兄は足元を見詰めた。「先んだつても、かういふことがあつたよ！……山家のことだがね。夫婦と三人の子供の家族があつたんだよ！　ほんたうの小作人で、山家に住んでゐても、自分の山は一坪もなかつたつて。いゝかね。山家へも派出な風が入り込んだのだよ。そして、かゝりは多くなる一方なんだよ。で、その家族は暮して行くに大變だつたのだ。何故といふに、その妻が、野に出て働らけないやうな弱い身體たつたのだよ！　そこへ年の暮が來た。借金の掛け取りが來る。税の帶納の叱責が來る。正月は目の前に迫つて來る。財産家の娘達は新らしい衣物を買つて貰ふ。彼は字が讀めなかつたので街へ行く氣にならなかつたのだ！　で、遂々その人は、妻と三人の子を殺して、自殺したんだよ！何故つていふに、生きてゐて侮辱されるよりも、死んで極樂へ行く方がいゝと考へたに違ひない」

義兄はそして深い息を吐いた。裕道の眼光が沈痛に血走つて唇が顫へた。

「おゝ、虐げられた者共！　お前等がさう考へるのも、無理がないのだ！　此の義兄にした所が若し五反歩の地と家がなつたならば町へ出るか、死んで了ふより他なかつたらう！　あゝ、世界の農民よ！　みんなして農業を止めて、死の來るのを待つたなら？　人間がすくなくなつたなら吾々は働らかずに（今のやうな）生きて行くことが出來るのだ！……又は、勞働そのものをして神聖なりとするならば、せめて山奥の森の中にかくれて一人生きよう……）

　彼は、又、田の中の道を淋しく歸つた。

「裕道は、何故かあんなに沈んだ顔色をしてさつさと歸つて行つて了つた。時たまに遊びに來た彼が……」

　義兄は、裕道を見送つて、力無く呟やいた。と、彼に激しい侮辱を感じた。（あゝ、俺れは、義弟にまで馬鹿にされるやうになつたのだ。それもみんな俺れが意氣地がないからだ）そこで彼は何故に自分の家が零落し、農業を止めて機業に變職しなければならなかつたかを考へた。

　義兄の家は七十年前には村でも一番の財産家であつた。その頃生きてゐた曾祖父は、土が人間

を生かして與れる所の有難さを自覺してゐた。彼は實にその神聖な勞働のために至した。よく働らいてよく質素にしたのであるから、自づと財産が貯つたのだ。そして彼は遂ひに田で勞働し乍ら、太陽の下に卒倒して、そのまゝ尊い死を了へたのである。

蓄積されたその財産はその子を毒した。彼はそれでも、父の辛苦を知つてゐたから、敢へて蕩盡することはなかつた。しかし乍ら酒を飲むことは好きであつたのである。彼は早く妻を貰つて男の子を上げた。それが義兄の父であつた。義兄の父は、財産家の一人息子として我儘に育てられた。意志の薄弱な身體の虛弱な人間であつた。父は烈しい放蕩をした。町の遊女の下から惡い病氣を持つてきた。父は三十才近くなつてから漸くにして、山家から若い温順な娘を貰つた。父は贅澤なことをするのが好きであつた。それに地主としての交際も多くの費用がかゝつた。そのためには、矢張り小作人の所から多くの小作米を取り上げるより他なかつたのである。彼は村の小作人達からも憎惡された。

一度惡い習慣に陷ると、それから拔け出るといふことは大變六つかしいことである。父は次第に派手な生活に馴れ、まして意志の薄弱な彼は、何の事業をやつても旨く行かなかつた。田畑の

耕地整理をしたがそれも旨くは行かなかつた。父はまた放蕩を始めた。年取つてからの遊興は直き悔悟することは六づかしい。そのために、義兄の母はどんなに苦勞したかわからないのである。財産は次第に減つて行く。地主階級は實に經費損けがして、みな倒れる時がきた。華美な贅澤と習慣的な怠惰と、日本帝國政府の商工業政策の繁榮とに依つて、農村、殊にその地主階級が倒盡して行つたのだ。父は町へ出て製紙會社を起した。がそれも旨く行かなかつたので、遂ひにそれも人手に渡つて了つた。父は町の藝者を連れて遠い旅路に漂泊ひ出た。後に殘された母は嘆いた。その時彼女は二人の男の子の責任を負はされてゐたのだ。やがて母は苦勞して死んで了つた。後には彼等兄弟と年老いた祖父のみになつた。共に働らき得ない人間達であつた。餘儀ない居喰ひといふことが始められた。その後父の消息は判らなかつたが、義兄が十二才の頃遠い北海道で死んだといふ報知が來た。その時義兄はどんなに烈しく泣いたか知れない。

義兄は、十一歲の時から野に出て働らかなければならなかつた。親のない子として、一家の生活を支へて行くことは、如何に苦痛なことであつたであらう！　義兄の家には、最早いくばくの財産も殘されてはなかつた。漸くにして、自家で作る程の田畑しかなかつた。裕道の姉が、彼の

處へ嫁に行つたのは、義兄が軍隊生活を終へて、再たび農業をし始めた頃であつた。義兄達はどんなによく働らいたことであらう？　祖父母と弟と生れた赤子を食はせて行くためには、餘程の苦勢をしなければならなかつた。朝早きに起き、夕べ暗闇の迫る頃まで働らいて、しかも粗衣素食に甘んじて、その日その日の生を續けて行くより他なかつた。しかし乍ら、祖父母が相次いで死んだ時、義兄はその葬式のために多額の費用を拂はなければならなかつた。何故ならば、その頃は最早田園の村落へも、都會の華美な風俗が浸み込んで來たし、（都會に住む者も田舍に住む者も同じ人間ではないか。されば輝やかしいこの文化を同等に受け樂しむ所の自由を以つてゐてい〻筈だ）といふ思想は田園の生活を向上さした。それに、彼等の家の親戚はみな地方の資產家であり、又、彼の家が昔財產家であつた所の隨勢で、相當華美な葬式をしなければならなかつた。

その多額の金は何處から出て來る。固定的なそして自然の惠與に縋る農民に取つては、その多額の金を作り出すことは至難のことである。しかも、その生活の益々贅澤になる世に於て。そこで義兄は借金を作つた。年の暮が來て、返濟が出來なかつた時、義兄は祖先の買つた地所を賣つたのである。

文化といふ教育の力は、奴隷的封建制度の羈絆より脱せる農民に、啓蒙的な自覺を與へたのである。都會の商工業の伸展と、交通の發達と、自由なる向上の思想とは、地方農村の青年少女を驅つて、都會集中が行なはれ始めた。柔らかな頭腦を持つ少年少女達の都會憧憬は、たゞ淫靡な都會の華麗に對するバク〳〵したものであらうけれど、一度知識の充實を計らうと思ひ立つた青年は、どうしても學ぶに都合のよい大都會、殊に首府東京へ出て來るのであつた。

義兄の弟、俊二も、徵兵適齡の年に、かうして東京へ逃げ出したのであつた。田園の生活は、活動好きな若い自覺した青年には、單調と無意のために堪へられなかつた。

（百姓は馬鹿のすることだ。）と、思つたのだ。

そこに無理解な保護者との苦しい爭鬪が起る。先驅者はみな苦しみ壓迫せられるものではあるけれども。俊二は遂ひに、兄の田畠から逃れて、東京の工場へ這入つて了つた。

その頃、日本の農村では、長男が家督を相續し又先祖の業務を繼ぎ、次男は婿に行くか一人で家を持つかする習慣であつた。

久しい間睡つてゐた野蠻國が、一度日光の强烈な直射に會つて、國力が伸展するに隨つて、そ

の人口も増加してきたのである。しかし乍ら、土地は増へては行かなかつた。

（おゝ、増悪すべき人類よ、おぞましい理智を持つ人間よ。誰れが何時、汝等がそんなに増殖し墮落することを許したか！　死ね！　汝の集團の中に天生の道を與へるぞよ！　死ね！　呪はれたる不遜の人類よ！　裁斷の日は近づいてゐるではないか？）

あゝ、天はさう教へてゐたのであるが、日本の人口は益々増加して行つたのだ。血みどろな姦淫のために、人類は永遠に罪惡の種を増やして行つたのだ。一貫目のものを七つに別つたその一箇よりも、一貫目のものを十に別つた其の一個が輕いやうに、人類のあくなき増殖は、遂ひに個人的の破産を至さしめた。

（人間よ！　一つの人間革命を決行せよ。然らずんば汝その苦惱より出づること難かるべし）と又何かが言ふ。

人口は増殖するのに、耕やすべき土地は少ない。こゝに於て移民、殖民政策が行なはれ始めた義兄の村でも、小作人百姓を止めて遠く亞米利加、又は北海道へ移民して行つた家族がある。又東京とか神戸とかに行つた者もある。そして、それ等の人々の、故郷への消息はいゝものであつ

た。歐洲大戰爭が始まつて、日本の商工業に取つては、最も割のいゝ時が來た。急激に發達する工業は、一時に多くの人間を必要とした。農村に働いてゐた若者達は、その開らかれたる理智を持つて打算してみた。田舍に百姓してゐるよりも、町の工場の方が二倍も三倍もの賃金を出す。そこで、みな百姓を止めて都會に走り出した。

人口移動の原因は、到底一を以つて律することは出來ないが、日々幾千となく繰返さるゝ移動過程に共有な一つの特長がある。それは即ち一層有利な生活條件を求めんとする人類の居所變更である。

或る年、義兄は、東京の弟を訪ねた。弟は造幣局の職工であつた。日々に他人のものとなる何千圓の紙幣を拵らへてゐる人間である。弟の下宿は貧民窟の一軒であつた。東京でも下等な貧民窟であつた。そして驚ろくことには、それ等の貧民達が、多くは地方から出て來た所の農民の男であることであつた。が、それ等の貧民と雖ども、その頃の地方の小作農民に比較すれば、決つしてその生活條件の劣つてゐることはなかつた。

（みんな、若い者達が、東京へ來たがるわけだ！）そして、その不生産的な職業者が、如何にこ

の世に多いかに驚いたのである。

義兄は、故郷に歸つて百姓をし乍ら考へたのである。彼はそのまゝの生活を續けて行くことは出來なかつた。

（渾沌としたこの文明過渡期に、俺れは貧しい割の惡い百姓として生れた。どうかしなければならない。さうだ。このまゝ忍從的な百姓を續けて裁斷の日の輝やきを待つか、現代の混亂の中に突進して活躍するか？　が、俺れはそんなに長生はしない。それなら」

で、義兄は後者に隨つて、文明が進んで、人間が贅澤になればなる程、必要な、機織業を始めたのである――。

義兄は、裕道のあの豫言者的な風貌を思ひ乍ら、さう考へてきた。考へれば考へる程、自分が小さい者であることが判つてきた。無知に氣づくと悲しくなつて來た。そして、前途の不案に臨られて來た。

（あの太陽が、毎日々々沈む度に、日本の國には暗い影が射して行くのではないのだらうか？みんな、人間が餘りに惱み、過ぎて居る。きつと呪はれてゐるのだ！）

「貴下、どうしたの？　裕道はもう行つて了つたぢやありませんか？　それだのに……」

と、妻が晴々した顏で言つた。

「あゝ、行つて了つた。が、裕道は俺れよりもよく考へてゐるやうな氣がする。今つからは、あれ等の世の中だ！　俺れにはもう、何をする力もない。」

「そして、美兒は濕つぽく冷たい土を見詰めた。足が土の中へズルノヽ入つて行くやうな氣味惡い感じがしてきた。

第三日の朝、彼は霜柱を踏んで、野へ出て行つた。彼は、純然たる農夫の服裝をしてゐた。彼の確かな胴には、古い茶褐色の木綿のチヤケツが附けられ、脚には太い黑紫のヅボンが履かれ、足には古い革靴が喰附いてゐる。古い煤けた鼠色の形の崩れたソフトの下から、黑い髮が房々と出てゐる。彼は柄の長い鍬を擔いでゐた。彼は遠く眞白な芙蓉峰を見た。ぞつとする冬の寒冷が身に浸み徹つた。彼は鍬持たぬ手を、左右に強く振つた。と、一時に身内が熱く燃え上つてきた。おうーと、叫び度いやうな力強い衝動に驅られてきた。彼の瞳は、美くしくらんノヽと魅力を持つて輝き始めた。

「あッ！　こんな朝つから……ようこそ！」

裏の家の内儀さんは、彼の姿を見ると、不思議さうにニコリして嘲笑するやうに言つた。

「あゝ」彼はむつとした。「勞働の法則が狂ふかね？……いゝだらうさ！　堪らなく」

「ほんとに、何んだか外國から來たお百姓さんのやうだ！」

彼の後方から、内儀さんの呟やく聲が聞えた。

彼は畑へ行き着いた。と、直ちに凍つた土を強く耕やし出した……。

やがて彼の額から、全身から熱い汗がだくだく滲み出した。汗は流れて玉となつて、耕やされた黒い土の上へ玉散つた。

雜草は次第に土の底へ埋められ、生新な氣は土の中から彼の周圍に立ち昇つた。

彼は手を休めて胸を伸ばし、自分が耕やした耕地を見返した。黒い通りは一條の線を引いて雜草面と區別されてゐた。彼は帽子を取り、額の汗を拭ひ、顏へ落ち掛る髮の毛を後ろへ撫で上げた。

彼はすばらしく愉快で愉快で堪らなくなつた。

彼は自分のスタイルに注意した。それは、最とも異樣な新らしいものであつた。彼は確かなる

文化の智惠を考へた。

（すばらしいものだ！　これでこの勞働が如何に愉快であることよ！　そう、報酬を要求しない勞働そのものとして神聖なこの原始的な勞働の名こそ、俺れが誇り得る誰一のものなのだ！）

神の光であらう——輝やく朝の太陽の光りは、彼の全身を育くむやうに照らし、露は一つぱいに天より降つて草の端に滴つてゐる。

（そう、不斷なるこの一擊に、無限に續くこの黑い土を耕やし、その中より新らたなる幸ひを受けむこそ、新らしき農夫の祈りだ！）

彼は、又前方へ耕やしつゝ進んだ。

（種を蒔け！　やがて芽が出て花が咲くだらう！）そこで、彼は家に走り歸つて菜の種を持つてきて、土を小かく均らし、條を通して蒔いた。

（芽が萠えたなら、又、肥をしてよく育てゝやらう！）

彼は、又、一頻り激しい勞働をした。彼は、汗と愛との幸福を惠まれた。

彼が、勞働のよろこびに耽り乍ら、家へ歸つて來ると、そこに港町の叔母と妹が來てゐた。叔母は肥えた脂ぎつた軀の所有者であつた。何か妹と二人で緣に腰掛けて拵らへてゐた。妹は急に娘らしく美しくして成長してゐた。

「あゝ、叔母さん！　よく來ました」

彼には、叔母と妹と一緒に來たことが不思議であつた。彼等は滅多に寄りつくことがなかつたから。「何か重大事件でも起きたのですか？」

「あッ、裕道さん！　御機嫌よう！　明けましておめでたう。……御無沙汰ばかりしてゐますからね、新年にはと思つて年賀に參つたんですの！」彼女は裕道の風態を上から下まで、盜人をでも要心するやうに見上げ見下した。

（ふん！　此奴、俺れの風態に今やつと氣がついたのだな。いぢらしい愚かな奴だ。太つちよ奴！）裕道はさう考へた。そして美くしく華麗に着飾つてゐる妹の方を見た。彼の妹は、虔ましやかに禮をした。

「裕道さん！　もう野良へ行くの？　まだ三ケ日ではないの？　それに病氣は？」叔母は皮肉に

言ふ。

「あゝ……百姓には、そんな餘裕はないからね。少なくも一日四時間は働らかねばね！」

叔母は遂に言つた。「貴下の態は乞食のやうよ！　西洋の……」

彼はかつとした。「馬鹿ッ！」彼は全身を震はし、髪の毛を逆立てた。「貴樣は、何んの權利があつて言ふのだ？　いつ貴樣が、俺れにこの一枚のヂャケッ！　一つの靴を投げ與へたか？……勿論、我々は一介の農夫だ！　しかしそこに神聖な犯すべからざる地置が礎かれてある。

僕として言ひ度くはないが、强いて君のためにいふならば、妹の今日の風態こそ實に唾棄すべきものであると思ふ。その美くしいショール、その素的な眞紅の羽二重の帶、それは我々の米一俵では到底買ひない品物だ！　君等は何んのためにそれを身に着飾るか？　只その高價を誇るためではないか？　又、その軀に附けた白粉及び魅惑的な香水、それは、男を、いゝかね！　成るたけ財產家の好男子に好かれたい、言ひかへれば、君等の理想的な鴨を引き掛け度いための計略だらう！

それもいゝ、それもいゝ。それも町の人間である君等には許すべきことであるかも知れない。

併し、何故、そんな風態をして、この素朴な農村へ侵入するかね！　少なくも、それを見たうら若い農村の處女達は、それに眩惑されるだらう！　が、彼女等にはそれを買ふべき餘裕はないよ！　それは當然過ぎる程判り切つたことだ！　然らば、彼女等は悲しく諦らめねばならない。諦らめが、如何に悲慘なものであるか？　それは君等も知つてゐるだらう？　君等は何故、自分の誇りを以て他人の心を傷つけやうとするか？……僕は君等を許すよ！　然し、自然は、君等の上に、やがて何年かの後、何十年かの後、必らず峻厳な裁決を與へるだらうよ！」

叔母は、反抗的に彼の顔を眺めた。しかし、妹は俯向いて考へてゐた。肩の邊りが小かく顫へた。

母が障子を開けて出て來た。

「何故お前は、そんな馬鹿な事を言ふのだい」

彼は、母の顔を見た。そして腹の底から笑つて、涙を流してやり度くなつた。彼は、ぷいと立つて、自分の唯一の樂しむべき室へ遁れた。

「ほんとにあの子は變りものでね！」後から母の辯解する聲が聞えた。

彼は、自分で拵らへた椅子へ腰掛けた。手製の椅子は、彼の强健な軀の急激な腰掛けやうに依つて、ギッギッ悲鳴を上げた。それが尙更ら、彼を不快にして、書かうと思つた考へを破して了つた。彼は何故か哀れな氣がしてきた。彼はそつと室の中を見廻した。彼の前には、矢張り手製の不器用な机が置かれてあつた。そしてその前には小さい書架があつて、それには詩集や雜記帳や原稿用紙や、又、讀みさしの本なぞが詰めてあつた。その横には筆立てとインク瓶とがキチンと置いてあつた。机の横には大きな本箱があり、本箱の横の壁には二通の板がかけられ、澤山の本がぎつしり、大きなのから小さいのへ揃へて詰め込まれてあつた。その書架の上には、大聖と大書した粗末な額が懸けてあつた。それは曾つて三年前、彼れが心生觀のどん底に陷ちた時、悲痛な衝動に驅られて書いたものであつた。北側の隅には、彼が三日間かゝつて拵らへた寢臺が据へてあつた。寢臺の上の壁には、古典的な野原に遊ぶ神女の繪が懸けてあつた。實に殺風景な室であつた。窓が二つしか(それも切り拔きの小さい角と丸の)ないので、室の中はいつも薄暗かつた。床板が薄いので、歩むとミシリミシリ奇しい音を立てた。天井と言つても、割竹を組んで作つたものであつたから、屋根裏から鼠が落ちると、煤がバサバサ床へ落ちた。

しかし、彼には、此の室のみが、懐かしく嬉しいものであつた。彼は一通り見廻すと、急に嬉しくなつた。(この時だ！　考へをまとめるのは！)

彼が、一篇の「新らしき農夫」の詩を作らうとして萬年筆を取り上げた時、外には聞き馴れない下駄の音がして、休暇で東京から歸つた半田が訪ねてきた。彼は氣障な大きなハイカラにし、緣無しの眼鏡をかけ、指の先を綺麗に磨いて、絹の着物をぞろりと着てゐた。恰もその時は、港町の叔母と妹は家の中へ入つて飯を食つてゐたので、半田は裕道の所へきた。彼はドーアを開いて氣を拔かれた。

「やア、大見原君御在でですか？」

「おう！　半田よ！……さア、どうぞ中へ！」

裕道は立つて行つてドーアを廣ろく開けた。半田は入ることを逡巡した。見たばかりで最早薄暗さに一驚して了つたのである。然し彼は如何にも愉快さうな表情を作つて、室内へ入つた。

「長い間御無沙汰致しました。御病氣は如何ですか？　大見原君！　僕心配してゐましたよ」

半田は丁寧に手を重ねて言つた。彼は、裕道の眼色を窺ふやうに眸を光らした。

「有難う！　半田よ！　僕は最早、健全に復活したのだよ！　全的にね！」さう言ふ裕道の姿は、遙々東京から歸鄕した友には、見違へる程、靜かな優しい人間に見えたに違ひない。
「君は試驗はどうだつたね？　三級の……」
この問は、半田をして非常に喜ばしめた。何故なら、彼は、此處へ來る途中、將又故鄕へ來る途上、この榮譽を誇り度い衿持で昂奮してゐたからである。もう一つは、裕道の口から間接に、彼の妹へ言ひ傳はることを豫期したからである。で、半田は、表面虔ましやかに裝ひながら、多くの誇張を以つて言つた。
「隨分、君難關だつたよ！　全くね！　二十歲前の者には大いなる苦痛だよ！　僕は徹夜で一ケ月机にかぢりついたね！　每日牛乳と卵で過ごしたよ！　僕は絕望に泣き度くなるやうなことがあつたよ！　しかし、君、喜こんで吳れ給へ！　幸ひにして君、合格（パッス）したんだよ！　まつたく君等のお蔭だよ！　僕ァ感謝する！」
（さう、俺れは何も君に感謝せられる理由はないよ！　僕は一度も君の合格を祈つたことはないからね）

裕道は、半田の性質が可愛さうになつた。

「さう！　それやよかつたね！　君は好運見だよ！」

「君！　實際感謝するよ！　みんな君等のお蔭だよ！　實際僕ァ今いゝ氣持がするよ！　君の病氣は癒るし」

(俺れの叔母と妹は今日此方へ來てゐるしね)

彼は、半田の淺薄を思ふ樣嘲笑して遣り度くさへなかつた。しかし何故か氣の毒でもあつた。

半田は室內を見廻してゐたが遂ひに言つた。

「君は今何を書かれてゐたんですか？」

「僕かね！　僕ァ今百姓の唄を書いてゐたんだ」

半田は、机の上の原稿用紙を見詰めて感激的に言つた。

「君は、遂に農民作家になられましたね！　美くしい偉大な！」

「農民作家！　農民作家！　或ひは然らん！……」

彼は、どしんと机へ寄りかゝつてペンを投げた「恰も、君が遊民的俸給生活者である如くね！」

半田はびつくりして顔を上げた。と二人の視線がぴつたり逢つたので、彼は俯向いた。裕道の眸が餘りにも清純に輝やいて彼の全身を電光のやうに射たからである。

「僕は言ひ得るよ！　現代の藝術は餘りにも浮つ調子だ！　砂上の樓閣に等しいとね！　しかし吾々農業勞働者に基礎を置く者は、如何なる風にも水にも崩れなく、永遠に得ることをね！」

半田は首垂れて神妙に聽いてゐた。

「おゝ、こんな男に何が解るか？　これは、これ、虚僞の眞面目を作つてゐるのだ！」

彼は半田は突き飛ばし、面の皮を引剝いてやり度くなつた。

やがて、叔母は家の中から口をもぐもぐさせ乍ら出て來た。

半田は直ぐ立つて室を出た。彼はニヤリ笑つて辭儀した。

「アッ！　三郎さん！……」彼女は狼狽して口を押へた「先日はどうも……御世話樣になつてね！」

「いや！　僕こそ…今日はよくおいでになりましたね！」半田は、叔母の眸に卑しく笑ひ掛けた。叔母は肥つた軀をふる、ぶるッと震はせ、部厚な手で緣の塵を拂つて、自分の傍へ若い男な

坐らした。
「餘り此宅へ御沙汰したもんですからね」
「お年賀ですか？　僕も一寸……」
二人は又、見合つて卑しく笑つた。
その時、叔母は狡い表情をして叫んだ。
「裕ちやんも此方へいらつしやいな！　そして喜美子も！」彼女はそう言つて、そこに置いてあつた布を取り上げた。それは奇態に膨れてゐた。彼女はそれを抱へるやうにした。
「大きな枕でせう？　朝から喜美子と二人でかゝつて、やつと拵らへたの」
「枕ですか？　僕は又、何んだと思つた！」
「貴下に差し上げやうと思つて拵らへたのよ。貰つて下さるでせう？　お否や！……」
彼女は眉びるやうに男を見詰めた。三十九歳以上の女が、そんな格好をするのは、大變見た所のいやな感じのするものだ。
「えゝ、有難う！　喜こんで頂戴します！」

半田は受け取つて頰摺りするやうな眞似をした。
喜美子が障子を開けてしとやかに出てきた。
「何か御用？　母さん！」
彼女は半田を見ると、眞綴な顏をして禮をした。半田は緊張して、丁寧に目禮した。そして彼はニヤリ微笑んだ。
裕道はそれを見逭さなかつた。「彼の頭の中をば、憤怒の血が驅け廻つた。
「おゝ、恐るべく、卑しむべき小人共の小さい計謀だ！　彼等は最早、東京を出る時、之れを約束してきたのだ！　而して、今、俺れの美くしく素直な妹が、その計謀に陷らうとしてゐるのだ！　憎むべき小人共をかうしてやらなくてはならない」
彼は、つか〳〵と室から出て行つた。
「叔母さん！　僕が先刻言つたのはこれです。美くしい衣物を着せ、いゝ香水を附けることは、若い男を魅惑したいためであると言つたのは。
……今此處に、一匹の蟲が寄つて來ました。それは、花には煩さいが、叔母さんは大變好きな、

一匹の灰色の蟲です！　それはたまらなく下らない蟲だ！」
　彼はさう言つて、きつと半田を見た。半田は眞蒼になつてぶる〳〵震へた。妹は顏を上げ得ないで默つて俯向いた。彼母は彼の顏を睨めた。彼は天を見て唾を吐いた。
「下らない計謀だよ！」
（彼は座に堪へられなくなつた。いつまで其處にゐることは、自らを汚すことになる。それに妹の位置が餘りに可愛さうだ！）
　彼は、立つて家の横へ出た。そして籔陰へ歩いて行つた。そこは暗く木の枝が入り亂れ、一つの苫屋をなしてゐた。地は、いつも太陽の光線に當らぬので、じめ〳〵してゐた。苫の上から、灰色の蛙がピョイと一匹道へ飛び出した。彼はずつと奥の、納屋の影の草の上にぐつたりと腰を下した。
（あゝ、何んて卑劣な心事だらう！　よく恥ぢないでゐられるものだ！　あゝ奴等は商人だ！いつもあんな計謀をばかりやつてゐるのだ。彼等は最早惡に馴れて了つてゐるのだ！　小惡魔め！　…‥それにしても、妹が可愛さうではないか？　あの清純な豊麗な心身を、あんな下劣な不良

青年に任せるなんて、そんなことがどうして許せる？　あゝ、なんといふ悲痛な慘虐だ！　許すべからざる慘忍の行爲だ！　悖德奴！…俺れは敢然妹を助けやう！　妹よ！　心配するな！）

彼は悲しい決心をした。彼は聲を上げて泣き度くなつた。そしてその涙の中に光明を認め度く思つた。

「兄さん！　兄さん！」彼女は、彼の後を追つてきた。

「兄さん！　私には判らないわ！　どうしていゝのか？　私には何にも判らないわ！」

「おう！　妹よ！」

「兄さん！　私には…判らないわ！」彼女は兄の胸に縋つてきた。「妹よ！」彼は妹の手を固く握り緊めた。「妹よ！　お前は可愛そうだね！」彼は妹の軀を強く抱き緊めた。そして熱い唇を、妹の悩ましげな、涙に濡れた頰や瞼や額の上に、幾度も幾度も接吻した。

彼女は强烈な兄の腕の力に緊め付けられて、ぴつたりと兄の軀に接觸した。彼女は唇を感ずる毎に、ぞくぞく嬉しさ恥かしさが身内に浸み徹るのを感じた。彼女は先刻の悲しさを忘れた。そして無上に幸福が周圍を取り卷くのを覺えた。彼女は戀人に抱かれてゐるやうな感覺に醉ふた。「い

ゝのね。」

「おゝ、心配するな！　俺れがついてゐるよ！」

彼はもう一度強く緊めつけた。

やがて午後になつてから、叔母と妹は歸るべく彼の家に別れを告げた。

彼と半田は電車の停留所まで送つて行つた。鐵道の陸橋の上まで行くと、東上の汽車は、恰も爆然と駛つてきた。

叔母と半田は欄干に寄つてそれを眺めた。

（小惡魔よ！　汽車に轢かれて死んで了へ！）

彼は二人の私語を聞くと、堪らなく憎惡を感じた。

（此奴等二人を、線路へ突き落して、ぶち殺してやらうか？）

その間に汽車は通り過ぎた。

電車が來た。叔母と妹は乘つた。

「妹よ！　ただね、健全にね！　それだけだよ！」彼は強くひたと妹の眸を見据ゑて言つた。
「エ、」妹の聲は震へてゐた。
電車は走つて行つた。
「歸りませうか？」半田はニヤリして言つた。
「あゝ、勿論！」彼の聲は素的に力強かつた。
「君はもう東京へ行きませんのですか？」
「あゝ、東京へかね？　僕はもう農夫になつたよ！」
彼は、半田の細い女のやうな手の、爪を見た。そして不快になつて、チエッ！と唾液を吐いた。
「君はそれでも勉强はなさるでせう？　もし、なんなら、僕が本を買つて送りますよ！」
「ありがたう！」
しかし、彼は、腹の底の底から、うはアうわッと湧き上つて來る嘲笑を抑へるのが苦痛だつた
（いくらでも、お前は俺れの氣嫌をお取り！　俺れは喜美子の兄だよ！　が、判つてゐるぢやないか！　お前は、俺れのあの美くしい妹に、その肉體に惚れてゐるのぢやないか？　要するにお

前は俺れの妹を抱き度いのだ！

　馬鹿な哀れむべき不良青年よ！　俺れが知らないと思つてゐるのか？　お前が××村の年増を騙したこと、そしてその女が、今泣いて恨んでゐることを。そうしてお前は、おれが東京にゐる頃下宿の娘を弄んでゐたではないか？　しかるにお前は、今度下宿を變へたそうだね！　お前は最早、下宿の娘に飽きがきたからだらう？　そして、それからお前は悪い希望を持つて歸郷したのだ！

　俺れの妹は餘りにも清純だよ！　が、お前等のやうな青年には、迚も堪らない美人に見えるだらうさ。馬鹿野郎！　貴様なぞに、誰れが唾の掛けてでもあるかい？　俺の妹は、お前なんぞには、夢に見る龍宮の娘だよ、馬鹿！」

　彼は一緒に歩くのさへいやになつた。

「さよなら！　早く東京へ歸つた方が得だらうて！」

「さよなら」しかし半田の自惚強い心は、別れ際に與へた裕道の微笑を善意に解した。

（まだ望みがある）

（色情狂は御すべからざる代物かな！）

裕道には、みんなみんな可愛そうであつた。いぢらしくなつた。自分自身さへ憐れみ度くなつた。

彼は俯向いて、地を見詰めて歩いてゐた。

「大見原君！　おい、大見原君！」

彼は、顔を上げて見た。小山がその二階から彼を呼んでゐた。

「何かい？」彼は憂欝さうに訊いた。

「是非！　是非君にも力になつて戴き度いんだよ！　僕等ばかりでは、どうにも仕樣がなくなつたのだよ！　まア上つて呉れ給へ！」

隣村の内藤もきてゐて叫んだ。彼は、默つて破れ靴を脱いだ。

「どうしたんだい？」

「實はね！　君！　聞いて呉れ給へ！　あの補習學校のことだよ！　僕等が行く頃は、あんなに

も優勢であつた村の農業補習學校がね、君！　見るに忍びなく衰亡して了つてゐるんだよ！　情けないぢやないか？　そこで、どうかして挽回しやうと思ふんだが……」

内藤は熱して語り終つた。

「どうしても、傍觀してゐるに忍びないよ」

不思議や、栗持も來てゐて言つた。彼と小山とは、犬猿の仲であつたが、かうした問題に對してはお互ひに援け合ふのか？　ほんとになんて感謝すべきことだらう！

「何かそれには原因がだらうね？　衰亡の」

「校長が駄目なんだ。禿がね！　女敎員ばかり引き込んで……無能だよ！」

小山は憤激して叫んだ。

「しかしね、禿でも女にチヤホヤされるのは惡い筈がないよ！」

裕道の眞面目な反駁に、皆奇怪に笑つた。

「工場が增へたのも一つの原因であると僕は思ふ」栗持は（彼は敎養園員である）ニキビの顏で言つた。

「或ひは然らん！　市街は確かに田園を脅威するよ！」
「しかしね、僕は、生徒それ自身悪いと思ふよ！　第一、彼等は學ぶといふ氣がないのだ！　たゞ夜遊びでもしてゐるらしいんだ！　彼等には、自覺がないのだ！」
內藤は、『特權あるもの』やうに眸を輝やかして叫んだ。
「ぢやね。君は學問してどうしやうとするんだい？」
裕道は、この友人が何を言ふか、ぢいつと注視した。
「僕は文官の試驗を受けるよ、そして官吏になるよ！」
「いゝだらう！　しかし現代では、官吏たらんものは須らく富豪たるべしだよ！」彼の力強い聲に、みんな吸ひ付けられた。
「所で、君等は、本問題をどうしやうとするんだ？」
みんな顏見合せて、定見ないやうに考へ込んだ。彼は靜かに重々しく熱を帶びて言つた。
「で、僕は思ふよ！　斯の如き公共的な事業は、敢へて一部者の獨斷に委せらるべきにあらずとね。だから、僕は、公衆會を、そして講演會の開催を主張するよ！」

期せずして、みんなの考へが、生新なものへのやうに、其處へ集まつた。
「世の中には、やれば働らくことがいくらでもあるのだ！　何處へ行つてもな！」と、彼は高い愉快な聲で叫んだ。みんな、彼の傍へ寄つて、彼の手を握り度いやうな氣になつた。

或る寒冷な冬の朝、それは五日目の朝であつた。彼の弟は學校へ、母は港町へ菜を賣りに、父は農會へ、で、後へ祖母が殘ると、畑へ行くのは、彼一人であつた。彼には、却つてそれの方がよかつた。しかし、彼の弟は町の商業學校へ行くために、次第に生意氣になるのを見ると苦痛であつた。一層學校を止めさして、百姓にしてやれ！　と、思ふ時もあつたが、彼は默つて弟の怠惰を、自覺するまでと見てゐた。彼の母は、町へ行くことが好きであつた。彼女は町へ行けば、いつもいくらかの小遣錢を得て來たからである。彼の父は農會の部長をしてゐた。で、如何に忙しい時でも、その會議に行かねばならなかつた。彼には、その農會の存在の必要が認められなかつた。
「農會？　農會が何んだね？　意氣地なしの、ほんの形式的のそんなものが何んになるね？　學

校出の生若い技術者の怠惰な指導がなんになるね！　奴等はいつもノートと首つ引きぢやないか？　然も、人蔘や牛蒡を作ることに於ては、そこの七十のお爺さんに及ばないよ！　僕は、そんなもの無くして、税を少なくする方に賛成するよ！」彼の言葉を聞くと、彼の父はいつでも暗い陰鬱な表情をした。

裕道は今朝も、茶畑の耕作をしなければならなかつた。冬草はいつぱい根を這うてゐた。彼は、一つ一つ、それを耕ひ込んで行かねばならなかつた。

彼は久しい間、鍬を持たなかつたので、掌がチク〳〵痛んだ。彼は顔をしかめた。

道を女學生が一人通つてきた。そして、彼の異樣な百姓姿に注視した。

（オヤ！　此の方は、大學へ行つたつて言つたのに……。こんな妙な風をして百姓してゐるわ！）と、その若い女學生は考へたのである。そして、彼から遠く離れてからも、振り返つて見た。（恰度、何かの畫にあつたやうだわ！）と、彼女はもう一度考へた。

彼は、女學生を見送つて、そしてニコリ微笑んだ。

（若い！　ほんとになんて幸福な時季だ！）

太陽が次第に高く上つたので、茶の上の白い霜は溶けて、たら〳〵美くしく雫を滴した。

若い、しかし元氣のない女が、部落の一番端の家から、ふら〳〵出て、彼の方へ小刻みに白い道を歩いてきた。……先刻から、彼女は自分の家の前で、彼の仕事してゐる姿を、幾度も幾度も注視してゐたのであつた。

（若しや、あの人でないと、誰れか他の人だと、恥かしいわ。……しかし、裕道さんならもう一度逢つて話し度い）

そして、彼女は、蒼白い病み疲れた面をし、全身を小かく顫はし乍ら、蹌踉として路へ出て見たのである。（そう、あの人に違ひないわ！）と、彼女は固く思つた。と、急に懐かしさがはげしく感じられた。彼女の灰色であつた眸は、急にらん〳〵と燃え上り、頬は上氣してぼうと赤くなつた。

裕道は、彼女が近づくのを知らずに、一心に土を耕やしてゐる。

彼女は彼の近くまで歩んで歩を止めた。彼女の胸の動悸は激しく高鳴つた。彼女の心に、絶望

から來る、或る力から來る元氣が湧き上つた。

「裕道さん！　裕道さん！」彼女は蒼白い窶れた顏を上げた。彼は彼女の顏を見た。

（昔馴染の雪子である。おゝ雪子である！）

「雪ちやんですか？　雪ちやんですか？」

彼は鍬を強く地上へ投げ付けて叫んだ。

「病氣ですね！」

彼女は俯向いた。彼女は堪らなく安易な悲しさを感じたのである。

「病氣のやうだね！」と、彼は言つた。

「エヽ、遂々……。惡い病氣なのよ！　それや」

彼女には、此の一年間が泌々思はれた。苦勞もした。そして樂しみもした。泣きも笑ひもした

（でも、私のこの一年は悲しかつたわ！　さうだわ、病氣になつたのも、それから來るのだわ！

……あゝ、それを此の人に聞いて貰はう、此の人だけには話し度いわ！）

彼女は顏を上げてぢいつと男の顏を見た。彼が、見下ろす眸には、秀麗な温情が、そして涙が

浮んできた。と、彼女は、急にせき上げて來る涙を覺えた。

「君は苦勞をしたやうだね？　何處にゐたの？」

男の優しい聲を聞くと、彼女は遂に聲を上げて泣いた。彼女は激しくすゝり泣いてから言つた。

「エ、、私はこの一年間群馬縣にゐたの！　料理屋の女中よ！……それは體のよい淫賣婦だわ！私はそこで隨分苦勞したのよ」彼女は眸を下ろした。

「何故？　君はそんな所へ行つたのだい？」

彼は彼女の痩せた細い手を握つてやつた。

「何故つて、貴下は未だ知らないの？……私は馬鹿だつたはね……私は男に騙されたのよ。私が東京へ行き度がつてゐたのは貴下も知つてるはね！　去年の春、私はどうしても行き度くて堪らなかつたのよ！　そこへ、あの色魔が遊びにきたのよ！　そして、僕が用事があつて上京するから一緒に行きませう！　つて、旨い事を言つたのよ！　私は遂々その男と一緒に春の夜、東京へ逃げ出したの、あゝ、私は馬鹿だつたわね！　私は東京へ行つて苦學するつもりだつたのよ。……私はその夜、宿屋へ男と一緒に泊つたの……。私はその晩、遂々身を汚して了つたのよ。……あ

ゝ、私は馬鹿だつたわね。私はもう何んにも思はなくなつたの。男のいふ通りになつたのよ！　そして、群馬縣へ酌婦に行つたのよ。……」彼女は絶望の悲しい表情をした。

「あゝ、君は愚かだつたね。しかし仕樣がないよ！」

彼は憐れみたゝへるやうに彼女を見遣つた。

『男は直ぐその金を持つて逃げちやつたのよ。私は始めて氣が付いて、泣いたわ、泣いたわ。泣いて泣いて泣き通して死んで了はうと思つたのよ』

しかし、私はその夜から、客の前へ出なければならなかつたの。私はもう自暴自棄になつたわ。私は、誰れにも彼にも身をまかしたのよ！　一度すれば、二度でも、三度でも同じことだつてね。

或る時は村會議員のお爺さんもかけたわ。或る時は、その人の息子にもね！　又或る時は子の二人もある大工さんにね。……その大工は遂々妻を追ひ出して了つたのよ。そしてみんなお金を私に貢いだのよ！　私は誰れからでも、有りつたけお金を絞り取つてやつたの！　村會議員は遂々破產したのよ」

「君は、馬鹿だね！　まつたく……」と、裕道は力強く言つた。
彼女はぞつとした。彼女は急に佗しく遣瀬なくなつた。「私は男を泣かせたわ。男を困らせたわ！　そして、それは私の手腕だ！　特權だと思つて、……しかしそれはみんな空虛なつまらない惡戯に過ぎなかつたのだわ」彼女はどうしたらいゝか判らなくなつた。
「あゝ、私は馬鹿だつたわね！　私は遂々流產したのよ！　私は誰れだかの子を產んだのよ。恰度私は惡い惡い病氣に罹つてゐたのだわ。私は又、肺炎になつたのよ。……そして遂々歸つてきたのよ！」
「君は罪を犯したね！　君は餘りよくなかつたね？」
彼はぢいつと彼女の窶れた顏を見た。「君には絕對な裁斷の日が來るだらう？」
彼女は急に責められるやうに悲哀を感じた。
（みんな罪の酬ひだわ！　病氣になつたのも、流產したのも）
「私は、どうしたらいゝの？　どうしたらいゝの？」彼女は最早顏を上げ得ない程泣き入つた。
「君には裁斷の日が來る――それは、君を苦しめるよ！　しかし君は無罪を言ひ渡されるだらう

！　君は餘りにも虐げられた運命に生れたからね！」

彼女には、何が何だか判らなかつた。が、唯裕道の言ふことが無上に嬉しかつた。

「君は、君は實に可愛さうな女だよ！」彼は犇と女の身體を兩手に抱き締めた。女は柔順に男に靠れかゝつた。彼女には、ぞくつとして嬉しさが身に浸徹つた。

「接吻をおし！」彼は強く締め付け乍ら命令的に言つた。そして熱い烙き付くやうな唇を以つて女の唇に接つしてやつた。女は感謝したいやうな、慰められるやうな恍惚とした狀態に誘ひ込まれるやうな氣がした。彼女は無圖と白い細い兩手で男の頸に卷きついた。そして、男の唇を離さなかつた。

「肺病患者にね、こんなに親切なのは俺ればかりだよ！」彼は三度目に接吻する時低い聲で言つた。

「うれしいわ！　私うれしいわ！」お雪は祕々と男の情を感じた。（私は、この人にずつと戀してゐたのだわ！）彼女は、男のやさしい眸の色を見た。そして嬉しさばかりが彼女を取り卷いた。

「君はこれで幸福になつたよ！　さア、寒くなるから、宅へ行つて、お休み！」彼は、抱いた手

を解き乍ら優しく言つた。
彼女は、柔順に俯向いて歸つて行つた。
（私は幸福になつたのだわ！　あの人に逢つて）
「君は懺悔するのだよ！　いゝかね、雪ちやん」
「エヽ、きつとするわ！」彼女は喜んで歸つて行つた。彼女の後ろ姿は淋しく力無かつた。今にも倒れさうであつた。
「もう、彼女にも二度と逢へないだらう？　虐げられた女だ！　哀れ悲しい……」彼は眸を瞑つた。
（只、神樣によつてのみ幸福になり得る）
彼は鍬を取り上げ、土を耕やし乍ら考へた。
青年會館には、最も頂點に達つした險悪な流れが渦を卷いてゐた。
——十一日である——。交渉の日である。

打ち拔いた室の一方には、地主連が額を鳩めて協議し、又、一方には、小作人が大勢詰め寄つて、無言の行をしてゐる。その間を、暗雲は、今にも雨を降らさうと、低迷してゐるのである。

集會所の横の道へ、大見原裕道の、新らしい農夫の姿が、ひよいと現はれた。彼れの美しい眉宇の間には斷然たる決心の色が刻まれてゐる。

先刻から、窓に寄つて外をばかり氣にしてゐた甚五郎は、彼の姿を見ると、躍り上つて喜んだ。彼は村一の饒舌家である。彼はそつと外へ出てきて、裕道に目禮した。

裕道は應揚に頷いた。

「どうだね？」彼の聲は腹の底から出るやうに力强い。

「遣つて見ましたよ！　三條乍ら、貴下が仰言つたやうに要求して見ましたよ！

第一條、小作人に平等な權利を與へ、小作人組合を認めること。

第二條、小作料は十ケ年收入平均の半分以上に出でざること。但し、土地によつて定むるも、不作の年は六割引くこと。

第三條、信愛の情を以つて、土地を次第に小作人に分讓すること。

第二條がね、貴下！…」彼は右手で頭を掻いた。

「さうだらうさ！　五割かね？　それでいゝさ」

裕道はぢいつと甚五郎の顔を見詰めた。

「俺れの親父もゐるだらう？　馬鹿な！」

「へ…。地主は三割を主張しますだ！」

「三割？駄目だね！　馬鹿共が…」

「私はやつて見ました。六割を固持したですよ！」

「五割に決定しただらう？」

「エヽ、やつとね！」甚五郎はニヤ〳〵微笑んだ。

「いゝさ！　地主共は經費に追はれて苦しんでゐるのだ。が、彼等の苦しみは、小作人の苦しみとは割がいゝよ。彼等が今から苦しむのも、彼等が、不當所得して贅澤した罰だよ。ほんとに地主共も馬鹿だからな！　お前等のやうに…。が、今つからは、只一反歩から澤山取ればいゝ世になるのだ！」

「へ……………貴下のお蔭げで」

「俺のことは、みなに話すなよ…。ぢや俺れは行くよ！　俺には、まだ仕事がある」

彼はチラリ、集會所の方を見た。そこには黑い人の頭が澤山見えた。「行くよ！」

彼は、しつかりと、學校の方へ向つて歩き出した。

（まァいゝさ！　これで、だんだん平等される。百姓が共同して重要さるべく努める、後は只、神様が知つてゐることだ！）

彼はニコリした。

（今夜は又、俺れは講演しなければならない！　青年共を引き上げるためにな！）

彼は青い晴れた空を見た。さうして、手を高く指し上げて、うおーうと叫んだ。

講演會、會場である村の小學校の、控室には、同志の者が七八人寄つて、話してゐる。

「大見原君はどうしたんだらう？」栗持が突然叫んだ。

「あヅ！　さうだね！　大見原君が來て吳れなくてはね」內藤が心配さうに言つた。

「未だ時間には一時間餘あるからね！」と、小山は言ふ。

「さうだね！……あの人は變り者だね！　僕先達つて君の所で逢つて吃驚したよ！」と内藤が小山に言ふ。

「さう、あの人は、確かに吾々より何處か違つてゐるよ！　かう、落ち付いて深味がある」

「大見原君ですか？　あの人は大學を止めたのですか？」と新らしい人が言ふ。

「エヽ、昨年中でね。今百姓してゐますよ！」

「さうですか？　あの人は、學生時代はよく出來ましたね」

「あの人は、隨分精神上苦勞したらしいんだね」と、栗持は、ニキビの顔でいふ。

「あゝ、僕は苦勞したよ！　諸君……しかしその苦勞が尊といのだ。少なくも、僕はその經驗によつて教養されたよ！」

――さう言つて、裕道は、ひよいと窓から顔を出した。みんな驚いてそちらを見る。と、裕道のニコリした顔面筋肉の力強さに、索き込まれて了つた。

「這入つて呉れ給へな！」と、内藤は言つた。

「あゝ」彼は室に入る。「遲れて失敬したね！　一寸朝、雜誌へやる詩を書いてゐたんでね」

彼は、やさしい瞳で、みんなの顔を見廻す。

「いや！　まだ一時間程有ります。開會には」

「さうかね！」彼は一寸不快な表情をした。

「君は、文學をやるさうですね？」と內藤が訊いた。

「あゝ、文學をやりますよ！……今では百姓をし乍らね。その方が却つて愉快だがね……。文學がなかつたら、社會は余りに淋しいよ！　藝術のない生活はね。食ふことゝ、想ふことゝは、人間には必要なことだよ！　昔から、後までね」

「僕も一寸、遣らうと思つてますがね……」

「さう、それや結構だ！……が、中毒せられ給ふな！」

彼の言に、內藤は青い顔をした。彼に取つては、文學は戀人に對する以上の憧憬を與へてゐるからだ。

小山は政治の話をしたかつた。少くも、世界がどうした。どの會議が不滿といふ風に。

「時に、君等は、××の平和條約をどう思ふね？　僕は、日本の全權が、餘りに腰が弱かつたことを憤慨するよ！　何故、あんな奴等を遣つたんだらう？」彼は、特に注意を引くために大きな聲で叫び始めた。

「支那の內亂はどうだね、あれは英米の後押しだよ！　僕は斷言する！」

「さうだらうよ！　しかし俺れ達小さい百姓には、關係のないたわ言だよ！　あれは卑しい奴等の遊戯に過ぎないよ！」

（日本人はどうだね？　支那はいゝ場所だ！　文明は西漸してゐるではないか！」

裕道は低い聲で言つた。そして急に不快を感じたので、室の外へ出て行つた。

彼は校庭の土の上へ、ぺつと唾液を吐いた。

（あゝ、冬の正午の美くしい陽光が照つてる！　さうだ！　俺は、今日は泌々太陽に接しないから）

彼は、つかつかと校庭の暖かな日當りへ行つた。

彼は衣服をすつかり脫いで、眞裸體になり、そこの枯草の上に蹲んだ。日光はチリチリ彼の脊

を射して、彼の皮膚に、強烈な刺戟を與へた。彼の内臓は急激な發育を始めた。

一人の若く美くしい女教員が、便所へ行かうとして、扉を開くと、彼女の眸に、たくましい男性の眞裸體像が映つた。「アッ！」と、彼女は叫んだ。男性の皮膚はむくむくと動いた。彼女は、ぢいつとその男性の肉體を見据ゑた。（男の肉體を見た！）女は一寸責められたが、内心の根強い好奇心は、彼女の心を、眸を、男性の裸體の上に集中させた。と、彼女には、自分も矢庭に衣物を脱ぎ白い乳房を出し、白い腹を露出して、男に抱かれたい、強い衝動に驅られた。彼女の眸はらんらんと燃え上り、全身は欲望に爛れた。彼女は堪らなくなつて、廊下へ坐つて了つた。裕道は立つて、彼女を振り向き、そして、ニッコリ優しく微笑んだ。彼女は、その時、強壯な男の身體を股から全軀を見た。彼女は、何故かぶるぶる細かく全身を震はした。

裕道は、衣物を着け、ニコニコし乍ら、彼女の側へ寄つてきた。

「貴女は、僕を見ましたね？」力強い聲で言つた。

「エ、……濟みません！　失禮しましたわ」

彼女は詫びるやうに小さい聲で微かに言つた。

「いゝですよ！　一層、貴女も遣つて見給へ！　心配ないです！　我々は母の腹から生れる時には、皆裸體ですからね！　アハハ、、、」

彼は愉快さうに聲高らかに笑ひ乍ら、控室の方へ歩いて行つた。

（何んて自然なんだらう？……あゝ、私は見て了つた）彼女は、サツと上氣して赧い顏をした。そして、それは彼女の一生涯の秘密となつた。

控室へは校長も來て、語り合つてゐた。

「考へて見給へ！　この駿河の海岸に打ち寄せる波も、あの米國の桑港の岸へ打ち上げる浪も、みな太平洋の水である、續いてゐる、といふことを。しかも日本は世界の三大國の一になつたのだといふことを。吾々はうつかりしてはゐられない……」

校長は禿頭を振り立て乍ら叫んだ。裕道は校長の野暮な顏を見た。

（オヤ！　これは先日の教育時報にあつた、S博士の言つた通りを語つてゐるぞ！　無能者奴！）

そこで、彼は、眞面目な顏をして言つた。

「校長！　貴下は近々他へ御榮轉に内定したさうですね！」と校長の赧い鼻を見て言つた。

「エヽ、有難う。多分…:」校長は輕調に言つて了ふと、ハッとした。
「結構なことですな！…:そこで、諸君、後任にはどんな人がいゝだらう？」
裕道は、哀れにも、お可しくなつた。
（あゝ、了つた！　百圓！　百圓の月給を棒に振つて了ふ。…:しかし言つて了つた。今この學校を止めれば、差し當り山奥の小さい學校だ！…:あゝ、堪らない）校長は、なさけなくなつて泣き度くなつた。みんなはその表情を見ると、クス〳〵笑つた。泣き出しさうな表情をして、校長は出て行つて了つた。
そこへ入り變りに、村長がやつて來た。みんな立つて、目禮して、彼等は式場の方へ行つて了つた。で、後へは、裕道と村長の二人が殘つた。
「あッ！　大見原君！　今日は御苦勞！」
「イヤ！…:餘り可愛さうですからねー　やつて見やうと思つて――」
「有難う。君等若い人がやつて呉れて嬉しいよ！　實際私としては、余り成績が惡いんで、來年度は廢校して了はふと思つたんだがね…:」村長は傲然として言つた。

「農民は未だ無智の境にゐますよ！」彼は底力ある聲で言つた。村長は彼れの眸を見た。

（これは傑物だ！）と思つて、ニコリした。

「さう……でも、わしは『民は寄らしむべし、知らしむべからず』の方でね」

小使ひが「仕度が出來たから」と言つてきた。で、二人は立ち上つた。

『日暮れ近づけり、爾等、光ある中に光の中を歩め！』て、僕はいひませう。」

彼と村長は、肩を並べて會場へ歩を移した。

――會場には、三百名の青年が、緊張した表情をして、開會を待つてゐた。彼と村長は肩を並べて入つた。青年達は、一勢に彼等を見る。と、彼の潤ひのある黒い眸は、知り、悟り、憐れみた、へるやうに、人衆の上に落ちた。すべては坐につく。そして、そこには緊張した靜肅が充ちた。

理事の一人は、立つて簡單に開會の辭を述べた。

で、その次ぎに、彼れは立つて、悠然と演壇に進んだ！　彼は、何物か偉大なものに通ずる感激に打たれた。

補習學校生徒へ

大見原裕道

――吾々人間は感情の動物であり、又、理智の所有者である。諸君の醜き慾望は、人々を獸に墮すであらう！　諸君の飽くなき怠惰は、人々を饑飢に誘ふであらう！　そして、現代青年の向ふ所を見るに、或は此處に陷らんとするものにあらざるか？　假に私の村の青年を見やうか？補習學校の成績を見やうか？　吾々でなくも、その頽廢を嘆ずるであらう！　或る者は、肉の享樂に憬れて女の下に夜遊びに耽る。或る者は酒に醉つて淫らな放言をなしてゐる。そして獸欲の鬪爭と、飢餓の叫聲は、地上を渦卷き流れてゐるのだ！　昨日もそこには赤い血が流れた。今日もそこには革命の聲は上つた。

文明國だ。世界の一等國だ。しかしそれが何んの誇りにならう？　華府會議で立派な四國條約を結んだ。而しそれは遊び好きな、外交官共の寢言に過ぎないのだ。……高等官は偉いだらう？而し我々としても、同じく人間ではないか？　只彼等は高等な大學教育を受け、君等は低い義務教育をしか受けないといふ相違のみだ！　然るに、何故に彼等は權力を行使しつゝ歡樂をし、吾々は勞働を、しかも義務以上の勞働を餘儀なくせられるだらうか？　只彼等は富豪の家に生れ、

我々は貧乏に生れたがためだ。

我々は最早、平等の機會を叫ばなければならぬ。吾々とても、皆同じく地上に生を得たる人間ではないか？ 我々とても大臣たり得、權威者たり得る事が主張されていゝのだ！ 而し、私は此處で言はなければならぬ。何んとなれば、吾々は平等を叫ぶには、餘りに敎養が低くはないか？ 大學を出た者と、小學を出たばかりの者とは、その理智の開發程度の相違することを、吾人と雖も否定することは出來ない。

さらば、吾々は現在の狀態に甘んじて、彼等寄生蟲のために盡すといふのか？ 否！ 絕對に許容すべからざることである。しからば吾々は、如何にしてこの虐げられた境涯から脫却しやうとするか？、私達は、自己の智識を增加さすより外ないのだ。吾々の理智はすべて平等に神から授けられてあるのだ。我々はその理智を働らかせねばならない。然らば、吾々は何んによつて自分の理智を磨いたらいゝだらうか？ 吾々は勉强するより外ないのだ――。

彼はそれから、自己の宗敎的體驗に就いて元日の朝のやうに語つた。彼の眸は燃え、全身は强烈に躍動した。

——私は病氣になつて東京から、歸つてきました。そして七十日の間苦しい病床に横はつてゐました。私は友達もなく、實に一人淋しく絕望の死の線の前に考へました。

人間は何んのために生きてきたのか？　人間は何故働らくのだ？　私は、人生といふものに就いて毎日々々考へたのでした。何が何んだか、みんな疑ぐつて判らなくなつて了ひました。みんな、みんな虛無だ。世の中には何も面白い幸福なことはない。私は遂ひに嚴肅な死を考へたのであります。眞個に私は幾度死を考へたかわからないのです。——現在の呪はれたる時代に於て、此の世の中に生を受けたる者であつて、眞劍に一度も自殺を考へないやうな者は、語るに足らない。むしろその生存の意義がないやうである——。

或る晩、私は死場所を探して、暗い闇の中を彷徨しました。ふと私が空の星を見た時、私の寂しい孤獨の心へ、或る神祕な力が沁み入るやうに思ひました。私は無意識に祈りました。私は始めて、ほんとに神に祈つたのです。世の中には神といふものがあるのだ、と思ひました。

「どうぞ神樣！　私を幸福へ導いて下さい」

（彼はこの時、昂奮して兩手を胸に組み乍ら語り續けた）

私はその晩一夜、神といふものに付いて考へました。私は次第に慰められました。そして地上の人間は、皆兄弟であることを知りました。如何に惡い人間であつても、人間である以上、屹度良心を持つてゐます。その良心は即ち神です。大集の神から別れた小さい神樣なのであります。しかし、現代の私達は、その小さい神を押へつけて惡いことをしてゐるのです。罪を犯してゐるのです。大集の神はすべてを見てゐます。裁斷の日は最早近く迫つてゐるではありませんか？

私は、餘りに自分の淺ましいことを思つて、只管に祈りました。私はすべてを愛さなければならないと思つた。私は勝利に近付いたのであります。

私は、私の村の青年の方の樣子を聞きました。私が居なかつた六月か七月の間に、私の村の娘の所へ、急に夜遊びの青年が來るやうになつてゐた。或る晩、私は友と二人で、村を見て廻つた青年達は、『宴會の酒に醉ひ疲れて最も卑猥な低級な暴言を吐き乍ら、押し寄せてきた。或る娘の家では、恐れて戸を閉ぢて了つた。家の人達は、決してそれ等青年の行爲をよろこんではゐない。

兄弟よ！　私達がいつまでもこんな淺はかな行動を取つてゐたならば、私達は最早破滅して了ふのみだ。日昇の如き勢ひを以つて進展してきた日本も、衰亡の外はないのだ！　支那は最早日

醒めてきてゐる。今後三百年經つたら（その時は西暦二千二百五十年だ）日本は支那の後へに落されるであらう！

私の兄弟達よ！　餘りにも悲しいことではないか？　諸君も人間だ！　獸に返る必要はないのだ！　我々は勉強しやう！

そして神をも、信仰しやうではないか？

曾つて、私も、諸君以上の不良兒であつたことを告白する。而も私は不幸であつた。女や酒に耽溺するよりも、現在の神を信ずる勞働生活の方が幸福である。

兄弟達よ！　私達は先づ理智を磨かう！　學校へ來てね！　又、家でね！　よく注意して考へて見て吳れ給へ！

彼が、降壇すると、皆俯向いて考へ込んで了つた。彼はみんなの上に眸をたゝへ瞑目した。

（一人でもいゝ、俺れに走り來る、俺れに共鳴する人間、殊に若い青年よ、あれ！　俺れはどんなに君を敎へるだらう！）

式が了へて、昂奮した人々は會場を出た。

「君、僕は痛快だつたよ！　實に‥‥校長の泣面が！」小山は堪へられさうもなく笑ひ乍ら叫んだ。

「何故ね！」

裕道は憂欝さうに訊いた。

「あの無能者が、君に遣られてね！」

「さう‥‥しかし、彼の無能は、彼ばかりのせいではないよ！　彼は哀れな人間だよ！」

裕道は、仰いで、空の星を見た。そして人間がみんな淺小に哀れに見えた。

「私は祈ります。友の神よ！　星の神よ！　天よ！‥‥」

星が、彼の頭上へ寄つてきたやうだ。

或る日、彼は、部落の道を、とぼ〳〵歩いて行つた。小石が道に出てゐると、彼れは、それを道傍へ除けては行つた。決潰してゐる所があると、彼は修繕した。

（爾等、明日の日は、又、明日にて光りあり。何んぞ今日の日を惜しむなかれ！）

（されば爾、一日一時間、他人のための、よき勞働に捧げよ！）

彼は、破れた小橋を直した。と、突然、側の家から、爭鬪の叫聲が聞えた。又、激しい打擲の音が響いた。そして女の泣き聲が聞えた。裕道はつと立ち止つて了つた。

中から、年取つた老女が、激しく泣き乍ら表はれた。

「あゝ……何んて情けない、あゝ……………」

老女は堪らない聲を張り上げて、土の上に蹲まり、皺だらけの全身を打ち震はし、兩手を顔に押し當て、白髮の頭を振り立てゝ泣き崩れた。「あゝ、野呂まめ！　莫迦野呂まめ！……あゝあゝ……」

裕道はそれを見た。（どうしたのだ？　可愛さうに……）で、側へ寄つて優しく言つた。

「お婆さん？　どうしたの？　ね？」

老女は、人が來たのを見ると、尚更ら聲を上げて泣き出した。

「どうしたんだい？」と、彼は一寸語氣を強めて言つた、

「どうしやうがありますだ！　ああああ…。私らん野郎は、やくざ者で御ぜいますだ！　ああ…」

「息子が、どうしたんだい？　お婆さん！」

「なんといふやくざもので御ぜいますだ！　毎日〳〵炬燵の中に蹲くまつてごろ〳〵してやるだ！…俺ら、一人で働らかねいなんねいだ！　俺アこの三日間、碌々飯も食はねえで働らきましたゞ。…が、百姓は、直ぐ報酬は得られないものでなア…。俺アどうしたらえゝだかわかんねえだよ！　な、お前様ア幾ら叱つてもどうもなんねえだ。どうしやうがあるだ！」

「今、喧嘩したのだな？」と、彼は一寸天を見上げて言つた。

「えゝ、えゝ、今、うんとこづいてやりましただ。だつてどうしやうがありますだ？…あれには、去年新らしい嫁を貰つてやつただ。…ほんたうに彼女は働らきが過ぎて亡くなつて了ひましただ。お前様、「去年××から貰つたのでしただがな」と、突然、老女は今迄怒つてゐた顔を、泣き出しさうな悲しげな顔に變へて言ひ續けた。

「ほんとうにあの子は、若くて元氣な、物事のよくきく子で御ぜいましたゞ。でな、あの子と私

との外には稼ぐものは御ぜいましねいだ！ そんなことは、俺らには何んでもねいことだつた。馴れた事で御ぜいました。

然し、嫁が直ぐ身持ちになりましてな、お前樣、流産して、親子共死んで了ひましただ。ああ・・・。それ以來貧乏ではあるし、どうすることも出來ましねいだ。野郎は知らねい顏して相變らず、炬燵の前に空虚な頭を掻いて蹲つてゐましただ。野郎が殺しただ。あの野呂まめが！・・・俺アそれから一人で働らかなアなりましねいだ！ が、俺アも年取つて行くだ。な、俺アも、又嫁のやうに働らき過ぎて死ぬだよ！きつと！」

老母は最早怒る元氣も拔けて、ホツと溜息を吐いた。

「ぢや、どうしやうてんだね？ これから・・・」

「あゝ、俺らにも判んねいだ。・・・が、せめてな、お前樣にお願ひするだ！」彼女は聲を低め頭を下げて言ふ。

「何かね？」と、裕道はやゝ焦れて來た。

「御覽の通り、野郎もまだ若い百姓で御ぜいます。ところが、俺らには大變な荷厄介で御ぜいま

す。俺ァ今日生きてゐても、明日死ぬか判んねい身空で御ぜいます。野郎はどうして家内なしでやつて行けませう？　あんな奴はお前樣のお爲めになるやうなことはしつこありましねいだが、どうか嫁を探してやつて下せいませ！　どうか？」

「ぢやお前は、あれに又嫁を貰つてやらうといふのかい？　それやいゝ思ひつきだ！　直ぐ貰ふといゝ」

「だがなァお前樣、考へて御覧なせいまし。俺らには一坪の地所もありましねいだ！　それに野郎はあんな馬鹿で御ぜいます。どうして好んで來る嫁がありますかい？　だからお願ひ致しますだよ！」老女は尙頭を下げた。

「ぢやァどうしたらいゝのだい？」彼は不快な表情をした。

「お前樣の家は、村でも信用が御ぜいますだ！　お前樣の家で聲を掛けて下されァ、きつと娘が來て吳れますだよ！　お願ひしますだよ！　お前樣！」

「あゝ、あゝ、あゝ」彼は逃げ出し度くなつた。彼は戶の間から中を覗いた。薄暗い室內の炬燵の前に、黑燻んだ顏の怪物が蹲まつてゐて、彼を見ると、ぎろつと眼ばかり光らせた。婆ァは彼

の袖に縋れるやうにした。

「お前樣、お願ひしますだ！　あれの嫁をな！」

裕道は一散に走り出した。

（あゝ、あゝ、あゝ、俺れが泣き度い――どうしやうがあるのだ！　どうしやうが……）

彼は畑へ行つて少時立つてゐた。今見た悲慘な農家の光景が、鮮明に映し出されるやうだ。

（悲慘！　悲慘！　他になんと言ひやうがあるのだ？　悲慘と言ふより他に……。どうしたら、彼等を助け救ふことが出來るか？……何しろ彼の息子を正氣に返さなくては駄目だ！……又は、あのまゝ養ひ得る社會を建設しなくては……）

彼には、兩方とも、その力がないやうであつた。彼には只祈り得ることのみが、正しい行爲のやうな氣がした。彼は天を指して祈つた。

「あゝ、神よ！　彼女等を哀れみ給へ！」

その日の午後のことである。村の一番端れの小さい苫屋から一行の葬列が出掛けた。

(雪子が、遂ひに死んだのである)

とむらひの悲しい鐘は、かん／＼鳴つて、村人の心に儚ない生の意義を與へた。

葬ひの行列は、寂しく靜かであつた。鐘は又、淋しくかん／＼鳴つた。冷たい木枯しに、白い女の衣物が空虛にひら／＼飜つた。やがて、行列は墓場へ着いた。そしてそこで僧侶の讀經が朗々と始まつた。

中途へ捨てられた葬式の旗がぴら／＼舞つた。

人々は穴の周圍に立ち、敬虔な嚴肅な氣に打たれて涙を流した。沁々心に死といふことが考へられたのである。

大見原裕道は、畑に立つて、寂しい葬列を見送つた。

(おゝ、雪子！　雪子！　雪子！　お前は死んだのか？　お前は行つて了つたのか？)

彼は震へ聲で叫んだ。

(お前は他鄕へ流れて行つた。そして罪を犯した。しかし、お前は、又、故鄕へ歸つてきて埋められるのだ！

お前の生涯は、何んといふ數奇な運命であつたらう？雪子！　雪子！　お前は十九で死んだ！）
（雪子！　あゝ、お前は何處へ行つて了つたのだ？　俺れは、お前が好きだつたのだ！）
裕道は墓地へ向つて目禮し、兩手を天空に指し上げて祈つた。
彼の頰を、熱い涙がたら〳〵流れた。

第四章

裕道は、激しい創作欲に驅られて小說を書いてゐた。それはかういふ作であつた。

或る村に、一人の前科者がゐた。彼は最早十數年前に、高利貸の金を借り、それを返濟し得なかつたために、遂ひに告訴され、牢獄へ入れられた。

彼は、すべてに絕望した。しかし彼は無事に一年の刑期を了へた。彼は實に歡喜して故鄕へ歸つてきた。と、故鄕の人達は、彼を知らなかつたもののやうに白眼視した。彼は始めて、自分の境涯を氣づいた。しかし彼は、他國へ流れて行く程の元氣はなかつた。彼は自分の古い家に住んで、孤獨な、除け者扱ひされる悲しい百姓になつた。

やがて、彼は、醜い、年增の、少し足りない妻を貰つた。彼女の家は癩病系統であつた。しかし、二人の間には二人の男の子が生れた。親達は、ほんとに子供のみを愛した。子供の成長にの

み望みをかけた。若し、他人が、その子供を一寸でも泣かせやうものなら、父親の蒼黒い血は、一時に煮えくりかへり、眼口を血走らせ、顔面を猜疑に引き歪めて飛んで來るのであつた。彼は子供の聲、跫音、呼吸等によつて、遠く隔つてゐても嗅ぎ出した。實に、彼が子供の泣聲を聞いた時は、ハツと血走が甦るのであつた。

彼の妻は三人目の子を生んだ。愛らしい女の子であつた。親達は飛び上つて狂喜した。

「あゝ、お前、女だ！　女の子だ！」彼はそひやかに叫んだ。

寒冷な冬が來た。親達は赤子のことが心配になつて仕樣がなかつた。（寒いから感冒になりはしないか？　乳が足りなくはないか？）

或る日、父親は町へ行つて豐爐を買つてきた。そして熱い火塊を注ぎ込んで、赤子の柔らかな軀に當てゝやつた。赤子は激しく悲鳴を上げて泣いた。

「どうしただらう？」と妻は訊ねた。

「俺れが湯暖保してやつたから、それで泣くのだらうよ！　驚いて……」

彼はさう答へて畑へ行つた。

夕方、二人が野良から歸り、妻が赤子に乳を與へやうとして布團を上げた時、彼女は遂ひに腰を拔かし、聲を振り上げて泣き出した。

「死んだ！　死んだ！　赤ちやんが死んだ！　貴下が殺したのだ！　何故殺した？　何故燒き殺した？……おゝ赤ちやん！　何故燒き殺した？」

彼女は遂ひに、さう口走つて、村中を走り廻るやうになつた。彼は遂ひに、或る晩、妻と二人の男の子を殺し、自分も棟へ縊つて死んだ――。

彼はその小説を、涙を注ぎ乍ら創作してゐた。このことは實際あつたことであつた。

彼の筆は快活によく進んだ。外は靜かな冬の夜であつた。と、戶の近くに人の跫音がして人の來る氣配がした。

裕道は(高田が來たのだらう？)と、思つた。下駄の跫音は、遂ひに戶の外へ來て止つた。

「入つてもいゝですか？」栗持の聲だ。

「あゝ、よろしい！　入り給へ！」

裕道は筆を擱いた。ガタガタ扉を開けて、栗持が現らはれた。
「今晩は！　御邪魔ではないですか？　貴下の」
「いや！　もう書いて了つたんだよ！」
裕道は優しく栗持の方を見た。「もつと近く寄り給へよ！」
栗持は、戸を閉ぢて近寄つた。
「何をお書きになつたのです？……あッ、貴下の室は？……」と、叫んで彼は四周を見廻してゐる。
「短篇小説をね！……」
彼は、栗持の横顔を見た。と、寂しい影が漂うてゐる。
「栗持よ！　君は元氣がないね！　どうしたんだい？」
「僕？」と、言つて、栗持はニキビの顔に淋しい微笑を浮べた。「面白いことがないのでね。退屈でしやうがないのだよ！　悲しいいやなことを考へるんだよ…。つくぐいやになつて了つた」
栗持はぢいつと裕道の眸を見上げて言つた。

「君は、一寸此頃考へたやうだね？　結構だよ……。しかし君は教養團の熱心な團員だつたね。今でも入つてゐるのかい？」彼は、やさしく力強く訊いた。
「エヽ、まだ入つては居ますがね。……駄目ですよ！　もう、教養團も次第に活氣が無くなつて了ひました。この村でも、一時は全盛で、支部を作つた程でしたがね。みんな禿の野心にどうかしられて了ひましたよ。彼奴が理事になつてから、みんな偉い人の、財産家の人達ばかりになつて了ひましたよ！　だから實はね。僕も止めやうかと思ふのですよ」
栗持は名殘り惜しいやうな悲痛な表情をして溫つた聲で物語つた。「僕なんだか、今夜どうしても君に逢つて、話して見たいと思ひましてね……」栗持は俯向いた。
「よく來て吳れたよ！　君もさぞ淋しいだらう？　辛いだらう？　無理もないよ！　彼等特權階級に侵略せられたんではね！……しかし、君教養團は今どんなことをやつてゐるのだい？」
「講習會を每年やつて居ます。それに時々講演もありますが、たゞそれだけです。そして五十錢づゝ納めて、頁の少ない雜誌を一册宛送つて寄越します。」
「さうかね！　うん！　暴虐だね！　僕は教養團の幹事が駄目だと思ふよ。僕は前から知つてゐる

ゐるよ！　即ち、宗教は、開祖一人がいゝのであるといふことをね！　教養團もH君一人だよ！いゝのは…、彼は相當苦しんだらしい。彼の精神力は、彼の死後一世紀位ゐ響くだらうよ！

君等の教養團は、直きに會館を立てゐるから惡いんだ。僕はそれには不賛成だ！　そこには、野心を持つた連中が、ごた〳〵うろついてゐるよ」

「しかし僕は、もうみんないやになつて了つたよ！」栗持は、泣きさうな表情をして言ふ。

「さう？…どうしても、ぢやね、君は死に給へ！　自殺し給へ！」裕道の眸は鋭どく光つた

「いやかい？　君は默つてるね！　ぢや君はすべての女にほれ給へ！　女の肉に！」

裕道の頰に微笑が浮ぶ。

「女？　女は、僕はもう止めましたよ！　君、ほんとに」

栗持は、一寸上氣してニキビの顏で叫んだ。

（馬鹿！　お前の顏を見ろ！　女を姦淫したいと書いてあるではないか？　お前のニキビを見ろ！　未だそんなことをいふには早いよ！　お前はまだ若いよ）

「君は、何んといふ馬鹿な嘘を言ふのだ？　いやしくも僕の前にきて。君のニキビを取り給へ

よ！」

「ニキビかね・・・俺ァ醜い男だよ！　あゝ」

「ニキビが恐ろしいのかい？　なさけないのかい？」

「僕は、姦淫なんか思はないよ！」

「さう、それでいゝさ！心が清澄になればニキビなんぞ出來ないからね！・・・これは僕の體驗でも斷言できるよ！　君はまだ修養が足りないのだ！　假令教養團員でもな」

「ぢやァ、僕には・・・判らなくなつて了つた。」

「栗持！」彼の聲は力強く周圍に響いた。

「エ、・・・」栗持は度膽を拔かれてハッとした。

「君は眞劍な自制がない。君は食ひ過ぎてゐる。僕は君にいふ！　君は斷食し給へ！　教養團を忘れても、忘れなくともいゝが。やり給へ」

栗持は眞蒼い顔になつた。彼は平氣で瞑目して續けた。

「僕のことを、君の參考のために言ふなら、僕は毎日聖書を讀んでゐるよ。曾つて三年前に、あ

の有渡山に二十一日間斷食修業したよ！　僕は、今でも一日斷食して、床の上に瞑想することがある。又、一夜三時間づゝ、燈りを消して思索することがある。室の隅で祈禱することがある。……一層、君も、二週間程日本平へ籠つては？」

「エ、、僕もやつて見ませう？」栗持は吐息した。

「遣つて見給へ！　一週間山で斷食修養することは、君等が三年間教養團で講演聞くことより、きつといゝだらうと思ふ。ね、君！　現代人は、餘り滓ばかり舐め度がつてゐるのだ！　！學者が何んだ！　ほんとにつまらないぼうふらだ！　君！　君も俺れのやうにね、獨創することに心掛け給へ！　滓ばかり貰つてゐるから飽きるのだよ！」

　栗持は、少時の間、俯向き、ぢいつとして、彼の言葉を聞いてゐた。彼はしらずしらず、涙が腹の底から押し上つて來るのを感じた。彼は、窘迫しさうに喜ばしいやうな、哀れ深いやうな感情に捉らはれた。

「有難う！　有難う！」栗持は全身を固くし聲を震はして言つた。裕道はたゞへ悟るものゝやうに彼の顏を見てやつた。

「僕、これで失敬しますよ！」栗持はよろよろ立ち上つた。（何んだか生新な氣に打たれました）

「さうかね！　左樣なら！…君、家へ歸つてね、よつく自分の心を、考へて見給へよ！」

裕道は情味をたゝへて後から言つた。

「エゝ、有難う！」

栗持は、考へ乍ら步いて行つた。

「行つて了つたな！　闇の中を…」

彼は呟やいた。

（彼れも損な性分に生れたものだ！　彼は一生孤獨だらう？　彼には偏屈な惡い癖がある――。しかし、彼れも可愛さうなものだ！　が、今夜は苦しむだらう？　いゝさ！　それだけ彼は光明へ近付くよ！　後は只神樣のみ心のまゝだ）

彼は、燈を消し、暗い室の隅に跪まづいて靜かに虔ましやかに祈つた。

彼れは、上昇を感じてきた。

彼は、ぴつたりと前方を凝視して歩いて行つた。

小さき者には
小さき糯を與へ!
大いなる者には
大いなる糯を與へよ!

彼は聲高らかに唄つた。人間は空想し、聲を上げて樂しく歌ふことの自由を、何人も神から款されてゐる。

二月の中旬の萬象はよく澄んでゐた。

(おゝ、俺れの心の反映だ! 喜こばしい……。俺れは今日も畑で土を耕やすさ。おゝ、又何處かでなく小鳥の聲も樂しい。大氣は清新に透り、陽炎は大地からはひ上つてゐる。……いゝ、實際いゝ……俺れに何んの不平があらう? 俺れになんの不幸があらう? 俺れには只感謝がある

ばかりだ！）

彼は胸を張つて深呼吸した。おお！ お！
（見給へ！ 何處も、何處も、天と地のつらなりが美妙ではないか？）

彼は、或る家の屋敷角を曲つた。と、其處に蹲まつてゐた汚ない風態の老婆が、ぎろり顔を上げて彼を見上げた。彼はぎよつとして歩を止めた。老婆は皺だらけの顔に、氣味惡いニヤリと微笑を浮べた。

「あんた樣！ あんた樣！……エ！」老婆は咽喉に何か障へるものゝ如く、ぜいぜいして苦しんだ。

裕道は、不快に、しかし又哀れに思へた。

「あんた樣、あの……あの、おゝ……魚屋はまだ通りましねいだか？」老婆は、不安さうに力無く見上げた。

「何故？……何故？……こんな所へ出てゐるのですかね？ 宅に居れば、魚屋は伺ひに行くでせうよ！ お婆さん！」

「しかし、……しかし、なァあんた樣！　俺ァ家ぢや魚食ふこと出來ましねいだ。な、老人は魚でも食ふのが、一番樂しみで御ぜいますのに！……あんた樣、俺ん所ぢや食ふこと出來ましねいだ！」老母は、下劣な卑しい表情をしてニヤリ口邊で笑つた。そして、彼に、誰れにでも聞いて貰ひ度い女の欲で喋つた。

「あんた樣。聞いてお吳んなさいまし。俺ァの忰は、ほんとに我利我利野郞で御ぜいますだ。でなァ、俺らが働らかずに寢てゐるでな、飯もろくろく食はしねえだ。な、俺が、たまには旨い魚でも食ひ度いと言ふと、厄介者奴が！　早く死んぢまやァがれ！　てこくだよ。嫁は嫁でな、赤子ばつかたんとひらァがるくせに、自分ばつかしやれこくつて、俺ァ虐め罵しるだよ！……俺ァほんとに辛らねいだ。がな、どうして俺らが死ねますものか？　どんな苦勞しても生きてゐていだ！」

老婆の眸は、生への根强い執着に醜く光つた。彼は、まざまざと人間の本能を見せられたのだ彼は氣味惡くなつた。嘔吐を催してきた。

「君の忰も酷いね！……さう、君の忰は、村隨一の功利派だよ！　みんなよく言はないよ！」

裕道は聲高く叫んだ。

「あんた樣！……あれは、ほんとに俺らを殺すかも知れましねいだ！　あれは、俺らがあつては財産が殖へないと、始終言つてますだ。穀潰しの老婆奴！　早くとつとゝくたばつて了やあがれ！つてな……。あんた樣、なんて野郎になつたで御ぜいませう？　俺はあんな野郎に育てるつもりで生んだでは御ぜいましねいだ！　俺は死んだ夫にも濟みましねいだ！……あんた樣、あれは嫁にそゝのかされてゐるで御ぜいますだよ！」老婆は、聲を低めて排斥するやうにさゝやいた。

「馬鹿！　女め！」と、彼は呶鳴つてやり度い氣がした。

「俺らに魚を食はしねいのも、嫁の指し金で御ぜいますだ！　俺らの野郎は、そんな惡い人間ではありましねいだつたもの……。あんた樣、俺らにやまだ二十錢お金が殘つてますだ！……でな嫁にかくれて魚を買つて食はふと思ひましただよ……」

彼女はさう言つて、卑しくひゝゝと笑つた。

「直き魚屋も來るだらうよ！　そしたら、うんと負けて貰つて、澤山お食ひよ！　お婆さん！」

彼は寂しく微笑んで歩き出した。

「へへゝ……。あんた樣、若し魚屋に逢つたなら、言つておくんなせいまし。買人が居ると
な…」老婆の嗄れた聲が、彼の後ろから響いた。彼は、ぞつとする惡感に顫へた。
「彼奴は直き死ぬだらう？…若しかしたら自殺するだらう？　彼女は虐待しられ過ぎてゐる
――」
彼は、畑へ行つた。さうして地上へ踏ん張つて、天を見上げた。おゝ、今日の日が暮れて行く
のであつた。
太陽の光輝にも斑點がある。今、その太陽は、彼の心臟の鼓動と同じ程、左りへ左りへ廻轉し
乍ら、歩いて行くのであつた。
あゝ、山邊の寺から、入相の鐘が中空を流れてきた。

――遂ひにその老婆は、その夜、自殺して了つた。
（因緣は恐るべきものなるかな。老婆の死後その家の子供等は、續いて三人熱病となつて死んで
了つた。その家の長女は、いつまでも、いつまでも老孃として家にぶらついてゐた。彼女は石女

であるといふ風評であつた。嫁は三十九で死んだ。その家は次第に財産を減らして行つた。村人等は、自殺した老婆のたゝりであると言ひ合つた。因果應報は、不滅の眞理なるかな）

雪は降る。雪は降る。雪は眞珠とを散らばる中、人の子は固い鋼鐵を身に附け、熱い心を中に燃やし乍ら、歩武を揃へて、突き進み、突き進む。

曾つて慘虐なお前等の戰場を、今勳功に輝やく平和會議員の特別列車を、そしてつゝかゝらない昔しながらの百姓の土を、雪は平等に抱擁する。

（散亂する吹雪の一片は、太集の神の心のかけらか？）

大見原裕道は、室の机に向つて『古典諧美頌』を讀んでゐた。彼の赤心は、憂欝と倦怠に爛れ始めた。

で、顏を上げ、切り窓から、外の雪景色を眺めた。そこには、眞白な神の行動のみが、必然に嚴肅に行なはれつゝあつた。

彼はぢいつと、美くしい哞を隘つて、散亂と降り積る雪を見詰めてゐた。

と、その時、さん／＼と降りしきる雪の中に、黒い外套を着た郵便脚夫は現らはれた。

「郵便！」脚夫は、彼に角封を手渡し、紫の唇に微笑みをたゝへてから、機械的に歩いて行つて了つた。

「御苦勞！　御苦勞！」

彼は、脚夫の冷たくなつた手を握り締めてやり度い氣がした。

彼は、手紙を取り上げて、改らためてみた。港町の妹からであつた。（何んだらう？）

お兄さん

御無沙汰しましたのね。その後御身體は如何ですか？

兄さん！　私はほんとに、此頃悲しいことばかりですわ。

お母さんは、昨夜、やつと東京から歸つてきましたわ。病氣の方はもう大分いゝのですけれど又、いつもの病氣で困るの。半田さんの所へ一週間も泊つてきたのよ！　ね、ですから、來ると直ぐもう父と二人で爭かいしてゐるの。今朝も起きると直ぐなぐり合ひをやつてゐるの。私はど

うすることも出來ないのよ。だから、一人二階で小さい胸を痛めて泣いてゐたわ。するとね、父が上つてきて私を打つたのよ。母さんも烈しく罵つたわ。いつも喧嘩の後では、弱い私に八つ當りするのよ。

兄さん！　私ほんとに生きて行くのがいやになりましたわ。いつそ修道院へ行つて了ふかと思ふのよ。なぜ世の中には義理なんてことがあるのでせう？　義理のために苦しむ人が、どんなに多いことでせう？　私は世をうらみますわ。何故つて?!　何故つて……

兄さん！　私は何故貰はれてなんか來たのでせう？　私は、兄さんと一緒に、百姓してゐる方がよつぽどいゝと思ひますわ。兄さん！　私には矢張り貴下一人が力ですわ。

兄さん！　私はこれから後、どんなに苦勞することでせう？　學校も、もう卒業近くになつたのよ。

兄さん！　哀れな妹として思つてゐて下さいね。私これから、悲しい時には、きつと手紙を上げますわ。私が手紙を書いて出した時は、悲しいことあつたからと思つて下さいね。もう、今日は涙のために書けなくなりました。私は、泣けるだけ泣くのよ！　泣くことだけがたつた一つの

慰めですわ。左樣なら

お兄樣へ

喜美子

「あッ！　妹よ！　妹よ！　許して吳れ！　許して吳れ！　お前は苦勞することだね――。何故俺の父は養女になぞやつたのだ。ほんとに、お前の今の親達は氣六つかしやだ。妹よ。お前は生きてゐるのがいやになつたのか？　修道院へ行き度いのか？　お前はさぞ悲しいだらう！　死にたいだらう？　可愛さうな妹よ！　妹――」

彼は堪らなくなつて、手紙を犇と抱きしめてすゝり泣いた。

一お前は泣くことだけが慰めなのか？　泣くことだけがね――。僕も、僕もお前と一緒に泣いてやるぞ！　泣いてやらうぞ！」

彼は狂ほしいまでに叫んだ。

彼の腦髓は恐ろしい熱を以つて燃え上り始めた。

「妹！　妹よ！　僕は何處かへ行つて了ひ度い」

彼はすつくと立つた。そして身を跳らせて、散亂と降りしきる雪の中へ驅け出した。

雪は止度なく灰色の天井からハラ〳〵降つてゐた。家の屋根も、木の枝にも、又、捨てられた塵の上にも、將又、一面續く耕地の上にも、雪は平等に眞白く降り積つてゐた。

「妹よ！　妹よ！　あゝあゝあゝ」

彼は狂ほしく叫び乍ら、道さへ判らぬ雪の上を走り續けた‥‥。

彼は疲れてきて、ふと氣が注くと、前方はすべて、灰が降つてゐるやうで、何物も見別けられなかつた。彼は或る失望を感じた。彼は雪の上にがわッと倒れた。（このなり、このなり雪に埋もれて、死んで了へばいゝ）彼はそんなにも思つた。天からは、雪の粉がハラ〳〵と彼の上に降つた。彼は脚に激しい凍痛を覺えた。（死、死ぬことだけだ）彼は何物か嚴肅な力の聲を聞いた。彼は、心が落ちついて來ると、聲を上げ、涙を流し、身を震はせて歔欷した。

入相の鐘の音が、灰色の中空を傳ってきたので、彼は最早日が暮れるのであることを知つた。

日は暮れても、雪明りで四邊は輝やいてゐた。

彼は立つた。そして徐ろに歸り始めた、彼は考へて見た。自分が何れ程走り、何處に倒れてゐたかを。と、自分の狂人染みた行爲がおかしくなつた。

（雪はまだ降つてゐる。いつまで降る雪ぢややら？　俺は今日を一生涯忘れないだらう！）

彼は歩き乍らさう思つて、四邊を見廻した。四邊は矢張り雪ばかりであつた。

ふと、氣付くと、彼は學校の門の所へ出てゐたのであつた。彼は雪に埋もれたその長い校舍を見上げた。

（夜學校はどうだらう？）さう考へたので、彼は、つかつかと門の中へ入つて行つた。校庭の隅の方に燈りが見えた。それは小使部屋であつた。

彼は、眞白い校庭の雪を横切つて其處へ行つた。雨戸が固く締めてあつた。彼は立つてトボトボと戸を叩いた。

「誰方ですか？」嗄がれた老人の聲がした。

「一寸！……すみませんが」

人が立つ氣配がして、雨戸がガタピシ開かれた。老人は顔をしかめて降る雪を見た。
「ひどい雪ですね……何か？　御用ですかい？」
「夜學校は、今夜まだですか？」
彼はさう言つて、老小使の顔を凝視した。
「へイ……その、今夜は雪が降りますでな、休みにしたさうですよ……」老人は、さう言つて、不思議さうに、雪の附いた彼の姿を見遣つた。
「さうですか？　失禮しました！」彼は禮して戸を閉めた。と、急に、悲しい失望の涙が瞼の裏にこみ上げてきた。彼は又、門の外へ駈け出した。
（駄目だ！　駄目だ！　弱蟲共！　雪に恐れるとはなんだ！　雪位に……）
彼は、若しそこに夜學校の教師、又は學生がゐたなれば、呶鳴りつけ、なぐりつけたであらう？
しかし彼は悲しくなつた。みんな、みんな哀れになつてきた。
（最早、衰亡の時が來たのだ。この青年達が、成長した頃は、この島は、この東國の日出づる島

は、きつと滅亡して了ふであらう！　悲しい。しかし、最早時がきたのだ……」

彼には、爛れるやうな頽癈が考へられた。

彼は悄然として雪の上を歩いてゐた。彼は小川の邊りへ出た。水はいつものやうに、せん〳〵として低い方へ流れ流れてゐた。そして降る雪は、ヒラ〳〵水の中に吸ひ込まれて行つて了つた悲しさよ、絶望の悲しさが、犇々と身に沁みて感じられた。

と、直ぐそこの料理店の二階から、華やかな小太鼓の音が、若い女の聲に連れて調子よく鳴り始めた。彼は立ち止つて、きつとその二階を見上げた。そこの障子には、明るく灯が輝いてゐた。

小太鼓の音が、ハタと止んだ。

「ホホホ……アラ！　まア……」

若い女の聲が、淫りがましく響き渡つた。

「今夜こそ歸さないよ……」

「エ、……ほんと？」若い女の聲は、見上げてゐる裕道の耳に、はつきり響いた。

「うむ……。あの聲こそ青年團長の聲だ……。若い女……若い女と雪見をして、享樂してゐる――」

と、その時、裕道の全身が、根强い狂暴な力に、ぶる〳〵震へ始めた。

（俺れも、俺れも、一層若い女を上げて、あの！　あの太鼓を、打つて打つて打ち破つてやらう！）

彼の引き締つた口邊には、悲壯な決心が現らはれた。彼は狂暴な衝動によろ〳〵蹌けた。と、その時、彼の眸には、哀れな妹の泣き沈んだ俤が、はつきりと浮んできた。

（あゝ……俺れには出來ない！　妹よ！　妹よ！　俺れはどうしたらいゝのか？　妹よ！　俺れもお前と一緒に修道院へでも行かうか？）

彼は俯向いて考へた。雪はまだしきりに降つた。

（が、俺れは、修道院へ行くには、餘りに經驗し過ぎたのだ。俺は餘りに苦しみ過ぎてゐるのだ！　獨り身を安らけくするのが、決つして幸福でないといふことを、幸福は、民衆と共に在る所に存在するといふことを……。

おゝ、さうだ！　俺れは、俺れは矢張り、あの虐げられた人々のために盡せばいゝのだ！

妹よ！　世の中には、お前のやうな、叉もつと哀れな人間達が、如何に多いことであらう？

俺の行く道は、矢張りそこだ！　俺れは、虐げられた民衆のために盡さうよ）

彼は、ぢいつと天を仰いだ。彼の熱した面に、雪は快くハラ〳〵降りかゝつた。

（虐げられたものは、農民の中だけでも、餘りに多いではないか？）

彼は、瞳を瞠り、微かに見える里の白い屋根を見詰めた。

（愛して援けて遣らう！）

彼は美くしい顔に決心の昂奮を示現した。

赤くなつた頬を、熱い熱い涙が、恰も血のやうにたら〳〵流れた。

第五章

―苦しみ多し。
されど愛深ければ、
吾れ、うれしさに生きぬ―

（大聖詩篇）

生を得て、二十年の間、苦患に悶へ悶へてきた、『大見原裕道』彼は遂ひに、虐げられたる人々の友として、愛し援け得る愛の報償を、今や全つたく恵まれたのである。彼の心中は、勝利者の榮擧に、打ち震へたのである。彼の美くしき顔面は、尚更らに神のもの丶如く、崇高に、その瞳は、佛の慈悲を抱藏するもの丶やうにたゝへてゐる。

彼等が住む丘續きの曠野には、遂ひに早春の大氣が押し寄せてきた。三月になつたのである。

或る、温暖な早春の、草木の芽もずん〳〵伸びるやうな日であつた。

裕道はいつものやうに、異常な農民の姿で、村端れの小路を歩いて行つた。

『援けなければならぬ、一軒の農家』のことが、彼の頭腦の中で展開せられた。

――三年前に、村の中程に、小作人ではあるが、安易に生活し得る一軒の農家があつた。中年の働らき盛りの夫婦と、その親の老人夫婦と、男の子供二人の、六人暮しであつた。彼等の生活はほんとに幸福であつた。しかし、そこへ大いなる不幸が押し寄せた。それは、その年の小學校の增築工事に從つてゐた、主人が、ふとした不注意(それも他人の)から、遂に柱の下に壓つせられて、無慘の死を遂げて了つたのである。彼の家は大騷ぎであつた。何もかも絕望であつた。

悲しいいたましい葬式が了へると、彼等には最早、生活を支へるべき働手がなくなつてゐた。必然な生活難がそこへ押し寄せたのだ。殘された妻は、下の三つになる子を連れて、自分の實家へ歸つて行つた。後には、老人夫婦と、小學生の孫との三人が取り殘された。やがて居食ひのために、村から貰つた三百圓の慰藉金も殘り少なくなつて了つた。老人は地を見詰めて、暗い溜息

を吐くことが、多かつた。老女は、最早飯を焚くことさへ一つの苦痛である程老衰してゐた。老人は又、遂に、疲れた軀を野に出て勞働せなければならなくなつた。

と、又、一つの不幸が、この一家に押し寄せたのであつた。それは主人が死んでから、二年程經た時に、里に歸つてゐたその妻は、遂ひに病氣のために、五つになる子を殘して死んで了つたのである。子供等は孤兒となつて了つた。で、下の子も、又、老人の所へ連れて來られた。かくして、彼等の生活は、益々窮乏を加へるばかりであつた――。

彼はこの一家のことに就いて考へた。

(運命とは言へ、村のために犧牲となつたこの一家に、村人等は餘りに冷淡ではないか？　一時三百圓の端金を投げつけて、素知らぬ顔をしてゐるとは……)

さう思ふと、どうして、自分だけでも援けて遣らなければならないやうな氣がした。

彼は、その家の方へ歩いて行つた。

老人は、家の前の茶畑に、痛い腰を曲げて耕作してゐた。彼れは、それを眺めると、同情の念が、むらむらと湧き上るのを覺えた。

「お爺さん！　太助爺さん！　今日は！」

彼はつゝましやかに、老人を驚ろかさぬやうに叫んだ。

老人は腰を延し、振り返つて彼れを見ると、淋しい影を漂はせて、ニコニコ追從笑ひをした。

「今日は……裕道さま！」

さう言つて、ピヨコリ頭を下げた。

「お精が出ますね！」

「餘りいゝお天氣ですからの――」

老人は、さう答へて、天を仰いで淋しさうに微笑んだ。

「僕に一寸手傳はせて下さいよ！　お爺さん！」

彼は、さう言つて、最早つかつかと畑へ入つた。

「何んですつて？　裕道樣……濟みましねいだ！　そんなことして戴いては」

さう言つたが、老人の面には、喜悦の情がはつきりと浮んだ。
「いや！　僕は、自分のために手傳はせて貰ふのだよ！」
彼は、直ちに鍬を振り上げて、畑の中の草を埋めて行つた。老人も、腰を曲げて耕作し始めた。
「貴下のお家も、人手がなふて、忙がしゆうあらうに、哀れな私しらァ手傳ふて下さるたァ、ほんとに何んて言つてお禮していゝだかわかりましねいだ！……ほんとに、私らァ程不幸な人間は御ぜいましねいだよ！」
老人は手を動かし乍ら言つた。
「あゝ、ほんとに、同情するね。君の息子さんは何月に死んだんだつけ？　學校で……」
彼も、敏活に手を動かし乍ら訊いた。
「ヘイ、貴下樣、三月で御ぜいますだ！　恰度今日のやうないゝ天氣で御ぜいましたゞ。貴下樣忘れるもんで御ぜいますだか！
私がな、緣へ來て日向ぼつこしてゐるとな、あれが大傷害をして、みんなに擔がれて家へ歸つてきたゞ。貴下樣、私ァどんなに驚ろき嘆いたことだか？　嫁はな、遂々氣が狂ひさうになつた

ゞよ！」

老人は、さう言つて悲しさうに眼をしばたゝいた。

「それから貴下樣、嫁も一年經つて死んで了つたで御ぜいますだ。何んて私らァ不幸で御ぜいませう！……私等の子供は、親なし子になつて了ひましただ。それでもな、どうか、かうかして、今日まで育つてきましたゞ……。貴下樣、昨日も、役場からな、子供を學校に出せと言つて、叱つて參りましたゞ。が、碌々飯も食へない人間に、學校がなんになりますだ？　それに、私等には、どうしてそんな働らきが御ぜいませう？　私には、あれらにやる小使ひ錢も御ぜいましねいだ。それに今年は又、あの舍弟つ子の方も、上がる年で御ぜいますだ……。さうすると、家を留守するものがなくなつて了ひますだ。貴下樣、あれでも、私と婆さんと野良へ行けば、温直しく家に留守してゐますだよ！」

汚れた子が、表に遊んでゐたが、祖父達の話が自分のであると判ると、その子はつ いと走つて、歪んだ醜い家の中へ飛び込んで了つた。

「しかしね、學校へだけはやつた方がいゝよ！」

裕道の聲は、はつきりと強く響いた。

「へイ！……遣り度いには遣り度いですがなア？……。私らア、何んだか學校がいやな氣がしますだ。伜があそこで死んだからでもありますめいが……」

「あゝ、それがあるよ！　ほんとに三百圓とは何んといふ安價な生命であつたらう？……」

彼等は、話し乍らも、始終手は休めなかつた。枯れ草は、次第に埋められて行つた。

彼は、一時間位ゐ經つたことを感じた。そこで鍬を止めて立つた。

「お爺さん！　今日はこれで歸るよ！　又、明日來るがね……」

彼は、さう言つて、しつかりとした歩武で、自分の畑へ歩いて行つた。

「貴下樣！　有難う御ぜいましたゞ。あゝ、有難う！……」

彼の後方から、老人のおろ〱した感謝の聲が聞えた。

又、或る日であつた。

彼は、それも父のない娘の仕事をしてやつた。その娘の父は、昨年腦充血で即死したのであつ

た。で、後には、姙娠中の妻と、小學校へ行つてゐる男の子二人と、一人の小さい女の子と、そして娘とが殘された。彼女の家にも、格別の財産はなかつた。曾つては相當あつたのだが、生活難に追はれて、次ぎ次ぎに賣つて了つたのである。

裕道の家の畑と、その娘の畑とは並んでゐた。で、その日は、恰も、一人宛で耕作してゐたのであつた。

「あの娘は、何んといふいぢらしい心根を持つた娘であらう？　十九歳にもなつて、白粉をつけるでもなし、華やかに笑ふでもなし、ほんとに影のやうに淋しく生きてゐる。しかし、彼女は自分一人が働らいて、六人の家族を食はしてゐるではないか？」

さう考へた時、彼は走つて行つて、手傳はずには居られなかつた。

「僕に一寸手傳はして下さい！　ね、お弓ちやん！」彼はさう言つて、彼女の前に突立つた。

「エ、、」彼女は急に眞赧になつて俯向いた。

「僕のために、働らくのですからね。どうか……」

「エ、、濟みません」

二人は並んで耕作した。裕道は堪らなく愉快であつた。娘の赧く昂奮した感謝の情が、泌々と身に感じられた。

「今に、いゝことが來ますよ！　忍從さへしてゐたら、きつと！」彼は優しく言ふ。

「エヽ」彼女は、チラリ黑い瞳を輝やかした。

彼は、忽ち、兩手に抱き締めて慰めてやり度い衝動に驅られてきた。

此方に一つ、村に大きな事件が突發した。村の青年團の賛助員でもあり、信用もあり、日本人として四十歳の分別盛りであるOといふ人が、どうした風の吹き廻しか、家の財產をみんな抵當に入れて、三千餘圓の金を持ち、港町から若い藝者を連れて、九州へ出奔して了つた。

村の人達は驚愕した。餘りに信用の裏切られやうが、大きかつたからである。そして、この事件は、村人の頭腦に、激しい刺戟を與へたのであつた。

彼の家には、老い疲れた老父と、醜く嫉妬深い妻と、三人の子供が殘された。

（村人等は言つた。」妻の嫉妬深いことが、彼の家出の主な理由であると。戀愛は、嫉妬に依りて

保ち。嫉妬によりて破るゝものなるか？）

或る寒冷な夕べであつた。

捨てられた妻は、見る影もなく落ち零れた風をして、脊に一人の赤子を負ひ、左手に五歳の子の手を引き、小さい籠を持つて、只一つ殘された畑へ漂泊ふのであつた。

裕道は家の前に立つて、哀れな捨てられた母子のために、慰め且つ祈り度い感激に倢された。彼はぢいつと突立つたまゝ、遠去り行くその姿を見送つてゐた。

と、背に負はれた赤子が、火の點いたやうに激しく悲しい怒りの聲をはり上げて、叫び泣き出した。女は、籠を其處へ置き、赤子を肩から下ろして、胸に抱きかゝへ、蹲まつて、赤子に乳を與へてやつた。

夕まぐれの冷たい光線が、彼女の淋しい影を長く地上にひいた。五歳の男の子は、ブルッと身震ひして、母の肩に縋りつく。

「お母ちやん！　寒い、寒い……お母ちやん！　お父ちやんは何處へ行つたの？　僕、お父ちやんと一緒に寢たいよ！」

「あゝ、鈴一や！　何故お前そんなことを言ふのだい？　お前のお父ちやんは、大變惡い人だよ！　叮の美くしい叔母ちやんと一緒に遠い所へ逃げて行つて了つたのだよ――」

「でも…：お母ちやん！」

「あゝ、何故、お前はそんなことを言ふの？　何故？」

彼女は、子を引き寄せ、頰摺りし乍ら、遂ひに聲を忍んで歔欷しはじめた。

裕道は、それを見てゐるに堪へられなくなつた。彼の瞼には熱い涙が、一杯溜つた。彼は自分の暗い室へ驅け込んだ。そして哀れな母子のために、いつまでも祈つた。

裕道は、その家の殘された畑が荒れてゐることを思ひ付いた。そこで、或る朝、皆より二時間早く起きて、その畑へ走つて行き、茫々と生ひ茂つた雜草を、ひそかに取り去つてやつた。そこでも、彼は、朝日に向つて、母子のため祈つた。

――偉大なる受難者、『大見原裕道』の、異常な義俠的行動は、遂ひに、村人をして、「彼は、氣狂ひである」と、言はしむるに至つた。

勿論、彼の父母は、どんなに心配したことであらう？　彼等は、みんな個人的功利派に屬する人間であつた。從つて、新らしく生れたるこの農夫の行爲は、豚に眞珠を與へる如く、理解せられないも無理はなかつた。

しかし、裕道には、是等の事情が、判然と知られてゐたのである。彼れは、決して、憎惡はしなかつた。彼の想ひ深い眸には、憐れみたゝへる涙と光りがあつた。あゝ、彼れは長い間、涙を流してきた。しかも、その涙は、又、今後永久に流されることであらう！　涙のみは、枯れない美くしいものである。

或る日であつた。彼が、切窓を開けたなり外へ出て行くのを見た、その母は言つた。

「お前！　窓を閉つておかなければ、本を盜まれるよ！」

彼は振り向いた。そしてにこり微笑んだ。

「いゝですよ！　盜み度い奴は盜むがね！　一層、僕の軀でも盜んで行つて吳れるといゝ……」

彼は、さう言つて、母の顔を凝視した。

(哀れな人間共め！　お互ひに猜疑し合つてる)

母は、ぢいつと立つたまゝ、落ち付いて歩いて行く息子の後姿を見詰めてゐた。ふと、彼女は村人等の噂さのことを考へた。そして自分達の前途を考へると、何んだか心細いやうに思へて來て自ら瞼の裏に涙の溢れるのを感じた。

(あゝ、何故あんな子が出來たのだらう？　私達は、何んにも惡いことは思はないのに？)

で、彼女はこのことを夫に告げた。夫は、暗い灰色の表情をして、ホッと溜息を吐いた。さうして、二人は少時の間、ひそ〳〵と、種々悲しさうに話し合つてゐた。何か、相談が出來たのだらう？　父は、やがて、丘の伯父の家へ行つた。

裕道は、撰剪鋏を以つて、蕾の膨脹し初めた桃園へ入つて行つた。この桃園は、彼が一番好きな畑であつた。

村の日の出の丘で、そこからは、東方に富士山を見ることが出來た。叉、港町の工場の煙突か

ら上がる黒煙も見えた。曠野には芽を出し始めた部落の木々が、點在してゐた。

裕道は、しばし桃の枝に靠れて、遠く富士山の白い峯を見てゐた。早春の浮雲は、ふわ〳〵と山の横から湧き上つて、箱根の方へ飛んで行つた。

やがて、やおら身を起して、バチンバチン冗枝を拔き切つて行つた。彼は、バサリバサリ落ちる枝の蕾を見ると、何んだか、哀れにも無慘に思はれた。

(さう!　かうして、人工を以つて、自然を壓つして行くのだが……)

町の工場から、十一時半の汽笛が鳴り響いてきた。

その時であつた。この畑へ、丘の伯父が緊張した表情をして、ひよつこりとあらはれた。

彼は、始め一生懸命に仕事してゐたので、伯父のきたのを知らなかつたが、ふと人の跫音に、そちらを見ると、伯父の姿が五間程近く進んでゐた。

「おゝ!　よく精が出ますの」伯父はさう言つて、造り笑ひした。

「あゝ、伯父さん!　ようこそ……、何か父に用でもあつて來たのですか?」裕道は、さう言つて、ぢいつと伯父の顏を見詰めた。と、異様な感じが、彼の直覺に通じた。

「いや！　何に、一寸お前に相談して見度いことがあつての…。どうだの。此頃は、軀の工合は？」伯父は、さう言つて、煙草入を出して火を點けた。その落付いた樣は、坐談の老巧を示してゐるものゝやうだ。
「エ、…有難う！　身體は健全でね！」
（をかしいぞ！　何んだらう？）と、心中に考へた。彼の焦點が伯父におかれた。
「それや、いゝ…、實はね、早速言ふがね。お前、お嫁を貰ふ氣はないかい？…もう、貰つてもいゝ年頃だと思ふがね」
　伯父は、探るやうに彼の顏を見据えた。
「あゝ、いゝでせうよ！　しかし、此處、五六年はまだいゝでせうね。どうせ配遇は定めるですが…」彼はさう言つて瞑目した。
（嫁？　嫁なんてことは考へたこともない）
「さう言つて了へば仕樣がない。それや、お前さんは、その、藝術とかを好いてゐるから、いくらも理想の女があらうけれどもね。又、勉強もしたいだらうけれどもね。…それはよく私も理

解してゐるよ。しかしだね。お前。こゝを一つ考へて貰ひたいのだよ。實はね、今朝親父が來てね。——俺らの所の伜も、二十歳になつたけれど、まだ、何が何んだかさつぱり判らないことばかりしてゐるから心配でしやうがない。で、お嫁でも貰つたらと思ふんだが。それに、私等ももう年を取つたんだから。一つ伜に話して見て吳れ！　つて、言ふんでね、出掛けてきて見ただけだよ。どうだね一層貰ふとしては」

裕道は答へずに俯向いて深く考へに沈んだ。

（嫁！　嫁を貰ふといふことは、實に一轉機を劃することだ！　それに俺れはまだ若い！　一人での理想が多數あるが）

「ね、お前！　親達も年取つたんだから。女はお前に好きな子があれば連れて來ればいゝではないか？　どうだね？」

（さうだ！　俺れの父母は老いてゐる。疲れてゐるのだ！　寂しいのだ。父母のために、自分を殺して貰はうか？　犧牲——さうだ！　どんなもんだか、いゝ女があつたら貰つて見やう——）

「よろしい。貰ひませう！　承知しました」

ついと上げた彼の顔面は、いつになく重く沈んで、悲壯な緊張をさへ示してゐた。

「さうか？　さうか？　裕道！　それでみんな安心よ！」

伯父は喜悅の笑を滿面に湛へて、愉快さうに言つた。

「どうだね、桃の花の美しく咲いた下で、二人で働くのは……」

彼は顏を上げなかつた。一分二分三分、彼は地を見詰め、激しく震へ乍ら、深く重い息を吐いた。

（精神生活をしやうとする者に取つては、女を思ふこと、女に接すること、結婚することは、罪だ！　破壞だ！　俺れは駄目なのか！　あゝ、成るやうにしかならぬのだ！）

父母は狂喜して嬉しがつた。

「まあ、お前よく判つてくれたね。裕道や！」父母は、さう言つて彼を待遇すると共に、彼の心が、又、變らぬ中に……と、八方手を盡していゝ嫁を探し出した。

彼の心は、重い灰色の塊りを、胸に押し當てたやうな氣持ちであつた。しかし、その塊りの下

から、好奇心（俺れも妻を貰ふのだ！　といふ）が、蜃氣樓のやうに立ち昇るのを感じた。
（あゝ、成るやうにしかならない）矢張りさう考へるより他なかつた。
父母の活動は、遂に一週間の後、一人の候補者を探し當てゝきた。それは、北の山邊にある里の農家であつた。年は十九歳で村一の美人である（すべてに於て）
「どうだね、お前、その娘を見に行つては……」
「いゝでせう！」
彼は表面無雜作に言ひ切つた。

「今晩は！」
「今晩は！」
「出掛けませんか？」
「あゝ、御苦勞様です！」
遂にかくして、大見原裕道は、未知の世界に飛び込むべく活動を始めたのである。

彼を連れて行く青年は、晝間、父に娘のことを話した家の次男である。彼は、有名な不良青年であつた。彼は饒舌家であつた。

「君、莫迦に寒い――」と、裕道は内心の緊張に連れて、全身がぷる〳〵躍動するので言つた。

「さうかね」と、その青年が、闇の中でニヤリした。

恰も、その夜は、村の青年團の講演大會があつたのだが、彼は、最早、そんなものに注意する氣さへ起らなかつた。彼等は明るい青年會館の前をすり抜けて、圃地に續く小路を歩いた。

遠く山邊の方に、灯がチラ〳〵見えた。彼はぢいつとそちらを見た。そして堪らない感情に押されて、カラ〳〵と高く笑つた。

道を歩き乍らその「原」といふ青年は言つた。

「君もいよ〳〵貰ふのだね。いゝさその方が」

「いゝつて、惡いつて仕様がないよ」

――ふと、この時、彼の腦裡に、文子、英子、梅子等の記憶が渾然とした形を以つて再現して來た。

「僕も若い時はやつたのだね！　あゝ、萬事終了だよ！」彼には、是等の思ひ出は、樂しくもあり又、夢のやうでもあつた。即ち自分が現實に行つてきたのかしら？　と、思つた。

「君も暴れたよ！　しかし僕の方がやつたね！」と、原は低い内證話のやうな聲で言つた。

「さう――君は立派な不良靑年だよ！　君は、君のおべんちやらを以つて、多くの女を欺き苦しめた所の、君は凄い腕を持つてゐるよ。驚くべき。」

（お前の顏は、この暗闇の中で、惡魔のやうに羽搏してゐるよ！　だが、この頃のお前はいつも女に振られてゐるよ。二十五歲にもなつて、女の尻ばかり追つてゐる色情狂め！　そしてお前はいつも、女にもてたやうな虛僞を言ふ）裕道は、後ろから、黑い原の姿を見た。嘲笑から哀れみへの感情が通過した。

（哀れな惡魔よ。俺れはお前の上に、憐れみの眸を投げてやらう！）

「僕は、やつたね。…　初めは十七の時だつたが、二十五歲の女に、錢を貰つて抱かれたね。女が、始めて僕の〇へ手をやつた時、ぶる〳〵震へてゐた僕は、ひやつと飛び上つたつけよ」原は自分の腹の中が、突張つて來るやうな氣がした。裕道は彼の横顏をきつと睨んだ。

（君に取つては、それが不幸の始まりなのだ！　惡魔の子はその女から君に移つたのだ。君が餘りに若くして禁斷の果を食はせられたことは、君の大いなる不幸だ！　が、君の行爲を許す譯には行かないぞ！」

「僕はそれつからでも、七人汚したよ」原の顔に、ほんとに氣味惡いニヤリとする笑ひが浮んだ。

「ふん！　君は、氣の毒ではないかい！……女に對して」

（馬鹿！　女の肉體を穢すこと位ゐ雜作ないことがあるか？　色魔よ！　考へて見ろ！　一日に一人宛替へて穢して行つてもね、一年には三百六十五人だよ！　三十年に一萬人だよ。アハハ……そして君は腦神經衰弱になるといゝ）

「氣の毒なんてことはないよ！　男だつて女だつていゝのだから。お互ひに樂しむのだもの。そして女は處女の操を破られた時の光景は一生涯忘れないといふもの……。何んにも氣の毒なんてことはないよ……しかし、それも若い中だけだよ！）

「若い中だけ？　人間は年を取つても危險な動物だよ……。男女七才にして同席すべからず……て、君の叔父さんは言はなかつたかい？」

「へへへ……。僕はそんなことは知らないよ！　實際いゝからね。……僕は今でも忘れないよ。凡らく一生涯忘れないだらうが……。よし枝さんは實によかつたよ」

原は聯想のために軀を燗らし始めた。

「よし枝さん！いつの事だい？」

「もう三年前の夢だよ！　彼女が女學校を卒つて小學教員になつたばかりでね。まだ十七才だつたよ。始めはね、どうしても手紙の返事を寄越さなかつたのだよ！　だからね、或る晩、學校の歸りを待つてゐてね、執拗に話しかけたんだよ。そして遂々口說き落したんだよ！　そうなるとね、女は堪らないよ！　いつかの夕べはね、赤子を負ぶつたなり、僕をこの邊まで送つてきて吳れたよ！」原はそう言つて四邊を見た。山邊の灯はまま近く迫つてゐた。裕道の心は、まだ見ぬ娘の上に走り出した。あゝ、と彼は叫んだ。

「君……實によし枝さんは熱烈だつたよ。僕はまだあんな熱烈な女に逢つたことがない。或る日曜日にね。彼女が日宿だから遊びに來いと言つたんだ。でね、その日に僕はめかして行つたよ。するとね、彼女は窓から首を出して嬉しそうに微笑んだよ。僕はそこへ行つてよ。そこはね、應

接室の横の宿直室なんだよ。

　僕等二人はそこへ入つちやつたんだよ。

校庭には子供が大勢遊んでゐたがね。宿直室の前には〇〇〇〇〇〇〇〇〇してあるんだよ。よくきて下さつたのね！　と言つて、彼女は微笑んだよ。僕はね、彼女の手を固く握りしめてやつた。そして熱い接吻をしてやつたよ。接唇してゐる間に彼女は堪らなくなつてぶる／＼震へ出して、逐々疊の上へ座つて了つたんだよ。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇「〇〇〇〇〇」〇〇〇〇〇「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！」て彼女は眞紅な顔になつて、僕の胸に縋りついたんだよ。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇！」

　原は淫りがましい聲で言つた。「〇〇〇の前で抱いたんだよ。へへへ……」

「痛快だつたね！」裕道は鋭どくそう言つた。

（馬鹿！　それ程にしても、お前には女を得る力がなかつたんだ！　いかにも抱いて女を一人前にしたやうな嘘を言ふ）

「よかつたよ……君！」

「よし枝さんて何處だい？」

「矢張りこの村だよ！　君が見に行くみやちやんの家の近くだよ！　學校も同じだよ……。君！　みやちやんもきつと○○○○○○○！」

「馬鹿野郎！」彼は、かつとして、血が逆上するかと思つた。（穢らはしい）彼は、原のすんなりした軀を、ぐいとぶちのめしてやり度い衝動に驅られた。彼は遠い空の星を見て歩き出した。

彼等はやがて目的の家の近くへ行つた。で、その隣りの世話人の家に立ち寄つて、その家の内儀さんと一緒に目的の家へ行つた。彼の全身は躍動し、胸は激しく高鳴つた。

彼は、胸に兩手を犇と押當てて明るい障子の前に立つた。

「今晩は！」と、言つて内儀さんが入ると、そこに裁縫をしてゐた娘は、バタ〳〵と奥座敷へ逃げ込んだ。

「今晩は！」と、原と裕道も内へ入つた。

「いらつしやいませ！」その家の内儀が、出てきて挨拶した。

「大分、暖かになりました」

この間、裕道は全身を硬ばらせて立つてゐた。

しばらく上つて、内儀さんと原が話してゐた。と、仲の障子が開らいてぱつと明るくなつた。彼は見た。しとやかに茶盆を提げて出てきた美くしい娘の俯向き勝な面を見て自ら赤くなつた。娘は彼等の前に出た。

「いらつしまし」しとやかに禮した。

「今晩は！」裕道の聲は、力強く落ち付いて神のみ聲のやうであつた。彼は自分乍ら嬉しくなつた。その聲は、娘の耳に、ぴつたりと力強く傳はつた。娘も同時になつかしさを覺えた。

「粗茶で御座いますが？」

娘は、禮儀正しく仕舞つた。

（これは、二十世紀、日本の富士山近い田舍の、結婚の見合ひの風習である）

——やがて、彼等はその家を辭した。

「お苦勞樣でした。いづれ……」

世話人の内儀と別れた。

「君どうだつたね？　印象は？」と、原は、村を出端れると聞いた。

「そう！　大變い丶」彼は、周圍の闇の中に彼女の俤を描いた。白い活々した顔、黑目勝ちな思ひ深そうな眸、すつきりとした鼻、濡れた赤い唇、彼女のい丶姿。それ等が、恍惚とした魅力を持つて、彼の軀にぴつたり密着するやうな心よさを覺えた。

青年會館の前へ來ると、まだそこでは、演説が續けられてゐた。原は一寸用事があるからと自家へ歸つた。で、彼は、會館へ入つて行つた。

彼を見ると、奥平は飛んで來た。奥平は、心底から大見原裕道に共鳴して了つてゐた。彼に取つては、裕道のするなんでもよく見えた。素晴らしく生新に力強いものに見えた。

「お丶、大見原君！　もう先刻から僕ァ待つてましたよ！」

「あ丶、……一寸用事があつたものだから」彼は、そこに座つて、演説を聞いてゐる村人等の上に、やさしい微笑を投げかけた。彼には、みんなが、今夜の彼のことを知つてゐて、祝福して呉

れるものゝやうに感ぜられた。彼の眸は希望に美くしく輝やいてゐた。

室の隅に居た乙女達は、一勢に、彼の方を見た。そして、居容を直した。彼女等は、彼の前には、いつもそうであつた。裕道には、それも愉快であつた。

裕道の姿に、最も熱心な視線を與へたのは、村の富豪、石上家の令孃若子であつた。彼女はぢいつと裕道のきつと結んだ口の邊りを見詰めた。

(あゝ、裕道樣! なんて男性的な方だらう? 天才的な、英雄的な…ほんとに好いたらしい方だわ!)

彼女は、燃ゆるやうな眸で、上座の方へ歩いて行く裕道の後ろ姿を見送つた。

ふと、彼女は、今夜のことを考へた。

——彼女は、夕暮れの頃、自分の室の窓から暗くなつて行く庭を見乍ら、つまされるやうに咽び泣いでゐた。…彼女は、今日、自分の許嫁の男の、不品行を聞いたので、それで悲しくて堪らないのであつた。彼女の許嫁の男は、いつも花柳界へ出入りしてゐるとのことであつた。

(あゝ、いやだ! いやだわ!…。何んていやらしてことだらう?…あの人が、私以外の女

を抱くなんて）彼女は、そう思ふと、汚辱されたやうな激しい感情を覺えて、悲しくて堪らなかつた。

「私は清純な女學生ではないか？……それだのに、あの人は、平氣で私以外の女を抱いたりしてから、私と結婚しやうとしてゐるのだ……」彼女は絶望を思つてすゝり泣いた。

「私の兄さんだつてそうだわ！　青年團長をしたりしてゐ乍ら、いつも藝者買ひばかりしてゐる。そうだわ……兄さんは一年志願で兵隊に行つてきてから、あんなになつたのだわ。……いやだわね、大勢の女を抱くなんて」

で、彼女は、近々の中に、兄の所へ嫁つて來る女のことを考へた。

「あゝ、姉さんが可愛そうだわ！　姉さんはきつと私のやうに清純よ！　でも、汚れた兄さんの所へお嫁入りして來るのだわ、可愛そうだわ」

彼女は、涙の中に考へた。（私は女だから悲しいのだわ。女は男の奴隷になつてゐるのだわ。だから、駄目なのだわ！）

彼女は、生きてゐるのさへ厭惡されてきて、激しく泣き俯した。

そこへ女中が上つてきた。

「御孃樣！　今晩青年の演說會へ參りませんの？」

「いや！　お前一人で行つておいで！」彼女はいつもの命令的に叫んだ。しかし何故かいゝやうな行つて見たい氣になつた。

「あゝ、私も行くわ！　あの絹の大島の衣物を出してね！　早くつて言つたら！」

若子はそれだけ思ひ出した。そして何んだか又悲しくなつた。

「裕道さんは、いゝ男ね。私あゝいふ人が好き、ほんと」と、友達のふみ子と裕道の從妹のきむ子（きむ子は原の現在の情婦である）とが、ひそ〳〵私語してゐるのが、彼女の耳に何故か強く響いた。

大見原裕道は、團長石上の所へ行つた。

「盛大だね！　中々――遲れて濟みません！」

「いや！」團長石上は坊つちやんらしく赤く昻奮してゐた。「でね、大見原君、君にはどうしても一つやつて戴き度いんだが……最う直き青年はやつて了ふのだから」

「僕、今夜は、ね――」彼は、この快よい氣持ちを破り度くなかつた。「閉會の辭位ゐで勘忍して吳れ給へ！」

「そうかね！　君にやつて貰ひ度いんだが……ぢや閉會の辭を賴みますよ。福引のことも言つて下さい！」

「あゝ」

やがて、演説が終了したので彼はやをら立つた。拍手が一勢に上つた。みんな彼れの演説が聞かれると思つたのだ。

「みなさん！」彼は、いつものやうに人衆の上にたゝへる眸を與へた。

「靑年諸君の熱誠と、村民諸氏の協贊に依つて、この春季講演大會も、此くの如く盛大に擧行せられたことを喜びます。で、最早今晩も時が更けたことであれば、これを以つて閉會します。お互ひの向、餘興の福引の景品を差し上げますから、順序よく御出でを願ひ度いのであります。お互ひの人格――ほんとにこの人格を尊重して戴き度いのであります。ではこれで閉會します！」

みんな、喧轟として立つた。しかしこの中に一人、若子は泣き度いやうな嬉しさを感じた。（人

格！　人格！　そうだわ！　私が、今夜聞き度かつたのは、只それぱつかりだつたのよ！　あゝ人格だわ」で、彼女は、堪らなく裕道が戀ひしくなつた。

人々は、各々景品を貰つて更けた夜の中を歸つて行つた。で、會館の中は一勢にひつそりして了つた。青年が三四人居殘つて菓子を食つてゐた。

「大見原氏！　君ァ實際偉いよ！　今夜のあの終りの言葉は堪らなくよかつた。僕ァ駄目だつた……」奧平は、彼の前に菓子を持つてきて言つた。

「そう――。それァ君が俺れに惚れたからだよ……」で、彼も、奧平も愉快そうに聲高く笑つた。

と、その時、家の外で互ひに罵り合ふ聲がした。

「君は僕を侮辱したね。衆人の中で」

「いや！　僕はそんなことはない！」

みんなが飛び出すと、小山と栗持が闇の中で爭論してゐた。

「どうしたんだい？　止め給へ！　喧嘩なんか？」裕道は二人の横から鋭どく言つた。

つまり二人は、小山が外交問題の政府の態度を攻撃したに對し、栗持が知つたか振りをすると

言つて、小山を侮辱したといふにある。
「僕はどうしても勘忍することは出來ない！」
「いや、僕は君を侮辱するつもりはなかつた」
「止め給へよ！　爭論なんか！　只、お互ひをつまらなくするばかりだよ！　ほんの一寸した感情の行違ひぢやないか？」
　で、やつとみんなが入つて納まつた。
「小山と栗持は、何故仲が惡いのだらう？」
　奥平が裕道の顔を見上げて訊いた。
「奴等はね。お互ひにね、自分の浮ついた超越感を强調し合つてゐるからだよ！推譲の德がないのだ！」
　裕道はさう言つてニコリした。彼には、爭鬪といふことは、實に下らなく思へた。と、二人が可愛さうになつた。
　彼は天空の星を見た。そこには、地上のいさかひも知らぬもの丶やうな、規律の絕大さが行き渡

つてゐた。
彼はふと、今夜見てきた娘のことを想つた。と、熱火のやうなものが、忽ち彼の頭腦に湧き上つた。
（俺は幸福だよ！　こんなにもな‥‥あゝ幸福）彼は何物にか中の心を捧げて祈り度くなつた。

彼は、大きな希望に輝やいた。彼は里を離れた麥畑に立つてゐた。
圃地には、麥が一つぱい青々と早春の暖かな日に照らされてゐた。麥の間には、菜の花が黃色く點々と咲いてゐた。白い二匹の蝶々は花から花へ樂しさうに飛び廻つてゐる。雲雀は天空高く囀づり乍ら舞ひ上つた。
春霞はぱふと物皆をやさしく眠氣に引き包んで了ふやうである。北の方の山も、富士山もそして里も、その春霞の中に、うつとりと溶け込んで了ふやうである。
（あゝ、自然は、人間がどうしなくとも生長して行く。あゝ人間までもが、この宏大な自然の中に生長して行くのだ！）

彼は、歡喜に耽り乍ら、靜かに感謝の眸を冥つた。

彼は山邊の家の娘のことを考へた。はつきりと印象付けられた娘の美くしい俤を描いた。

彼は遂ひにそのみや子といふ娘を貰ふべく決心して了つたのである。家内の者もみんな贊成した。で、最早、親戚の贊成と世話人を何人を賴んでいゝかの問題のみであつた――。

（みやちやんと言つた。そう、みやちやん！　あゝ、彼女の家は何處邊だらう？）彼は、眸を美くしく瞪つて、山の邊の里を見遣つた。そこは霞のためにばふとしてよくは見えなかつた。

（そうだ。彼女を貰つたら、彼女に倦怠や寂寥を與へないやうにしやう！　新婚旅行に何所へ行つたらいゝか知ら？……一層、彼女のために東京へ行かうか？　彼女を貰つたら、この畑や田の耕地をいゝ場所へ統一しやう！　やさしい羊も飼はふか？　葡萄や林檎も植えやう！　そして廣々とした耕地の丘の上へ、古典的な美麗な白亞館を建てやう！　そして春から夏へかけて、あの綠の葉隱を、彼女の白いやさしい手を引いて逍遙しやう！

……彼女はきつとやさしいに違ひない！　彼女はあんなにも美くしいんだもの……」

と、この時、彼の心中で、忽ちに、奇怪な恐るべき姦淫が行なはれて了つた。

「あゝ」と、彼は異樣な叫聲を上げた。
（人間は、殊に若人は、結婚といふ感情によつて、如何に性的に急速な發達をするものであらうぞ！）
彼は、耳根まで赤くなつた。そして鍬を取つて、汗が流れるまで、激しく耕作した。
――彼が、晝飯に家へ歸ると、丘の家の伯父が來てゐた。みんな暗い元氣ない顏をして話してゐた。
母は暗い沈んだ眸をして彼の姿を見た。父は俯向いて膝を見てゐた。
「伯父さん！　おいでなさい！」
裕道は、ニコヤカに言つた。
「あゝ、今日は！」しかし、伯父の表情にも浮かぬものがあつた。
小時、重苦しい沈默が室の中に續いた。父は顏を上げて言つた。
「實はね……、あの嫁は貰はれなくなつたよ！」

「エ！　何んですつて？」彼はきつと眸を据ゑて父の顔を見た。
「丘の家の方にね。さしつかへがあるのだそうだよ……」父の聲が震へた。
彼は、鐵槌で頭をがんとなぐられたやうに眩暈を感じた。彼の顔は眞蒼であつた。彼の全身は冷たく凍つた。
「ど、どうしてですか？　伯父さん！　え！　伯父さん！　何故、僕があの人を貰つては惡いんですか？」彼の眸は鋭どく光つた。
「實はね…あの家から私の村へその娘の叔母といふ人が嫁に來てゐるのだよ！　そして、その家が血統がよくないのだからね。止めて貰はふと思つて出掛けてきたのだ」
伯父は煙草を吸ひ乍ら悠然として言つた。
「血統が惡い？　あの家が？　だつて僕の家で調査した時には、みんな村の人達もいゝつて言つたのですに……」彼は瞼の裏が熱くなるのを感じた。
「そうかも知れない。あの山邊の家はいゝのかも知れないがね、私の方の家は、みんな村でも厭がつてゐる家だよ！　でね、そんな家の親戚から貰ふと、私の宅の子供の出世の妨害になると思

つてね…。きつと俺の村の人達は色々にいふからね…止めて貰ひ度いのだよ」
「ぢや、あの家では知らずに貴下の方へは呉れたのですよ！」
「さうかも知れない…しかし、どうも血統の悪いのわね！　遺傳といふこともあるものだから…」
「さうでせう！…」彼の頬を熱い涙がたら〳〵流れ始めた。「よろしい、諦めませう！　あゝ、諦めませう！」
彼はそこに居堪らなくなつた。彼は遂ひに兩手で顏を押へて家を駈け出した。彼は人の見えない畑へ駈けて行つた。そして通ふ樣、泣いて泣いて泣き通した。
「許して下さい！　許して下さい！　みやちやん！　許して下さい！　僕は貴女に罪を犯しました。僕は貴女の魂を汚した。少なくも貴女の期待に反いた。…一般の青年は、あんなことなんとも思ひはしないだらう！　しかし、あゝ、僕は貴女に向ける顏がないのだ！　只許しを請ふのみです。みやちやん！」
彼は涙の眸で、霞の中に見える彼女の家の方に向つて見詰めてゐた。彼は、悲しさ、絶望の悲

しさに一つぱいになつた。そこで、小さい草の上に俯して咽び泣いた。

（あゝ、家族制度！　家族制度を壞したい！）

彼には、家族制度の義理といふものが呪はれた。しかし、彼の心が落ちついて來ると、自分自身後悔されてきた。

（おゝ、俺れが惡かつたのだ！　俺は、初め妻なんていふ事を考へたこともないではないか？只他人のすゝめに依つて、好奇心に驅られたのだ！　そして、自分の一生涯悲しくとも、辛らくとも一緒に生きて行かねばならぬ妻のことを、他人の選定にまかせるなんて。あゝ俺は舊い型に押し込められて了ふ所だつた。……よろしい。俺れは最早、他人のすゝめによつては、妻を貰はないであらう！）

彼は天を仰ぎ、瞑目して自分の心を見詰めて言つた。

（神よ！　私は最早、貴下がお授け下さるまで、決つして、妻を貰はないでありませう！　私は信じてゐます。正しくさへ生きてゐたなら、又、人間がどうしても配遇を得なければならぬものでありますならば、きつと、貴下は、私によき妻をお授け下さる事を。では、私は、力を盡して

働らきませう！）

で、彼は、又、無我の人のやうに、神聖な勞働に身を委ねた。

太陽が運行の路を續け、西山の峰に入ると、殘照は、四邊を淋しく照らした。太陽は、無限より無限に天空を光明する。

まぐさ喰ふ牛は、尾を巻いて歸る。水は木影をさゝやかに流れてゐる。笹籔の蔭の茅屋から、白煙は音もなく上つた。

日は暮れたのである。山邊なるみ寺の、いと小さやかなる鐘樓堂に、世離れた、みめ美くしき若僧は、敬虔の氣を籠めて鐘をつくのである。ごうーん……、ごうーん……。中空を入合ひの鐘が鳴つて行く。

終日、田を耕やした若い夫婦は、腰を延して地上に立ち、眸を潤ほし、手をさしのべて、靜かに鐘を聞き乍ら、神に向つてお祈りするものゝやうだ。

裕道は、遠くその姿を見た。村里も遠く見えた。彼も矢張り祈りの鐘を聞き乍ら、牛のやうに家に歸り始めた。

（これ！　これこそ、自然と人生の調和だ！」

彼は、涙ぐましくなつて、小路を歩いて歸つた。

第六章

遂ひに大聖二十年の四月となつて了つた。
（俺れは、この三ケ月に何をしてきたか？）
大見原裕道は、そう自省すると、決して、自分が、無意義には暮して來なかつたことを知つた。少なくも、そこらに居る村の青年達より、有爲に生きてきたと思つた。
（俺れは、よくも、宇宙の省察へまで進んできた）

或る日であつた。久方振りに、彼の姿が、青年會館へ行つた。細いかすかな雨が、しと〳〵と止度なく降つてゐた。で、彼は、入口に立つて、傘をつぼめた。
と、中から、小山と、栗持の激しい爭論が聞えてきた。
（相變らずやつてるな！　彼等のやうな仲になると、仲々そのいがみが取れないものだ）
彼は、腹に力を入れて、耳を聳てた。

「僕は、現在の日本に於ては、軍備は擴張して可なりであると思ふ。何故なら、日本は東洋の人種だよ！　しかも、この小さい島國で世界の一等國として威張つてゐるのだ。それはなんだと思ふ。みんな強兵のためではないか？　しかも、世界は日本を嫉視してゐるよ！いつあの野心を抱いて、日本を虐めに來るかも判らない。でその時になつても、最早遲いよ！」小山の激しい聲だ。

「僕は思ふよ！　君のいふ通り、日本は急激な發達をしたので、世界ではみんなして羨やんでゐるよ。で、今、世界はあの歐洲大戰爭の敎訓に依つて軍備縮少の會議を開らいたではないか？　でだね、若し日本のみが獨り現狀維持か、又、擴張でもすれば、忽ち世界は、日本を攻め滅ぼすことを相談するに違ひないよ！」栗持の昂奮した聲がする。

裕道は、ニコリ微笑んだ。彼は、灰色の天を仰ぎ、又、冥目した後、室内へ入つて行つた。

「盛んだね！　相變らず」彼は、二人の顏をば等分に見批べた。（惡い道德に毒せられてゐる）

「みんな聞いたよ！　外でね……失敬」

「君はどう思ふね？　この問題に對して」と、小山は訊ねた。

「僕？僕は言ひ度くないよ！」裕道は愛相よく言つた。

「でも、言つて呉れませんかね。僕と小山君とは、全然反對の意見なんだよ」栗持は（自分の方へ有利に）と、彼の顔を見た。

「さう…では言ふがね！　でもね、君等には意想外だらうからね。理解せられないないかも知れないがね。それを承知なら言つてもいゝよ…。いゝかね。君等は小學校で、あの禿げた校長から、文部省で拵らへた修身書を敎はつたよ。僕はその後苦しんで獨學したよ。で、君等は、まア、體裁のいゝ國家主義者だね。栗持よ、何も小山と反對なことはないよ。要するに國家本位ではないかい？　延いて個人功利派だよ！　物質的――。

しかし、僕のやうな境涯を經た者はね、どうしても、國家なんぞといふ境界の線（ライン）は考へなくなるよ。幸福を宇宙に想ひ、その一部である自己に考へるやうになつてはね。で僕は宇宙主義者だよ！　世界以上な、大聖的な――。そこでだね。君等にも解るだらうが、僕は爭鬪の用具である軍隊を好まないよ！――勿論軍人はいつも病的に戰爭を欲してゐるものだがね。彼等は呪はれて了つてゐるんだから哀れむべきだが――。實を言ふと、僕は爭鬪を好まないのだ。下らないやう

に思へてね」
「だがね、人間には個性として爭鬪性が秘んでゐるよ！」小山は言ふ。
「さうかしら？　その人は、人間第一の自制がないのぢやないのかしら？　ほんとに、僕は昔つから嫌ひだよ！」
「ぢや、××國の兵士が、君を殺さうとしたら、君はどうするね？」
「僕？　殺されるだらうよ。僕のこのたくましい自我は、その時、音を立てゝ天に立ち昂るだらうよ！　僕は墮落しないよ。」
裕道の强固な意志は、心中で緊張した。
「しかしね。　まア、一歩君等の立場へ踏み込んで言ふとね。若し僕をして大統領たらしむるならばだね。この日本の――黄色人種の――最とも使川し得る軍隊を率いてね、全世界を統一するよ！　そして、この地上に敎政一致の美くしい國を建設するよ。しかり、僕は豫言する。來るべき二十一世紀は、黄色人種の全盛期であつて神人合一の、大聖の敎へが宇宙に行なはれるべき時であると….。

……あははゝ……。まア、僕は矢張り、下衣まで與へる方の人間だよ。永遠に宇宙に觸手する勞働者だよ。この丘の農夫だよ！」

「巡査が來るぞ！」と、誰れか恐れる聲で言つた。

「巡査？　巡査は路傍の犬に過ぎないよ！　馬鹿！」彼は、聲高くカラ〳〵笑つた。人衆は彼の言ふことが次第に解つてきた。そして響鳴しずには居られない氣になつた。

（彼は、次第に、この現實と神秘とが、渾然融合したる宇宙へ突き切つて行くのを感じた）

或る日、彼は父と二人で、鐵道線路の横の田を耕した。

そして中休みに、潤つぽい畦へ腰をかけて、息づいた。彼は泌々と宇宙の一部としての、自己の意義を考へた。

（宇宙は決つして何處も少しの空虚がない！）

彼は顔を上げ、畔を瞠つて、空を、太陽を、流れる雲を、さうして低く富士山を、それから村の家を、木々の綠を、遠くに咲いた櫻の薄紅い花をそして野に働らく人々と、路を走つて行く小

犬を見た。ふと、父の姿を見ると、不思議な笑ひがこみ上げてきた。

「オヤ！　これがまァ　俺れの父か知ら？　不思議だなァ。ほんとにこの蒼黑い顏をした老人が俺れの一人しかない父とは……。何處かに、ほんとに俺の父がゐるのかしら？」

彼は又、四邊を見た。彼は自分の心を見度くなかつたので。

芽は淺黃に萠え出で、葉はその綠を增し、花は色よく咲き誇り、鳥は配遇を求めて囀づり飛んでゐた。

裕道は、太陽の强烈な光射を受け、その潤澤な暖氣に食傷し、何故か無へひき入れられるやうな、うら悲しさに捉へられてきた。と、その時、若い柔らかな肉體の、そして交尾しつゝある二匹の蜻蛉が、つい〳〵と飛んできて、少時疲れを安めやうと、畦へ止つた。蛙は、水の中から、それを見付けて、そつと畦の陰へ近寄つた。蜻蛉はまだ知らずに、放逸な歡樂に耽溺してゐた。アッ！　蛙は飛びついて一匹の蜻蛉を食ふ。一匹は驚いて、遠く高く逃げ去る。彼は、美くしい春の、太陽の下に、靑空の下に、大氣の中に、地の上に、水の傍らに、こんな奇怪な現象を見て苦笑した。（こゝに生存の哲學がある）

鐵道線路に、線路工夫が三人、エンヤラヤー――エンヤラヤー――と、汗を流し、灼熱の光射に皮膚を焼き乍ら、勞働してゐる。その掛聲は、汽車より早く鐵路上を走つて行つた。その妻は踏切番であつた。そして彼等の一人娘は、汽車に乘つて、毎日遠い町の學校へ通つてゐる。

（文明は怖ろしい神の恐れか？）

遠くから汽車が全速力で走つてきた。これ等汽車に乘つて通る人は、農民の働らく姿を見て、（あゝ、愚かにもいやだ！　汚ない！　いやだ！）と（ほんとに神聖な勞働！　ほんとに悠久な姿がいゝ）と、など考へるのであつた。

伯爵令孃、生島鶴子は、先刻から一等列車の窓に寄つて、外を眺めてゐた。青々とした清新な色の草や木、よく耕やされた圃地、そして雅趣に富む田舍の家。殊に田畑に働らいてゐる農夫の素朴な姿。それ等は、みんな好きなよろこばしいものであつた。彼女は、自宅の人工的な華麗を打ち忘れて、外を見るに夢中になつてゐた。と、彼女の眸に、汽車が向つて走る前方に當つて、茶褐色のチヤケツを着、灰色の帽子を冠つた異樣な農民を見出した。彼女は好奇心に驅られて身を乘り出した。汽車は全速力を以つて近づいた。彼女は、視線を農民の一點へ集中して見詰めた。

と、その時、裕道も顔を上げ、令孃の眸の光りを感じたので、優しい、はぐくみ抱き緊め、慰めるやうな微笑をして、令孃をひたと見詰めた。鶴子は、農民の異常な力强い索き付ける微笑を見た。彼女は、ぞくぞくつと、嬉しさが身内に浸徹るのを感じた。二人の視線がピタリ合つた。彼女の軀に電波のやうなものが通じ活動した。で、汽車が家の蔭へ入るまで、彼女は、若く美くしい農民の姿に見惚れてゐた。彼女は、クッションに居容を直し、今見た農民の容姿を心に描いた。彼女は眸を閉ぢた。と、力に充ちた表情の若者の俤を見ることが出來た。彼女は、汽車が東京へ着くまで、そうしたことを樂しみ續けた。遂に、彼女は、眸を見開いてゐてさへも、その幻を見得るに致つた。彼女は、全身に、全靈に、何物か力强い淸新な物を注ぎ込まれ、啓發せられたやうに感じた。

彼女は家に歸つてからも、獨り自分の室へ籠つて物思ひに沈むやうになつた。彼女は、かの農民に對する激しい戀慕の情に攻められたのである。遂に彼女は、七日の間、毎夜、あの農民の幻を熱く抱き緊めては、自ら、心中に姦淫を行なつたのである――。

又、四月の中旬の或る日であつた。

裕道は、午後一時頃の强烈な春光を受け乍ら、一心に畑の消毒をやつてゐた。南駿河――そこは日本でも有名の茶の生產地である。――の一隅に、此く茶の木の蟲を殺し、黴菌を驅除する可く酸素液を散布してゐる、彼の行動は單純と忍耐と正直との權化であり、沈默と勞働との表象であり、自然と人間との全き調和の生活である。

高い綠の堤の上の道を、奥平がすた〳〵と步いてきた。で、彼と顏見合せて、ニツコリ微笑む。彼は奥平の顏を見詰める。奥平は索きつけられるやうに、彼の畑へ入つて來る。

「いゝ天氣だね！　堪らなく……大見原氏！」

「そう……素晴らしくいゝ天氣になつた。若者の心中に春も芽生へるだらうよ！　奥平よ！」

(君もその仲間ではないか！　十九才になつたのだぞ！　春！)

裕道は强く訊く。

「君は何をするんだね？奥平！」

「僕？　あんまり面白くないからね。鍬だけ持つて出て來たのだよ。ほんたうになんだか、働ら

くのがいやになつて了つた」奥平は、鍬を地に投げつけて、尻を草の上に下ろす。
「そう！　君は酬ひられないからだよ！……姦淫の欲望にね」彼は眞面目な顔で見下ろし乍ら言ふ。「刺戟がないからだよ！　殊に若人は、直き心變りがして、倦きるものだからね」
「大見原氏！　實際、僕は君のいふ通りだよ、しかしね、女だけではどうも滿足しないよ！　僕は……」
「そうかい？　それはいゝ……俺の若い十六七の頃のやうだよ！　君はそれだけ俺に後れてゐるのかね。うん！　君は先日港町の酒者へ婿に貰はれたそうだね！」
奥平は眞赤になつた。そして茶の木の枝をホキンと折つた。
「エヽ……だが僕は婿になんか行きませんよ。獨立しますよ。實はね、僕、亞米利加へ行かふと思ふのですよ！」
「止め給へ！　最早亞米利加は絕望だよ。俺れはむしろ、支那へ、亞細亞大陸へ乘り込むことを贊成するね！」
「僕も、滿州へ行つて馬賊にならうとも考がへるんですよ！」

「い ゝ！　それだよ！　奥平！　君は壯健ではないか?……少なくも現代に生れて來た以上、須らく優勝者たるべしだよ。が、ね、空想の中の自己の中の帝王者になるなよ！」

「そうだね！　有難う！　大見原氏！　僕は君の言葉が好きだ」

そして、奥平は、輝やいた表情をし乍ら、路を歩いて行つた。彼はその强壯な田舍の若者の後姿を見送つた。

（あゝ、あつぱれたのもしい若者！　君の上に榮冠あれ！）

奥平の姿が堤の影へ隱れて了ふと、彼は噴霧器を肩から下ろし、草の綠なして密生してゐる揚所へ行つて、仰向けに寢そべつた。

天空は宏大に、奥深く限りなく神秘の層をなしてゐた。白雲は片々としてその中を流動し、光線は直射して陽彩をなす。あゝその空には、雲より遠く、今も無數の星晨が運行してゐるであらうものを、獨り太陽の光線にひん負かされて、人間の眸に映り來ぬとは?　彼は太陽を見詰めた。と、如何にしても堪えられぬ眩暈を感じた。と、不思議にも、ハックションと、くさめが突發した。彼は笑ひ度いやうな、怒り度いやうな、又悲しいやうな感情に迫られた。彼は顏を横にした。

と、光射は暖かに彼の軀を抱擁し、黒く日燒けさして行くやうだ。で、彼は次第に愉快な氣分になつた。（いつだつていゝ、眠くなつたらね）彼は安らかな睡眠に落ちて行つた。

彼は夢を見た。それは狂ほしき夢であつた。

「何に？　君は何んですか？　その、土地を解放しろつて言ふんですか？」そう赤い顔をして叫んだのは、地主の長男園長である。

「そうです！　すべて、村の土地を解放して、我々青年者、壯年者及び他の働らき得るものが、共同的に、忍從的に勞働し、生活したなら……」

新らしき農夫は力强い聲で言つた。彼の眸は輝やいた。

「いや！　ならない！　僕はもつと澤山土地を欲しいと思つてゐる位ゐだ！」地主の長男。新らしき農夫は、きつとした表情になる。

「そう！……欲しかつたらどしどし增やし給へ！　君の父は、村長で縣會議員で、陪審官で權力があるよ！　村役場へ行つて、村全體の土地を君の名義に書き換へてき給へ！　が我々農民は反

抗するだらうよ！　そして君等をぶち殺すだらうよ！

君等の死骸は、墓地に運ばれて、身には蛆が湧くだらうさ！　その時、君等は只一間四方の土地が必要なだけだよ！」

「何に！」地主の長男は矢庭に農夫の右の頰を打つ。新らしき農夫は涙を流して泣く。無念に泣く。哀憐に泣く――。

その中に、農夫は氣味惡く笑つた。彼は考へついたのである。それは只革命のみが殘つてゐると。何故なら、現實は余りにも不合理へ行き詰つてゐたからである。

彼は、村の素朴な青年を、みんな墮落させやうとした。そしてその感情の中から思想を生み出させる。

彼は新約聖書と、讃美歌と、トルストイ全集を、左し當り古本屋に五十圓で賣つた。

彼は次に何を爲したか？

彼の村には十三人の青年があつた。二人は妻帶者、後の十一人はみんな童貞者であつた。

彼は街の妓樓へ行つて話して來た。其處には、二人の娼妓がゐた。一人は情熱的な美くしい女。

一人は呂鈍な肥つた女。

その次の夜から、彼は二人宛の青年を連れてその妓樓へ行つた。青年達は震へて童貞を破つたのである。一から十までの青年は、一夜にして皆成人して了つた。奇數の青年は情熱の女に、偶數の男は呂鈍な女に捧げて了つた。只彼れ(新らしき農夫)のみが童貞者として殘つた。

青年等は、嬉しく、又悲しかつた。遂ひに、彼等には煩悶自棄が來た。しかし、その間にも、村には淫蕩な華美な風が流れ初めた。

村の美くしい三人の處女は、一三七の青年に各々穢されて了つた。彼女等は泣いた。が、その一人は淫蕩な女の子を生んだ。一は花柳病のために程なく死んだ。三は放浪の旅へ彷徨ひ出た。二は十五才の小さい魂と肉を地に埋めた。四は狂人となつた。五は情熱のために、その醜い〇を穢した。六はその後も、矢張り先の娼妓の下へ通つた。七は子を生ませた女と結婚した。八は直ぐ軍隊へ志願して戰爭に行つて了つた。九は遠い濱邊から妻を貰つた。十は一人偉大なる道を見た。彼は若い心を抱いて山の森へ入つた。彼はそこで瞑目の行を續けてゐる。それが恐ろしい結果であつたのだ!

親達は泣いた。地主の長男は眞蒼い顏をした。而し、宇宙は渾然たる相をなしてゐた。太陽と地光りと露は神祕に、人は喰ふ食物を惠まれてあつた。
新らしき農夫の前方遙かに、灰色の土の塊りが突進してきたが、手前まで來ると、一塊となつて眞赤に燃え上つた。と、轟然たる音響と共に爆發した――。

彼は、その時自覺した。そして周圍を見て微苦笑した。
「うん！　俺にも強い自我があつたのだな！　個人――人道――宇宙、ふん、神のやうに復雜だ！」で、彼は、改めて、更らに宇宙にその美くしい眸を投げた。
彼は、やをら身を起して立つた。うおう―と手を振つて叫び度いやうな強い腹の底からの衝動に驅られてきた。
と、その時彼れは、堤の上の道を、從妹のきむ子が、極度な昂奮に眞蒼い顏をして、手前にある大きな深い溜池の方へ、走つて行くのを見付けた。
（オヤ！　彼奴、情夫に捨てられたな！　自殺するらしいて？）

彼は、心地よげに笑つた。そこで、彼は悠々と堤の上へ、彼女の後を歩き初めた。と、途を横切つてスルリと走りすぎる蜥蜴が彼の眼についた。裕道は、丈の高い草原を辷つて行くそのなよやかな綠色の小さな軀をば、いつまでも、いつまでも見まもつてゐた。

春の瀰爛するやうな陽光の下に、きむ子はぢいつと立つてゐた。彼女の胸は惱ましげに結ばれてゐた。彼女は何處か遠い遠い知らぬ所へでも行つて了ひ度いやうに思つたが、さて何方へ足を向けてよいか分らなかつたのである。自分の室へ這入ると、彼女はつと立ち止つて、兩手を組むなり、眞蒼になつてジッと疊の上を見詰めた。彼女は、原との關係に、餘り深入りしすぎたことをばふと氣がついたのである。自分より遙かに人格の劣つてゐる。かの淺薄な、輕調な男が、取返のつかぬ、例の心弱さ以來、自分の心へ喰ひ入つてきたことを感ずると、彼女は始めて屈辱を覺えたのである。それからといふものは、男に來て吳れと乞はれる度びに、彼女はもう拒り切れなくなつた。もう始めの好奇心のやうに男を飜弄するなんて事なぞは思ひもよらず、男のまゝになつて、ほしいまゝに接吻をさせ、又ニッコリしてはそれを引はずし乍ら、どうしても、その野

卑な抱擁の奴隷とならぬわけには行かなかつた。どうしてそんな風になつたのか、彼女にはまだ判らなかつた。で、いつも酔はされてゐるやうな、又同時に白い霧にでも引包まれたやうな感觸を覺えてゐたのだが、一朝、焔がパッと炎上つて、それが頭へ衝き上るが最後、彼女は忽ち或る微笑な息はだしい心になるのであつた。そして微白い霧は、かの深淵の中へ跳り込まふとする激烈な意欲だけは別にして、其の他一切の感情をば絶滅させて了ふのである。

足の下には大地も姿を隱して了ふやうに思はれた。彼女の軀はぐつたりして力がなくなつてゐた。彼女はたゞ、自分を唆のかす薄暗い底光りのする厚かましい眼ばかり見た。

男が強く抱擁して、軀を動かす度びに、彼女は何も見ず何も聞えない瞬間があつた……。さういふことを憶出して、きむ子はぶる／＼身慄ひした。と肩を聳やかして諸手で面を蔽したが、やがてよろ／＼と部屋を横切りざまに、窓を開けて庭上を照らす暖かな春光を、暫らくヂッと見戌つてゐた。どこやらの木がくれで、鶯が遙かに啼いてゐた。

彼女は人知れぬ憂愁に惱まされた。それは朧氣な情熱と、傷けられた自尊心とが絡み合つた。遣瀬ない不思議な感じであつた。で、その感じは、彼女が、己惚れた愚かな男のために、自分の

一生涯を汚した、といふ考へから又、その失策は偶然についそうなつた、馬鹿げきつた陋しい事にすぎなかつたのだといふ考へから生じたものである。

彼女の未來にはさまざまな威嚇が襲ひかゝつてゐるやうに思はれた。けれども、彼女は强ひて剛腹な態度を裝つて、そういふ不吉な豫想をば打消そうとした。

（そうよ、して了つたんだわ‥‥で、跡は？）

と眉を顰め乍ら彼女は考へた。で、かの惱ましい歡樂と此の捨鉢な言葉に自ら醉ひ乍ら、

（あんなことはなんでもありやしない‥‥妾がしたいと思つてしたことだわ、そしてあんなに嬉しくて〳〵たまらなかいたんだもの‥‥）組合はせたまゝの手を前方へ差し出して彼女はぶるぶる顫へ乍ら身を伸した。（あんな嬉しい思ひをしなかつた人が却つて馬鹿だつたかも知れぬ。考へまい、考へまい‥‥して了つたんだもの、もうどうにもなりやしない）

と、急に男の俤が、原の俤が厚がましくニヤ〳〵し乍ら浮んだ。

（そうだわ。　あんなことは下らないわ！‥‥氣が向けば惡魔にだつて身を任すわよ）と、彼女はうつとり春の光が、葉に緣に反射るのを見て言つた。（そう、春だわ！）彼女は粘氣のある聲で

そう言つた。と、自分の聲に感激して、急に強烈な豊滿な接吻と抱擁との欲望に誘はれた。(あゝ)

と、彼女は有頂點な聲を上げて、兩手に乳の下を抱き緊め、女のみが犯す罪に耽つた‥‥。

烙きつくやうな異樣な匂ひが、彼女の周圍を森と取り卷いてゐた。と、その時であつた。門口に人の來る氣配がした。

彼女は、ハツと憑かれたやうに飛び上つた。郵便！ 脚夫は機械的にスタ〳〵歩いて行つた。

「角封だわ！ 原からよ！」彼女は抱き緊め頰摺りしてから、いそ〳〵と室へ取つて返へした。

(ほんとに、私は、こればつかりを待つてたのだわ！)

彼女は、封を切つて讀み始めた。

彼女の顏は眞蒼になつた。そして眼光が血走り、唇が紫色に變つた。彼女の肩が震へた。彼女はがばと突き俯した。と、肉體の底の底から、悲しさ、口惜しさ、腹立たしさがこみ上げてきて一時にどつと、涙が溢れ出た。

「あゝ、あゝ、あゝ、何んだつて？ 何んだつて？‥‥あゝ、あゝ‥‥

小生事、此度東京の伯母の家に養子たるべく‥‥君とのことは只一時の心にて‥‥あゝ」

彼女はピリッ！　と手紙を八ッ裂きにした。そして歯でギリ〳〵嚙み破つた。彼女は、すつと立ち上つた。

「けだものめ！　けだものめ！……よくも俺を弄んだ！　あゝ、あゝ、あゝ、俺は死んでやる――」

彼女は、「粉々になつた手紙を壁に打突けて、一散に白い路へ駈け出した。

彼女は、只夢中で歩いた。で、熱いのか、暖かいのか、寒いのか一向氣がつかなかつた。一人の見知り越しの村の老人が、脊を曲げて歩いてゐた。彼女はわざとニツコリして禮をして見せたが、彼女の心は結ばれてゐた。

暗黒な或る力が、全宇宙から彼女を引離して太陽を横切り、綠を横切り、生の喜こびを横切り眞黑な深淵へ彼女を導いて行つたが、其の深淵へ近づくことは、彼女も薄氣味惡く感じた。

彼女の頭腦は不思議にはつきりして、明瞭に又熱烈に働いた。最も恐るべきことは、かの美くしい氣位の高いきむ子が消失して、その代りに、凡ての人に侮蔑さるゝ憐れな少女が殘ることであつた。男が餘りにも色魔であつたからである。でも、彼女は、その誇りとその美とを維持せず

には居られなかつた。で、それがためには泥土に汚される憂のないやうな或る場所へ立退かなければならなかつた。さて、そう詮じ詰めて來ると、彼女の周圍は忽ち空虛になつて了つた。太陽も人も彼女にはもう存在しなくなつた。彼女は只一人となつた。そして身を遁れる所は何處にもないやうな、死なねばならぬやうな氣がしたのである。さういふ事が明確に心中に浮ぶと恰も全宇宙から彼女を孤立するために、大石壁が、彼女の四周へ湧出したやうな氣がした。彼女は次第に早く走つて、溜池の堤の上へ出た。そしてそこへ突立つてその下によどむ朦朧たる綠色の水を見た時に、彼女の決心は俄かに消滅した。そして恐怖の念と、それからもつと生きたいといふ欲望とが犇々と彼女の軀中に充ち溢れてきた。

今、周圍の一切は、彼女には再び甦つたやうに見えた。彼女は雲雀の鳴く聲を聞いた。彼女は春の强烈な日光をも見た。草の中なる愛らしいコスモス花も見た。と、大きな涙がボロ〳〵と彼女の眼から零れ出た。こんなに美くしい、こんなに愛すべき彼女の生活が、ムザ〳〵と消失せて了ふのかと思ふと、彼女は堪らなく悲しくなつたのである。彼女はクラ〳〵と眩暈を感じた。

彼女が、再び、足下の懸崖に望む黑い冷たい水を見た時、彼女は、自分の五體がいかに生を欲

してゐるか、死が如何に恐るべきであるかを理解した。が、どうも此の上生きてゐらないので、彼女はどうしても死なふと思つた。そこで見向きもせずに下駄を脱ぎ捨てると、いきなり荊棘の中へ分け入つた。と、無量の感慨が、こもごも彼女の心頭に迫つた。忽ち長い間ねむつてゐた信仰が、心の底で目を醒ました。彼女は幾度も神を畏るゝ純な祈禱を繰り返した。――（神様、私を助け給へ！　救ひ給へ！）

と、不意に原のことが憶ひ出された。が、それはほんの束の間に過ぎなかつた。續いて父母のいとしい顏が見えた。――この顏は殊更らに彼女を中水へ追ひ立てたものだが……。と、一切のものが、熱病の幻影のやうに錯亂した。恐怖、生き度いといふ要求、避け難いといふ感情、何もかも終りだといふ確認、それにもかゝわらず朧氣な或る物に對する希望、絕望、自分の死ぬのは此所だといふ苦しい自覺――そういふもの一切が、昏迷した彼女の腦中で輝やいたり、現らはれたり、混亂したりした。

「それ以上の馬鹿なことをば、お前は工夫することが出來なかつたのだ！」と、息を彈ませた裕道の聲が叫んだ。彼は丁度水緣の所で彼女を捕捉へる間に合つた。と、自分の力と、その敏捷さ

とが大に彼自身を喜ばした。
（こんなものだ！）と、彼は思つた。彼はきむ子を堤の蔭へ連れて行き、草の上へ座らせさせて不安な眼光で周圍を見廻した。（さア、此奴をどうして吳れやう？）と自分の心へ訊いた。
　きむ子は我に還つた。彼女は蒼白く憔悴してゐた。と、苦がい淚がポロ〱と其の眼から溢れ出て、頰を流れた。
「神樣！　神樣！」と、彼女は子供のやうに引泣けた。
「お前は馬鹿だね！」と裕道は優しく慰めた。きむ子は、その聲は聞かなかつたけれど、裕道が動いたので、一層激しく引泣け乍ら、ブル〱身を震はして、犇と從兄の胸に縋りついた。
「ねエ、何がそんなに辛らいんだよ？」と、裕道は彼女の肩を撫で乍ら言つた。
　きむ子は子供のやうにおづおづ從兄を見上げたが、不意と泣き止めた。
（そうだわ！　私は泣いてはならない！　でなけれや、裕道さんは、何もかも知つて了ふ）
「俺は何もかも知つてゐる！」と、裕道は言葉を續けた。「私は、ずつと前からこの經緯は殘らず知つてゐたのさ……」

従兄のこの言葉には、少なからず驚ろかされた。恰も、裕道が彼女の顔をピシャリ搏ちそうな氣がしたので、彼女は乾いた眼を大きく見開らいて、ジッと從兄を見詰め乍ら、彼から身を離した。彼女は目を閉ぢて、肩の間へ深く首を引込めた。

「お前は原に捨てられたのだらう？　そして、死ぬなんて考へたのかい？　始めつから、奴の戀はお前を幸福にする氣遣ひはなかつたのさ！……お前が奴に身を任せる前にも判つてゐたのさ。奴はいゝ男で、特に栗持よりはね。愛相がよくて、惚れるには持つてこいの人間だが、下等で陋しい人間に過ぎないといふことわね。女は、おべんちやらな男には、よくひつかゝるものだよ。が、今、お前はそれを苦しんでゐるのだ！　奴が餘りに佗麗だつたといふことをね――。しかしお前は、奴に身を任せたことを悔いてゐるのぢやないのだ。お前は奴に裏切られた失望と、憤怒との感情で、又、社會の人々の批難攻撃が恐ろしいからお前の不幸の恐ろしい部分は、すべて不幸そのもゝ中にあるのぢやない。お前が、そいつを、お前自身と世間との間へ置くからだよ。ね、お前は何故、世間をばかり氣にしてゐるのだい？　何故お前は死なふなんかするのだ？　死ぬなんてこと程、左様に人様にいやな氣を起させるものはないよ！　死なふなんてことは愚の骨頂だ

よ！　御覽よ！　太陽は輝やいてゐるぢやないかい？　水は靜かに下へ流れて行くぢやないかい？　鳥はあんなに樂しく囀つてゐるぢやないか？」彼は、彼女の白い頰へ振りかゝつた美くしい黑髮を見て言つた。「では、どうしたらいゝの？　どうしたらよ？」と、彼女は、問はまほしげに眸を上げて心配氣に訊いた。が、その眸の光にある理解の閃めきを讀んだ、彼はぢいつと、彼女の眸を見詰めて力强い聲で言つた。

「さう――お前に取つては唯一つの路がある。それは、お前が自制して、お前の魂を捧げて、長なる靈に懺悔することだ！　それから、お前は差し當り栗持と結婚することだ……彼は、お前に結婚を申込んだつて言ふぢやないかい？……若しお前が、あののつぺりした原と知らなかつたなら、お前はきつと、栗持を愛したに違ひないよ――」

栗持の名を聞くと、きむ子は心の中に當惑した一種の温情を感じた。原は彼女を不幸にしたが栗持ならさうはしなかつたであらう？　といふ氣がしたので、さう思ふと同時に自分の失策もさう大した事でもなく、たゞ自分次第でそれを取返すことが出來るのだ！」と彼女には思はれたのである。彼女には立上ることが、歩くことが、爛々たる日光の下を華々しく、彼女の前に展開す

ろ人生に向つて微笑むことが出來るのだ。彼女はもつと生きて……前よりももつと深く……清く愛することが出來るのだ」

ところが失策つたといふ自覺が、すぐ又歸つてきて、そんなことは出來ない、自分は最早汚れた身だ價値のない軀だ、とばかり考へられるのであつた。

「そんなこと出來ないわ、卑劣ですもの……私は……」

「ふん！　が、そんなことはどうでもなる。お前は卑劣と言つたね……が、若し俺れが栗持にお前の失策を話したら奴は手酷しい打擊を受けるだらうよ！　それでも奴はお前を愛さずにはおかないよ。そして失策は自分にあるのだと思ふだらう！　奴はお前なしでは生きて行けない人間だよ！　奴は、お前が告白さへしたならば、きつとお前を許すだらうよ！」

きむ子は溜息を吐いた。しかし、彼女の心は最早死を考へることは出來なかつた。昂奮の鼻先を妨げれたので。彼女の心は一種の壓迫を感じた。で、それを拂ひのけやうとした。

「多分きつと！　なんでもかんでもよくなるだらう……栗持さんは私を前から愛してゐて吳れたわ。最初に結婚を申し込んで吳れたわ。ほんとに女は、結婚を申込まれて惡い氣のしないものだ

わ‥‥栗持さんは温良しいわ、俊れた方だわ、そして好男子だわ。さうぢやないかしら。さうだわ‥‥いや‥‥私にや判らない」

「ねえ、お前が身を投げたら、何んの役に立つだらう？　お前が死んだ所で善悪は増減しないのだらう！　たゞ、お前の軀が崩れて、泥の中を轉がりまわるだけさ」裕道は動かない。きむ子の眼の前には、緑がゝつた色の脅かすやうな水底が搖めいてゐた。彼女はねばねばする絲條の蛇のやうな曲線や、胸の惡くなるやうな泡沫の渦卷くのを見た。と、ぞつと‥‥‥。

「いや！　いや！　そんな事はしまい‥‥不名譽を怺へてゐる方がよつ程增しだわ。栗持さん！　思ひ通りに行くか知ら？‥‥ゆきそうもない」と彼女は眞蒼になつて考へた。

「これさ、きむ子よ！　何んだつてそんなにビクビクしてゐるのだい？」と、裕道は笑ひ乍ら言つた。きむ子は泣き乍らニッコリした、と、その微笑が、自分乍らまだ笑へるといふ自覺を生じたので、彼女は嬉しくなつた。

「どんなことがあつたつて、生きるのだ！」

「そう！　そこだて‥‥よろしく生きるさ！　生きるさ！」

が、彼女の心を納得させたものは從兄の心ばかりではなかつた。彼女の心には、執拗な力強い潑剌たる生が充實してゐた。彼女は恍惚として、五體の全氣孔を通じて呼吸し來るかの一大歡喜をば、目に見たり耳に聞いたりした。と、その歡喜は、八方から、日光の中に、綠草の中に、輝やく水の中に、從兄の物靜かな力強い顏の上に、それから自分自身の魂の中にその歌を唄つたのである。（生きるのだ！）と、耳も聾するやうな歡聲が、彼女の心中に鳴り響いた。

「そう！　それでいゝ」と、裕道が、低い力ある聲で言つた。「辛い目にあつた時はね、いつも俺に頼るがいゝよ……そこで、俺れを接吻しておくれな。お前は別嬪さんだからね」

きむ子は默つてニッコリした。彼女は感謝に打たれて、男の唇の上へ、長い長い熱心な接吻をした。

彼は、最も有効な抱き方で、彼女を強く抱きしめた。二人の肉體がピッタリと密着して影は一つに折重なつた。一種言ふべからざる歡喜の情が、きむ子の心中を通り過ぎた。彼女は、いつまでもいつまでも生き度いものと希つた。もつと豐富な、もつと濃密なライフを希つた。彼女は千萬無量の意想を籠めて、熱つした肉體を男の方へ差伸べた。彼は犇と女の軀を強く固く抱き締め

た。そして唇を離して言つた。

（これ以上は失敬！――僕は童貞者だからね）彼女はハッとした。しかし、男の抱擁と接吻は、却つて或る清純の氣を持つてゐるやうで原に身を任せて了つた時よりいゝ心持がした。

「妾はどうするつもりだつたんだらう？……馬鹿だつたわねえ……何故そんなことを思つたんだらう？……あゝいゝわね……貴下にこんなにぴつたり抱いてゐて貰ふなんて……何だつてかまやアしない。生きるのだわよ！）「ねい！　どうだい！……」と、裕道は抱いた手を解き乍ら言つたきむ子は、嬉しくて堪らぬやうに、ニッコリ從兄を見詰めながら靜かに髮の形を製した。裕道は、

「いゝことは何んだつていゝさ！　いゝことの外は何も考へる必要はないよ！」

は、双手に彼女を抱きしめて、堤の上へ連れて行つてやつた。

（何んでもあんなものだわ！）と、從兄と押し並んで堤の上を歩き乍ら彼女は考へた。

彼女の高く突出た胸の上をば、日光がヂリヂリ燒きつけてゐた。

「どうだね――いゝだらう？……が、俺が童貞者だからね……が、俺には……それ以上のものがある！　ね、いゝだらう？お前！」彼の聲は、恰も、その春光の中から湧き出るものゝやうであ

つた。

「いゝわねえ……いゝことよ……貴下はなんていゝ方なの？」そう言つて、彼女はそつと彼の手を握り緊めた。

「ぢや、左樣なら！　俺は働らかねばならない　……お前、よかつたら結婚おし……そして懺悔はきつとするのだよ」

「エヽ……きつとするわ！　自制するわ！　結婚もねえ……」彼女は感謝の燃える眸を彼の顏に集中して言つた。

そして、綠の堤の上を、家の方へ、後振り返り乍ら步いて行つた。

彼は、ぢいつと立ち、陽光を全身に浴びつゝ見送つた。（そう！　あれ達は、又生きるだらう？そして苦しみ合ふだらう！　しかし、死ぬよりどれ程よかつたか？　光りはこんなにあるではないか？）

四月の下旬であつた。彼は不圖したことから流行性感冒に犯された。それに一寸長い詩を書く

ためにその前夜徹夜したからであつた。彼は病床に橫たはつた。

第一日に彼は禁記帳へ書いた。

病氣！　病氣！　恐ろしい病患！　全身は腐敗に痛み、靈魂は混融に返る、病氣は犯せし罪の酬ひか？

絕望！　絕望！　許されざる最後！　燃え上る赤き欲望は禁斷され、精神は神への眞理に返る病氣は犯せし罪の酬ひなるが故に。

第二日目であつた。彼れが天井を見てゐた時である。

恰も、地震が急に萬象を震はせて押し寄せた、祖母は悲鳴を上げて彼を呼び起した。彼は美くしい眸を閉ぢて、靜かに遠去り行く音を聞いた。そして彼は書いた。

火柱は炎々として赤く天空に燃えほどばしり、地塊の心熱な空洞を充たさんとして打ち震ふ。次第に熱は平均され灰色の滅亡は押し迫る。萬象よ！　人の子よ！　餘りにも悲しく恐ろしい試練だ！。

天と地と、灼熱の太陽と清明な水が震へ、都會の街路に人家は倒壞し、曠野の森に草はなびく、學者は蒼白な溜息を吐き、農民は鍬に縋つて立つ。
宇宙よ、靈魂よ、それのみが確實な足場なのだ。

第三日目であつた。彼は十二時間の睡死の後に書いた。

何をくよくよ川端柳、水の流れと人の身よ。

放浪者は柳の蔭に蹲まる。
「何處から私しや來たのやら? いつまたどうして歸るやら?
父もない、母もない、どうして兄弟と子があり得やう!」

青年はその側へ行つて聲を掛ける。

「何をくよくよしてゐるの？　貴下よ！

水は下へ下へと流れて行つて了ふではないか？　朝日もあんなに高く上つたではないか？

どうして目的地へ早く歩き出さないのか？」

放浪者は蹌踉と立つて歎く。

「俺れかね？　何が目的だらう？」

青年は怒つて放浪者を睨む。

「いゝことは多い！　一層君は死ぬ方がいゝだらう？」

放浪者は太陽を見上げて微笑む。

「太陽が輝やく現實と神秘の明るい生！　闇が來たら暗黑の休暇よ！　死だ！　宇宙の法則は嚴

肅と必然と、そして無限！　いゝかい？　萬象があり、人があり、運命だ！　絶對の道だよ！　目的と言つたね？　君よ！　天才よ！　學者よ！　よつく君の心を考へて見給へ！　惡と善は宇宙に等分してゐることを知つてゐるかい？　君の靈魂を掴み上げて見ろ！　君のやうな俺れのやうな魂がさぞ重層してゐるだらうよ！　俺の魂はね。次第に上へ昇つてゐるだらうよ！　そうだ！　墓場の草は肥えて、空はよく晴れてゐるよ！」

青年は彼の輝やく顔面に見惚れて了ふ。

「何んですね！　君は聖人ですね！」

放浪者、柳に靠れ水流を見詰めて言ふ。

「いや！　それは君の魂の陰翳かい？

俺も無抵抗主義者だつたよ。愛する女を横取りされても闘はない！　その苦しみをね。神愛なる忍從の幸福としたんだ。

修養かね？　君にして下らないことを言ふなよ！

俺れに反逆が來た。女と、眞裸體で一緒に抱き合つて寢たよ！　街頭で一粒の食物もなく、遂ひに徹底自我主義者になつた。

厭世と愛の强調！　君が言つた自殺に縋つたんだよ！　俺が幸福だつたと、又は不幸だつたと思ふかい？

其處には薄弱の意志の妄靈が歔欷してゐるんだ。そして悲しい聲で呼ぶんだ。あゝ、日よ！月よ！　父母よ！　兄弟よ！　どうぞ生へ引上げて呉れ！　女よ！　何故笑つてゐるのだ！　つてね……俺はがつかりしたよ。幸ひにして、棺箱の中で自覺したよ！　一寸絶望したが、遂ひに地獄を破つて川の上流の草原へ出たよ！」

靑年は戰慄して彼の脚を見遣る。

「神秘だね！　全たく。眞個に！」

放浪者は、昔しの百姓の子のやうに歩き出す。「それから俺れは水草を追ふて來た
森で小鳥が啼き、野に花が咲くよ！
君、忘れるなよ！　平凡！　平凡はいゝものだよ！
ね、露ぐさい食物もあれば、可愛い光りの女もあるよ！」
何をくよ〳〵川端柳水の流れと人の身よ！

裕道はこれを書いて了ふと、昂奮した美くしい表情をして、一散に、野の光りの中へ駈け出した。
（おう、俺も遂に偉大なる平凡者たるべく到達した）
彼は。天空の夕雲を見て、古しへを思ひ未來を想つた。

闇を遁げ光明へ行け！
光明は無限大に。闇は無限少よ！
闇には反射なく、光明には反射あるが故に。闇を遁げ光明へ行け！

第七章

君よ、吾を愛せよ、
吾れ御身のために祈らむ。
愛ある日、我に生あり。　　——（大聖詩篇）

大見原裕道の、輝やかしいきりつとした姿が、五月の眞晝の陽光の中を横切つて、青年會館の方へ歩いて行つた。何處かの家の上空に、鯉幟りがヒラ〳〵風に飜つてゐた。五月の節句である。

（小山！　栗持、彼等は例年の通り、今日その徵兵檢査だ。若し、當つたなら、二年間、又は三年間、あのお壕の中の別世界へ投げ込まれるのだ！　又は、運惡くも、西比利亞の守備にでも遣られゝば……何故、現代はかくも兵士が必要であらう？　小山、栗持。彼等は何故にこの素朴な農民を驅り出して、あの西比利亞邊りまで殺しに遣るだらう？）

彼は、一寸顏を上げて入口にある柳の枝を見てから、戶を開いて入つた。と、みんな一勢に彼

を見迎へた。

「小山よ！　どうだつたね？」（當つたな）と直感する。「何んだい？」で、ぢいつと、慰めるやうに小山の顏を見る。

「騎兵へ！　騎兵へ當つて了つたよ！　あゝ三年……）小山は悄然として俯向いた。

「だつて、君は行き度がつてゐたではないかい？」

「だがね、當つたら急にいやになつたのだ！」

「そう――三年も、最も面白い青春の頃を、あのお壕の中の別世界へ送られてゐれば、君の政治も駄目だね……頓坐して了ふね。君に取つてそれが一番辛らいだらう？　哀れむべきだよ！」

「そうだ！　そうだ！　僕はもう駄目だ！　何んだつてかんだつて……もうおしまひだよ。三年！　三年あの牢獄へ拘束されてゐればね。僕はなんだか悲哀を感ずるよ！」

「そう！　今日のあの軍隊は、驚くべき謀計が潜んでゐるよ。あゝ、金の力は軍隊へまで浸染したのだ！」

「さうかなア……」で、小山は力無く頭を下げる。

「僕の親戚に、現在特務曹長になつてゐる人があるよ！　で、その人が班長時代のことだ。そら隣村の閑院ね！　彼が恰度その班へ入つたのだよ。財産家の一人息子だらう？　親が脊後から何れ程金を持つて行つて運動したことか？　で、彼奴と、もう一人上等兵候補者があつたのさ、が、親の運動にほだされてね、俺の親戚の人は遂ひに彼奴を上等兵にしたさうだよ！　もう一人の方が成績がよかつたさうだがね……そんなもんだよ！」

「さうだつてね……隣村のKもね、去年除隊したKもね、隨分苦勞したさうだよ！　それで候補者の中でも成績がよかつたさうだがね、遂々上等兵にはならないよ！」

「さうだ！　彼には最後の五圓がなかつたのだ！　情實の傀儡！」裕道の聲は鋭どかつた。

「……栗持は旨くやつたよ！　兵隊には當らないし、いゝ女房は貰へるし……おい奢れよ！」奥平は皮肉に栗持のニキビだらけの顏を見て言つた。

「あゝ、僕アよかつた」栗持は、實に幸福さうであつた。

（あはゝ、此奴きむ子の秘密を知らぬのだな）

「栗持よ、お芽出度う！　結婚式はいつだね？」

「九月だよ！　まだ四月程向ふの話しだ！」

「九月？　九月？」と、言つて、裕道は彼の顔を凝視した。

「何故そんなに延したのだい？　何故、今、直ぐ同棲して了はないのだい！」

（彼女は直き飽きていやになつて了ふぞよ！）

「しやうがないのですよ！　向ふの都合で」

「オイ！　軍隊は眞個にそんなかい？」と、此の時小山は沈痛な表情で言つた。

「さうだつて言ふよ！……まァ、宅の園長さんもその組だよ！　金を使つて少尉になつた……」

「勿論さ！」と、奥平が大きな聲で言つた。

「お坊つちやんなんか」。

「あんなのはね。若し、戰爭があつて出征すれば、第一に後ろからどさり！　遣られて了ふのだよ！」

「後ろから？」

「さうさ！　敢へて彈丸は敵の方から飛んで來るに限らない。すべてそうだよ！　威張る奴はね

！」

「あゝ、一層戰爭でもあつた方がいゝ」と、小山は狂ほしく叫んだ。

「戰爭かね……しかし君等は戰爭の慘虐を知らないからいふのだ！　何故温良な百姓共を、あの他國の曠野まで驅り集めて、鬪はなければならないか？　僕には判らない！　お互ひに殺し合ひ殺され合ふなんて……そして戰爭に參加した兵士は、みんな戰爭の亡靈に取り憑かれて了ふのだ彼等は凱旋してからも一生涯祟られるのだ、そしていつも戰爭でもしてゐたくなるのだ、ね、軍人で戰爭の嫌ひな奴はないからね……あはは……でだよ！　戰地へ行つてゐると、死てふ觀念の緊張に依つて、最も慘虐な罪をも犯し得るのだよ！　人間は大勢寄ると野次馬的昂奮に卷き込まれるものなんだから。戰爭――慘虐だよ。で、又、かういふこともあるそうだ戰爭が長く續いてね、塹濠生活が十日も續くとね、そこの壁にも、此處の壁にも、奇怪な形の繪がはられるそうだよ！　實に彼等は、悲慘な愛慾の駄地獄に苦しめられるのだ。

若しだね。軍隊が居る所へ、その近所の娘でも、(女と言つてもいゝ)が、來やうものなら、軍團長の顏色でも變はるそうだからね……そう、戰地に殘つてゐる所の女は、みんな小女から老母

に至るまで姦淫されて了ふであらうよ！　彼等は、何物でも强奪する。どんなさゝいな食物でも激烈な病毒の女でも。少女の家の食物は掠奪され盡し、家は燒かれ、七才の少女は兵士達の○○のために死に陷しめられ、逃げ後れた七十二才の老婆は强姦された。兵士等は、○○○○○○○○○○○○○○○○を、平手で十數回强く毆りつけて、○○の筋肉の腫れ上つた時に、その○○をほしいまゝにしたそうだ！　老女も、無慘に殺されて了つたのだ！……。

何んのためにこんな慘虐が行なはれるか？　一部○○○○○の、自制を忘れたる生活の野心のために發つせられる動亂のためだ！　自制なき野心のためだ！憎むべきものはそれだ！　あゝ、俺れはそれを滅さなければならない！　そうだ！　正しきものよ！　愛する者よ！　あゝ、俺はそれを言はずには居られないのだ！」

——この時、團長石上が、ひよつくり姿を現らはした。

「どうだつたい？　徵兵は？」

「小山が三年兵だよ！」と、奥平はクスクスし乍ら言つた。

「騎兵かい？　馬に振り落されるぞ！」

「さうだよ！　だから何だつて、小山は今つから練習しておくとい丶よ！　町の樂園(パラダイス)へでも行つてね」奥平は低い聲で言ふ。

「さうだよ！　もう駄目だ！　兵士に行くまでうんと暴れるよ！　泣いて餞別を吳れる奴をうんと拵らへるよ……」小山の聲は震へた。

「だが、夜遊びは止せよ！　青年の名譽に關するから……」團長石上が、突然に、大きな聲で命令的に怒鳴つた。

「小學校教員のやうなことを言ふね」と、奥平が、茶化した。

「何故？　何故だい？」石上はぐつとした。

「何故つて、一寸思つただけよ！」と、奥平は橫を向いた。

「それやかうだよ！」と、裕道は力強い聲で言ひ出した。「い丶かね。今日の小學教員は、生徒に謹嚴を敎へてゐ乍ら背後にはお互ひに乳繰り合つてゐるよ！　で、僕は決つして彼等の行動を攻めはしないよ！……でだ。現代は最早、彼等の教へる修身書を改正する必要があるよ、その時が

きたのだ。現代の生徒は、最早忠孝の道徳には飽きて了つてるよ！」で、彼は一寸團長の表情を見遣つた。

「文明の過渡時代に於ける、一つの表れとして頽廢がきた。ね、聞き給へよ！　僕の友達の一大學生が言つて寄越したよ。現代の不合理な社會への反抗の酬ひられぬために、自己の第一義的な意志の燃燒を否定しやうとして、あらゆる方面の享樂に耽溺してゐるつてね。實に、彼等の言ふ高等なる悲慘だよ！オイ！　ウイスキーを持つてこい！　女よ！　カフエーの女よ！　おゝ、もつと奥へ、もつと深くずりこまさして呉れ！　つてね。實に彼等は、血みどろな頽廢の泥濘の中に陷つてるんだよ。そして、彼等は、詩は頽廢の中にあるといふがね、實はその思想は、たゞ腦髓の燃燒に過ぎないのだよ！　それでね、やがては、腦病院の朝の窓硝子へ、彼等の蒼白いどんよりした顔が映るのだ。現代の都會には、ぼうふらを收容する腦病院の増築が緊急問題だよ！ふゝ……。

石上團長よ、君は田舎の財産家の息子だ。そして君は品行方正だよ。藝者なんての顔を見たこともないやうな、あは！……そこで、君の過去を、君の最愛なる新妻、おとよさんに物語つたなら

彼女は必らずやヒステリーになるだらうよ。文明と嫉妬とは正比例するといふがね……」。裕道は何物かの力をかりて代辯するもの丶やうに言つた。石上は眞蒼になつた。奥平はクス／＼笑つた
「然るに、我々無産階級の、而も今日の小作農民の悴共は、君等のやうに藝者や女郎を買ひ得る程の金を惠まれてないよ。何も僕は、彼女等は無用の人間だとは思つてるがね。君等は贅澤をして女を買ふ。第三階級農民の悴は、神聖以上の勞働に從はなければならない。女を買ふ餘裕はない。而も、同じく生命を得て生れてきた人間だよ！　苦しみ、又矢張り享樂すべき人間だよ。然らば、この貧しき青年共は、如何にして滿足する？　勢ひ無錢で享樂し得る素人女の所へ行くよ。田舍の彼女等には、都會の女のやうに手練はないが、又一種の味があるよ、で、こ丶に不良青年と不良少女が出來る。い丶かね、現代は實にさうした文明末世紀の頽廢期だよ！　大勢だといひ得よう！」
「ぢや、君もその頽廢に溺れてゐるの？　大見原氏！」奥平は、裕道の顏を見て言つた。
「僕かね？　僕は最早十六七の頃、そんな所は卒業して了つたよ。今、吾々は、文明を突切つてより先きへ進んで了つてるよ！　先驅者はね」

裕道は、茫漠とした表情をして、彼の話に聞き惚れてゐる人衆が、堪らなくいやになつた。で嘔吐を催してきたので、外へ出て行つた。

コートでは、高田と、裕道の弟とが庭球をやつてゐた。

「高田よ！　君は運動が好きになつたね！」高田は熱のために赤くなつた顔を振り返つた。

「あゝ、僕の行くたのしみは、これより外ないのだ！」

「そう！　君は失戀したからね…どう？その後は？」

「駄目！　絶望！　落膽！　自棄…だよ！」

「君は、憐れむべき同情すべき愛すべき男だ」彼れの美くしい眸は、やさしく育ぐむやうに高田を見守つた。「で、今夜、町へ芝居を見に行かないかい？」

「行かないよ！　何處へも行きたくない――」

「ぢや、僕だけ行くよ！　若子が行きませう！　つて言つたからね…あはゝゝ」彼は晴れた五月の空を見上げた。そして、東南方を指して、しつかりと歩いて行つた。

劇場の入口から、人々はどつと一時に流れ出た。そして輝やく町の街路を、黒い人間の頭がずん〳〵歸つて行つた。

或るカフエーからは、美くしい音樂の響が、唸り立つやうに流れてきた。又、或る遊女屋の前には、船員らしい一團が罵り騷いでゐた。裕道は、無意識の中に、小山や奥平の群から離れた。そして遠いライオン齒磨の廣告燈を見詰めて、すた〳〵歩いた。美しい女が摺り違ひ樣彼にそつと觸れた。

「アラ！　失禮……」女の聲は癇高く響いた。（賣淫婦！）彼は、微笑して、眞直ぐを見て歩いた町を出端れると、忽ち濃い五月闇が彼の四周を圍繞して了つた。

（徒歩主義！　俺は歩いて十五町も歸るのか？）彼は、闇を透して、きつと前方を見据えた、暗く何も見えなかつた。（何故、人間は、闇夜には物を見得ないのだらう？　梟でさへ見えるのに……生物には、神は休眠の法則を與へたのかしら？　習慣は法則よりも強いことがある、といふが……）

と、その時、前方の闇の中から、奥平の若やいだ聲と、若い娘達の惡戲けた高い聲が聞えてきた。彼は急にいそいで歩き出した。

……若子は、先刻から、裕道に逢ひ度くて逢ひ度くて仕樣がなかつた。で、彼女は、

「裕道さんはどうしたの？」と奥平に訊いて見た。「大見原氏は、後の力から悠々と來ますよ！尊敬する哲學者は」奥平はそう言つた。

若子は、淫らな話をして行く娘逹と離れて立ち止つた。

「どうしたんだらう？　裕道樣は？　あゝ、逢ひ度い。今夜逢はなかつたら……」

彼女は道の傍らに立つて、後の方にぢいつと注意した。その時、いそいで來る人の跫音を聞いた。（裕道さまだわ！）と、直感すると、彼女の胸の動悸は高鳴し出した。その人はずんずん近附いてきた。そして彼女の前を通り過ぎやうとした。

「あゝ、裕道さま！」若子は、低い驕羞に咽んだ聲で口籠つた。彼女は闇の中で眞赤になつた。

「あゝ、若子よ！　よく待つてゐて呉れた！」彼は、つと立ち止つて、その黒い人影へ近寄つた闇の中では、あらい力は強くなる。

「裕道樣！　私、私貴下をお待ちしてゐましたの？」

「有難う！　では、一緒に出掛けませう！」彼は矢庭に無圖と若子の震へる手を握り緊めた。そ

して強く引張つた。若子は蹌踉けて歩き出した。
「みんなは、どうしたの？」と、裕道は若子の耳元で言つた。
「前へ行きましたわ！」と、若子の聲は益々低く口の中で言つた。
彼は闇の中でニコリした。そして天空を仰いだ。星が恰も、銀粉を振り撒いたやうに煌々光つてゐた。
若子は、どうしても、裕道に何か言ひ度くて言ひ度くて堪らなかつた。
「今夜の御芝居はよかつたのね！　私、あの令孃と、戀人が、山の中へ逃げて行つて、そこに修業してゐる、天文學者に、說教をしられて泣く所がいゝと思つたわ！　貴下は？」彼女は裕道が贊成して吳れるであらうと思つた。
「僕は、いゝと思はなかつた。僕は實に見てゐられなかつた。而も木戸が高過ぎるよ」
（そう、俺は、より力と信とを與へる脚本を書いて、民衆のために、眞實な劇を、安く見せてやらう！）
若子には、裕道の返事はどうでもよかつた。只、その力強い凛々しい男性に、強く抱き緊めて

貰ひ度かつたのだ。

「貴下。テニスはこの頃どうなさつたの？」

「テニス？　テニスは最早廢業しましたよ！　脚氣を遣つてから、思ふやうに動けないのでね……それに、僕等のやうに毎日野で働らかねばならない一介の農民に取つては、そんな餘裕はないのでね……若子よ、君は此頃何う？」

「私？　私は毎日町へお裁縫よ。いやになつて了ひましたわ。私、女學校を卒業したら、茫として了つたのよ！」

彼女は、何んとか言つて嬉しい返事を聞き度かつた。惚れた者の弱味であつた。

「そう――で、君はいつ結婚式を擧げるの？　喜一ちやんと」

そう言はれた時、若子はハツとして息をひそめた。許嫁の男の不品行な噂さが、はつきりと彼女を壓し付けた。

「私、私いつまでも結婚式なんて上げないことよ！」（私は貴下に戀してゐるのだわ！　これ！　こんなに熱烈にねえ……）

裕道は、眞直ぐに前方を見詰めて歩いてゐた。
「實はね、僕も妻を迎へやうと思ふんだよ。しかし、吾々のやうな農民の所へはね、現代の女は却々廻つて來ないよ！　彼女等はみんな、商業的俸給生活者に媚してゐるからね」
「いゝえ！　そんなことないわ！　少なくも私だけはそんなことありませんわ！　私、私はね、野へ出て働らき度いのよ！　暗い天井の下で、獨り夫の歸りを待つてゐるなんかより、（貴下のやうな方と）野で働らく方が、どんなに愉快だか知れないわ！　私は農民の妻になり度いわ！）彼女は、特に力を籠めて熱心に言つた。
その時、前方の闇を横切つて、自動車の照燈（ヘツドライト）が輝やいて來た。街道は、實に明るく照らし出された。見ると、奥平と、他の男女との群が、ぴつたりと重なり合つてゐるやうに映し出された。自動車は、疾風の如く快速力で走つてきた。彼の直ぐ手前まできた！。
「自動車！　危險い！」
若子は無意識に、裕道の胸に縋り寄つた。
ずおう・・・と、自動車は響きを立てゝ通り過ぎた。乾いた塵埃はぽふと白く立ち上つた。何も

かも、微白い靄で包まれたやうに朦朧な中に浸つた。若子は、男性の軀に密着したことを不意と氣附いた。と、不思議な恐怖と好奇心の錯綜した感情に壓されて、赤赤になつてぶる〳〵震へ出した。「あゝ」と、裕道は低く唸つた。そして、横抱きに、若子の豐満な肉體を兩手に强く抱き緊めた。女の部厚な肉體が、從順に彼へ靠れかゝつた。彼女は、ぶる〳〵震へて、而も內心根强いその好奇心に誘はれてうつとりした。男の唇がぴつたりと女の唇へ接觸すると、女は烙きつくやうな燃え上る軀內の熱力を感じてきた。彼女には何もかも見えなくなつた。たゞ、男の强く抱き緊める軀のみが、快よく感じられた。彼女は最早立つてゐることが出來なくなつた。脚が窘迫してきて、忽ち坐つて了ひ度くなつた。そこで、彼女は、男の肩へ兩手でしつかりと抱きついた。そして、ばふとして、男の方へだらりとした軀を差し伸べた。

「いゝ！　いゝね！」と、男は頰を密着させて私語いた。彼女は、男の聲に尙更ら堪らなくなつて、遂に座つて了つた。

「若子よ！　座らなくともいゝ……立つて步き給へ！　みんなに後れて了ふではないか？　さア早く立つて步かうよ！……ね、立ち給へ！　僕には、最早これ以上、君に捧げることは出來ない

僕は童貞者だからね！」

彼女の、ぱふとした頭上で、男性の力強い嚴粛な聲が言つた。彼女は、その聲をばはつきりと聞いた。それは、闇をつん裂いて、神のみ聲が響いて來るのかとも疑はれた。

「若子よ！ 立ち給へ！ 君は幸福ではないか？ さア！」裕道は、ぢいつと見下ろして、やさしく丁寧に言つた。

若子は立つた、彼女は、裕道を再たびはつきりと見た。

「裕道樣！ 有難う御座いました。私、私は幸福ですの！ 私は貴下に感謝しますわー そしていつまでも、いつまでも忘れませんわ！ きつと一生涯貴下のことを思ひますわ！ 裕道樣！」

彼女の昻奮した美くしい頰を、涙がホロ〳〵流れた。

「いゝです！ いゝです！ 貴女はまだ淸純な方だ！ 僕は祝福する！」そして、彼は、兄妹のやうな親しさを以つて、改らためて女の手を握つた。

その時、前方で、人々の高聲で笑ふ聲が聞えた。二人が近寄つて見ると、それは、一人の娘が傍の溝へ落ちたのであつた。

で、娘達は、若子が行くと、みんなどやどや急いで歩いて行つて了つた。裕道は、耳を澄まして消え行く足音を聞いてゐた。

奥平と、もう一人の職工とが、彼の傍へきた。

「小山はどうしたの？」と、裕道は、低い聲で訊いた。

「小山は、途中で何處かへ行つて了つたよ！」と、職工は答へた。

「そう――樂園だらう？　無理もないよ！　彼は兵隊に當つたんだ、今頃は、有頂點な享樂に耽溺してゐるだらうよ！……所で、奥平よ！　君は目的を達したかい？　愛するみつちやんを得たかい？」彼は、きつと鋭どく聞く。

「いや！　大見原氏！　餘り傍に人がゐたのでね、恥かしくつて遣り得なかつたよ！」奥平は、そつと言つた

（意氣地なしめ！　女は抱かれ度がつてゐるではないか？）

「駄目だねえ、そんなことでどうするんだよ……若しだね。若し僕が君の位置にあつたなら、一度見込をつけた以上。何人の前だらうが、何がゐようが、かにがゐやうが、敢然として、忽ち遂

行して了ふよ！　何故、君等は他人にばかり要らぬ遠慮をして、ゐるのだ？　戀は、少なくも今後の戀愛は、他人のために、その享樂を妨害さるべきものではない」彼は前方を見詰めて言つた

「では、君は今夜若子を旨くやつたね！　きつと。疑ふよ！」

「馬鹿を言ひ給へ！　君等は、ちよつと男と女と一緒に歩けば、最早、奇怪な密接な關係があると思ふから惡い！

恰も、中等學校の敎員のやうにな。

僕は、若子をやらない！　何故なら、俺の心は、彼女に依つては燃え切らないからよ！……で一寸抱いてやつただけよ！　たゞ、それだけさ！　實は奥平よ！　僕は靈魂が白熱に達つした時の、あの靈肉一如な妙境を希待してゐるのだ」

若子は歸宅して就床したが、昂奮して眠れなかつた。二階では、兄夫婦の乳繰り合ふ音が、怪しくも連綿と傳はつてきた。

（あゝ、またやつてゐやァがる。兄さんだつて、姉さまだつて墮落の習慣に陷ちて了つたのだわ

いつまで狂つてゐることだらう? 〇〇〇〇〇〇ミチ〳〵鳴つてるわ!…ほんとに、腦神經痛にでもなつて了へばいゝ。節制しないと、毒素が溜つて、子だつて出來やしないわよ! まだ!…)がふと裕道の俤が、彼女の腦裡に映つた。

(裕道さま! 裕道さま! あゝ、貴下! 貴下! 戀ひしい…)彼女は、強く男性の幻を抱き緊め、……て昂奮を續けた。

裕道は、星空に左様なら、を告げて、新らしい室に入り、パッと灯を點けた、すると、忽ち、一匹の蟲が、飛んで來て、炎に燒け死んだ。彼はそれを見て微苦笑した。

『力と信に光ちた完全な芝居を、人衆に見せるべき脚本』を、彼は一心に創作し出した。それは彼が七ヶ月の間構想してきたものであるが、今はどうしても書かずには居られない衝動に驅られた。それは次のやうな、悲劇であつた。『野火』と言つた。

——場所は富士山の麓の山家であつた。第一場に於て、樵夫の基作は、一生懸命に道傍の森で木を切つてゐた。そこへ村の長老正右衛門が白髯を撫し乍ら古曲的の風裝をして出てきた。そし

て彼は正直な基作を褒めた。基作は孤兒であつた。そして盲目な一人の弟が家に留守してゐるのであつた。正右衛門は言つた。

「基作どん！　お前様にァ俺ァいつも感心してゐるだ。村の若い奴等がみんな町の惡い風を眞似てゐやァがるのに、お前さんばつかりや、古しのやうに何にも言はずによく働らいてゐなさるだ！それにお盲目をかゝへたんぢや、さぞ苦しいだらうお察ししてゐるだよ！　が、神樣のみ心に從つてさへ居なされや、きつと幸福が來ますだよ！」

「神樣のみ心！　俺にや判んねい？」

「一心に信心さへしてゐれや。神樣のみ心は自然と判つて吳るものだよ！」正右門はそう言つた。

「歸りにまた！」と言つて去る。

村の娘、お雪とおたらが登場した。お雪は基作の情婦であつた。

「おゆきちやん！　昨夜は基作どんと、あの竹藪の陰で旨くやつたね！　お前達ァ幸福だ。俺りァつまんねい。が、いつも幸福でばかり暮らすことァ出來ないのだぞよ」おたらが嫉視して言つた。おゆきは泣きさうになる。おゆきは正右衛門の孫娘であつた。

「何をいふのだおたらよ！　お雪は俺れを好きだといつた。俺らもお雪が好きだ。だから俺れ達ア一緒になつたまでだよ！」

「俺らが悪かつたのだ！　ゆるしておくれ！　俺らはお前に惚れてゐたのだ！　が言ひ出せなかつたのだ！……俺らの夫は今街へ行つて了つてゐる！　俺ア今ひまだ。俺はつまんねい？　俺の夫は街で他の女を買つてゐるに違ひない！　俺ら程不幸なものはない！」

「いや、人間はみんな、自分が一番不幸だと思ふことがあるものだ、が、お前の夫も、直き町に居らなくなつて歸つて來るだらう！」

この時、町の銀行家の悴、剛一が出て來る。彼の家は銀行成金であつた。彼はこの村の別荘へ來てゐた。頽廢的な青年であつた。彼は地方の農民はすべて馬鹿で、幾ら虐めてもいゝものであると思つてゐた。彼はお雪を氣紛に弄そんで見やうとした。そして彼女の家へ行つたのであつたが、隣村へ使ひに行つたと聞いたので追ふてきたのである。

「何をしてゐるんだい？　お雪！」

「……」お雪は答へなかつた。そして否な表情をした。

「俺れはお前の家へ行つたんだよ。先達つて言つた指輪を持つて行つたのだのよ！　三百圓のだ！　さア、これをお前に遣る。今夜、俺の別莊へお出でよ！　さア遣るよ！」

が、お雪は默つて受取らない。おたらは言ふ。

「駄目だよ！　お雪ちやんには、基作どんていふ尊といものがあるのだよ。物に替へられない……。俺は今閑だよ！　な、それを俺にお吳れよ。そうすれや、俺は今夜、足を暖たゝめて待つてゐるだ！」

が、剛一が怒つて睨んだので、おたらはお雪を誘つて行つて了ふ。

基作は、剛一にかまはずに仕事に取りかゝる。剛一は基作を買收しやうとする。

「おい基作！　お前は町へ行く氣はないかい？　俺の銀行で使つてやるよ！　町へ來いよ！　町には金がたんとある。面白いことがある。」

「いや！　俺ア此處で生れたよ！　それに俺アには、お雪といふものがあるだ！　別れて行くことは出來ない？　俺アその外には何んにも欲しかアねい。私ア貧しい樵夫だ！　貧しいつていゝだ！　俺ア木を伐るだ。そしてお粥をすゝつて、お雪と一緒に暮せばいゝだ！」

「おい！　お前はお雪と別れろよ！」

「何んでね。俺れ達ァ互ひに好き合つてるだよ！　何んで他人の言葉で別れる必要があるだ」

この時剛一は仕事の妨害をする。

「退いで下せいよ！　私らァ働らかねァならねい！　働らかねァ食つて行けないだよ！」

「お前は馬鹿だ！」

「馬鹿でもえゝ、馬鹿を虐めるのは、尚馬鹿だよ」

「何に、馬鹿野郎！」

剛一は基作を毆る。基作は、忍耐の緒を切る。そして、二人は格闘する。二人はふと立別れて突立つ。と、剛一は基作の落した斧を見付ける。そして素早くそれを拾ひ上げて基作に打つてかゝる。基作は體を變す。剛一はよろける。基作は後ろから突きのめす。剛一倒れる。叫聲、藻搔く。剛一の胸から激しい血潮。基作は突立つて血走を變へてゐる。ふと血を見る。驚駭。

「ア！血！　血！　血か！　おゝ。死！　死だ！」

剛一は奇怪な叫聲を上げ、藻搔き、遂ひに死ぬ。動かなくなる。

「あゝ。死んで了つた。あゝ、恐ろしい、許して呉んろ！　俺ア、俺ァ殺すつもりやなかつたゞ！　殺すつもりやなかつたゞ……だつて、お前が餘り俺らを虐めたからだ！　あゝ、しかし恐ろしい！」

この時、お雪おたら歸つて來る。

遂ひに基作は、巡査に拘引される。

「あゝ、もう駄目だ！　日が落ちて行く！」

正右衞門が靜かにきつとして言つた。

「また日が出るまで、俺れはお雪と一緒にお前の返つて來るのを待つてるよ！」

裕道は、一場書いて了つた。そして二時頃までかゝつて了つた。と、彼の周圍を、若子の想ひが、闇の中を流れてきて、ぴつたりと圍繞した。何處かで二番鷄が鳴いた。で彼は室の隅で祈り安らかに寢床に就いた。

それから三日經つてからの夜であつた。彼はその夜、一つの小さい短篇を書いてゐた。

『天才と言はるゝもの』といふのであつた。

彼は、かうして、大抵夜ばかり書くのであるが、その構想はみんな、晝間野に勞働し乍ら、考へるのであつた。で、彼れは、心のみで太陽や草木と話してゐた。

高田が來た。彼はいつものやうに歌も唄はずに歩いてきた。彼の顏は蒼白になつて、沈痛の氣を漲らせてゐた。

(高田よ！　おゝ可愛いゝ男よ！　君には又返事が來ないのだな！)

「君！　君！　僕は！　僕は！　もう死んだ方がいゝのだ！　これ程侮辱され虐待されゝば、最早死んで了つた方がいゝ！　君！　君！　君は僕の縋り得る一人の親友だ！　どうぞ僕の僕の悲慘なローマンスを聞いて呉れ給へ！　あゝ、君！　君！」高田の蒼白い頬を、熱い熱い涙がタラ〳〵流れた。

「おゝ、高田よ！　聞くとも！　聞くとも！　僕のこの胸に縋つて、思ふ樣お泣き！　お泣きよ！　高田！」彼は、天井を見遣つてから、高田に優しい眸を投げた。高田はついと顏を上げた。

「君！　君！　實は、僕、又あの節句の日に手紙を送つたよ！　七通目だ！　君！　笑つて呉れ給ふな！　僕はどうしてもおさよを忘れることは出來ないのだ！…しかも、あゝ、しかし、君今日で四日目だ！返事は來ない！　君！　君！　僕は最早絶望だよ！　あゝ、ゝ…」

高田は遂ひに、感情が爆發して、聲を上げて、机の上に泣き俯した。

「高田よ！　高田よ！　實に君は眞面目な男だ！　こんな立派な青年に思はれるなんて、ほんとに幸福だのになァ。」

裕道の瞼の裏が熱くなつた。彼は高田の手を強く固く握り緊めた。そして遂ひに泣き出した。しばらくして、大兒原裕道はきつと顏を上げた。彼の顏面は緊張され美くしい眸は輝やいた。

「おゝ！　高田よ！　君はこの小說を讀んで見給へ！　恰も君のやうな主人公だよ！　實は、僕の此頃の感情を、象徵的に書いたのだが…しかし、きつと、君にも何かためになるよ！　ね！　君！　讀み給へ！」

「有難う！　僕は、何んでもかんでもいゝのだ！　僕のこの辛らい胸を慰めて呉れるものでさへあれば…實際僕は、自分では最早どうすることも出來ないことを痛感したよ。僕は他に縋るよ

り他ないのだ！」

高田は、原稿紙を取り上げ、虔ましやかに讀み始めた。

『生　の　聲』

彼は、ふと眼覺めました。と、寂しい寒げな氣が、彼の周圍を取り卷いてゐるやうに思はれました。彼は、決して、二度と世の光明に歸ることの出來ない死の深淵に陷ち込んだのだと思ひました。

彼は先刻のあの空腹を思ひ出しました。そしてあの自棄な考へを聯想致しましだ。

彼は、昨日の夕方、空を眞紅に恰も血を流したやうに彩り乍ら、靜々と沈んで行く偉大なる入日に向つて、その惱ましい人生の苦患を抱き乍ら、除々と進んでゐました。彼は朝から何物も食はなかつたのです。彼の步みは實に蹌踉として、力無く哀れ深い姿でした。太陽は益々深く遠く沈んで行つて了つたであらう！　空は次第に暗くなつて行きました。彼は最早、何方へ步いて行つていゝか、その方角をさへ知ることが不可能になつて了ひました。この力弱い無信仰な、虛無

的な人間に取つては、地上は餘りにも闇深く暗かつたのであります。彼は立ち止つて天を仰ぎました。もう空には、いくつかの星が、恰も麗はしい乙女の眸のやうに、煌々と輝やいてゐました。

彼は、自分の前に、押し迫つてゐる悲痛な餓死を考へました。

「死！　死だ！　もう駄目だ！　なんだつてかんだつて……」彼は、沈んだ聲で唸るやうに呟やきました。と、彼は急に悲しくなつて、思はず熱い涙をホロ〳〵と流しました。彼は泣き乍ら暗い野路をトボ〳〵と歩いて行きました。彼は村里へ入つたやうに思ひました。と、或る安心のためか、くら〳〵つと眩暈がして、思はず其處へ、倒れて了ひました。

彼は漸やく傍の納屋へ這ひ込んだのでした。が、それ以後の記憶は、彼にはありませんでした。

彼は、改めて、意志を強固に働らかせて、自分の周圍を注意しました。彼にはすべてが明瞭に判つて來ました。即ち、彼れは、それから何時間かの間、その納屋の中に眠つてゐたのでした。否、氣絶し、死んでさへ居たのでした。

彼が疲れた軀を動かす度に、藁は氣味惡くカサリと鳴りました。が、萬象は沈默を守つて靜寂に浸つてゐました。

彼は、遠く遠く歩いてきた自分を思ひました。が、彼は、又絶望に氣付くと、淋しさに慄へ戰きました。

「何故俺れは眼覺めなぞしたらう？　一層のことあのまま寢入つて了へば……」と、さへ考へました。

「俺れは何故、生れてなぞ來たらう？　こんなに苦勞する位ゐなら……」

そこで、彼れは、悲しみ多い今までの生涯を考へて見ました。

――彼は、生れた時から不幸であつたのです。彼は實の父の顏を知らないのです。彼の父は彼がまだ母の胎内に居る時に、日露戰爭のため出征しました。そして、不幸にもその善良なる一人の農夫は、尨大なる權力のために犧牲となつて、滿洲の野に埋もれて了ひました。後になつて判然したことであるが、彼の生れた日と、父の死んだ日とが、同一の日であつたといふことは、何んといふ神祕な奇蹟であつたらうか？

その後、彼の母は、新らしい夫を持ちました。それは酒飲の無賴漢のやうな渡り者の男でしたそれは、戰爭も終了した、彼が三才の時でした。若い彼の母は、獨り淋しい日を過してゐました。

まだその時は、祖父母共生きてゐる時でした。母は毎日、慰められない悒欝な日を暮してゐました。そこへ突然に男は現らはれて、彼の家に入り込んで了ひました。勿論祖父母は反對であつたが、母は泣いてその男に走りました。彼女は一人の愛する彼をも捨てゝ、男の所へ行つたのでした。やがて、親戚の者が仲へ入つて、母は漸やく男と一緒に家へ歸ることになりました。男は思つたよりも酒飲みであつたのです。そのために、母は常に悲しい日を泣き暮したのであるが、矢張りずる〳〵と或る力に引張られて、四人もの子を生みました。

太陽は無限の運行を續け、すべてのものは、成長し滅亡する宿命に從ひました。彼も、四人もの弟妹も成長しました。そして反對に母は老いて了ひました。

彼は、父といふ他人の男とも、又、その子の四人とも、和合しやうと、どんなに努力したか判りませんでした。が、人間として、血の流れといふことをどうしやうがあらう？　彼は矢張り、一人淋しい孤獨の境涯を守らねばならなかつたのです。

が、彼にも、青春の血潮は湧き上つて來ました。彼には十七年の春が廻つて來て、彼の心は、欲求に浮々と輝やきました。彼は、學校を了つて、農業をしてゐたのであるが、春は又、彼の美

くしい眸にも宿つてゐました。

或る日、彼は、碧空の下なる桃園の綠なす草の上に、燃ゆる心を抱いて長々と寢そべりました。春日は强烈に直射して白日をなし、渾然として一つの爛熟を現らはしてゐます。小鳥は放逸な歡樂に醉ひ、獸は夜を日についで姦淫を𨋳つてゐます。彼は素裸體となつて女と接觸したいやうな衝動に驅られました。が、惱ましく沈んで行く苦痛な心をどうすることも出來ませんでした。彼の心は、餘りにも惡い不自由な道德に毒せられてゐました。そこに、彼の儚ない自殺の考へが浮びました。が、直きに、彼には、華々しい運命が開展せられました。

或る低い地に續く村に住む人々の待つた輝やかしい祭りの夜が來ました。昨日までの雨は止んで、空は淸く晴れ、地には提灯の燈が仄見えてゐます。黑い流れの川邊の小屋で、若い娘がそゞろに踊ります。赤と白とのだんだら幕が張られ、電燈の灯りが强烈に光ります。踊り娘の白い顏面は緊張され、ハッと思へばニッコリ微笑む。座敷の前には、見物人が一溢ぢいつと踊子の姿を見詰めてゐます。踊りが切れて幕が引かれると、見物の上にサッと黑い流れが起り過ぎます。

「あら！　失禮・・・」

彼の足に、乙女の白い熱い脚がすらりと觸れたので、乙女は彼に詫びました。

「イヤ！」で、彼の心は躍り上り、赤い血がサッと顔に押し上ります。さつきから、彼の前に、若い美くしい一人の乙女がゐました。そして、たゞ、なつかしいと彼の心が顫へてゐました。彼のきゆつと胸に當てた手に、乙女のお下げにした毛髪がふつと觸れます。乙女がやさしい手を上げると、はつと思ふ間に女の髪の櫛は拔け、そして彼の手に殘りました。

「有難う！」女は、彼の手から受けておじぎします。いゝ顔がチラリ彼の眸に殘る。で、女はそつとふら〳〵動きます。

乙女の頰は上氣してぼうと赤く、肩はゆるやかに顫へる。二人の手は觸れてゐます。燃え上つてる血の熱が交はり流れ合ひます。踊りが了へて幕が下ります。彼の肩は、乙女の肩にぴつたり密着して、きつい接觸の暖かさが意識されます。

「お歸りになりませんか？」乙女は、振り向いて、ぢいつと彼の目の下を目詰めて言ひました。

「エ、、でも未だ早いでしやう！　九時にならない、もう少し」と、言つて、彼の心は希ふのです。

「でも、私歸らなくつては」で、乙女は考へます。

彼も考へます。（別れ度くない。いつまでも長く長く同じに居たい。可愛い絕對に愛する乙女よ！）

「ぢや、私、失禮致しますわ！」乙女は、ゆるやかに、丁寧に、頭を下げ、そして別れて行きました。

それから彼は淋しかつたのです。彼女が歸つてから、踊子は同じやうに舞つたが、淋しい殘され者の悲哀に、しみじみと乙女が想はれました。

（何故、同じいに歸らなかつたらう？　彼女もそれを望んでゐたのに）と、考へました。

見物の中に、多くの女が居ました。美くしい眉びる女も……。しかしそれが何んであつたでせう？　乙女のない心の上に。

で、彼は灯を離れて、一人つゝましやかに歸り始めました。家に歸つて彼は寢床に就きました。

全身はポカ〱とほてり、閉ぢた彼の瞼には、うれしい乙女の面影がはつきりと映りました。

（おゝ、うれしい乙女よ！　又、逢へるだらうか？　私はこんなに熱く惱ましく燃え慕ふてゐる

のに、乙女よ！　私の喉から、熱くほろ〳〵流れ出るこの涙が、この泪がね、わかるのか？）

彼はそんなにも強く考へました。彼は幸福な初戀に捉へられて了つたのでした。

彼は、いつも、祭りの夜の乙女の姿を想ふて暮す青年となつて了ひました。彼の心は鋭敏になり、嘘僞を吐くことさへ覺えました。彼は、乙女が隣村の大工の娘で十六才であることを、その戀するもの丶敏感と熱心で嗅ぎ出しました。彼は煩悶懊惱の日を過しました。

彼は、彼女の村へ、夕方ふら〳〵と彷徨ひ行くやうになりました。一日でもい丶、女の顔を見たかつたのです。彼は乙女に手紙を遣らうと思ひました。又、彼女の家へ遊びに行かうと考へました。しかし、彼の道徳は、それに反對しました。禁慾と、慾求との激しい爭鬪が、彼の心の中で行なはれました。彼は心の中には、熱く彼女を戀ひ慕ふてゐるのに、敢へてそれを打ち開け、尚慾求するだけの勇氣がなかつたのです。そこに必然なる厭世的な氣分が胚胎します。

彼はやがて死を憶ふ青年になりました。

それでも、彼は、ふと路傍で彼女に逢ひ、お互に紅くなつて顔を見合せる時は、祭りの夜の幸福が復活して來るやうに感じました。

そして、彼女も、決して自分を否定してゐるものでないとさへ考へました。

「Kちやん！　Kちやん！」彼はよく、彼女の家の空を眺めて、涙を流し乍ら感激に充ちた聲で呼ぶことがありました。

寂寞の秋が來て、木の葉は紅くなりました。山の森では、山鳩がホロ〳〵とうら悲しく啼きます。

その頃、急に、彼女の姿が家に見えなくなつて了ひました。彼は、彼女の家の附近へ行つて、その理由を訊ねて見ました。

「隣りの大工さんも不景氣でなァ、それに子供は多し、生活が大變だらうて……」と、その人はそれだけしか答へませんでした。そして、彼女は北の町へ賣られて行つたことを私語きました。

彼は、暗い絶望を抱き乍らトボ〳〵と力無く家路へ歸りつゝ（彼女は、彼女は遂々、犧牲になつて了つたのだ！　あの美くしい肉體を賣つて了つたに違ひない）と考へ、悲痛な憤慨と、同情と失望と交錯した涙を流しました。

彼は、それから急に弱々しい人間になつて了ひました。彼れは元來善良な性質の男であつたの

です。只、一つ、短氣であることが、缺點でした。がそのために一層正直であつたのです。彼は失戀の涙を流し暮しました。しかし彼は、どうしても彼女を忘れることは出來なかつたのであります。

最早、彼には、彼女なしでは生きてゐられない秋が來ました。彼は、如何にもして、彼女に逢はなければ……といふ決心を固めました。彼には、亡父から別け與へられたいくらかの財産がありました。彼の養父は、それをしも自分の子供に與へる機會を待つてゐました。彼はそれをよく知つてゐました。で、冬の初めになつて、愈々出奔の決心をしました。

或る月夜の夜更けに、彼れは家を拔け出でました。母は、産れたばかりの子を抱いて、よくすやすやと眠つてゐました。彼は、大變濟まないやうな氣がしました。外は清い月光が、神高くもさんさんと降り注いで、萬象を照破してゐました。絶對の道は涯しなく無限の曠野に白く續いてゐました。彼は村端れの堤の上に立つて、永年住み馴れた自分の家を振り返り、思はずも聲を落し歔欷しました。

「故鄕よ！　故鄕よ！　もうお別れだ！」

彼はその夜、汽車に乘つて寒い北の國の街を差して走りました。

彼はその町で、彼女に逢ふことが出來ませんでした。彼には運命の沈滯がきたのです。彼は最早絕望を感じました。彼には、望鄕の念が起るのであつたが、歸ることもしませんでした。彼はその後一年程の間を、北の町から町へと彷徨して歩きました。或る時は、鍛冶屋の職工にもなつて、手に大きな火傷をしたりしました。又、或る時はその日食ふに困つて、立ん棒をしたこともありました。で、最近彼れは或る釀造店へ雇はれました。彼は正直によく働らきました。が、彼は如何に激しい勞働の中に於てさへ、彼女のことを忘れるやうなことはありませんでした。彼は蕎麥屋の出前持をしてゐた時、そこの女中達に隨分誘惑されやうとしたが、彼女の俤を思つては固く身を守りました。又、鍛冶屋で火傷をした時は、彼女の俤を思つて、その痛みを怺へました。

(そうだ! 彼女は最早俺れのことを忘れ、その軀は他の男達にまかせてゐるかも知れない? しかしそれが何んだ? 俺れは、あの祭りの夜のことを覺えてゐる! あの夜のよろこびはどうだ! 假令、彼女が如何なる罪を犯さうとも、俺れはそれを許し得る程、彼女を愛してゐるつも

りだ！）

彼はよくそうきつとして考へました。彼は酒屋で辛らい釀造の勞働の中に於てさへ彼女を想ふことに依つて幸福でありました。

（そうだ！　彼女に逢ふまでは、何處までも、假令世界の端までも！　若し死の世に於て逢へなかつたら、あの幽迷界に於て）彼れはそうも考へました。

その町にも彼女の姿は見出せなかつたのです。彼れは最早絶望することはありませんでした。彼は遠い空を見ました。

一昨日、彼れはそこの頭司と遂ひに喧嘩をして了ひました。それは酒好きな頭司が、未青年である彼に向つて、酒を強ひたことから、短氣な彼れが頭司の禿頭を毆つたことから起つたのです。結局、彼がその家を出されることになりました。彼はその夜、西へ向つて歩きました。昨日も一日西へ向つて進みました。彼には、何故か彼女が西へ歸つてゐるやうに思へて仕樣がなかつたのです。彼は足の底が痛くなる程歩きました。彼は晝過ぎから空腹を感じました。彼には一錢の貯へもなかつたのです。彼は一枚の袷せを着たまゝでした。が、健全な體格を持つた自分が、他人

の働らいた餘裕を掠めるといふことは、心苦しいことでありました。それで彼は思ひ切つて敢へてなす元氣もありませんでした。まして、彼に盜むといふことがどうして出來得やう！彼は、そんなことは考へもしませんでした。しかし、太陽が西へ行くに隨つて、彼は次第に心細くなつて來ました。

（一層のこと、俺れは死んで了つてゐたなら？）そう思つた時、彼の瞼の中が、熱くなつてきたのを感じました。

彼は、その餓死せようとする瞬間にも、彼女のことを忘れることは出來ませんでした。彼は、ほつと吐息して兩手で顏を撫でゝ見ました。彼はぢいつと眸を閉ぢました。と、闇の中に、彼女の美くしい俤が鮮明に映りました。彼はいつまでそれを見詰めてゐました。

横腹がきゆうと鳴つて、チク〳〵痛み出しました。彼は、さうして最早餓死することを觀念しました。彼は最早生に就いては諦めました。彼の心は、悲痛を感ずるには、餘りに傷つけられてゐました。彼は少時の間、そうした恍惚とした狀態を辿つてゐました。

と、突然に、何處からか、生々しい赤子の聲が彼の耳朶へ響きました。聲は母屋の方からおぎやおぎやァ聞えて來るのです。それは、實に生の力に充滿した産れたばかりの赤子の生新な泣聲でした。彼はぢいつと聞き惚れてゐました。彼は犇々と生の意義を感じました。

「神は決して、無意義に生を與へはしなかつた。喜ぶものにも、悲しみあるものにもそして苦を忍ぶものにも」

赤子は高い聲を上げて泣きました。その聲は四方へ強く響いて行きます。

それを聞く彼れは、堪らなく強烈な生の衝動に驅られてきました。

「生きることだ！　生きることだ！　そして俺れは故郷へ歸つて見やう！　彼女は歸つてゐるに違ひない！　俺れは逢へる！　きつと！…俺れは生きるのだ！　どうしても生きるのだ！」

彼には有頂點な歡喜がぞくぞくつと湧き上つた。彼は、赤子の聲を聞き乍ら、遂ひにすゝり上げて泣き出して了ひました。

何處か遠くで三番鷄が啼きました。

彼はすつくと立ち上つて、納屋から出ました。曉の空は、清新なミルクを流したやうに明け初

めてゐました。彼は故鄕の空を見ました。そこには大きな星が光つてゐます。彼の眸は燃え上つたのです。

「生きることだ！」

彼は、胸を張つて强く叫びました。そしてしつかりとした足踏みで、生に充實した朝の氣の中を步いて行きました。（完）

大見原裕道は、自分が血と淚とを持つて書いたこの短篇を、ぢいつと讀んでゐる哀れなる親友高田の力無い姿をやさしく熱心に見下ろしてゐた。高田は一氣に息をも吐かず讀み了へた。彼の顏は昂奮に赧くなり、眼光は歡喜に輝やき、感激の焰は炎々と軀內に燃え上つた。

「君！　君！　君が書いたのか？……この小說を……この小說を？」彼は、原稿をピツタリ机の上に置いて、ぢいつと裕道を見上げた。

「さうだよ！……僕はかういふ戀愛を思つてゐる。吾々は幾度でも戀すべく許されてゐる。そしてそれはみんな樂しいものだ。しかしそれには白熱がないよ！　自分では白熱化したことだと思

つても、ないのだよ！　戯戀！　戯戀には僕は最早飽き飽きしたよ！　僕は眞實の神聖なる戀愛を要求する。眞實の戀愛とは、神が惠與した所のもので、お互ひの靈魂が炎々と熱の最高潮に達つし白熱的に燃え切り、此處に生ずる靈肉一如な妙境をさしていふ——。で、その機會が、いつになつたら惠まれるのか？　僕には今判らない。しかし人間には必ず惠まれてゐるものだ。僕は敢へて十年でも二十年でもその時を待つてゐるだらうよ！　僕はその心持を書いたのだ。僕はこれを書くためにどんなに苦勞したらう？　しかし、一人でもいゝ、如何に若い人でもいゝ、この短かい小說によつて、ある信と力とさへ得る人があつたなら、僕はどんなに滿足するだらう？」

裕道は原稿の表紙を見据えて言つた。

「君！　君！　それは實にいゝやうに思ふ……。しかし、その主人公、つまり君の感じてゐる戀と、僕の現在の戀とは違ふやうだ！

……君！　僕も十年おさよに戀ひしてゐる。さうだ！　僕が始めておさよが好きになつたのは彼女が十才の時だつた。彼女が、小學校の校庭で、友達に泣かせられてゐた時からだよ。あゝ、何んだつて、こんなに時の經つのは早過ぎるのだ？　彼女はもう十九になつた。君！　彼女は直

き嫁に行つて了ふに違ひないよ！　君！　僕はどうしたらいゝか？　もう堪らないのだ！……もう！」

高田は奮激して狂ほしいやうに叫んだ。

「しかし高田よ！　君は、お小夜と逢つて話したことがあるのかい？」

「ない！　僕は彼女に逢へば震へて了ふよ。だからない！」

「ない？　ぢや君はどうして彼女に惚れたのだ？　君はつまり、彼女の豐麗な肉體を所有したいのだな！　あの處女の肉體を野蠻な手で弄そびたいのだな！……然らば、此處に一つの有効な路があるではないか？　高田よ！　只一つ强姦！　姦强のみが殘されてあるよ！」

「エッ？」高田は眞蒼い顔になつた。「强姦？　强姦なんて……恐ろしい。僕にそんなことが出來るものか？」高田はつと立ち上つた、「失敬する！　失敬する！」

「そうかね！　高田よ！　高田よ！　祈ることのみだよ」

「有難う！　しかし、僕には何んにも判らない！　失敬！」高田は夜の中へ歩いて行つた。裕道は門口まで送つて行つた。

「左様なら！」

「左様なら！高田よ！」

彼はそこに立つたまゝ消えかゝる月光にぼんやり照らされ乍ら、悄然と歩いて行く高田の姿を見送つた。

「あゝ、何んといふ悲しい運命だ？　彼は餘りにも虐げられてゐる。彼には、反抗する元氣がない。しかも忍從する信仰もない。彼は突發的な自殺に走るだらう？　どうも、それより外に行くべき路はないやうだ！」

彼は最早天を仰ぐことが出來なかつた。そこで首垂れて自分の暗い室に歸り、靜かに跪まづいて祈りつゞけた。

或る晴れた五月の朝であつた。その時は最早五月中旬になつて、この土地特有の製茶に忙がしかつた。その上大見原家には、三反歩程の桃園あつたのでそれへ袋をかけねばならなかつた。彼はいつもの異様な新らしい風裝をして、村中の道を横切つて歩いて行つた。彼のこのスタイルは

漸次村へ多くの模倣者を出したのであつた。しかしその人々は、心まで眞似ることは出來なかつた。で、彼はその人々に生新な思想をも與へる必要があつた。

五日朝の光りは、眞裸體のまゝ天を指して語るものゝ上に輝やくであらう！ 五時半の汽笛が鳴り響いて、工場から歸つて來る職工の上にも輝やくであらう！ 昨夜は野宿した放浪者の上にも輝やくであらう！ 又、牛の手綱を引き、可愛ゆい女房と押し並んで、今日の勞働のために、田へ急ぐ農夫の上にも輝やくであらう！

實に五月の朝の太陽は生新そのものゝ表象であつた。

彼は、草の露の輝やいてゐる光りを見て、素晴らしく愉快になつたので、うはをーと高く叫んだ。

その時、或る製茶工場から高田が出てきた。見ると、顎髯は蓬々と生へ、顔は瘠せて、力無かつた。

「君！ 裕道君！ 君は何をやるね？」と、高田は嗄がれた聲で言つた。

「俺れ？俺は袋掛けだよ！：：まア、しかし君は馬鹿に窶れたね！ 貧弱な顔をしてゐるね！」

「あゝ、僕はもう駄目だよ！　僕等は二十時間打通しに働らかなければならない」高田は暗い沈んだ表情をした。「僕にはもう目的もなんにもない。みんなもう絶望だよ！」そう言ひ續けて、高田は遣瀬ない憂欝な溜息をした。裕道は、親友高田が可愛そうでならなくなつた。

「ねえ、高田よ！　何故そう落膽するのだ？　見給へ！　太陽はあんなに輝やいてゐるよ、小鳥はあんなに囀づつてゐるよ！　そして、娘達はあんなに樂しく唄つてゐるよ！」

實際向ふから三人の村の若い娘達が、胸を張つて高く美くしく唄ひ乍ら、光りの中を歩いてきた。

どんな男にも、好かれて好いて、

泣いて別れて、知らぬ顔ォ――。

忽ち、彼女等は愉快そうに笑ひ轉げた。それを見た高田は、羨やましそうにピリッと眉を寄せた。そして、工場の方へ馳け込んで了つた。

（あゝ、彼れは、遂ひに先入主的に虐げられてゐる。彼を救ふべき路は最早ないのか？）

彼は暗然として涙を飲んだ。

（この輝やく光りの下に、こんないたましいことがあらうとは）

しかし彼は、働らくことに寄つて、自分自らを慰めやうとした。そこで彼は、桃園の方へしつかりと歩いて行つた。

ひろびろと展けた曠野の一隅、一寸小高い丘に彼の桃園は生新な緑色の新葉を飜し、日々に膨張する果實を育てゝあつた。

（この桃園へ、高田を連れて來てやり度い。あんな不潔な工場で、二十時間打通しに過激な勞働をしては堪らない。が、彼は、悲しい失戀者だ。おさよは大地主の一人娘だ。が、彼は最とも貧乏な小作人の小悴だ。それが何んだ？　そんなことが……戀愛になんの關係がある。高田ならきつとおさよを幸福にするに違ひない。……それだのに何んといふ現代人の階級意識だ！……力もない！　信もない。そして自殺か？）

裕道が俯向いて桃園へ這入つて行くと、其處には最早雇女のお種婆やがきて、仕事してゐた。

お種は、無心に唄ひ乍ら手を働してゐる。彼女は唄ふことが好きだ。そして善良な樂天家だつた。

「何を言ひなさるだ？　神樣を疑ぐつたりすることは、ほんとによくありましねエ。只、一生懸命にお祈りさへすれや、神樣はきつとお惠みを垂れて下さいますだ。よく働らいてさへ居たなればね……」

いつかそう言つたお種婆やである。

「やア、お種婆や、お早う。御苦勞樣だね！」

「お早うもねいだよ！　お天道樣はあんなに高く上つて了つたで御座いましねいだか？　兎角若い時は、道草を食つたり、暴れ廻つたりしたいものだが、だんだん年を取るに隨つて、靜かな安易な生活がよくなるもので御座いますだよ。さア、坊ちやま、さつさと仕事を始めなせエ、ハハハ、……」

裕道は、婆やの言葉に愉快に微笑む。太陽が一時に光りを强めたやうだ。

お種婆やは、向ふへ行つて、又靜かに樂しく唄ひ出す。――そしてこの勞働は、大變愉快なものである。

第八章

（强姦！　强姦！　血みどろな姦淫の中の死！）

高川の茫漠とした頭腦の中に、何物かのかうした、悲調を帶びた旋律が響いて來るやうな氣がするのであつた。しかしそれは、彼の朦朧とした錯覺の記憶から來るものであつた。

（强姦！　强姦！　血みどろな姦淫の中の死！）

高川はもう一度よつく考へて見た。

（君は何故、一事敢行しないのか？　意氣地なしめ！）と、大見原裕道の力強い聲が、又ハツキリと聞えるやうであつた。彼はそう思ふと、無意識の中に、裕道が、力を與へて吳れるものゝやうに思へた。と、彼の眸は、忽ち猛惡な獸類がきほひ立つたやうな、恐るべき狂暴さに引歪んだ。

（强姦して了へと、大見原は確かに言つた。……ほんとに强姦！　强姦したなら、俺はどうなるだらう？　彼女はどうなるだらう？……あゝ、到底そんなことが出來るものか？　俺は正しい青

年ではないか？
強姦！……忽ち暴力を持つて、女を不可抗力にし、自分の獸欲を遂げる。彼女は悲鳴を上げるに違ひない。泣き叫ぶに違ひない！……あゝ、どうしてそんなことが出來る。どうして、そんな陋しい非道なことが……）

彼は、寢てゐた軀を起してやをら立ち上つた。と、後頭部がヅキンと痛みを覺えた。彼はよろよろッとよろけた。そして、兩手で後頭部を抱き抱へた。

（強姦！……あの眞白い女の軀を……そんなことが出來るものか）

しかし彼の心の中には、抵抗すべからざる或一種の欲望が、湧き水のやうに押し上つて來る。彼の眸は、慘忍に輝やき始めた。彼の沈痛な表情には、秘妙な活躍が始められた。

（そうだ！　すべての男は、みんな強姦を希望してゐるのだ！　口に謹嚴を稱へ、如何に威風を裝はふとも、みんな、みんな女の肉體に憬れてゐる。女を見ろ！　奴等も屹度何人かにその軀を提供したがつてゐるのだ！　ぢいつと男の顏を見詰むる女は、心中すでに姦淫を行なひしなり……だが、俺はどうしたといふ事だ？　えゝ、馬鹿者！……よろしい！　俺れも遂行しやう！　俺も

彼女を○○○○○！）

　彼の全身が、益々動物我のみに占有せられ始めた。

（だが、彼女は何んといふ憎むべき女だ！　俺を侮辱した。きつと俺を不良青年と思つてゐるに違ひない。）

　愛を、裏切られた憤怒と憎惡が、烈しく彼の全靈をブル〳〵震はせた。

（おゝう！　そうだ！　どうしても俺れは、あの憎らしい女を紐で縛り上げて、○○しなければならない。彼女は悲鳴を上げて泣き叫ぶだらう！　おゝ何んと痛快なことだ！　何んだつてかんだつたかもふものか？　思ひつきり○○してやるのだ！　○○○やるのだ！　あの眞白な肉體から、○○○○○○○○○○！　俺は血を見る。俺れは、その享歡の瞬間に死んでやる。彼女を打ち殺して――）

　彼はブル〳〵震へる手で抽出を開けた。そして中から短銃を取り上げた。彼の眸が沈痛に底光りした。彼の歯はキリと喰ひ縛められた。

　彼は、一歩二歩三歩歩いて戸口へ行つた。

（だが、彼女は又、俺れが愛するたつた一人の女だ！　彼女を殺すことは、餘り可愛そうではないか？　彼女には、彼女のみの生があるではないか？　――そう！　何故俺れは、あんな女に惚れたのだらう？）

彼は、又、机の前へ力無く座つた。悲しさが泌々と感じられた。彼の頰を熱い涙がホロ〳〵流れるのであつた。で、彼は、机の上へ白紙と萬年筆とを取り出して、スラ〳〵と書き始めた。

「人生はすべて退屈なものだ。

「初戀に破れし者は禍ひなるかな。その者の性質は虐げられ、惡變すべし。人間苦はこゝより出づ。

「生活は人生のすべてにあらず。あゝ、今は初夏なれど、又秋來り、冬、春、夏、そして秋。此くも人生は倦怠なる瞬間の連續なる？　過去ありしに未來あらずと言ひ得べきか？　只、瞬間のみ。

「人間は、何處よりも生れず。只、宇宙の中に融動するのみ。空所より生せず。而も同一の根原

を有す。

「薄弱なる意志よ！　最早爾は、生にまで復活すること叶ふまじ。而も爾、永遠にこの中に涙流せ！。

「死よ！　現實は神秘の中に混融せられたり。

「あゝ、最早、高田の二十一才の生涯は終らむ。吾が軀は、あの地下に深く埋められむ。死といふか？　高田としての終極あれど、見よ！　蛆は生き、墓場の草は肥えたり。生ける者にのみ特權あり。さらば、吾れ何處へ行かむか？　あゝ、吾れこそ正しかりしものを……」

うむ、悉く眞理だ！と、思ふと、その文句が一々彼の胸を打つて、身を切られるやらな憂鬱と得意然たる創作的感情とが、互ひに錯綜するのであつた。

彼は、窓に近よつて、永い間ボンヤリ庭を眺めた。常住な新陳代謝する光りと熱の作用を見ると、夏の清純な死が、イラ〳〵と彼の心中に迫るのを覺えた。

（みんな馬鹿者共！……しかし、何んだか可愛そうな氣がする）

と、不思議にその時、彼の腦裡を都會の雜然とした街路が、地獄の三丁目のやうに感じられて

映つた。

「生きてゐた方がいゝか知ら？——や、死んだ方がましだ！」

彼は、投げ込むやうに唸つた。と、自分すら意外な程だしぬけに、短銃を胸に押し當てざま、ぐつと引金をひいたのである…。

新暦六月は爛熟の春を示す。

曠野の田には、農民が、毎日熾烈な狂ほしい日光に直射されつゝ、田植に忙がしい。

（農民はこの六月の日に田を植え十一月になつて收穫するのだ！　悠久への忍從者）

大見原裕道は、自分の植えてきた通りを見直すために、軀を延して、立つた。赤黒い圃地は、次第に緣になり變つて行く。太陽はいつものやうに照り輝やいてゐる。

（勞働！　勞働こそは、第一義的に神聖なるよ！　この烈日の下に、愛しつゝ、汗する農民の容姿を見よ！　實に純素なものではないか？）

彼は、近く働らいてゐる一團の農夫の群を見た。そこからは、樂しそうな唄ひ聲が眞實を傳へてきた。

彼等には、八月に流れる赤い血も、九月に起る暴騰の饑渴も、すべて無感覺であつた。

と、この時、晴れた天空に、一發の銃聲の響きが傳はつた。彼はビクッと身顫ひした。そして遠く流れる白雲を眺めた。そこには、太古を憶はせる悠久な一つの流れが、無限に連續してゐた。

（俺の古い昔の祖先達は、此地で何をしたんだらう？　彼等は多分、俺のやうに、こんなに册の中で泥にも汚れず、只感謝して生長したことであらう？……然るに、現代人は、嘘僞のみに生きてゐるのだ。

人衆は迷霧に彷徨してゐる。彼等は醉生夢死してゐる。彼等は權力の綱の中で、退屈凌ぎをやつてゐる。

早くあの偶像物を倒せ！　でないと、若人等は、家出し、自殺して了ふであらう？

おゝ、富士山よ！　いつそのこと爆發して呉れ！　地震を起して呉れ！　そして、人間共をすべて熔岩の下へ壓し潰して呉れ！　壯絶に、痛快にね……殺して呉れ！）

「チエッ！　忌々しい。權力の暴施だ！」と、彼は叱咤して叫んだ。

「俺れも曾つては一個の大學生であつた。角帽、學士、學者十法學、政治學、經濟學、社會學、

哲學、心理學、論理學、倫理學、文學、佛教概論、儒學概論、物理學――文化人――退屈。で、俺は遁げ出してきたのだ！」

彼は、そう思ひ出に耽つた。そしてそれは樂しい者であつた。

彼は宇宙の裏、日の下、地の上に立つ自分の身を思つた。

（そう！

天才は狂人に等しい。

惡漢には興味がある。

そして、馬鹿にはつける藥がない。

さらば、偉大なる平凡者か？）

と、此の時、白い道を、一人の女が埃りを蹴立てゝ、一散に彼の方へ走つてきた。女の全身は眞蒼であつた。

「裕道さま！　裕道さま！　高田が死にましたゞ！　高田が！」

「うむ！　高田…憂欝の出口を求めたか？」

彼は、天空を走つて行く何者かに耳を傾けた。

（あゝ、最期の犠牲者……休眠の鐘は與へられる）彼は強く大氣へ呼び掛けた。彼は圖地を眞直に横切つて走つた。

（おゝ、高田よ！　高田よ！　高田よ！）

高田の家は、大騒ぎであつた。高田の自殺は、吸然として同情を彼の上に呼び寄せたが、しかし、高田は最早感じなかつた。彼は爆發——自殺であつたのだ。さらば、第二の高田は、何處に生々しい赤子の聲を上げてゐることであらう？

「高田よ！」

裕道は、犇と、高田の死骸に抱きついて叫んだ。

「高田よ！　君は最早生き切つて了つたのか？　君は迷ふなよ！　君はしつかりした第二の高田たれよ！」

彼の血のやうな涙が、高田の頬へタラ〳〵流れ落ちた。彼は、そこに散つてゐる短銃を見た。そして高田の遺書を見た。

（空の空なるかな！　空想は屁よりも悪い――）

「失戀に生きるものは禍ひなるかな」

「初戀に……うむ……」

裕道の眸が、急に慘忍に排斥するやうに光つた。

「女よ！　女よ！　君の罪は餘りに重いぞ！　君等は何故、眞裸體で歩かないのだ！　女！　女よ！」

彼は、冷然として、西の空を見て悲鳴を上げた。

「高田よ！　高田よ！　君はよく燃え切つた。完璧だ！」

高田の沈痛な顔は、齒を喰ひしばつた。

暗闇は忽ち押寄せた。

第九章

七月は、綠の裏に、灰色の死をひかへてやつてきた。

盛夏の日の烈日は、かつとして、新らしい農夫の頭上に直射し、その倦み疲れやすい頭腦を、一散に燒盡せんとするもの丶如くであつた。實にその光線の熱力は、弱者たる人間の上には、强烈過ぎたのである。

彼の頭腦は混亂し、憂鬱は彼の心内に鬱積した。（太陽よ！　餘りお前ばかり光ると、みんな枯れて了ふぞよ！）

大見原裕道は、この朝を、地に滅入り込むやうに俯向いて歩いてゐた。親友高田の自殺は、彼をして、自然なる憂鬱に陷らしめたのであつた。

（高田よ！　君は墮落したね！　美名の下に……そして、君は今どうしてゐるね？　オイ……高田よ！　俺と話そうではないか？　そして、君は、幾日にして渾融に歸るのだ？　四十五日目に

かい？　親しい高田よ！　最早君には、俺の君への善心が判るだらう？　俺はどんなに親友のことを考へてゐたか？」

彼は顏を上げて、ふと、空を流れる淡白雲を眺めた。と、何もかもが、宏大に思へた。そして、そこには、善もなく惡もないやうであつた。

彼は村端れの桃園へ行くために歩いてゐたのである。が、彼は、道傍の一軒の零落れた家を見出した。それは、曾つて一月に彼に嫁を賴んだかの老母の家であつた。彼は一寸、老母の病氣を聞いたので、新らしい農夫の服裝で耕作に出掛けて行つた。

彼は今年になつてから、烈しい讀書と思索とに寄つて、創作に精進し、勞働し、そして愛によつて道路を修繕し、他人のために一時間の奉仕をした。この老婆のためにも働らいてやつた。影のやうな娘のためにも働らいてやつた。そして、太助爺さんのためには、大變多く働らいてやつた。で、彼は働らいてやると共に、やさしい世間話の中に、彼の抱懷してゐる宗教を聞かせるのであつた。が、彼は決して、說敎として行なはなかつたのである。

「御道さま！　あゝ何んだつてお禮申していゝやら……ハイ、私らアいつも、貴下樣に感謝し依

居りますだ。私等アいつも、御世話になるばつかりで御ぜいますだ。が、いつかきつとお恩報じする時が來ますべいよ！　有難う御ぜいます。裕道樣！　私等の生活は、只、貴下樣の思召の通りで御ぜいます」太助爺さんは、そう言つて、涙を流すこともあつた。

彼のこの行爲は、半年の間、緊張した氣分を持つて遂行せられて來たのであつた。しかも、今七月の烈日の下に、空虛を脊負ふやうな憂鬱が、彼の頭腦を占領して了つてゐたのである。

彼は、衰れ虐げられた老母の家の前に突立つて、耳を澄した。中は靜寂にひつそりしてゐた。彼はそつと障子の隙から中を覗いて見た。中には薄暗い陰氣が閉ぢ籠つてゐた。そして、夏でも、居爐裡の前に、野呂馬の悴が蹲まつて病的に眼を光らしてゐた。その蒼白い髯の生へた細長い顏は、何物にか反抗せんとして成し得ざる人々のやうでもあつた。男は、一種神經質者のやうに、その鋭敏な感覺を以つて、彼の近寄つたことを知つて、その窪んだ眸をきつと戸口の方へ向けた。その顏は、實に憑かれた亡靈のやうであつた。それは、氣味惡くニヤ〳〵白い齒を出して笑つた。裕道はぞつとして、不氣味な感動を覺えた。で、彼はそつと障子から遠去かつた。そして、烈日の下をこそ〳〵歩き出した。あの退かふとする時、ふと暗い隅に見た寢床の樣が、ボン

ヤリ彼の腦裡に再映した。

（悲慘！　實に、みんなして、餘計に勞働して救けなければならない。運命！　呪はれたる恐ろしき人間苦だ）

彼は太陽の光を見た。綠の葉陰を見た。

（彼等は、生きてゐるのか？　あれでも死んだと同じいではないか？　生ける屍ではないのか？）

彼は、その道で若子に逢つた。彼女は華美に裝ひ平然と澄まし込んで歩いてゐた。しかし、彼女は、彼の前へ行けば、眞裸體でいゝやうな氣になるのであつた。彼女はニッコリ微笑んだ。そして、自分ながら、その日一日が幸福であるのが判らなかつた。彼女は、結婚前で、毎日生花を習ひに行くのであつた。

裕道は、ふと先夜のことを思つた。そしてニッコリ笑つた。

（そう――同じものさ！　彼女等は……。しかし奴の服裝は華美に輝やいてゐた。……うん、現代には未だ生き得る餘裕がいくらでもある。光りのある中はな）

彼は、振り返つても見ずに、しつかりと桃園へ歩いて行つた。彼は、手前の道で驚ろいたやうにつと立ち止つた。そして桃園の一部にきつと眸を据ゑた。桃園には何がゐたが？　生存してゐたか？

彼は一散に桃園へ駈け込んだ。と、二人の小さい盜人は、吃驚して、垣を越え、畑を横切つて遠く逃げて行つた。

「濟まなかつたね。盜心のない子等よ！　おん身には、俺れが賣る桃を買ふ錢がないのだね！　しかも、お前はさぞ喰ひ度いだらうよ！　が、現代では、他人の勞働の成果を浸すのは犯罪だよ。あゝ、俺れは、一層あの子供に呉れてやらうか？　しかしそうしたら、彼等は毎日來るやうになる。そして、友も來る。終ひには、大人までやつて來る。そして、俺れの桃を取り乍ら、彼等は他人に向つて、自分の生産物を與へぬだらう？　人の罪を許さぬであらう！」彼は堪らなく嫌になつて、ぺつと嘔吐した。

此處に又、一つ、村には悲慘なる事件が突發した。

この里の中頃に、母親と娘との二人暮しの家があつた。彼女は毎日その隣の財産家へ仕事に行つて暮してゐた。母親の夫、娘の父である男は、今より十六年以前に、遠く亞米利加へ出稼ぎに行つた。そして始め五六年の間は、よくお金を送つて寄越した。で、今から十一年前に、その時十七才になつた息子を旁々呼び寄せた。そして父子は、或る鐵工場に働らいた。が、忽ち不幸は彼等の上に落ちた。その息子は、渡米すると直き、機械の輪轉機に捲き込まれて無慘な死を遂げて了つたのである。父は、絶望に引歪んだ刹那の息子の表情を見た。そして、それは、永久に彼一生につきまとふ氣味惡い影となつた。

父はその時から遂に自暴自棄に落ちた。そして農業勞働者の群に投じ、取つた金はみんな、その酒と女の放從な生活へたゝき込んで了つた。今日は西に、明日は東に、彼は放浪の生活を續けた。するると、日本に殘つてゐた妻子の上には、忽ちに生活の不安が押し寄せた。で、妻のおしまは殊勝にも起つて、自ら勞働し乍ら娘を育てゝ來たのである。

思へば、夫に捨てられてから、滿三年の日のことであつた。彼女の家に、時々手傳ひに行つてゐた伊作といふ中年の(老年へ入りかけた)寡夫と彼女とが、始めて納屋の中で馴れ合つたのは。

朝早く、伊作はおしまの家へ出掛けて行つた。すると、家の中には居なかつた。で、納屋の方へ行つて見た。まだ薄暗い位ひであつた。納屋の中ではおしまが藁を梳いてゐた。伊信が行くと彼女は手を止め顔を上げてニコリした。その顔は、朝の閃光に照られされてボッカリ白く見えた。この時、伊作の胸には、激しい涙含むやうな同情の念がぐん〳〵と湧き上つた。

「もう、精出してゐだのかい？　おしまさんー」

「エヽ、そへでなきや食へないでねー」おしまはホッと吐息して俯向いた。と、伊作の眸に、おしまの後毛の顫へてゐる眞白い頸根が映つた。

「おしまさん？　俺ァお前が、可愛そうで可愛そうで堪んねい」

「有難う――」おしまの聲は、感謝に震へた。で、二人は期せずしてなつかしむやうに顔見合せてニッコリした……。

――その朝から、二人はずつと七年の間關係を續けてゐるのであつた。亞米利加の夫からは文通もなくなつて了つたし、それに伊作は一人者であつたので、二人の間は、公然の秘密として村人から許るされた。

おしまは、その間にも、Kといふ財産家へ仕事に行つては、娘を守り育て、きたのである。そして娘はすこやかに生長し、昨年十五才の春、町の或る工場へ女工に行つた。

と、今年になつてから、ひよつこり亞米利加に居る夫の常藏から、歸朝するといふ手紙が來た。おしまは驚ろいた。そして早速にこのことをKの主人に告げた。伊作は默つて、沁々とおしまの顔を見詰めてゐた。おしまは、思ふ樣縋りついて泣き度かつた。

遂に、常藏は、六日になつてから歸國した。そして村の人達に土産物を與れたりした。彼は赧く日に燒けた顔をしてゐたが、紳士のやうな服裝をしてゐた。彼は二千圓の金を貯めて持つてゐた。で、村の人達は、振舞酒に醉つて、つい、おしまと伊作のことを、歌に唄つたりした。常藏はビックリした。そして不快な暗い表情をした。（しかし、俺はどんな生活をして來たか？）そう思つて、キリスト、イエスに祈つた。彼は基督敎徒になつてゐたのであつた。胸には十字架をを下げてゐた。

おしまは、彼に愛想よくしなかつた。成る可く彼と話さないやうにしてゐた。二人の仲は、長い別れに痛み、遠く相隔つて隔つてゐたのである。

町から娘が歸つてきたが、「これがお前の父だ！」と言はれても、彼女は母の方へばかり行つてゐた。

伊作は、この時、横濱へ行つて了つてゐた。

がんとした騷ぎが終へて、家の中に始めて親子三人ばかりになると、お互ひに氣不味い思ひに攻められた。どうしても母と娘は二人で話すやうになつた。

が、娘が工場へ行つて了ふと、夫婦差向ひになつて了つた。夫婦の間には、昔しの情愛を感ずることは出來なくなつた。恰も、始めて逢つた、他人のやうであつた。

（俺れがかうして歸つてきたのに、何故お前はそんなに辛く當るか？　お前は俺の妻ではないか？）と夫は考へた。

（いゝえ！　私は貴下の妻ではありませんよ。十年もの長い間、故鄕に打ち捨てゝ置き、子供も育てさせておき、今更ら夫だとは、何んといふ馬鹿者め！

あゝ、それにしても、伊作どんはどうしてゐるだらう？）おしまは、そう考へた。と、伊作戀ひしさに、心身を燒かれるのであつた。

彼女は、遂ひに、或る夜家出して、横濱へ逃げて行つた。しかし、直ぐKの主人に依つて訓戒され引戻された。彼女には、呪はしい絶望と反抗がきた。彼女はいつも夫と喧嘩してゐた。横濱の伊作は、彼女の知らぬ所へ越して了つた。そんな、こんなで、彼女は狂ほしいやうな自棄な氣に捉らはれた。

或る晩、彼女は常藏と激しい喧嘩をした。彼は十字架も何も投り出して、女を思ふ樣毆り付けた。女は毆られ乍ら、齒を喰ひ絞つて泣いてゐた。

それは七月の暖かな闇夜であつた。その罵り合ふ聲が、村中へ響き渡るかと思はれた。

常藏は存分おしまを毆りつけてから、Kの家へ行つた。

おしまは、倒れたまゝ、長い間身を振はせて嗚咽してゐた。涙が止度なくタラ〱流れ落ちた。

彼女は、その歔欷の中に冷たく考へた。第一に伊作のことが、そして次ぎに娘のことが思はれた。最後に常藏のことを考へると、彼女は恐ろしい憎惡に驅られてきた。

（何もかも、もう駄目だ！　あゝ、もう駄目だ！　畜生！　死んぢやまアがれ！）彼女は、ツケ〱とそう思つた。と、不意に、自分が死ねば何もかも了るのだ！　と、考へた。

（あゝ、憎らしい、憎らしい。みんな呪つてやるぞ！）彼女は物凄く叫ぶと、涙がピッタリ止つた。そして、血走つた眼で四周を睨んだ。

彼女は自家の廂へ放火した。しかし、恰ちそこへ歸つてきた常藏は、これを素早く見付けて、消し止めた。そしておしまを柱へ縛りつけた。

「殺しやがれ！　畜生！　あゝ、殺しやがれ！」

おしまは狂つたやうに喚き叫んだ。常藏は默つて、Kの家へ行つた。おしまはその隙に縛つた紐をほどいた。

（最早、何もかもお終ひだ！　どうせ一度燒けたものだ！　あゝ憎いのはHの主人だ！　彼奴が伊作どんを横濱へ遣つて仕舞やァがつたのだ！）

彼女は、散らし髮になつて家を飛び出した。

しばらくして、Kの家が、眞赤に天を焦して燃え上つた。警鐘はヂャンヂャン物凄く亂打され人々は一散に驅けつけた。火焔は炎々と闇を破つて天に沖した。實に村中燒けるのかと思はれた。

大見原裕道も駈けつけて、一心に消火につとめてゐた。

で、幸ひ風がなく、水都合がよかつたので、奥座敷だけを燒いて鎭火した。

筒符が何臺となく、エッショエッショと駈けつけた。村中は實に大騒ぎであつた。叫喚が渦卷いて流れた。人々は、燒けた家を取り卷いて騷いでゐた。

「放火らしいつて！」と、忽ち群集の上に、冷酷な恐怖が漲ぎつた。人々は、顏見合せて、慄へ戰いた。

「常藏の女房のおしまらしいつてよ！　犯人は……おしまが何處へ行つたか判らないのだつて……」その男は、物知り顏に得々として喋つた。人々は沈痛に考へ込んだ。

「おしまは、宅へも火を點けたのだつてよ！」

遂ひにおしまが、放火したことになつた。人々は恐ろしい戰慄に襲はれた。村中には不安な氣が低迷充滿した。辻々には男共が番人をし、女子供は家の中に顫へてゐた。

「そら出た！」と、いふ者があると、みんなギョッとして飛び上つた。

「何故一人ばかりの女に、そんなにこはがるのだ？　いや、一人でも恐ろしい、人間が死物狂ひ

になつた時の狂暴さは……）

大見原裕道は、涙を飲み込み乍ら、或る辻に立つてゐた。夜の星は美くしく煌めいてゐた。嗚呼。……と、鐵道線路の方で、けたたましい汽車の汽笛が鳴り響いた。おしまが自殺したのである。

裕道には、最早、何もかもが絶望に見えてきた。次第に信念が薄らいで行くやうな氣がした。彼は激しい憂欝と焦燥に惱まされた。（みんな、みんな死んぢまやァがれ！　一層のこと、地球よ！爆發して呉れろ！　そして新らしい何物かを造つて呉れ！）

雨が止度なく降つてゐた。ビショビショ〱〱咽ぶやうに、降り注いでゐた、彼は室に入つて、窓から、遠く原の方を眺めてゐた。雨に煙つて、原の端は見えなかつた。何もかもが、みんな泣き出しそうに見えた。木々は最早、雨に飽き飽きしてゐた。

と。その時、原のはしの方から、老いた飴賣り屋の悲しいやうな笛の音が、潤つた雨中を消えなく響いてきた。その斷續する悲調を帶びた引き込むやうな音は、彼の心を犇々と涙ぐませるの

であつた。彼は最早、ぢつとしてゐられない焦燥に驅られてきた。

（どうかして吳れ！　どうか…………）

彼は一散に室を駈け出した。雨は小降りになつて、壞滅を暗示するもの丶やうな暗灰色の雲は空を横切つて悠動してゐた。

彼は下駄で、濡れた土を蹴飛した。すべてが陰欝に力無く見えた。彼れは何處といふあてもなしに、無暗と歩いて行つた。

彼はある廣い街道へ出た。そこは人家が立ち並んでゐた。彼は人に逢ふことがいやであつた。で、ずんずんその通りを駈け拔けた。人家の端の大きな柳の木は、雨に濡れそぼちてうなだれてゐた。そこの茶店には、老いた爺が、外を見てゐた。

彼は瞑目して、そして松並木の方へ歩いた。「旦那樣……」と、嗄がれた聲で言つたやうに思へた。彼は眸を見開らいた。

「旦那樣……」又、言つた。で、彼は聲の方を見た。と、彼はぐう！と不快な唾の湧き上るのを覺えた。

そこには、汚ない乞食が濡れそぼちて、彼れを見上げてゐた。彼の顏を見ると、虐げられた弱い者の通有として、氣味惡くニヤ〳〵と追從笑ひをした。

「旦那様！　どうぞ一文惠んでやつて下さいまし。病で難澁してゐるもので御座います。どうぞ旦那様、可愛そうだと思つて、一文下さいまし。これ、こんなにお願ひで御座います」乞食は哀れつぽい聲を出して言つた。まだ四十才位でもあらうか？　しかし、その面窶れし、髯が生へ、埃の附いた顏は、六十近い老人のやうであつた。

「旦那様、お願ひで御座います！」

乞食は、丁寧に頭を下げて要求してゐた。その姿を見ると、彼の心には、同情の念がむら〳〵と湧き上つた。

（可愛そうな乞食！　そして、現實にあるのだ！　理想ぢやない！　今、この男は救けてやらなければ死んで了ふではないか）

彼は、懐中へ手を入れた、乞食の表情は歡喜に燃えた。が、彼の指には、財布が觸らなかつた彼は狼狽して蒼白になつた。彼は乞食を見るに堪へなかつた。

「君！　君！　勘忍して呉れ給へ！　許して呉れ給へ！　僕はね、今持合せが何んにもないのだ！　君！」

彼は叫んだ、そして、差し伸べた乞食の手を犇と握り緊めた。彼の眸に涙が溜つた。

「許して呉れ給へね！　君！」彼は、乞食の瞳をヒタと見据えた。

乞食は從順に握られたまゝ、なさけない表情をした。

「イエ！　旦那樣！　有難う！　これも一つの御惠みで御座います」乞食の暗い瞳には感謝の情が光つた。彼は氣がついて袖から手布を取り出した。それは高價なものである。

「君！　これをやらうね！　町へ行つたらね、これを質に入れ給へ。これでも一圓位にはなるだらう！」

「旦那樣！　有難う御座います！　有難う……」

乞食は立つて辭儀した。乞食はよろけた。足が惡いのであつた。

「君は何處から、何處へ行くね？」と、彼はやさしく訊いた。

「旦那樣！　神戸から伊豆へ歸ります。工場で傷害をしましてな」

「おゝ、君！　歩き出したらどうだね　もう日が暮れるよ！」
「そうで御座いますか？　ぢや失禮します！」
乞食は、幾度も禮して歩いて行つた。入合の鐘が中空を響いて來た。乞食は坂の上に立つてもう一度禮してから堤の向ふへ消えて行つた。雨が降つてきた。

――かくした感情の中にも、大見原裕道は次第に落ち付いて行つた。そして彼は遂に忍從と勞働との本然へ歸つて行つた。それこそは實に、宇宙の一員として、人間として生を受けたるものゝ行くべき路であつた。
（宇宙よ！　必然と嚴肅と充實とそして無限なる宇宙！　ほんとにお前の中の俺ではないか？）
彼は、すべてに感謝しないやうな氣にさへなつた。
（見たまへ！　すべては嚴肅に行なはれてゐるではないか？　濃綠は露を滴り、果實はこんなに味よく實つたではないか？　あゝ、人間はすべて足下を深く見ろ！）
彼の母は、毎日、市街の方へ桃を賣りに行つた。彼女は最早、老ひ疲れてゐた。その籠を負つ

て行く姿は、哀れにも儚ないものであつた。

父は毎日、田の草取りであつた。父も又老いてゐた。しかしその父は、忍從の生活に馴れ、勞働によつての快樂を理解してゐた。

で、裕道は、桃を取り、又は耕作することの役目を當てられた。果實は次第に多く熟り出した母一人で賣ることは大變な苦痛となつた。

彼は遂ひに決心した。彼は自身町へ賣りに行くべく決心した。彼は、涙含んで老いた母を見遣つた。

その青年が、町へ物を賣りに行くなぞといふ因習はなかつたのである。彼の地方に於ては、二十才なん

彼は、朝早く桃園へ行つて、甘い陶醉するやうな桃の香を嗅ぎ乍ら捥り取つて來る。そして、正午前から、彼は新らしい農夫の姿のまゝ、眞夏のヂリヽヽ燒き付くやうな光射の下を、桃を入れた小車を挽いて、家から家に賣り歩くのであつた。

「今日は！　桃は如何ですか？　新しい旨しい桃ですが！」

「どれ！」と、言つて内儀さんが出て來る。

「これいくらなの？」

「それですか？　それは一箇五錢です！　これが參錢！」彼は、特に愛想よく愉快さうに言つた。

しかし、ぢいつと內儀の表情を觀察した時には、彼の表情は嚴肅に緊つた。

「四錢に負けないの？　そしたら十箇買ふわ！」內儀は一つを取り上げていぢり乍ら言ふ。

「いや！　まかりません！　もう五錢と言つたんですからね！　決して高いことはありませんですよ！　吾々は、五錢に賣らなければ、桃を作る人がなくなつて了ひますよ！」裕道は、キッパリ力強く言つた。

奧から娘が出てきた。そして彼を見ると頰を染めた。

「ぢや十箇買ふわ！　宜錢でいゝよ！」

「有難う！　またどうぞ！」彼は丁寧に禮して外へ出た。そして又、他の家へ呼びかけた。

「あの方は桃屋さんなの？」と娘は美くしい顏を沈ませて言つた。

「あゝ、あの人は一錢も負けないよ！　しかしあの人が一番安いよ！」

「あの人はきつと喜美子樣のお兄樣よ！　あの方は詩人なのよ！　私あの方の詩を讀んだわ……そう、その方が大學生だつた時、學校へ喜美子樣を訪ねてきたのよ！　後で大評判だつたわ！」

みんなあの方に惚れたのよ！　だつて……、まァあの方が桃屋さんになつて……」

かくの如くして、彼れ新しき農夫の名は市街にまで喧傳され始めた。

如何に人間が、耕作しやうとも、雜草は雜草として後から後からと地上に生へ上つて來る。現代の農夫はそれと鬪はなければならなかつたのである。

大見原裕道の眸には、曾つて若き日に流したやうな淋しい悲しい涙があたたかく溢れてゐた。彼は今日も野に立つて憂鬱に捉らはれてゐたのである。

彼の頭腦をは、刹那的ではあるが、暗灰色の絶望が測り知られぬ早さを以て渦卷いてゐた。

彼には、濃緑の葉も見えなかつた。野に働らく人々の姿も見えなかつた。彼の目に見えるものは、そして感ぜられるものは、その額に附着した一葉の枯葉であつた。それは重く深淵に彼を引き入れた。

彼は死を憶つたのである。

絶望ではないか？　あゝ文明！文明の高頂に達つせる現代、そして功利派の現代、しかもそれ

等の人々が、相惱み疲れたる現代――俺れはその現代の一員なのだ。しかし、俺れは、先驅者として生れて來た。

天才……天才は何故社會から排斥せられるだらう！　俺は彼等を呪はう！　俺は現代に反抗しやう！　しかし、俺はどうなるのだ？　社會に惡を增すのみではないか？　俺れは苦しい俺れは悲しい、俺れは自殺するより他ないのだ！　何故なら、俺れ達は、生れる以前のことを知覺してゐないから。又、死後のことを、どうして豫覺し得やう！　……現代を逃れやうとするものは、頽廢の耽溺や隱遁がどうなるものか？　只、無に歸るには死の哲學に從ふより外ないのだ！　死は決つして我々に幸福を與へないだらう？　しかし、不幸から遁れしめる。」

が、彼は愕然として瞑目から跳ね上つた。

（何んといふ淺薄な卑怯のことを考へる俺れだ！　若し、死後が不幸であつたらどうする。自殺がどうして出來得やう！　實に、我々には、自然に死前のに戰く恐怖があるではないか？　俺れが死に度いと思ふのは、只、俺の我儘で思ふやうに行かないからなのだ！　俺れは苦しく悲しい。さらば、俺れは矢張り愛によるより他ないのだ！　自然に忍從するより外ないのだ！　心と行動

との上に何人の容喙をもさしはさみ得ない境地が欲しい。然らば、人間は人間として鳥にも猿にもならぬ、自然の社會が開らけるであらう！

あゝ、俺れは、內心に赤き焰を燃やしつゝ、この社會に忍從しつゝも、永久にこの强固な意志をまげないであらう！　時は、必らず、俺れの前に勝利の榮冠を捧げに來る、實に殘されたものは。只、これのみだ！　忍從――愛――心の幸福のみだ！）

彼の眸には、靑い葉が見えた。蒼空、勞働者、牛、遠い山、そして近程里くの陰影が見えてきた。

（そう、行き詰つたのではない。人間は、待つてさへ居れば、與へられらであらう？　俺は、又愛の中に復活したではないか？　俺は、彼等を愛そう）

彼の側に、父と母とが、一生懸命に汗を流して耕作してゐた。その姿が、實に神々しくも敬虔に見えたのである。

（幸福はこの中にのみある。現代はそれへ歸るのだ！）

灼熱の太陽は、午後二時頃の光射を、燒き盡すやうに浴せかけた。人々の軀からは實に水分が

蒸發して了ふやうに覺えた。彼は激しい渇を覺えた。で、鍬をおき、手巾で額の汗を拭ひ乍ら、程近い田へ行つた。

　彼は帽子を取り、全身を、土の香の強烈な畦の上に蹲んで、顔を水面に押し付けて、水を飲んだ。それは生暖かい水であつた。變妙な匂ひが彼の舌に感ぜられた。と、彼の眼前の水中を一匹の小魚が走つた。彼は渇を癒して立つた。彼は幸福を感じた。彼は全身の力をしめて、うわう！と叫びたかつた。

「お前は何處の水を飲んだのだい？」

　母は言ふ。

「直ぐ、そこの田の水を飲みましたよ」と、平然として答へる。

「オヤ！　まア、汚ないぢやないか？　腹でも惡くして御覧？」母は苦い表情をして、心配そうに父と彼を見た。

「いや！　いゝですよ？　毒のことはないでせうよ？　御覧んなさい？　あの水中には、蛙も住んでゐますよ？　魚も生きてゐますよ！　そして彼等は幸福そうだ！」

彼の聲は力強く、恰も、宇宙の神秘を傳へるもの丶やうであつた。彼は又、勢ひよく鍬を振り出した。

青葉の蔭で、青蛙が、天を向いて、ギャーギャー〳〵と喧しく啼くと、北方の山の上の天空には、偉大な容姿の雷雲がもく〳〵と威脅するもの丶やうに、湧き上つてきた。風はピッタリと止んで、熱さは更とに度を加へた。木々の葉は、最早敗滅を示すやうにぐつたりと首垂れた。

「隱分暑くなつたなァ」と、父は濁言でいふ。

「父よ！　雷雨が直ぐ來るのだよ！　そら！　あの山の上の雲を御覧！　あんなに急速に擴がつて行くではないか！」

彼は天の一方、彪然として押し上り、擴張する暗雲を指して叫んだ。「もう五分の間に押し寄せるよ！」

忽ち、雲の中からは、無數の大砲を一時に打ち放つたやうな雷鳴が轟ろき始めた。空を小鳥はチユウチユウと一散に南の方へ逃げて行つた。ドロドロ〳〵と、雷鳴は、次第に近く激しくなつて、暗雲はだんだんに低くなつた。草の匂ひが一しほ、鋭どくなつた。

木々は暗くなつた。そして影は大急ぎで野の上をすべつて行つた。

「おゝ、これや！　家へ逃げて行かなけれや！」

父は愕ろいた聲で言つた。そして鍬を肩に擔いだ。

「あゝ、雷りが、あゝ、早く逃げて行かなくては――」母も急いで籠を脊負つた。「裕道！　さア急いで――」

「どこへ？……もうどつち道、電から逃げ出すことは出來ないよ」と、彼は愉快らしく叫んだ。

野に働らいてゐた人々は、一散に里の方に向つて、走り出した。父も母も一生懸命老いた軀を運んで行つた。

彼は、鍬を手について、突つ立ち、ぢいつと天を見上げた。弱い火が一つ閃めいた。その黄色な小さい光りは、空から垂下した煙霧の中で異樣に見えた。風は今しも猛烈に旋轉して、その火を吹き消した。大粒の雨がポツリと彼の額へ當つて碎けた。と、木の葉の上へサラサラと、凄まじい音がしはじめた。忽ち眞暗になつた。驟雨が奔流のやうな響きをあげ乍ら、沛然として降つてきた。

「いゝ雨だ！」と、裕道は肩を搖がしながら云つた。その肩の上には、襯衣が水に濡れてピッタリ糊着いた。

雲は南へ押し流れて直き霽れやうともしなかつたが、雨は小降りになつた。

「もう！　俺れも歸らう！」

彼は、悠々と廣い路へ出て歩き出した。野の上には重苦しい雲が塊まつてゐた。電光はだんだんに繁くなつた。その物凄い閃は濃い色の空の上へ直線を切拔いた。雨は全く止んだ。雫は絕えず落ちてゐたが、斷續しながら草の上へ降りそゝいでゐた。眞黑な木々は、鉛色の空の上へ、くつきりと浮上つて——見え、稻妻は、ピカリピカリと森の裏の何處かへ落ちた。

曠野には人つ子一人殘つてはゐなかつた。彼れ唯一者のみ。こゝに悠々と歩いてゐるやうに思へた。彼は四邊を見廻した。自然は最早。地上を恢復し得ない程、慘酷に荒らすもののやうであつた。

彼が田の中の一條の道へ出た時、四邊は一層暗くなつた。

「そら！　鳴るだらう！」

大きな雲がユラユラと落ちて來た。恰もその白味がかつた下腹部が、地に觸れやうとしてゐるもの丶やうであつた。忽ち風が飀然と吹いて、彼を倒しさうであつた。空は凄ざまじい物音がしてまるで張裂けるやうであつた。稻妻はいつまでもピカリピカリ光つた。重苦しい雷鳴は、混沌たる音響を立て乍ら闇中に充ち溢れた。

「おゝ、堪らない！　ホウ、ホウー」と、裕道はその音響に伴唱しやうと努め乍ら、心ゆくばかりに絶叫した。彼は、實に、自分自身が健康と力に充ちてゐるかのやうに感じられ愉快であつたのである。

稻妻が又一つ、雲の中を通つた。と、この時、彼の耳には、雷鳴以上な、微妙な音が、唆り立つやうに調子よく聞え始めた、それは、次第に急激な歩調を取つて、彼の後方に人の跫音として感じられた。

彼は振り返つた。あゝ！　一人のうら若い乙女が、恐怖に追はれて、一散にこの道を走つて來るのではないか。

彼はつと立止つた。彼の眸は嬉しさに輝やいた。乙女は次第に近寄つた。彼はぢいつと射るや

うに乙女の姿を見詰めた。それは若い一人の女學生であつた、彼女の步調は、學校で教はる體操の步調も何もなかつた。只、一散に安全と思はれる自分の家に歸りつくことを考へてゐた。
又、一つピカリ光つて、ま近く雷鳴が轟ろき渡つた。
「あゝ、神樣」と、彼女は本能的な浮ずつた聲で叫び救ひを求めた。
裕道はその聲を聞いた。そしてその聲は彼れに一つの力を吹き込んだ。
「おゝ、乙女よ！…僕と一緒に行きませう」
彼の聲は低かつたが、雷鳴の中を力强く突き破つて、乙女の耳朶に響いた。
「あゝ、あゝ」と、乙女は、實に內心から湧き上る感激「友を得た！　人間の」の聲で叫んだ。
二人は顏見合せた。乙女は恐怖に蒼褪め緊張してゐた面を一寸赤くした。彼女は男性の力强い聲に索き入れられ、その憐れみなづかしむやうな面容に接つした時、或る一種の云ふべからざる感情に捉へられたのである。それは何處の法則から來る魅力であるか、何人も解し得ないものである。
裕道も、瞬間的に、乙女の顏を見た。その面は恐怖のために緊張してゐたが、如何にも美くしさを現らはしてゐた。しかもやさしい面容の中に、內心には强烈な意志を抱藏してゐるものゝやう

であつた。
彼は、乙女の感謝の意を感じた。で、彼は濃密な一種の最上位なる親愛を感じたのである。
「さア！……恐れずに……一緒に行きませう！」と、此の時である。稲妻は火柱のやうに曠野の端に立つた。忽ち、つんざくやうな轟ろきが、全空に震動した。
「あッ！」と、乙女は叫んだ。刹那彼女は無意識に、裕道の軀にしがみ付いた。
「おゝ！」と、裕道も叫んで、乙女を抱擁して、倒れるのを支へた、漠然した一つの音響が遠去り行くと、男女は始めて、自意識に復つた。
乙女は眞赤になつて、彼から飛び退いた。
彼もそれを感じたが、堪らなく全身の躍り上るやうな愉快に驅られた。
「さア！……この間に走りませう！　乙女よ！」
彼は無闇と乙女の手を握り緊め、やさしく引きつゝ、一散に一條の路を、里の方へ向つて走り出した。
乙女は、無中で、彼に遲れないと努力しつゝ懸命に走つた。

彼等は、里近い丘の上の辻まで走つた。彼はふと氣がついて止つた。と、娘は彼にどしんと打突かつた。

「アラ！」と、その上げた聲は、驚ろきと嬉しさに震へた！　彼女もやつと辻にきたことを氣付いた。

「此處から、貴女は家へ歸るでせう？」彼は低いやさしい聲で言つた。その聲ははぐゝむやうに乙女の軀を取り卷いた。

「エヽ」と、乙女は、答へて、つと彼の顏を見上げて眞赤な顏になつた。

「有難う御座いましたわ！……」彼女は黑髮のお下げの頭を下げた。

「あゝ……又鳴りそうだ！　ぢや早く行き給へ！」

彼女は三度目に彼を見上げた。彼はよつく乙女の顏を見た。二人の眸はピッタリと會つた。で彼は、どうしても微笑まずには居られない感情に押された。

「さよなら！」美くしいはつきりした聲で言つて、娘は自家の方へ步いて行つた。

彼はぢつと立つて乙女を見送つた。乙女は一度振り返つた。

雷鳴は激しく鳴り、雨は沛然として降つてきたが、彼は突立つてゐた。乙女の美くしい黒眸小さい赤い唇、そしてやさしい面容、又、その内心の強烈な意志——それが、彼の歪靈の上に、美くしく樂しい繪となつて懸けられた。

「俺れは堪らない！　感謝するのだ！　乙女よ！　神よ！　うお！」と、彼は狂氣したやうに跳り上つて、**雷鳴以上に叫んだ。**

第十章

最後の蒼綠を反照せしめて、殘熱の八月がやつてきた。小鳥は産卵の期を了へ、日中は次第に短縮される。

學校や役場や、遊民には、避暑の休夏が與へられた。

都から、彼の友達の大學生が訪れた。

「百姓は實際可愛そうだね！　年中休暇といふものを持たないんだからね！　僕は、君！家へ歸る所だよ！」その大學生は誇りがに言つた。しかし、大見原裕道は、やさしく友の顏を見詰めた

「君も矢張り若くて死ぬだらう！」が、實際、農民は、その八月には忙がしかつた。茶を摘み、桃を取り、耕作をし、田の草を取り、草を刈らねばならなかつた。

裕道も、漸やく桃を賣つて了つた。

彼の父母は、千圓近い金を見て喜こんだ。そして十月になつたら、どうしても息子に嫁を貰は

ふと考へたのである。

裕道は毎日野に出て、殘熱の太陽の下に、孜々として勞働に從つた。彼は又幸福であつた。彼は最早、勞働の神聖を疑ふやうなことはなかつた。彼は素晴しく敏捷に草を刈つた。彼はいつも汗を流してゐた。そして太陽に向つて和合するものゝやうに叫び掛けることがあつた。うはうと力強く。

彼は、ふと、遠くの道を歩いて行く女學生の姿を見た。彼は腹に力を入れて見詰めた。それは雷雨の日の乙女であつた。

彼は嚴肅な豫感に打たれて感謝した。祈つたのである。

かくて繁忙の上旬も行き、農民は一時茶刈り位の勞働でいゝ時がきた。その少しの間隙な時に部落には昔しから打ち續づく傳統なる觀音の祭禮があつた。

午後六時頃から、人々は、殊に若い男女は、ぞく〳〵として參詣に來るのである。そして彼等は、みんな虔ましやかな風態をして祈つた。

「觀音の神樣よ！　どうぞ家内を安全になさせ給へ！　そして私を幸福になさせ給へ！……美。くしき男を（又は女を）與へ給へ！　そして、我が身を幸福にし給へかし！」と、祈るのであつたその觀音樣は、生殖器を祭つた神であつたのである。

裕道は、拜殿の敷石の上に跪づいた時、ふとそれに氣づいて、擽ぐつたい微笑に捉へられた。

（あゝ、我が生殖器を健全にし給へ！）

彼の橫にゐる娘はそう祈つてゐるやうである。鳥居から拜殿までの廣場には、緣日商人が各々特意の粧品を飾り並べ、灯を赤くともして客を呼んでゐた。彼等はみな勇み立つて喋り散らしてゐた。

「ヘイ！　いらつしやい！　その氷菓子は、二十年も三十年も大丈夫で御座います。ヘイ、今度新らしく東京で發明されたものなんで、ヘイ」

Commercialism　の旺盛な文明期に於ける商人はその狡惡を誇るものだ。で、彼等はかうして口から出かせに怒鳴つてゐた。

人々は、火に顏を照らされ乍ら、行く人歸る人、止まる人、と、老若男女が、右往左往してゐ

た。何處かでピーピーと、小さい笛の音がしたりしてゐた。人々は强烈な歡聲を上げた。

（曾つて、三年前の今夜、小須賀梅子（第二章參照）は、あそこに突立つて、ぢいつと俺れを見てゐた。緊張した醜い表情をして）

彼はそう思ふ場所へ立止つて、はつきり彼女の面影を憶ひ出した。（が、梅子は、最早遠く町へ嫁に行つて了つたそうだ！　そして俺れは只、一人今夜も、この祭りの夜を漂泊ふのだ！）ふと彼は悲しくなつた。彼は歩き出した。若い青春男女の、輝やかしい、しかし淫りがましい顏が、それからそれへと、彼を注視して過ぎて行つた。彼等は、彼を見ると、一樣に、顏面を緊張させて媚び請ふものゝやうに目禮して行くのであつた。

（彼等は、姦淫の機會を熱望してゐる、そして彼等は、どうしてか俺れをよく知つてゐるのだ！俺が戀ひし慕はしいのか？　又、恐ろしいのか！）

彼はなるべく老人や小供に道を開けてやり乍ら左側を歩いて行つた。

彼の足の指を、强く踏んだ男があつた。「イタイ！」と、彼は聲を上げた。男は彼を見た。そして眞蒼い顏になつてブル〳〵震へた。彼は平然として男の顏を見た。彼の右手は固く握り占めら

れてゐた。男は身體を動かした。と、側の老人を突きとばして一散に人混みの中へ逃げ出した。

「馬鹿！　どうするんだ！」と。裕道は強く叫んだ。男は後をも見ずに人混みの向ふへ消えて了つた。

老人は突き倒されて立ち上り得なかつた。彼はそれを見た。彼は直ぐ老人を抱き起した。

「怪我はありませんか！　何處も……お老人よ」彼は老人の塵を拂つてやつた。（惡い男があるものだ！　あれはきつと罰を受けるだらう！）「イヤ！　貴下樣、お陰で怪我もありましねいだ！お若衆！　有難う御ぜいますだよ！」

老人は銀髮の頭を丁寧に下げて言つた。

實にこの時である。彼は人混の中に、あの雷雨の日の美くしい乙女の姿を見たのは。が、この姿はチラリ彼に美くしい翳を與へて消えて了つた。しかし、最早、その瞬間に、彼は乙女を感じて了つたのである。

老人は禮を言つて拜殿の方へ歩いて行つた。で、彼は、又、人混みの中を突き拔けて、電車の通つて居る街道へ出た。彼はあの美くしい乙女を物色したが見ることが出來なかつた。

（何んと云ふ不思議さだ！　確かに俺れは見たのだが）それで、この時のことは、永久に彼に神祕な謎として殘つた。
彼は最早家に歸らうと思つた。彼はどうしても、一般青年のやうに、女性の後を追ひ廻すことは出來なかつた。で、彼は、暗い木蔭へぺつと唾液を吐いて步き出した。
氣が注くと、その夜は十五夜の月夜であつた。四邊はほの白く霞むやうに明るかつた。その明りの中を、螢が弱い光りを引いて舞つてゐた。
云ふまでもなく、人々は白い衣物を着てゐた。そして彼等は大抵風を得る容器を持つてゐた。
實に娘達は、あらゆる自己の美を着飾つてゐた。
（觀音様の祭りの晩には、いゝ夫婦が出來る）と、いふ一つの昔しからの傳說を、學校教育を受けた彼女等でさへ、ひそかに信じ、期待してゐたのである。
で、男も女も、相手を見る眸の色が、異様に光つてゐたのである。
大見原裕道は、それを見ると、泣き乍ら、涙を隱して笑つてやり度かつた。
（何んと言つて、彼等に忠告してやつたらよいのだらう？　お前等は人間に歸れつてな。忽ち神

にならなくつていゝが、あんな獸にならなくもいゝ）彼は嚴然として呟やいた。

（人間に返れ！　人間には、人間としての道があるではないか？）

彼は、電車路を北に折れて、彼の部落へ入る道へ步み處つた。と直ぐそこには鐵道線路に懸る陸橋があつた。

夏となれば、この近所の部落から、人々は出てきて、この陸橋の上に凉を惠まれるのである。祭りの夜であれば人は尙更らに多く凉んでゐた。裕道はそれ等の人々の間を通り拔けて歸らうと思つた。と、その時、若い娘が彼れを呼んだ。それはきむ子であつた。

彼は振り返つて見た。きむ子はの傍らには、不良靑年逹が大勢取り卷いて騷いでゐた。彼女の傍には小山もゐた。小山は煙草に火を點けてゐた。

「何んだね？」と、裕道は悫儀そうに近寄つて言つた。

「あのね、裕道さん！」と、きむ子は一寸小山を見て、コケテイツシユな姿態をして、裕道の方へ來た。「一寸、ほんとに貴下にばつかりお話しがあるのよ！」

裕道は默つて、きつときむ子の顏面を見据ゑた。彼の胸に不吉な豫覺が、ぞつと感じられた。

彼れは月に逆いて瞑目した。あゝ、と溜息を吐いた。
「あの…一寸此方へ來て吳れない？　人が居る所では話せないのよ！秘密なことだから…」
彼女は媚びるやうな聲でさゝやいた。彼女はピッタリと彼に寄り添つた。
「そう…」裕道は力强く叫んで、强くきむ子の肩を摑んで步き出した。不良青年達はハッとした小山もぞぐつとした。そして根强い疾妬に驅られた。
（あゝッ！　大見原はきむ子を抱いて了つた！）と、叫んだ。
裕道ときむ子の二人は、橋の一番端の方へ行つた。
「何んだよ！　話しといふのは？」裕道は地に踏張つて訊いた。
「あのね…」ときむ子は仰向いた。「あの…みつちやんが…みつちやんが、不良青年達に强姦されたのよ！　大勢に！」
「エッ！　何に？　あゝ、馬鹿！」と、彼はいきなりきむ子を突き飛ばした。「何んだつて、何んだつて、みつちやんが…輪姦された？　おゝ憎むべきことだ！　不正義な行爲だ！　輪姦！輪姦？　何んといふ恥知らず共め！　きつと罰が來るぞよ！」

彼は、忽ち奥平のことを考へた。奥平は前からみつ子に戀してゐた。
「奥平は知つてるのか？」
「エヽ、多分知らないでせう！　だつて、みつちやんは泣いて家へ行つたわ！　若しか、死ぬことはないか知ら？　私心配だわ！」
「いや？　彼女は死ぬこゝとはないだらう！　彼女はお前程氣が張つてはゐない。「彼女はお前程氣が張つてはゐない。彼女には勇氣が乏しい。彼女はきつと悲しゝ諦めるだらう！」
彼は、さういふ中に、つらい悲しい氣分に捉へられてきた。農民の第三階級のどん底に生れたるみつ子が、町の工場の不良青年達の爲めに、極度な侮辱を受け乍ら、それに反抗し得ないだらう心根を思ふと同情をせずには居られなかつた。彼は、涙の眸で、ぢいつと月を見上げて吐息した。
「私、それを話したかつたのよ…ぢや行くわ！」
「何處へ行くのだ？　きむ子？　お前等のやうな若い女が、そんなにしやれて出て歩くのはほんとに罪惡の原因になるのだ！」裕道は言つたが、みんな、可愛そうで堪らなくなつた。

（きむ子も汚ない女だ？　コケテイツシユな、卑しむべき女だ！　彼女は九月まで待つことが出來ないのだ！　栗持を愛してはゐるのだが、若い浮氣の虫が、謹嚴に堪ゆることが出來ないのだ？…あつ、それに彼女は原との經驗がある。彼女は小山と罪を犯すに定つてゐる。小山も町の樂園（パラダイス）で修業してきた）

彼は、小山ときむ子が、細い路を森の方へ歩いて行くのを見た。が、彼は怒ることさへ出來なかつた。そして栗持が可愛そうであつた。又、奥平も憐れであつた。

（敗殘者よ？…しかし奥平は必らず將來に勝利を得るだらうが、…栗持は一割損んな性質だ！　彼は死ぬに決つてゐる——）

裕道はじいつとしてゐられなくなつた。聲を上げて泣き度くなつた。で、彼は不良青年達を突切つて一散に驅け出した。

彼には何物も見えなくなつた。と、どしんと何人かに突き當つた。

「大見原氏！」

「お丶、奥平か？　君は知つてゐるのか？　みつちやんのことを…奥平よ！」

「知つてる？　知つてる！　大見原氏！　僕は、僕は死んで了ひさうだ？　あゝあゝあゝ、僕には力がなかつた。僕には！」

「さうだ？　奥平よ！　しかし、確つかりし給へ！　我々はこゝを忍ばなければならない！　そして勝利者の位置へ行かうよ！」

「あゝ、大見原氏？　僕には、君だけが力なのだ！　たつた一人の信ずべき……」

月下に、男と男は、昂奮の餘り抱き合つて男泣きに泣いた。

――奥平は、その後、實に苦しんだやうであつた。彼は失戀のために、その日その日を煩悶懊惱の中に過した。彼は次第に憔悴して行つた。

（何故俺れは、もつと早くみつ子を所有して了はなかつたであらう？　あの美人のみつ子を、俺はどんなに愛してゐたか？あゝ、俺はもう愛すべきものを失なつて了つたのだ！あゝどうしたらいゝのだ！　どうしたらいゝのだ？……若しかしたら、彼女は俺れを愛してゐるかも知れない？そうだ！　彼女の肉體は汚されても、彼女の精神は汚れはしないだらう？　俺は一層、彼女と結

婚してやらうか？……いや！　いや！　彼女の軀は汚された。彼女の操は踏み躙られたのだ！　然るにどうして精神が清純だと言ひ得やう！　彼女の感覺は、一生涯あの汚された刹那を覺えてゐて、時々思ひ出すだらう？　さらばどうして全的に俺れを愛そう？　俺は、戀をしない方がよかつた」彼は、そうした絶望を抱いて裕道の所へ行つた。

（君は信ずるかね。太集の神を認識するかね？　お祈りしたいと思ふかね？　よろしい。君は、その自我の下積みになつてゐる所を捨て給へ！　そして君は次第にそれから浮き上つて、みんなを愛し給へ！　愛し給へよ！）

裕道の言葉に、奧平は慰めと、情けと、力との混融を聞いた。

小山が兵士に當つたといふことは、彼れをして、實に一變せしめて了つた。彼は政治の研究を捨てた。彼は勞働を怠けた。

（俺れは戰爭に行つて死ぬのだ、この化學文明が進む程、種々な戰器が發明される。俺達はそれを持つて鬪ふ。みんな人類が鬪ひ合つて、人間が地球の上に一人になつて了ふまで鬪ふのだ！

俺れなぞは今兵士に行くのだ。俺なぞは第一線に殺されるのだ！　そして俺のこの立派な身體は銃劍や彈丸に打たれて傷付き腐るのだ！）彼は、囚人が牢獄へぶち込まれる時のやうな絕望に陷つた。

彼は遂ひに自棄的に考へ始めた。

…（まゝよ！　どうせなるやうになるのだ！　自分が思ふ通り、思ふ樣荒れなければ損だ！）で、彼は、ある限りの時間を享樂しやうと努めた。

彼は町の樂園へ行つた。淫賣婦、娼妓、藝者、女給。そして女の肉の感觸と口の先の手練に耽溺するやうになつた。

祭りの夜、きむ子から、ふと、みつ子が强姦されたことを聞いた時、彼の全身は一種狂暴な血が逆流し始めた。彼はきむ子の美くしい顏を見た。そして栗持に對する日頃の惡感情を思つた。（うん！　惡戲してやれ！　どうなるもんか？）で、彼は最も巧妙にきむ子を誘惑して了つたのである。

それから後は、二人の間は、堪らない熱度を以つて密接して行つた。

――栗持は、兵役を免れたので大層喜こんだ。その上、彼には、戀してゐたきむ子との結婚が成立つたのであつたから、彼は有頂天なよろこびに打たれたのも無理なかつた。しかし、彼は、九月までの間、相手を飽かせずに置かふとするやうな心遣りはしなかつた。彼は、相變らず教養園の雜誌に讀み耽つた。そのくせ彼は、毎晩蒲團の中で、きむ子の種々の姿態を幻に映しては、不快な罪深い手段に耽つたのであつた。

彼は、大見原裕道からすゝめられた「山の中の斷食修養」も、しなかつた。すゝめられた當座は、山へ行かう。北海道の修道院へ行かうかとも思つて、牧師に聞いて貰つたりした。

(そうだ! 彼はその奧深くにあるよきものを見出すために、修道院へ行けば效果があつたであらう? しかし、彼には一つの克己心がなかつた)

彼は大變愉快な時もあり、悲しい時もあつた。彼は、それを露骨に他人に打ち突けた。で、彼は餘りみなから好かれなかつた。

彼はきむ子に逢ふことがあつても、氣取つて、他人のやうな挨拶をしたりした。

祭りの夜の明後日の朝、大見原裕道は畑で仕事しながら、向ふの道を、氣取つて歩いて行く栗持の姿を見た。

（彼はまだ何んにも知らないらしい。彼は、此頃、益々不氣味な人間になつた。きつと、何か罪を抱いてゐるに違ひない。彼の顏面には鮮明な光躍がない……しかし、彼は一割損な性質だ。割合正直なのだが、人にきらはれる。すると、益々彼は惡く陷つて行く。

……早く今の中に俺のいふ修道院——深山の森へ行つて斷食修業して來ればいゝが！　今は彼は最早そんな考へは持つてゐないやうだ。失戀したものは、そのまゝ諦めるか、深山に修業か、死への自瀆かの三つしか取る道はないが、しかも高田は自殺した。奥平は諦めた。それでは栗持は山の中へ入るだらうか？　小山ときむ子のことが判つたら……いや、いや、栗持は高田よりなほ惡い死方をするであらう？　何故だか、彼はいやな陰をひいてゐる。そうだ！　山の中へ入るものは栗持ではない。俺れが入つたのだ。三年前にこの俺れがあの有度山へ入つたのだ。雨の降る日であつた。俺は女を戀する心に失戀して、あの有度山に馳け入つたのだ。路が惡かつた。俺れはその前に一度自殺しやうとして、繩が切れて果さなかつた松の木の蔭の小さい小屋へ行つて靜

坐した。俺は、その時は死ぬことは出來なかつた。そして人間は社會的に生存すべきものであるのを知つた。博くすべてを愛し得るだけのひろい心境のものは、不幸と言つても、その不幸に超して包むだけの力が湧く。といふことを考へたつけ。

‥‥あゝ、俺れの後に山に入る者よ！　山の森の聖道院に斷食するものよ！　お前の上には榮冠が下るであらう！　さて、そしてお前の名は何んといふであらうか？‥‥」

彼が、こんな取止めもない想ひに耽つて、再び栗持の姿を求めた時は、最早何處にも見出されなかつた。彼は栗持に對して濟まないやうな氣がした。

祭りの夜の七日過ぎに、栗持は遂ひに小山ときむ子との關係を知つた。彼はその時、始めて女の名をくどく呼び乍ら驅け廻つた。

「呪つてやるぞ！　呪つてやるぞ！　小山め！　きむ子め！　呪つてやるぞ！　呪ひ盡して？‥‥」狂人の聲は七日の間響いた。

彼は遂ひに或る夜おしまが死んだ所で、汽車へ飛び込んで轢死した。

村中は大騒ぎであつた。そしてみんな薄氣味惡くなつた。栗持が轢かれた汽車路では、村の僧侶達の施我鬼が行はれた。

村人はどうした年だらうと思つた。

小山は町の叔母の家へ追ひやられた。きむ子は、栗持の七日が了へた日に、裕道の家へ泣き乍らやつてきた。

「裕道樣？　裕道樣？　私は懺悔しました。栗持さんの墓の前に懺悔しました。でも、私の罪はどうして消えませう？　私死なうと思ひますが、それよりも今は修道院へ行つた方がいゝと思ひますの、私明日出掛けますわ！」

「きむ子！　許して呉れ！　俺はお前に詫びをする。而も俺れは今まで自分はいゝと思つてゐたのだ！　たゞ、罪を包む心があるのだ！」

きむ子は、北の國の修道院へ行くべく長い長い旅路へ上つた。しかし彼女は、間もなく修道院で自殺した。

「俺れは死なゝいぞ！　決つして死なないぞ！　高田よ？　そして栗持よ！　君等は失戀——厭世自殺を決行したね！　君等に取つては、どんなにいゝことであらう？　しかし、俺は決つして死ぬことはないよ！　君等は今、どんなに後悔してゐるか？　俺は決つして死なないぞ！　死ぬものか？　俺は永久に生きて見せる！

見ろ！　俺は綠なすこの桃園に耕作するための勞働を惠まれてある。遠くには富士山があんなに毅然と聳えてゐる。澄んだ大氣の中を白雲が流れる。そして、俺れの魂は、大氣の心を感知し得る程強固な意志に精練されてゐる。だから、俺れは決つして死にまで墮落はしない！」

彼は、園の東南隅の木蔭に踏張つて、きつと東方の照映を見詰め乍ら叫んだ。

烈日の殘暑は、ヂリヂリと燒きこがすやうに強く照りつけた。そして色彩はパッと美しく反映する。

實に富士山は、人間の死といふこと、殊に自殺といふことを關知せぬもののやうに、大氣の中に秀麗な容姿を突立たせてゐるのであつた。

「俺れだけはなんていゝだらう？　肉身の養生にして靈魂の健全を計り、意力の修練を持つて軀

力の强壯へ來た。悲哀なく、歡喜なく單純にして倦怠なき大聖の道へ歸りし俺れ……。そう――おそらくあの富士山のやうに宇宙の自然の中に、こんなに正直に生き得るだらうよ！

午後の直射は、實に赫々として感じ惡く照りつけた。

「おゝ、俺れは一寸水を浴みて來よう！」

彼は鍬をおいて、程近く見ゆる河の方へ歩いて行つた。が、ふと氣が注いて、矢庭に衣服を脫ぎすてゝ、畑を出て行つた。

「自然よ！　こんなにも自然はいゝ！」

彼の男性質なしつかりした肉體は、パッとして周圍のものに反射した。と、彼れは、周圍に擴がつた熱と光りと綠とを胸一杯に吸ひ入れながら、堤の草を押し分けて、上の道へ上つた。

彼は、その時、實にハッとして眞紅になつて、全身を一時に緊縮せしめた。彼の心は燃え上り眸はらん〳〵と輝やいた。その視線の行く所には、一人のすんなりした幽艷な薔薇色の肉體をば日光に明らさまに照らして、美くしい若い女性が河岸に突立つてゐた。

「あゝ、何んて美くしいんだらう！　あの娘だ！　雷雨の日の……」

裕道は心から有頂天になつて言つた。
と、この聲に、その娘もついと振り返つた。そしてハッキリと、堤の上に立つてゐる男性の眞裸體姿を見た。彼女は自分の裸體を忘れて了つた。男性の、殊に强壯な眞裸體に索つけられ、眩惑されて了つた。彼女は、全身をブル〳〵震せて乳を抱いた。
と、その時、水の中にゐた文子が、ふと裕道の姿に氣づいた。
「アッ！　榮ちやん！」と、彼女は聲高に叫んだ。
その聲で、榮子は自身に氣がついた。榮子は驚ろいてヒラリと透明な水中へ跳り込んだ。と、その薔薇色の顏と、輝やく眼の外には、もう水の上へ出てゐる所はなくなつてゐた。
「おゝ、惜しいことをした！」裕道は悠々と堤を後へ戻り乍ら低い聲で口籠つた。「あゝ、人生はなんていゝ所だ！」と、不意に高田や栗持のことが思はれた。「いや！　俺はこんなにもいゝ。どれ？　俺はもつと下流へ行つて泳いでやらうか？」
彼は堤の下を歩いて行つた。女達の珠のやうな笑ひ聲が、長い事後方で響いてゐた。
實際二人の女は、好奇心と羞恥との錯綜した浮き〳〵する感情に捉へられて、遠去り行く裸體

男の聲音を聞き澄ました。と、言ひ合つたやうに輕やかな若々しい笑ひ聲が、二人の全身から湧き上つた。二人は水中で寄り添ふて顔見合せた。しかし、彼女等各々の眸に映るものは、今見た男性の裸體像であつた。

「榮ちやん！……貴女見て？」と、文子は震へる聲で言つた。

「エヽ、よろしく見たのよ！……だつて！」榮子は急に水中で赤い顔をした（私も見られたのだわ？　あの方に！　あの方に……見られた）

「ふみちやん！……私見て、見られちやつたのよ！」彼女は堪らない羞かしさに、兩手できつと乳を抱き緊めた。と、電氣にで觸れたやうに彼女は昂奮して、ガタ〳〵震へた。

（抱かれて見たいわ！　裸のまんま……あの方も裸で。そしたらどんなだらう？）

彼女そうした根深い欲求に氣づくと、自分ながらうれしかつた。ふと、あの雷雨の日のことを考へた。戀ひしさが十六才の處女の心を充ち捉へて了つた。彼女はぢいつと太陽を見上げた。と裕道の力強い表情が、その光線の中に見えるやうであつた。彼女は、ふみ子を見るとハツとした。

「どうしたのよ？　榮ちやん！」文子は水を刎ねながら太い聲で言つた。

「イヱ！　何んにも……あの方は何處の方でせう？」榮子は、遂ひに內心の力に押されて、深淵の中へ飛び込むやうな氣持ちで言つた。「何んといふ方でせうねヱ？……」

榮子の圓い肩や二の腕へ、五色の雫が抱きつくやうにタラ〳〵と滴つた。彼女はうつとりとして瞑目した。

「あの方は裕道さんよ！　私の村の大見原さんの息子さんだわ！　貴女は知らなかつたの？　あの方は大學へ行つてたのよ！　去年東京から歸つてきたのよ！」

文子は誇りがに言つた。「私は、あの方が大變好きよ！」

「そうなの？　そうなの？……私だつて好きだわよ！……大見原さん！　あゝ、あの方に先達て逢つたのよ！　私——」

「いつ？」

「あの雷の鳴つた日よ！　この前の月だわ！　七月——」

「そう！　ぢや二度目なのね。三度目に逢ふといゝわ！」

「エヽ、きつとよ！」
榮子は忽ち、うれしい豫感に打たれた。

裕道は下流へ行つて、かの水底に黃色い砂の蔽はれてゐる場所の、そう深くない、透明な、清澄な水の中へ這入つた。
「たまらなく佳い！」と、彼は呼びながら、野蠻人のやうに水中で躍り上つた。と、キラキラする新鮮な水が、彼の周圍に迸つた。
「泳いでやらうか？　が、一寸淺すぎるな！」
彼はチラリ上流の方を見た。川が曲線してゐたので、女達の姿は見えなかつた。
「あゝ、堪らなくよかつた。あの乙女！　あの美くしい乙女の眞裸體の姿――うむ――」
(彼女一人前の女に成長してゐた――。十五六才にはなるだらら？……女學校の三年生位ゐには――)
あの陽に輝やく薔薇色のすんなりした女性の腰から足へかけての聯想が聖く映し出された。

「彼女等はまだ水を浴みてゐるんだらう？　おうそうだ！　この水には、彼女の肉體の接觸の匂ひが混入つてゐる」

彼は忽ち、水を手に掬ひ上げて、親しげに飮み下した。

「キスしたやうなものだ！　實際いゝ！　何んていふ素晴らしい乙女だ！」

で、裕道の心は、次第に熱く燃え上つてきた。

「消えずに燃切つて吳れ！　あの乙女のためにな！」

親しげなる彼の聲は、川や綠の曠野を超へて顫へた。

「だから俺は生きてゐたいのだ？」

第十一章

野に復り働くものよ！
爾等の上によき日近づけり。
時は、忍從と勞働との恩惠なれば。
——(大聖詩篇)

遂ひに、淋しい季節がやつてきた。
初秋！　それは、まこと、人生に敢果ない寂寥を憶せるものである。まして、餘りにも年寄ることの早さを考へる者に取つては、光陰は哀れ悲しい調べである。
天空は次第に高く晴れそめた。
あゝ、燕は遠く南に去り、雁は打ち連れて北方からやつて來る。
日出づる國の若き農夫は、殊にうら悲しくも野に立つてそれ等の樣を見詰つむるのであつた。

（何處から何處へ行くのか？　雁よ！　いつまた歸つて來るのか？　燕よ！）

裕道は、ぢいつと立つて空を見上げてゐた。次第に色褪せ行く野の一隅である。

昨日まで、灼熱に燃えてゐた森からは、今また遣瀬ない寂寥を押し流すのであつた。彼は、ふと宿命といふことを考へた。

（高田も、栗持も、あんなに若くして生存を拒絶されて了つた。しかも俺れだとて、どうして死なぬと斷言なし得やう！　さらば、人間は、遂ひに亡びて了ふものであらうか？…否、人生は宇宙のあらん限り、生息することであらう！　祈り、和らぎ、働らき、ほめ、たゝへつゝ、又は憎み、姦淫し、鬪爭し、怒り、逆きつゝあるであらう！）

彼は、だだつ廣い曠野を一巡した。彼の所有地は、少しづゝ點々として、散在してあつた。彼は丘の畑へ立つて考へた。

（そう！　百姓が、どうしても生活のために勞働せねば、ならぬならば、この不都合に點在してゐる耕地を、統一して了はねばならぬ！）

彼に取つては、この考は大層淸新なものゝやうに思はれた。

（何處がいゝだらう？　俺れはそんな遠く歩き廻らない方がいゝのだ！　農夫が、自宅から耕地まで行くに、一時間も手間取る所であるならば、全農界に於ては如何ばかりの損失であらう？）

彼は、一面青々と穂の揃ひ出た田圃の上をずつと見渡した。

今は、既に、田の中に働らいてゐるものもなかつた。稻は最早、黄熟の刈入れを待つばかりであつた。

彼は又、田に續く畑を見遣つた、其處には、彼の家の桃園に續く小高い丘が、田を横切り、村落を横切つて、南の方有度山に打ち續いてゐる。

（さう！　彼處！　彼處こそいゝ場所だ！　あの俺の家の桃園を擴張したならば……二三丁歩も田と畑とある農園を完成したならば、そしてさうした農園のすべてが、共合的に存在を努めたならば、農民のためにも、村人のためにも必らず平等な平和な勞働の生活を見出すであらう！）

「あゝ、神よ！　心よ？　きつとこれはいゝことでせう！」彼は強く叫んだ。

で、彼は直ちに桃園の方へ歩いて行つた、桃の葉は最早、秋枯れて一片一片地に舞ひ落ちた。

彼は、その東南隅へ立つた。

遠く富士山は、清澄な姿容を空高く推圓狀に聳えしめてゐた。此處からは、程近い村里を越し、堤の松並木を越して、海近い清水町の工場の煤煙が黒く見へるのであつた。

彼は遂ひに、此處へ統一すべく決心した。で、直ちに一事敢行すべく立上つた。

先づそこの畑に働らいてゐた小山の老いた人好の父に交渉を始めた。

「實はね? お爺さん! 俺れはこの桃園をもつと取り擴げ度いと思ふんだが、お前さんの畑を賣つて呉れないかね! 又は、俺れの家の何處かと交換して呉れないかね! お爺さん!」

老人は、どんよりした力無い顏を上げた。

「よう御ぜいますとも?……宅の野郎はあんな奴だし……私等も働らけなくなるばつかりですもの。貴下に賣りませうよ!」

「そう! 有難ふ! ぢやね? 決定したよ! 俺れは證文なんか書かないが……」

かくして、小山の畑、及びそれに續ぐ第三階級農民の畑は、裕道の家の桃園に合併せられた。彼は、それ等農民に、よりよい畑をやつたのである。

が、此處に一つの難關は、石上家の所有地であつた。石上家は、今の祖父が 高利貸をして狡

猾な手段を以つて、その時代の中産階級から、抵當物として捲き上げた土地が、そこにも一丁歩程あつた。それを裕道は欲しかつたのである。そこは大抵茶畑になつてゐたが、小作人達は毎年一反歩について米三俵づゝを貢いでゐた。石上家は一千俵以上の作米が入つた。隨つて彼等は、その利得で喰つてゐた。彼は始めに小作人達にその理想を語つた。小作人達は、解放せられることを喜んだ。勿論皆彼の意に賛成して呉れてゐた。

「どうでせう？　あすこの畑を、私にお讓り下さいませんでせうか？」

裕道は丁寧に言つた。と、石上家の當主は、如何にも商人らしい狡い眸を光らして言ふ。

「いや！　それは出來ません！　そんなこと……私の家は敢へて畑を賣らなくても喰つて行くだけの金がある。それにあすこは、祖父の所有した土地ですからな。お拒りします」

「が、貴下の小作人はみんな賛成して呉れましたよ！」

「小作人が？　小作人が賛成したとて、所有者は私です！　どうしやうと私の心のまゝです」

「よろしい！　最早お願ひしませぬでせう！　が、君等は、自分のことばかり考へてゐて小作人のことを考へずにゐると、今に恐るべき日が、自分の中と外から起るだらう！」

裕道は桃園へ歩きながら空を見上げた。天候が險惡になつて、今にも雨が降りさうになつてゐた。

――遂ひにその夕方から大きな暴風雨がやつて來た。

つんざくやうな激しい雨は、沛然として天から矢のやうに降つて來ては、地上を叩きつけた。日が暮れると、それに風さへ混つて次第に暴風雨となつてきた。人々はみんな、人形の家の中に小さくなつて身を顫はしてゐた。

(あゝ、こんなに酷く雨が降つてきた? いゝ按配に――)

彼は、憂鬱な窓を開けて外を見た。暗くなりそめた外をば、雨が物に打つ突かる音、風が木をむしる音が、轟々として舞ひまはつてゐる。暗淡たる雲は、世の終りを示すやうに、低く壓しかむさつてゐる。光りは何處にもない、闇は近付いてきた。

(第三階級の農民は、この陰慘な夕暮を、如何にして過してゐるであらうか? 地主は土地を占有して、大きな家に華麗を盡してゐる、あッ! 小さい家が倒れるやうな音がする。木の葉のや

うにあんなに高く舞ひ上つたではないか？……しかしこの自然の大いなる力は、地主のしつかりした家をも、崩壞せしめずには置かぬだらう！）

彼はピッシャリと窓を閉ぢた。轟音が急に遠くで聞えた。

彼は、ランプに火を點けた。と、室内はパッと明るくなつた。が、隅の方には薄闇が忍び込んでゐた。

彼は、ギッギッの机に靠れて、靜寂の中に浸つた、遙かに遠くから響いて來る異樣な轟音が、小さい第三階級の農家が潰れるやうに聞えてきた。

太動爺さんの家は、そしてその裏の娘の家は、又、あの氣狂ひや亞米利加歸りの者の家は潰れることはないか知ら？

彼のこの考へは、彼をして非常に心配させたのである。彼はこの時程切實に、第三階級農民のうへに同情したことはなかつた。

（彼等農民は、かくの如き時、如何に自分を考へてゐるであらう？）

彼は七分間瞑目した。そしてペンを取つて日記に書いた。

彼が眞夜中に、ふと眼覺めると、雨はまだどしや降つてゐた。

（どうしたつていふことだらう？　こんなに酷い雨が降りしきるなんて！……）

で、彼は、後頭部を枕に押し當てたまゝ、冥目を續けた。室内は實に靜寂そのものであつた。

が、しつきりなしに、外部の騷音が彼の神經に感覺を與へた。彼が眠りついてから、最早相當の時間が經過せられたやうであつた。彼は、急に、寂しさよ！　寂しさよ！　と、私語く内心の聲を聞いた。雨戸を打ち叩く雨の音は、彼の孤獨感をいや增さした。涙が、淸い涙が、知らず知らず押し上つてきた。風は靜かに遠く去つてしまつたであらう！　小さい家が、倒れるらしい騷音も聞えなかつた。が、雨は降り止まぬ。

（いつまで降り續く雨だらう？）

ふと、この時、彼の全身に激しい戰慄が浸み徹つた。言ふべからざる壓迫の恐怖を豫感したのである。

彼の凝つと澄ました耳朶に、遙かに遙かに遠くから、激しい水流の音が轟響いてきた。恰も太平洋の眞中から起つた海濤が、日本海岸目掛けて押し寄せる折の音のやうであつた。

（確かに、あの桃園の向ふの澤から響いて來る音だ！　あのよく缺潰する川！）

と、この時、厳然たる一つの直感が湧き上つた。

即ちそれは、（今夜も、あの澤が缺潰するかも知れぬ）といふ疑問であつた。

（そう――あの山澤が缺潰するに違ひない！　俺れがふと眼覺め、此くの如く豫感するといふことは、神が俺れに一つの路を教へ惠んだものに外ならぬ――）

彼は、パッチリと暗中に眸を瞬らいた。

（よろしい！　俺れは行つて見てこよう！　誰れか先に行つてるかも知れぬが？）

彼は矢庭に布團を刎ね除け、がばとばかりに起き上つた。

彼は、手探りにマッチを探してパッとランプに灯を點けた。と、光線に、彼れの顔が、恰も幼兒のやうに、無邪氣に、しかも善、そのものゝやうに聖い輝やきを持つて映つた。

彼は窓際へ行つて、パチンと窓を外した。と、騒音が一時に彼の耳朶を脅やかした。沛然と降る大粒な雨が、内から迸出する光射に白く條を引いた。外は眞黑であつた。何もかもが闇に包まれてゐる。

彼は、母屋の方へ駈け込んで、激しく雨戸を叩いて家内を起した。
「おい！　起きておくれ！　早く起きておくれ！」が、何人の答へもなかつた。
熟睡してゐる人は、死んだやうなものであるのか？　彼は力を籠めて烈しく戸を打つ叩いた。
「起きろ！　早く起きろ！」
「誰れ？　裕道かい！」
母が起きてきた。そして戸を開けた。
「何んだね？」母はきよとんとして、駈け込んだ彼の姿を見詰めた。
彼は答へもせずに、いきなり、戸棚を押し開けて、作業服に着替へた。
「俺れは一寸、山澤を見に行つて來る！」
彼は決然と言ひ放つた。
「え？　お前！　この眞暗い雨の降るのに――」
父も、寢床から起き上つてきて叫んだ。
「いや！　山澤は又、切れそうだよ！　俺は行つて見て來る！」

彼は、敢然として父母に逆いた。彼の頰を熱い熱い涙がタラ〳〵流れた。彼は、父母の顔を見ずに、そつとカンテラを出して點火した。

「行つて來ます！」

彼は、眞暗い激しい降雨の中を突つ切つてしつかりと山澤の方へ歩いて行つた。破れた靴はザンザンとして流れる水の中に沒つした。村はまだよく眠つてゐる。そして闇は、何物をも引包んで了つてゐた。

次第に前方から響いて來る轟音が近づいて來る。彼の顔面はきつと緊張し始めた。

彼は遂ひに山澤に達つした。川幅は五間程しかないのであるが。水は黒く、凄ざまじい音響を立てゝ、激しく溢れるばかりに奔流してゐた。

（切れてはゐない！）彼は、ホツとして、下流の方へ歩いて行つた。

この河は、田の眞中を、高く水道のやうに流れてゐたので、若し、一度缺潰することがあるなれば、下流何丁歩、何十丁歩の田地は、忽ち荒野と化して了ふのである――彼はそう考へてぞくつとした。彼の眸は、次第に血走つてきた。

彼はアッと叫び聲をはり上げた。見る間に彼は立ち竦んで了つた。彼の呼吸が止つた。彼の足下の土は、ざらざらざら〳〵奔流の中に缺潰しそめてゐた。（どうしやう？　うむ！）と、彼はきつとして見詰めた。

（俺一人でどうなる？　村人に告げなければならぬ！）

彼は敏捷にカンテラを振り返した。彼はきつと村の上を見詰めた。そして一散に走り始めた。彼は無我夢中で走りつゞけた。

彼は村落の道へ達つすると、

「山澤が切れるよ！　山澤が切れるよ――」と叫び始めた。

彼は火見梯子の下へ達つすると、カンテラを左手に提げ、右手に力を籠めて、スル〳〵と梯子を上つて行つた。

彼れは、滅多矢鱈に亂打した。實に彼の一擊には、農民を呼び醒すべき熱烈な力が籠められてゐた。

ゴン、ゴンゴンゴン…ゴンゴン。愴慘な警鐘はいん〳〵として闇の中を押し擴がつて來た。

（村人よ！　早く眼醒めて駈け寄つて呉れ！）彼は一心に祈念しつづけた。

各自の家の戸は開かれた。カンテラが提灯が、一散に火見梯子の下へ驅け集まつて來た。

「みんなよ！　山澤が切れるのだ！　早く彼處へ行つて呉れ！」

彼は聲を振り絞つて叫び續けた。

「大變だ！　大變だ！」

人々は吃驚し、叫聲を上げながら山澤の方へ走つて行く。

鐘は續いて亂打された。村人はすべて起き上り、火は後から後から山澤をさして走つた。

彼も梯子から下りた。そして、人々の後を山澤の切れ所へ走つて行つた。

（切れないでゐて呉れ！　切れないでゐて呉れよ！）彼には祈念することのみが殘つてゐた。

彼は凡ゆる力を盡して走つた。

壯健な村の男等は、みんな堤の上へ集まつてきた。

「おう！　よかつた。切れないでゐて呉れたか！」彼は狂ほしげに喜んで叫んだ。が、水勢は増し、堤はなをもザラザラザラザラ缺潰し續けてゐた。

「早く杖を持つて來い！　俵を持つて來い！」誰れか悲壯な聲を絞つて怒鳴つた。

三四人の壯年者は、一散に村の方へ走り歸つて行つた。人々はぎゆつと鍬を握り緊め心配そうにかけて行く、土を眺めてゐた。

陰慘な氣が地上を壓つした。

と、この時、上の方から大きな松の枝がもく／＼として押し流れて來た。

裕道はぎゆつと手を握り占めた。枝はぞう――として彼等の缺潰箇所と碍へて了つた。忽ち水浪は跳り上り、堤は凄ざまじい響きを立てて渦巻き崩れた。人々はアッと驚愕の叫聲を上げた。

（駄目だ！　どうしやう？　絶望だ！）と、みんな考へたが、顔が蒼褪めるばかり、堤はどんどん渦巻き崩れる。誰れとて、川の中へ飛び込みその枝を取り除ける者もない。

（おゝ、よろしい、俺れが仕了せてやる！）

アレッ！　といふ間に、裕道はザンブと本流へ飛び込んだ。彼は非常な努力を持つて松の枝に摑みついた。

「アレ！　アレッ！　裕道さん！」人々の聲を上げてゐる間に、松の枝は又もや烈しい音を立て

ゝ碍へた所を離れた。裕道はその枝と共に下流の方へ押し流されて行つた。彼は中途で、岸へしがみついた。そして松の枝を引き上げた。彼は、又、一散に上流へ駈けて行つた。

人々は心配げに、下流を見てゐた。或る人は將に走り出そうとしてゐた。

「おう！　裕道さん！　無事だつたか？」人々は彼の姿を見ると躍り上つた。

裕道は第三度目にその缺潰の場所へ來た。堤は尙も崩れてゐるではないか！　人々は必死になつて防いでゐた。彼はどつと泣き度いやうな放逸する力と感情に捉へられた。

「杙は？　土俵は？　持つてきたか？」

「まだ！」遂ひに絕望がきた。堤は一大音響と共に缺け始めた。

人々は諦ろいて手を引いた。

彼は決然として叫び出した。

「みんな！　もう最後だ！　賴む！　賴むから、俺と一緒に身體で……身體で防いでくれ！　身體で！」彼は人々の顏をきつと見据ゑた。人々は彼の顏を見た。そしてその眞劒な熱烈な意氣にまきこまれた。

「あゝ、やりますとも！」

人々は手と手をかたく握びつけた。裕道は先頭に立つた。

「しつかり力を入れて呉れ！　みんな！　杙が來るまでだ！」

彼は叫びながらざんぶと水の中へ踏み入つた。人々は續いて入つた。人垣が出來た。

どうどうたる水勢は、凄ざまじい音響を立てゝ、人々の肉體へ打突かつた。

「うむ…少しの間だ！　彼が來るまでだ！」

彼は叫びつゝも一番危險な場所に立つてゐた。實にこの時の彼の姿は、人間の最大なる意志を表現してゐる者であつた。

「杙が來たぞ！　くひが！」後方で叫んだ。人々はホッと力を拔いた。

くひは打たれ始めた。土俵はは出來上り始めた。アッと人が叫んだ。先頭に、全身の苦痛を堪へ齒を喰ひしばつて立つてゐた裕道の姿はふつとして奔流の中へ消えてしまつた。

「裕道さんが…裕道さんが、流れた！」一人は泣くやうに叫んだ。

「おゝ、おゝ、裕道さんが…」人々は喧々として騷ぎ立つた。そして一散に下流へ向つて駈け

出した。

裕道は水勢に流され乍ら一心に念じた。

（もう少し、もう少し）が、あゝ、彼は何人にも見えない闇暗の深淵に陥つてしまつた。

――しばらくの間、大見原裕道は、沈靜なる幽迷界に漂泊の旅を續けてゐた。地獄を通り地殼を破り、天國に旅行するものゝやうな感覺を知覺してゐた。實にそこは恍惚たる光りばかりであつた。あゝ、天國は永遠なる未來に、過去の如く光照してあり。

彼は、一種苦痛な感覺を知つたと思ふと、忽ち、天國から落されるやうに思つた。彼は驚ろいて靜かに緊張した。遂ひに彼は、又もや、肉體の苦痛を感覺すべく蘇生したのである。

彼は、パッチリと美くしい眸を開らいた。と、彼には、白くぼふとしたいくつかの妄像が見えてきた、彼の心臟の動悸は、ドキドキと調和せられた旋律を刻み始め、その血の活動から電氣は體内に充壓され、熱は次第に平均されるやうだ。

彼は、肉體の倦怠と苦痛と不自由とに、焦燥し反抗し始めた。

で、闇は次第に彼から遠去り、曉の閃光は、再び、彼の前方に復活してきた。

「おゝ、おゝ、裕道！　裕道！　おゝ、おゝ」

「裕ちやん！　裕ちやん！　しつかり！　裕ちやん！」

がんとした太い聲や、すつきりとした美くしい聲が、一勢に彼れの上方で叫び出した。

彼は父の顏を見た。母の顏を。そして弟や妹の心配げな物思はしげな虔しみ祈る表情を。太い聲は父、すつきりした聲は妹の叫び呼ぶ眞劍な聲であつた。

（俺れはどうしたのだらう？）彼は、ぢいつと子供のやうに父を見上げた、父の、希求する老いたが顏映つた。

「おゝ、お父さん！」彼の眸にどつと熱涙がせき上げた。彼には、何もかもがはつきり判つたのである。

（俺れは、水に流されて死なゝかつたのである。否、俺れはかの暗い試練の深淵に陷つたのであるが、再び此の世に復活したのである、あゝ、永生よ）

彼は、兩手を差し伸して父の皺深い頭を抱いた。そしてその髯面の頰へ烙けるやうな親愛の接

吻を續けた。

「よかつた！　よかつた！」父もそう言ひ乍ら嬉し涙を飲んだのである。

「もう大丈夫です！　この分では」

醫者は機械的にそう宣言した。裕道は醫者を見た。そして一寸不快であつたが、彼には只感謝ばかりが與へられてあつた。

（俺れは甦生した。俺は最早一つの線を乘り超して了つた）

彼は急に太陽の光りを見たくなつた。あの暖かな光りを浴み度くなつた。

「窓を開けて吳れ！　成る可く光りがさし込むやうに」

で、弟は從順に立つて窓を押し開けた。と、朝の輝やかしい生新な力に充ちた光線は、爽やかに室内に差し込んだ。

「あゝ、いゝ！　何んていふ嬉しさだ！　歡喜の朝だ！）彼は力强く光射の中に呼びかけた。

（あゝ、有難い。有難い、俺れはこんな喜こばしい報償を惠與されてゐる。あればつかりの犧牲に對して……）

彼は虔ましやかに微笑んだ。彼は腹部に力を入れ、靜かに冥目して祈念をこらした。そして彼の全身から押し流れる霞氣は、恰も電波のやうに閃めき傳はつて行つた。

頽廢に疲れた軀に鞭當てゝ、青年團長石上がやつて來た。彼の額には、悔恨の色が深く刻まれ吐息は遣瀨なく洩れた。

石上は、彼の室へ、裕道の妹喜美子に案內せられて、悄々入つて來る。

「大見原さん――どうですか――どうですか！御軀は？あゝ、ほんとに、あゝほんとに、僕は感謝して居ります――君の――君の――あの勇敢な行動によつて、我々は助かりました。この村は救はれました……大見原さん――僕は――もう……何んと言つていゝか……」

石上は、裕道の枕元へ坐つて、昂奮に顫へながら聲喘まして叫んだ。「君は――大見原さん――君こそは――ほんとに聖人です！聖人です！」

裕道は、ぢいつと、やさしくはぐゝみいたわるやうに石上の細い手の指やその疲れた顏面を見詰めた。

「みんな君の言ふ通りだ！」

「大見原さん！　僕は今氣がつきました。君によつて、どうしなければならないか？　と、いふことが判りました。それは極めて漠然たるものです。けれど、きつと君のためにはつきりする時があると信じてゐます……大見原さん……どうぞ、どうぞ僕を許して下さい！　實は、僕は今迄君のことを氣狂ひだなんて言つてゐたのです。實際僕はそう思つてゐたのです！　どうぞ許して下さい！　僕は始めて今度氣がついて、自心に責められて堪らないのです！　どうぞ、哀れな僕をいつくしんで下さい！　大見原さん！」

石上の表情に、眞劒な血潮が赤味さしてゐた。彼の眸は、恐れと從順と、期求とを表はしてゐた。

裕道は突如、石上の痩せた細い手を固く握り緊めた。

「いゝとも！　いゝとも！　君は充分氣がついたのだもの……君はとつくに救はれたのだ！」

裕道の聲が、力强く淸い韻律をたゝへて石上に感じられた。彼は泌々有難さを覺えた。そして言ふべからざる法悅に身を任せたのである。

「石上よ！　君は、早く家へ歸つて、君の最愛なる妻に、今日の幸福を敎へてやり給へ！　君の妻は、君を力とする動物なのだ！　早く行つて、幸福を啓示してやり給へ！　こんなにも光りは輝やいてゐるのだよ！」

「有難う！　有難う！　僕は今、どんなに歡喜に充ちてゐるか？」

　そこへ村長がやつて來たので、石上は「左樣なら！」と言つて歸つて行つた。

（彼はいゝ按配に氣が注いた。で、どうか躓づかずに步いて行くだらうよ！）で、靜かに瞑目して靜かに瞑目して遠去り行く石上の跫音を祝福した。

　村長も、又石上のやうな言葉を述べた。

　彼れは、只、內心の相通ずる報償を感じつゝ、村長が祝福を祈つた。

　記者は、忽ちこれを新聞紙上に報じた。で社會は一勢に彼の犧牲的な行爲を賞讃した。

『讃嘆すべき若者に感謝す?!』殊に、今迄に見られないやうな見出しが揭げられた。

　そしてその夜の、勇勝者の如き彼の美くしい行爲が、詳細に書き出された。

　次の日には、彼の日常の、人々から氣狂ひじみた行爲として冷嘲せられた、彼の博愛の行動が

書かれた。

第三日目の紙上に、彼の言葉として、何人にも解し得るやうな感慨が書かれた。

かくして彼の名は、老若男女の上に、始めて輝やかしい光りを投げ與へたのである。

「まア、何んといふ立派な方でせう！　神樣のやうな方ね！」

「ほんとですわ！　こんな方は稀ですわ　！　おゝ、大見原といふ御方よ」

「どんな方でせう！　逢つて見たくなつたわ！」そして、人々は毎日のやうに、彼の下に押し寄せた。

裕道は、人々から尊崇の言葉を捧げられる度に、辛らかつた。

（俺れは、あればつかりの努力をしたに過ぎない。それに、俺れは最早、多過ぎる程の報償を受けてあるのに、人々はかくして押し寄せる、俺は、あの寺院や教會のやうに騒ぎ立てられ、終ひに蹂躙せられてしまふのか？……が、俺れは、すべての人衆をひかへて、神の如く立つのだ！」

彼は、遂ひに立つて光りの野に勞働した。暗い室に祈禱した。

人々は原の草の上に、彼の眸に慰められ、室内の靜寂なる氣の中に彼の吐息を受けた。

（人々よ！　幸福なれ！　全眞に……しかし、俺れは、もつと眞理へ入らねばならぬ）

井戸榮子！　十五才の彼女の全靈は、大見原裕道の全眞に融通しつゝあることを感じてゐた。彼女は、彼の勇ましい壯烈な行爲を聞いた。そして女性である彼女は、この男性的な英雄的な將又偉人的な心性を直受した。

（私の！　私の！　貴下よ！　私は嬉しい。嬉しい――。何んていゝことをして下さつたのね。そのかはり、私が……私が……神樣！　私はあの方を愛してもいゝ……そして、私の貴下はどんなに愛するだらう？）

彼女は、パッと美くしい顏を赤くそめた。彼女は、雷鳴の日、河邊の日の追憶を樂しんだ。

（何んて私は、こんなに愉快なんだらう？　幸福な氣がするのだらう？……彼の方が、いゝ事をして下さつたからだわ！」

彼女は、本を取り上げて讀まうとした。が、直ぐ心は裕道の上へ、そして紙の上へ、裕道の男らしい顏が浮び上つて來る。

（戀ひしい。何んでこんなに戀ひしいのだらう？　ほんとにあの方に愛されたなら？　あの方は私みたいな者を愛して下るでせうかしら？　いえ！　あの方も、きつと私を愛して下さるやうな氣がする——）

彼女は筆記帳を取り出して書取りを始めたが、直き彼女はあらぬ方をうつとりと見詰めて、手は紙の上へ、大見原！　大見原！　大見原樣！　大見原と、ばかり澤山書いてあつた。

「あゝ……何んて私は幸福なんだらう？……」

彼女の内心の强烈な意志が言つた。

彼は又もや、正直と、忍耐と、誠實との、よろこばしい勞働に親しむ日が來た。

彼は、遂ひに始めの目的通り、三丁步程の耕地を統一することが出來た。始め激烈な反對をした石上家も、今は喜こんで、否却つて向ふから望んで彼の希望を贊助したのであつた。

（俺れは隨分長い間苦しんできた。しかし、そのお陰で、天啓によつて、今のこの大聖の境地に上ることが出來たのだ！　俺れは勝利者の自信を得た。俺れは、まこと一つの線を超したのだ）

――そう思ひながら、彼れは自己の農園に、汗を流して、寂しげな秋のたそがれの光線を浴みて、働らいてゐた。

（俺れは、まこと新らしい農夫であつた。みんな、人々が、俺れのやうになるといゝ。いや、少しの間でもならはなくては嘘だ？）

桃の葉が、一片二片、ヒラ〳〵舞つて、地上に落ちた。

（さう！　こゝにも、眞理がある）

彼れは、桃の枯枝をポキンと折つて投げ捨てた。枝は變妙な音を立てゝ地の上に止つた。

（さう！　そこにも、又、眞理がある）

この時、村落の方から、悠々と歩いてきて、桃園の一隅に立つた一人の青年があつた。奥平である。彼は、眼光を鋭角に光らせ、蒼白い極度に昂奮した表情をしてゐる。

彼は、裕道の姿を見ると、一散に駈け寄つた。

「大見原氏！　大見原氏！」

裕道は、矢庭に奥平の肩を摑んだ。「どうした？」

「大見原氏！　僕は愈々滿洲へ行かうと思ふ！　亞細亞大陸を踏破するために、先づ北支那へ出掛けやうと決心した‥‥今夜行くのだこのまま‥‥」

奥平は、ぢいつと裕道の眸を見詰めた。

一分、二分、二人は七分間見合つてゐた。無音の中に、二人は微笑み合つた。力と、力と力とが、相通ずるやうに思はれたのである。裕道は、奥平の肩を離して、きつと立つた。

「君が、支那へ行くことは、至極いゝことだ。俺れは讚美する」

夕べ近い光りが、二人の横顏を赤く照波する。力強い聲はその中を、鐘の音と調和して流れる。

「君は何を持つてるね？」

「僕？　百圓家の金を持つてきました！」

「いや！　金ではない！‥‥その、君の第一義なものさ！」裕道の聲と眸には、奥平の底まで徹する鋭どい彈力があつた。

と、奥平は、緊張した顏に、自信を表はした。

「僕には、貴下の影がある。僕は實に正しく信じてゐるのです……きつと勞働します！　きつと努めます！　きつと祈ります！　そして、きつと感化させます！　どんなに離れても、僕は貴下を思ふのです。そして君を知ります。知つて行なひます。

……僕は、君なしでは生きて行かれません！　僕は君の一部だ。許して下さい！　僕は、實にさう思つてゐるのです。僕は前から君が好きであつた、堪らなく親しい感情を持つてゐました。僕は君を信愛してゐました。

大見原氏！　大見原氏！　あなたは、あんな立派な行爲を次ぎ次ぎになされた……それだのに僕は、僕は十九才にもなつて、一向に何事も爲し得ないのです。そして、只、只戀に破れたのみです。大見原氏！　僕は、僕はこのまましいつとしてゐれば、死んで了ふより他ないのです！だから、僕は支那へ行きます。そして貴下に恥ぢなくなります！　大見原氏！」奥平の聲は誠意に震へた。

「よく言ふた！　おゝ、奥平よ！　君はなんといふ好きな男だ！……實はね。僕も支那へ行つて見たいのだ！　亞細亞大陸へ踏み入つてやり度いのだ！　が、俺には、未だ行く餘裕はないのだ

！　俺には、餘りに此處での仕事が多過ぎるのだ。俺れは働らかねばならない！　俺れはこんなに廣い畑を許されたのだ！　俺はこゝに教へねばならない。

ね、奥平よ　どうぞあの支那人や印度人を救ひ上げて與れよ！　俺が、どんなに、どんなにあの人達のことを考へてゐるかといふことをね、傳へて吳れ！」

太陽が山の向ふに隱れた。翳は暗く山の根から押し擴がる。

「僕は、出掛けます！　そして、きつとあの人達を救ひ上げます。大見原氏！　僕は行きます！」

奥平は、涙を飲んで沈痛に叫んだ。

「行くのか？　奥平よ！　おゝ、日が暮れるからなァ奥平よ！」

裕道はぢいつと、奥平の日の下を見詰めた。

「行き給へ！　そしてうんと働らき給へ！　奥平よ！　疲れたらうね。疲れたら、きつと俺れのこゝへ歸つて來いよ！　俺れはきつと待つてゐるからな！　奥平よ！」

男と、男との意志は相通じ、涙は二人の眸に熱く溢れた。萬感は交々胸に迫つて、叢くる所を知らなかつた。あゝ、そして握手し、相對峙しつゝ、見詰むる視線よ！　それこそは、力を傳ふ

る悲壯な光景ではないか？

「失禮！」

「さようならよ！」

奥平は、殘照を浴みて、停車場の方へ歩いて行つた。その姿は、細く力ないやうであつたが。

振り向いたその顔は、信と力に充實してゐた。

（奥平よ！　壯健なれ！　第二の新らしき農夫たれ！）

裕道はいつまでも、いつまでもそこに突立つてゐた。彼の姿は、祈念しつゝあるものゝやうだ。

空には、星が輝やき始めた。

第十二章

その現在の堆積たる苦惱の十九箇年の若き日を、苦しみ惱みつゝ生きて來た、新らしい農夫、大見原裕道は、遂ひに、その二十歳の十月に於て、最も、宇宙に介在する根本的な理想境の、一分野に到達し得たのである。而も、彼は、今やその成果をも見んとしつゝある。

彼は、今日も、その與へられたる農園の整理に、激しい汗の勞働に身を委ねてゐた。汗！汗こそは實に勞働の神聖を僞りなく表現する神の暖かき涙ではないか？喜こばしき人間の朝露ではないか？如何に、汗は、その强壯なる勞働者の肉體に、美くししく宿ることであらうよ！人々は、汗のある中は働らくべきである。汗さへ枯れた時には、人よ！安らかに休息し給へ！

（自覺せるよろこばしき勞働は神聖である。しかも、それは生活の一分に過ぎないものである。苦痛なる勞働こそ、生物を殺し、神の意志に反するものである。何故なら、過激なる勞働は、肉體を疲らし、精魂を萎縮せしめ、遂ひに人をして死にまで墮落せしめるからである）

彼は、鍬を置いて腰を伸した。遙か東方の富士山には、初雪が白く積つて、山容をして、彌やが上にも崇高ならしめてゐる。

あゝ、秋の、小春日和の遠山は紫に霞み、空は青々とよく晴れてあり、しかし、その暖かな陽光の影には、最早、うら寂しい、自然の、決則の、意志の表現が、ひそやかに巣喰つてゐた。

吹いて來る風も、何んとなく寂しい。そして裕道の心を獨り泣かせる。

(俺れはどんなに懷疑したらう! 俺れはどんなに追究したらう? しかも、一歩踏み入つた今日に於てさへ、この空に、この地上に、存在する、宇宙の心と、自分の心とを、眞理のために、追究し、研究するであらう!)

彼れは、右手に鍬の柄を突き、きつと、空を見上げて吐息した。

彼の顏面は、あの暴風雨の夜から、こんなにも淸純無垢な美少年として、復活したのであつたその上、內心に燃え上る、信と力との哲學が、美くしい瞳に迸り出してゐる、彼のやさしい微笑のみは萬人を引き付け、彼の一言、は虐げられた人々を、立派に救ひ得る確信の微笑のやうに感じられた。

(おゝ！　おゝ！　おゝ！)彼の聲は、天地に微妙な旋律を與へた。

彼は、軀を動かし、瞑目して過去を思ひ出して見た。彼の幼年小年時代の無邪氣な平凡な儚ない日が憶はれた。(第一章參照)そして少年期から青年期へ移つた日の、あの激動が憶はれてきた。それ以後、五箇年の歳月の中に、自分が如何に成長し、餘りにも人間的な人間として、神我と獸我との間にいぢらしい彷徨をつづけたことであるか？　しかも、一つの線を越した今は、勝利者の、必然的な、嚴粛な快感に、萬象を見下ろすことが出來るのであつた。

自然は、最早、實に秋そのものであつた。田の稻は黄色に飽熟して、そよ風に重たく搖れ波打つた。

「豐年だね！　殊に若年若夫婦のは……いゝ！」裕道の聲は天の何處からか下るものゝやうだ。若い農民は、何年振かの喜こばしい顔を輝やかし、若嫁は、赤い顔をして黄金色の田を見遣る。

「豐年ですよ！　お蔭様で……」

「君は、それに祟られちや駄目だよ！　そんなものに直き飽慢しては駄目だよ！「お藝の觀念を忘れちや駄目！――」

だたつ廣い曠野の端へ、一塊りの黑いものが動き出した。彼は、不意と、或る一種天啓的な直感によつて、きつと、その黑いものを見詰めてゐた。と、黑い塊は、次第に田の中の道を、此方に向つてしづ〳〵と步いて來るやうだ。

遂ひに、その黑塊は、立派な七人の人間として、彼の眸に映じてきた。

七人は、今日にて、最早三日間この新らしき農夫の曠野に通ひ、大見原裕道の道を聞かむとするものであつた。彼等は眞に、新らしき宇宙の耕作者、大見原裕道の七使徒となるべき者であつた。

「おゝ、大見原樣よ！　どうぞ救けて下さいませ！　私はどんなに、貴下樣をお慕ひ申して居りますやら‥‥」

「今日で最早三日目で御ざいます！　裕道樣よ！　これ、この通りで御ぜいます！」

一人は大學生、一人は女學生、一人は若き農民、一人は老いたる軍人、一人は貴族の令婦人、一人は商業的政治家、そして一人は長い間社會を逃れ避け行きつゝあつたうら若い青年であつた

「どうぞ、大見原氏よ、私を憐んで行くべき道を教へて下さい！」
貴婦人は、そうやさしく涼しい聲で言つた。
「そう――そうかね…まこと君等のためよろこばしい。ぢや、俺れの偶感は、ふとあの天に語るやうに話して上げやうか……」
大見原裕道は、枯れそめた草の葉の上に相當した尻を下ろし、附近の使徒に判るやうに顧々と教へ語り始めたのである。
一、「親愛なる人衆よ、爾等自然のあるがまゝに受け、なるがまゝに行けよ」
宇宙は、必然と嚴肅と充實と無限ではないか！　人間は、こゝに何するものぞ？　只それ宇宙の一部分に過ぎぬ。
何物も空所より生ぜず。又、同一なる根原を有す。
空はあんなにも廣く、野に花は咲き、葉は茂り、森に小鳥啼き、水は永遠に低きに流る。爾等の行く所に、神は、汝等の必要なる果實を、惠みてあり、赤く、黄色く、熟りてあり。

見よ！　鳥も、獸も、汝等の如く冗苦せざるなり。汝等の如く、自然に反逆して、飽くなき道に飛ばざるが故のみ。

彼等は、如何に、單純に、正直に、又、忍從と謳歌との生活を營みあるか？　人間よ、自らを萬物の靈長なりといふなかれ！　汝等は、小鳥と蛙より、數等遠ざかりし者なればなり。歷史は只それ、宇宙の原則、神のみ心の運行か？

人間よ。生物よ、汝等は只それ、働らき、休み、愛し憎み、善と惡に、相對して悲しみ又喜こび、生れ、死ぬなるべし。

されば友僚よ！　偉大なる平凡者たるべし。

二、『爾等よ、强固なる己れの意志を深めて、自由に宇宙の眞理へ復れよ』

人間よ、殘忍なるやいばを向くるなかれ。されど彼等は自己のなす所を知らざるなり。

苦しめ！　苦しみの中に歡樂あり、働らけ！　働きの中に喜こびあり。しかして、すべてに注意せよ！

爾の意志強固なる時、爾はすでに神と共に立ち、決つして死にまで墮落することあらざるべし。
野に立ちて、獨り唄ふ者よ！
街頭に立ちて勇敢に絶叫する者よ！
汝等、是非の正斷をなし得べし。
汝の自我燃え切りし日に、汝は、他にて須らくよし。
星は天空に輝やきてあり、日は道を走りてあり。
汝等よ！　眞理の追究は如何に意義あることだぞ！只、汝等よ！　汝等の意志の强固なるを要す。小さき軀を跪きて、太集の神に祈れよ！

三、「人生を得る者は凡人にして、藝術を得るものは天才に限る」
吾人は須らく藝術家ならざるべからず。しかし藝術は直裁ならざる可からず。
生活の藝術、藝術の生活、之れ天才の行く道なり。
汝等よ、大學は平凡者養成所なるを知れ！

君はこの草の色を何んと思ふか？何に綠だと言ふか？
友よ！　おん身は如何に思ふ？　黃色だつて？　君等は、只それにてもよしか？
君等よ！　さらば木の根に濕る水分と、大河を流るゝ水と、何づれが力强きと思ふか？　勿論大河なりと答へるならん。
吾れ、敎へむか？「私はこんなであると思ふ」と答へよ！
殊に野にある農民よ！　君等の勞動をして、美くしく、樂しき表現たらすべし。勞働はよろこばしき生活の一部なり、天才よ！　自由に唄へ！　勇敢に絕叫せよ！
あゝ、始め、汝の前に、絞首臺は聳え、汝の周圍に慘忍なる睥睨視してあり。されど天才よ！屋內に平凡生活を得る凡人を恐るゝなかれ！　奮然として汝の道を行へ！
やがて、太集の神は、あらゆる時空をおいて、汝の中に巢喰ひ、汝の道をして、大成せしむべし。
光りは、無限より、無限に走りて照明す。凡人は闇を知り、天才は光明のみの天に上る。しかして、汝の道、やがて、人衆の上に行はるに至るべし。

四、「爾等よ、あらゆる偏見を忘却して、新らしきこの道徳へ走れよ!」

忠君か？　孝子か？ 愛國か？　人間苦の人類愛か？　禁欲か？

吾が人衆よ、自由と放從とは、同一なる根原を有す。

人類は、有ゆる時空をおいて性愛し得べし。愛こそは、人類の、最も偉大なる在存の意志の産物なり。

我等は、何人をも愛し、又、愛せらるべし。レーベの究極は性交をなすにあり。人生の究極又隨つて相同じ。姦淫は、爾等を倦漫の追窮に自殺せしめ、性交は、爾等を永遠なる道に印す。

しかして、嫉妬は奴隷の境涯より來ることを知れ！

我は總べての快樂と、總べての苦痛とが、直接に、太集の神より出づるものなることを信ず。

されば、我自身に取りて、快樂と苦痛と共に隔たることなし。

利己を基調としたる利他を說くべからず、眞愛は、彼れ我れを憎むことあるも、愛する日あるべきを憶ふべきなり。

世界の人類は、純一平等に、和合普遍の道を造るべし。

汝等よ、宇宙と人生の本然を思索し、敬神愛人の道に歩むべし。
怒つてはならぬ。
姦淫をしてはならぬ。
誓ひを立てゝはならぬ。
悪に敵してはならぬ。
戰爭をしてはならぬ。

五、「さらば爾等よ、神祕と現實との、渾然融合したる境地に、神の如く立てよ！」
すべての子等をひかへ、吾れ神の如く立てり。子等よ！　吾が掌に觸れ―　涙を拭きて面を和らげよ！
汝等、吾れを離るとも、すべて一時たりとも我が言を想ふべし。
あらゆる時空をおいて、忍從の赤き心を燃やし、我れ大聖の位置に立てば。
大聖とは、神の位置にある人間の謂なり。人間は何人も大聖することを得。
爾等よ！　光りの野に伴なひて、大聖せよ！　宇宙には只光明のみあり。決つして闇あるなし

見よ！　晝は太陽、夜は星辰の反射あり。又、心輝やきてあり。

汝等よ、美くしき眸を見開らきて、現實をも見よ！　空想も憧憬も此の現實を起點として始めて生きるものなるを。事實。自然と人生とのいかに滾々として汲めども盡きぬ味ひのあることよ。現實に根底を置き、神秘に上昇する外、藝術の的確なる底根あるなし。自己の生活に對する情熱その時代に對する情熱がそこから生れ。新らしき眞善美への表現と創造の歡喜がそこより生るゝなるぞ！

天國と神の正義とを求めよ、總べてのものは隨つて得らるべし。しかして神近きに歩めよ！

六、「爾等、苦惱の時、吾が丘を憶ふべし」

求めよ！　さらば與へられん。尋ねよ、さらばあひ、門を叩けよ、さらば開らかるゝことを得ん。蓋、すべて求むる者は得。尋ぬる者はあひ。門を叩く者は開らかるべければなり。

爾等よ、その子と老人が、飢え渴くごとく飲食を求めむに、何んぞ食はれざる沙礫を與へんや汝等よきパンと井泉水とを與へん。ましてこゝに達したる我れは、求むるものによきものを與へ

ざらんや。

されど爾等よ。我れは一介の平凡なる農夫に過ぎず。惡と善とを等有せる人間なり。而して、如何にその過去に於て、惡事を働らき來しことであらうよ！　されど、偉大なる平凡者なるぞ苦しみ耐へ來し若者なり。光りが心に充滿したる。

哀れ、虐げられ、疑がひ、嘆く者よ！　苦惱の時、吾が丘を憶ふべし。

天空を見よ！　しかして安らかに眠れ！

人は何んのために生れてきたのか？

この疑ひのために考へずに居られる人間よ。不可解のため酒を飲み姦淫する怠墮なる人間よ。それから堪へられなくなつての自殺者。自殺もなし得ざる哀れなる人間とが生るゝなり。人衆はすべてその中の一人よ。氣まぐれな生と死の愛を考へるな！　空虚な血と死を弄ぶなよ！　悲しい日があつたとて、淺い智慧で嘆くな！　汝等よ、他人の中の神を憶ひ愛せよ！　思ひは遠く流れて。融合し。電波の如く中和することであらうぞ…想ひこそ相通ずる力にてはある。

七、『しかして、爾等よ、かくしてこの道を敎ふべし』

あゝ、我が前にある七人の使徒よ！　爾等すべてのものに注意して、我が言を敎ふべし。一粒と雖も、この世界に無意義に生存せるにあらず。又、これを消失せしむることを得ず。死骸の中に蛆は湧き上りて、墓場の草は肥えてあり。

爾等よ、決つして憎みて敎ふることなかれ！　憎しみは、大聖を沈倫せばなり。愛こそ本然の味方なるぞ。

一人にて、各七人に敎へよ！　七人は、又四十九人に敎へん！

さらば反逆者の勢ほひより、味方大勢となればなり。

しかして、爾等よ。道を變ふるなかれ！　只、すべては、大集の勢ひに隨ふべし、これ神のみ心なればなり。

語り了へ、左手の掌を天に向け、右手を七人の面上にかざし、靜かに瞑目した大見原裕道の姿は、實に萬象の力を具有する神そのものゝ一縮像の感があつた。

恰かも、日輪は彼の頭上に輝やき、その黄金色の光線を放射してゐた。

七人の使徒は、怯々と面を上げた。と、裕道はそれに氣づいてニッコリやさしく微笑んだ。ぞつとする懐かしさ、嬉しさ、慕はしさが、七人の胸に沁み込んだ。彼等は、仰いで彼れの、秀麗に靜かに暖かな涙を流してゐるやうな、詩味、宗敎味深い淸純な眸に出會つた。

「君等は、今日から二十一日の間、この丘へ來て、そつと斷食修業し給へ！　俺の道が絶對ではない！　俺れは、只、一ヶ日の長として、これだけを參考のために物語つたのだ。俺れを偶像に祭り上げるな！　すると、今までのことが、何んでもなくなつて了ふ……。

君等は、君等の中にある神の國をよく考へ給へ！　そして立派な君等の新らしい道を發見して歩き給へ！」

裕道はすつくと立ち上つた。そして鍬を取り、ぢいつと四邊を見廻した。

「見給へ！　草木は、自然の法則に忍從してゐる！　調和してゐる」

七人の人々も立つた。そして、躍り上る內心の力に、全身をブル〱震はせた。

「有難う御座いました。御座いました」異口同音に言ひ始めた。「私達は、貴下によつて新らしい

力を得ました、よろしゆう御座います、きつと、又、自分でいゝ道を探し出すで御座いませう？……では、これで失禮致します！」

七人は、丁寧に禮拜して、慶ましやかに、親しそうに物語り乍ら、元來た道を、古い家の方へ歩いて行つた。

裕道は、ぢいつと立つて見送つた。と、窘迫しそうな感情が押し上つてきて、余りにも人間的な彼を泣かせて了つた。

（彼等はどうなるだらう？　矢張り、固性して定められた運命に引き摺られて行くのか？……俺れの言葉が、どれ程彼等に影響するか？　しかし、彼等は、聞かなかつた前よりはいゝであらう！）

彼は、又、激しく鍬を振り出した。汗が出てきた。そして町から工場の汽笛の鳴つてきたのも知らなかつた。

彼は、少時の後、顔を上げて、向ふの端へ消える人達の影を見た。

「あゝ、これもみんな人生なのだ！」

日出づる島に住む人々が、日待ちしてゐた新嘗祭が、秋の中頃になつてやつてきた。村里の上には、豊年のよろこばしい賑はひが、キラ〳〵と陽炎のやうに流れてゐた。村里の子等は、新らしい濃厚な色彩の衣物を着て、うれしそうに打ち興じ乍ら、家から家に、祝ひ遊び轉るのであつた。

實に、島の住人達の主食である米は、何十年かにない豐熟であつた。隨つて、町の次第に不景氣になつた時に於て、田舍の素朴なる農民達の上には、輝やかしい一時の勝利が出現したのである。

何處も、何處も、豐年の話しで持ち切つた。新らしき農夫の上に、歡喜の光躍は踊り狂つた。遂ひに、彼の願念が惠與せられたのであつた。

(主よ！ 主よ！ と、願ふものは幸ひなるかな。その者は與へらるべければなり) 家々からは萬歳の感謝が、天高く立ち昇つた。

祝へや！ 祝へ！

諸共に。

今年は
うれしい萬作ぢやァ……。
夕方、子供等は、軒燈の明るく點いた村の道を、涼しそうな、美くしい澄んだ聲で合唱し乍ら鎮守の森の方へ、樂しく打ち連れ立つて、歩いて行く。親達も、微笑み乍ら、一緒に歩いて行く。新らしき農夫、大見原裕道は、薄暗の中に白い顔を浮かせ乍ら、人達と群れて歩いて行つた。
「うれしい。うれしい。こんなにうれしいことがあるか？」
家々からは、晴れやかな笑聲が、高らかに聞えて來た。
「みんなよろこんでゐる。何んて嬉れしい夜であらう！」
彼は、輝やかしい面を仰いで、空を見上げた。星晨も、地上の幸福と、相和するものゝやうに煌々とまたゝいてゐた。そこには、何物かの力が、神秘な流れを通じてゐるやうであつた。
「神の國と正義を求むる者よ、如何に幸福なるか！」
彼の內心に、熱烈な感激の情がこみ上げてきた。と、彼の瞼が熱くなつて、つと、涙が頰を彼れ傳ふた。

彼は鎭守の森へ着いた。祝ひの大太鼓は、ドドンドンドン〳〵、勇ましく浮々と、夜の空氣を顫はせて、遠く村の上を響いて行つた。

道々に火は赤くともされてあつた。そして人々は三三伍々打ち連れ立つて、森の方へ歩いて行つた。

鎭守の森には、吉例の宮相撲があるのであつた。それは、村の青年達が、一年に一度の晴れの場所であつたのである。

裕道が、青年團の幹部のゐる方へ歩いて行くと、

「盛大にな！」といふ團長石上の聲が聞えた。「やァ！　今晩は！」裕道は男性的な力强い聲で言つた。「恐らく盛大にな！　諸君よ！」

人々は彼を見た。そしてよろこばしく禮拜した。

「大見原君！　先刻から、先刻から貴下を待つてゐたんですよ…………貴下は東方の横綱ですぞ！」石上は、昂奮した浮ずつた聲で震へ乍ら言つた。

「しつかり、華々しく取り組んで下さい！」

「勿論！」裕道は昂然として叫んだ。「勝つがためにな！」

東方の力士は、自分の方の横綱を見た。そして、その美くしい血色の赤く輝やいてゐる顔を見た。裕道は、その黒い眸を靜かに睜つて、それ等の人々を見遣つた。人々の眸と出會つた。と、ぞつとする力強さが、人々の全靈に感じられた。（きつとこの人は勝つ！）

人衆は、次第に宮を差して集つてきた。太皷は勇ましくドン〳〵ドン〳〵鳴り渡つてゐた。

小さい男子等の、角力は最早始められてゐた。一段高められた土俵の上に、全身の力と凡ゆる知腦とを絞つて、一生懸命に角逐を爭ふそれ等少年の姿は、遠い幽幻な物語りを、目の前に見るやうであつた。若い柔らかな、少年の肉體と肉體とは、激しい力を以つて倒し合つた。勝つた少年は嬉しそうな歡聲を上げた。

裕道はぢいつとそれを見た。そして、土俵場近くへ歩いて行つた。

「しつかりやれよ！　太平洋！」彼は、少年の柔らかな肩を親しそうに抱いて頬摺りし乍ら、言つてやつた。

「エ、」少年は美くしい眸を見上げて微笑んだ。子供達は彼の周圍に寄り集まつてきた。そして

彼の手や衣物や帶に掴まつた。
「大見原さん！　僕きつと勝ちますよ！」
「おゝ勝つてくれよ！」
彼は、子供の頭をやさしく撫でゝやつた。
「大見原さん！大見原さん！貴下は、僕の方の横綱だねえ？　横綱は一番强いんだらう？」
「そう……そうだよ！　東方の横綱だよ！」
彼は、やさしく微笑んで答へ乍ら、眸を上げて、土俵を犇々と取り巻いて、一つ一つの勝負に打ち興じてゐる數千の見物人を見廻した。
人々もふと、取り組んでゐる少年達から眼を離して、裕道の方を注視した。そして、一人の偉大な青年にまとはりついてゐる少年達の群を見た。
「何んであらう？　あれ！　あんなに……」
他村から、遠く見物に來た人々は、不思議さうに呟やいた。
「あれかね！　あれは、村の模範青年だよ！　先達つて、そら、新聞へ出た、あのえらい青年だ

よ！……あの人には、あんなに子供までなついてゐるのだよ！」村の人々はさう言つて誇りがに言ふのであつた。實際村人には彼を出したといふことは、一種の誇りであつたのである。

「さうかねえ……。偉い青年だねえ）人々は驚異の眸を瞬つた。

處女達は、彼の姿を見ると、一勢に居ずまひをなをした。彼女等はいつでも、彼れに逢つた時内心の意志以上の力に依つてさうするのであつた。（あゝ、あの方が、今夜もいらつした）彼女等はホッと吐息した。

裕道はそれに氣づいた。が、何故處女達がそうするのであるかは、久しい間不可解な問題であつた。戀！　さう言つて了ふことも出來ない問題であつた。が、自分が、何人かを愛して了つた時、この處女等が、どんなに失望するかを考へると、胸が痛くなるのであつた。（しかし、人間は時の下に、直ぐ青春を掠め去つて了ふではないか？）

少年達の取組みは次第に取り進んで、最早青年の番がきた。拍子木がチャキ／＼鳴つて、少年達は退下した。

「大見原さん！　どうぞ仕度部屋へ！」

後方で石上の聲が叫んだ。彼は振り返つた。そしてニッコリ微笑んで頷いた。彼は靜かに歩きかけた。と、この時、人々の群の中に、美くしい昂奮した乙女の注視を感じた。

『井戸榮子！』彼はハッキリとその面を見ると、忽ち、一種言ふべからざる熱い電波やうのものが全身に沁み渡るのを感じた。彼は俯向いて仕度部屋へ歩いて行つた。

榮子は、裕道の視線と、パッタリ會つたので、恥かしくしかもうれしかつた。彼女はおいつと裕道の姿を見送つた。

彼女は、傍らにゐる友のふみ子をさへ意識に置かぬ程、熱烈に裕道の姿に見入つた。彼女は、縋りつきたいやうな衝動にかられた。

彼の姿が、仕度部屋へ消えると、彼女はホッと吐息した。彼女の耳には、數千の觀衆の喧騷が聞えなくなつて了つた。そして、只、大見原裕道の跫音ばかりが聞えるやうであつた。

彼女は、先刻、神前でのことを思ひ出した。……彼女は、あの雷雨の日から、裕道に對してかすか乍ら戀を感じてゐたのである。あの河での日からは、尚更ら、心が裕道の方へ近附くのを覺

えた。彼女は、戀するもの丶敏感を以つて、裕道の風評は決して聞き逭すことはなかつた。彼女が、裕道の勇敢な行動を知つてから、彼女の戀は、遂ひに具體化して了つたのである。が彼女は受身な女性であつた。

殊に經驗のない若い女學生であつた。で敢へて自分から告白する勇氣がなかつたのである。彼女は、どうかして、自己の思ひを男に知らせ度かつた。そして男から要求され度かつた。彼女は清澄な心を抱いて、今夜、神前に立つた。

（神樣！　神樣！　どうぞ人々を幸福になさしめ給へ！　そして、私の家來を安全になさしめ給へ！）彼女は、虔ましやかに跪づいて祈禱した。彼女は眸を上げて、奥の方にチロチロ燃えてゐる燈明を見た。彼女は又、靜かにうつとりと瞑目した。（神樣！　神樣！　どうぞ私を幸福ならしめ給へ！……そして、私の戀を遂げしめ給へ！）が、彼女はハッとして髮の毛まで眞赧になつた。彼女は、この最後の祈禱に我れ乍ら、不意に氣づいたのである。彼女は立ち上つて人々を見た。そして神前の百段を足早に下つて行つた。彼女の心臟は激しくドキドキ波打つた、彼女は兩手を胸に組んで、強く乳をかい抱いた。

（でも、きつと、神樣は、私の願ひを聞いて下さるわよ！　私は眞劍にお祈りしたのだもの）

彼女は、若い處女の純眞な心でそう思つた。彼女はそこに、又立ち止つて、お祈りするやうな氣分になつた。

「どうしたの？」と、文子が、後から馳け寄つて心配そうに太い聲で訊いた。

「イエ！　何んでもないのよ！」で、彼女は殊更らに聲高く笑つた。戀のための噓僞で……。

「さう！　それならいゝけれど。だつて私ビックリしたわ！　餘り突然立ち上つた人だもの？」

「エ、、すまなかつたわね」榮子は、急に大膽になつて落ち付いた。彼女の內部の强固な意志がピリッ！と、彼女の顏面を緊張さした。

……彼女は、今がその時の連續であることを考へた。彼女のその熱は、益々燃え上つて行くのであつた。

拍子木が、又チャキチャキチャキ鳴り響いた。と、人衆は、一勢にしんと鳴りを靜めた。

幕內の土俵入りが華々しく行なはれ、引續いて三役の土俵入りがあつた。

青年達は一心に勝負を爭うた。

榮子は、それ等の取り組みには、一向氣が進まなかつた。彼女は、裕道の姿を熱心に物色したのであるが、見當らなかつたので、落膽して了つた。(あの方は取らないぢやないかしら?)そして、他の青年達の一勝負毎に上げる觀衆の歡聲も、彼女に取つては、彼がないために何んでもなかつた。

……この間、裕道は、仕度部屋で、敏捷に土俵入りの仕度をしてゐたのであつた。

「大見原君! 成る可く輕く願ひますよ!」

相手の西方の横綱は、黑い頑丈な體軀をゆす振り乍ら、低い聲で言つた。

「成る可く眞劍にな!」裕道は直ぐ答へた。裕道は自分より背の高い肥つた相手の軀を見た。實に相手の軀は、彼れを一突きに突き倒して了はふとする意氣に漲つてゐた。

(俺れはお前にや負けないぞ! 俺は軍隊で練へられて來た。俺はお前より大きい。それにお前は病み上りぢやないか?)

(よし! 俺れは、普通日本人よりは大きいが君よりは確かに小さい。しかし、どうして負けら

れるものか？　俺れのこの見えぬ力を知れ）默々として仕度する兩人は、恰もさう叫んでゐるものゝやうだ。

遂ひに最期の彼等の一戰の時が來た。

三度び、拍子木が神聖な音を震はせた。

數千の人衆は鳴りを沈めて、片圖を飲んだ。東西の兩横綱は、悠然として、東西に別れて現らはれた。

人衆は、一時にガヤ〳〵と喧躁を始めた。

「どうだね！　西方の力士は。色が黑くつてあんなに大きいよ」

「東方は一寸小さいな！　色は白いが…何に年が若いつて？」

「西方は兵士に行つて來たからな！」

「東方のは模範青年かい？…でもな、いくら偉い行ひをしたつて、それと角力とは違ふからなア」

こんな會話は期せずして無數に交はされた。呼出しは扇子を開けて土俵へ出た。兩横綱及び幕

內力士は東西の溜りに控へ、四木柱もきつと控へてゐる。
人衆はひたと話を止め、ぢいつと聞耳を立てた。
「ひんがし……、大聖道……大聖道ォ……」
「にい……し、日本海、日本……海ィ……」
（オヤ！　變んな名だな！　大聖道。ハテ聞いたこともない）
（日本海！　さう、日本海！　しつかりしろ！）
東へ大聖道、西へ日本海が突立つた。一歩土俵へ上つた。
日本海は、一寸狼狽したが、四肢を踏んだ。大聖道は、落ちついて、土俵の上に立ち、きつと姿勢を整へてから、ぴゆう〳〵腕を振り始めた。
（變んな角力取りだな！）と、人衆は考へた、大聖道の全身をば、强烈な或る力が、全速力を以つて馳けめぐつてゐた。彼はそこで手を垂れ、仰いで天を見た。彼の輝やかしい顔を、光射が明るく照らした。彼はよろこばしくニコリ美くしく力强く微笑んだ。
（落ちついてゐるな！　微笑んだりしてゐる）

榮子はぢいつと、裕道の樣子を見詰めてゐた。その一擧一動を注視してゐた。(神樣！　神樣！どうぞ裕道樣を勝たせ給へ！　神樣！)行司は靜々と土俵の中央へ出た。

「此方、大聖道！：：、片方、日本海！　さア、見合して！　お互ひの隙を取りませう！」

「大聖道！　きつと勝て！」

「日本海！　しつかり頼むぞ！」

「希はくば行司公平に！」

人衆は各々聲を絞つて絶叫した。

行司はサツ！　と軍配を引いた。

おゝ、男性の强壯の肉體ががつちり組み合つた。

「ハツキヨヨイ！　ハツキヨヨイヤ！」行司は、土俵を廻り出した。

うむ！　うむ！　肉體と肉體とは、全身の勇を震つて倒さうと努めあつた。

「ハツキヨヨイ！　ハツキヨヨ！　後がない！」實に、大聖道は、ヂリヂリヂリと、後へ退り始めた。彼の額からは、珠のやうな汗が流れ始めた。うむ！　相手は。こゝぞ！　と押し寄せ

てきた。大聖道は遂ひに土俵際まで詰め寄せられた。

ハッキヨヨイ！　ハッキヨヨイ！　殘つた！　殘つた！　ハッキヨヨイ！　殘つた！」

（神樣！　あゝ神樣！）榮子は泣きさうな思ひで言つた。そして、チッと苦しさうな裕道の顔を見詰めた。（勝つて頂戴！　勝つて！）

「ハッキヨヨイ！　後がない！　殘つた！　殘つた！　殘つた！　後がない！」

行司はきつと大聖道の足下を見据え出した。後がない！　後がない！

相手は益々强烈に押し寄せて來る。彼は、きつと齒を喰ひ絞つた。顏の筋肉がピリッと痙攣した。

後がない！　うむ！　彼が唸つた時、一人は忽ちドシンと激しい地響きを打つて、土俵外に打ち倒れた。

「大聖道！」行司は、彼の頭上に打扇を上げた。彼は土俵際にニッコリ微笑んで立つた。彼は打捨りをやつたのである。

「大聖道……」

わァ……わァ……といふ歡聲が一時にドヨメキ上つた。しばしは大騷ぎであつた。

「勝つて！　勝つて！」榮子の眸につと涙が光つた。わァうォ……といふ數千人の觀衆の歡聲は强深な轟音となつて、村の上に、日本の上に、全世界の上に、宇宙の果てにまで鳴り響くものゝやうであつた。實に此の人衆が大聖道に浴びせる歡聲は、眠つてゐる世界の人衆を覺醒せしむるものであつた。

彼は土俵を降りた。そして相手の肩を摑んでそつと引き起した。

「怪我はなかつたかい？」

相手は氣まり惡さうに笑つた。

「さァ、賞與を戴かうよ！」

かくして、大見原裕道は、こゝでも勝利を得たのである。

相撲が了へた時、彼は平氣で言つた。

「早く後を片付けて了はふよ！」

榮子と、ふみ子の二人は、人々と共に歸り始めた。榮子の心は、歡喜に燃え上つてゐた。今晩程愉快な日はないやうに思へた。

「私の家へ寄つていらつしやいな！　御馳走してよ！　榮ちやん！」

「でも！……あゝ、私今貴下の家へ行くわ！」そして、榮子は文子の家の方へ歩いて行つた。

彼女等からは、時々愉快な若い笑ひが、夜の空氣の中に爆ぜるやうに湧き上つた。

二人は、ふみ子の家へついた。

人々が歸つた後で、裕道と、石上とは、片付けを濟まして森を出た。

青黑い夜氣が、シツトリとさわやかに熱つしきつた彼の五體に浸徹つた。

森の後ろから月が現らはれて、恰も黄金の卵のやうに中空へ懸つた。と、その幽幻な光りが眞黑な地の上をば音もなく辷つた。

軒の燈りは消えて了つたが、家々の中からはまだ高い話し聲が洩れて來る。

「裕道さんが……、負けるかと思つたよ！　よく勝つたね！」

裕道は嗄れた女の聲を聞くと、ニッコリした、

（君は勝つたのだよ！　大見原氏！）石上はさう思つてほつとした。

「ぢや、これで僕失敬する。御苦勞でした」

「あゝ、左様なら！」

石上は、自分の家へ入つて行つて了つた。そこには、腹の大きくなつた彼の妻が、夫の歸りを待つてゐた。若子は町へ嫁入つて行つて了つてゐた。

裕道はふとそれを考へた。そして、喧騒後の一種の寂寥に打たれてきた。

（俺れの時はいつ來るのかしら？）

彼は仰いで月を見た。清澄な月光は、彼の顏面を白く透るやうに美くしく照らした。

（月よ！　地球近くの月よ！　お前は太陽の光りを受け、そして光つてゐるのか？）

空はよく晴れてゐた。そ、秋のそよ風が、ハラ〳〵と葉を落した。

木々の半面は明るく、影は眞黑に聳えてゐた。彼は自分の影を見下ろし乍ら、そつと歩いた。

そして歩き乍ら、密のやうに濃く甘い空氣をば心行くばかり吸ひ入れた。

彼は或る辻まで行つた。と、傍らの小路から出て來る、二人の人影を見たのでつと立ち止つた。
「榮ちやん！　貴女は今夜どうかしてゐるのね！」榮ちやん！　といゝ名前を聞くと、あの雷雨の日の女學生、及びかの華やかな日光を浴み乍ら、岸の上に立つてゐた美くしい少女の裸體像が思はず彼の心に浮んだのであつた。
ふみ子と榮子は、彼の居る辻へ近寄つた。で彼れは一寸後退した。
「ぢやァ貴女！　こゝからお歸りになつて？」
「エ、、…あのもう遲いわね！」榮子は遣瀬ない聲で言つた。
「私がお送りしてもいゝけれど……でも、私だつて歸りが怖いわ！」
「あすこの丘が恐いことないでせうねエ、あの桃園のある丘が………」
「ぢや、私、お母さんと一緒にお送りして上げるわ！」ふみ子は戻りかけた。
「いゝえ！　いゝのよ！　すみませんわ！　そんなことして戴いては……」
彼女は辻へ出て四邊を見廻した。と、そこに立つてゐる裕道の姿を見たのでハッとした。
「今晩は！」彼女は習慣的に禮拜した。そして一度消えかゝつた火に、又點火しられたやうに眞

赧になつた。
「今晩は、只今お歸宅するんですか？」裕道はヂッと見ながら言つた。
「エヽ」と、彼女は一層赧くなりながら答へた。
「僕が送つて行つて上げませうか？ ……僕は歸りが恐くない！」
「いゝえ、どう致しまして」と、少女はビク〳〵し乍ら答へた。
「さうだわ！ 送つて戴けるなら、その方がいゝわ！」ふみ子は極力言つた。
「さうね？……ぢや、さうして戴きますわ！」榮子はそつと裕道を見上げた。
裕道は力強くやさしく突き付けるやうに微笑んだ。「いゝですとも！」
「さよなら！ ふみちやん！」
「さよなら！」ふみ子は、又自家の方へ歸つて行つて了つた。
裕道と榮子の二人になつて了つた。
「サァ、出掛けませう！ 僕の腕をお取りなさい！」と、裕道は勸めた。
榮子は彼と腕を組んだ。と、薄い肌着の下に鋼纖のやうな裕道の筋肉を感じて、一種異樣な不

安と昂奮とを覺えたのである。二人は月光の中で知らず知らずお互ひに推合ひ乍ら、又一歩毎にお互ひの肉體の彈力と温氣とを感じ乍ら、村を拔け、曠野の方へ歩いて行つた。傍らには、桃の木がユサユサと戰いてゐる。それから明るい地平線の彼方には、圃地や曠野が遙かにボーウと消えてゐた。

「まア、何んていゝお天氣でせう！」榮子はうつとりとかすかな聲で言つた。

「僕は、實に、かういふ夜が好きですよ！」と、裕道は榮子の耳元で私語いた。が、その聲は顫へてゐた。

土が足の下でズルズル崩れた。二人は倒れさうになつた。と、平生自分が戀ひしてゐる美男子の强壯な肉體をば、身にちかぢかと感じたりすることが、異樣に彼女を昂奮させた。彼女は、又點火せられた野火のやうに燃え上る感情を覺えた。彼女の顏は眞赤になつた。炎ゆるやうな彼女の腕は、裕道の腕の中で顫へた。

彼女は幾度も笑つた。が、その笑聲は短かくて且つわざとらしかつた。

二人は默々として桃園の横の白い路を丘の上へ歩いて行つた。

裕道は、地上の草や木に反射する月光を見た。そしてよつく見れば何處もかも明るいのに感動した。

彼れは連れの少女の眞白な喉首や眞黑な髪の毛や、平生の温雅と、內心の强固な意志を現らはした美くしい横顔を見た。と、幸福の感情がグッと彼の體中に浸徹つた。

榮子の內心の或る物と、裕道の內部の或る物とが、この廣い空の下に於て相融通し始めた。(遂ひに絕對の愛が燃え切る時が來たのである)

感情と感激との熱涙が、つと彼の兩眼に溢れ出た。彼は立ち止つた。そして高空に輝やく月や光流を仰ぎ乍ら、熱誠を以つて絕叫したのである。

「神よ！　心よ！　苦しあなたが存在するならば、只今のやうに、とこしへに、この少女が俺れを愛し、又俺れが彼女を愛することを希ひ奉る」

榮子は、裕道が止つたので顔を上げた。と、彼女の唇は思ひもよらず自づと、單純に、裕道の唇の上へ置かれたのである。彼女は眞蒼になつてブルブルと顫へた。裕道はそつと、彼女を抱きしめた。と、彼女のなよやかな生暖かい肉體が彼の手の下に感じられた。四邊はしんと靜まり歸

つてゐた。そして全世界が崇嚴な氣息の中に停止してゐるやうに、二人には感じられたのである。彼女もピッタリと彼の軀に密着したくて堪らぬやうにその接觸を續けた。と、彼女は、男の要求の全力を感じた。

裕道はその強壯な兩腕に彼女の軀を抱へたまゝ、桃の蔭の芝生の上へ運んで行つた。

「落ちますわ！」と、彼女は嬌羞と幸福とに咽ぶやうに口籠つた。

裕道は彼女をそこへ坐らして強く緊めつけた。すると、彼女が大人に見えたり、又、子供のやうに小さく見えたりした。彼の手は榮子の上衣を通り越して、彼女の脚を掠めた。と、その昂奮する接觸が彼の心をドキリとさせた。

天空に月は止度ない進行を續け、月光は物皆の上に顫へてゐた。

彼は少女を靜かに寢さした。と、そこは丁度傾科面の上だつたので、二人は向ひ合つて臥るやうになつた。裕道の唇は少女の柔らかい唇と密着した。その燃ゆるやうな長い長い接吻は、或る事を切望してグタリとなつた二人の肉體をば、熱鐵のやうに刺戟したのである。それは、恰も遠い遠い無邊限空……凡ての人間から離れた、窮屈な人間界の規範から離れた……へ、漂よつてゞ

も行くやうな氣がする程、精神の錯亂する瞬間であつた。

裕道の手が未だ觸れたことのない彼女の脚へ觸つた時、榮子はブルブル顫へ乍ら、それに抵抗はしなかつた。

彼女の心持のいゝなよやかな軀が鋭い身震ひさるゝ安逸な感覺に醉はされて、うつとりとした眼瞼を半ば開き乍ら、又千萬無量の或る疑問を仄めかし乍ら、男の方へ知らず知らず伸された。彼女の周圍は、もう今迄の世界ではなかつた。月はもう月ではなかつた。そして明るい牧場の上に丁度引懸つてゞも居るやうに見えた。桃園も今迄の桃園ではなくなつた。彼女の頭はさも重さうに男の方へ傾むいた。

月が隱れた。二人の周圍にはたゞ深い暗闇ばかりであつた。その暗闇の中では頻りに木と草の匂ひがした。と、異樣な、又燒きつけるやうな冷たさが沈默の中に浸徹つた。榮子は深淵の中へ陷つたのである。彼女の手は力なく垂れた。彼女の軀は芝草の上で長々と横たはつた。もう何も見ずに、もう何も意識せずに……。

……………………………………………………………………………………

彼女が、再び我に還つたのは、それから暫らく經た後であつた。彼女は葉末にチラ〳〵と點綴する月の閃光を見た。と、自分が芝生の上に横はつてゐるのに氣がついた。續いてその眼を異樣に輝やかす裕道の顏が見えた。彼女は彼れに抱き緊められてゐるのを感じた。恰かも一體でゞもあるかのやうに。すると、彼女は無抵抗に穩なしく抱きしめられたまんま、さめざめと泣き出した。彼女はもう、取り還しがつかぬやうに或る物を失つたので、それがために泣いたのである。自分自身が可憐さうなために、相手の男がいとしいために泣いたのである。

裕道は腕の間に彼女を抱へて、膝の上に座らした。榮子は子供のやうにおどおどおどし乍ら、其の通りになつた。彼女は夢のやうに自分を慰めてくれる男の聲を聞いた。彼は、彼女をお前、お前と呼んだ。そしてその調子には情愛と和らいだ力と感謝の念とが籠つてゐた。榮子は、男の膝から免れやうと思つた。けれど又新らたに引寄せられたので、柔順にされるまゝになつた。

彼女の周圍は眞暗に靜まり歸つて、いかにも壯嚴に、又いかにも神秘めいてゐた。木々の梢に半ば遮ぎられた月の光には、縹渺たる幻想的の或る物があつた。一切のものが悉く緊張し切つて

恰も何事をか待ち設けてゐるものゝやうであつた。と、彼女が、父や母を愛してゐたといふことも、又裕道の男性的な胸を押しのけるわけに行かなかつたといふことも、更らに又自分は最早處女ではなくなつたのだといふことも、すべて彼女にはそれ等の事象を想ひ出すだけの意力がなくなつてゐたのである。で、男が再び彼女に接吻を始めた時に、彼女はそれを防がうともせず怪しく心を誘はる別世界へでもだん〳〵に遠去つて行くやうな心持ちをしながら、じッと眼を瞑つてその新らしい抱擁に身を委ねるのであつた。折々何も見ず、何も聞えず、又何も感じないといふ時があつた。…、……………………………、……………………………、……

……………………………………………………………。

(もう、みんな同じことだわ、こんなに親密になつて了つた)と、彼女は思つた。(これからどうなるだらう!)とも思つた。…、………………………、………………………。…

…、………、……………………………………………………。………

……………………………………………。

……………………………………………………………………………………。

それから暫く經つて、二人は立ち上つた。彼は手を取つて女を起してやつた。彼女は圃地を見た。眞白な霧を見た。月は恰も夜明けに姿を消さうとしてゐる幽靈のやうに朦朧と蒼白く見えたあたりはほとんど明るかつた。冷たい朝風がもうそよ〳〵と吹いてゐた。東方の空は、恰かも新鮮なミルクを流したやうに、曙の閃光が白く射してゐた。やがて朝の太陽が昇るであらう！

何處か村里の方で三番鷄が鳴いた。夜明け前の活動が、曠野の中から立ち昇るやうであつた。（さう…俺れ達の身靈が燃え切つたのだ！　俺れは久しい間待つた。そして、今、その一如な砂境を惠與せられたのだ！）

裕道は清新な空氣を深く重く吸ひ込み、やさしい眸を、榮子の目の下に投げかけた。

「ねえ、お前は覺えてゐるかい！　あの雷雨の日のことさ。そして、又あの河岸でのことを…」

彼は情婦の手を握つたまゝ訊いた。

「エヽ、覺えてゐるわ！　覺えてゐるわ！　よつく…そして三度目にはいゝことがあると思つたのよ。今夜のことが判つてたのよ！」

榮子はらん〳〵と燃え上る眸を媚びるやうにして答へ乍ら靜かに髮の形を整へた。と、不意に

彼女は父母や教師のことを考へたので、蒼い灰色の顔色になつた。
「どうしたらいゝでせう？」彼女は訴つたへるやうに訊いた。
「どうすることがあるもんか？　俺れ達は、眞實、立派に結婚して了つたぢやないかい？……さう、俺れ達は始めてあの雷雨の下で逢つたさ。又、あの河岸で太陽の光りを浴み乍ら、眞裸體のまゝ逢つたぢやないか。そして、今夜、この月光の下で、こんなにも親密に合一したではないか、御覽ん！　月はまだ消えずに光つてゐるよ。俺れ達はお祈りすれやいゝのだ。何人にも邪魔されることはないのだよ。そして俺れ達は形式的の結婚式なんてものはしなくつたつていゝのだよ、俺れ達は、こんなにも華麗な結婚式を行つて了つたのだもの……」
「でも先生は？」
「奴等が何んだ。奴等が何んとか言つたら直ぐ俺れの所へお出でよ。ね、この桃園は俺れ達の働らくのを待つてる。明日から、俺れ達はこの桃園で勞働しやうよ！　きつといゝだらう！」
裕道は力強く言つた。そしてわァと聲高く叫んだ。
「貴下！　貴下！　私には、貴下ばつかりが力だわ！」

榮子は、彝と彼れの胸へ縋つて泣き出した。「榮子！　榮子！　いゝとも！　いゝとも！　少しも心配することはない。俺れ達はこんなにもいゝのだ！」男は女の肩を撫でゝやつた。

曉の閃光は、最早天空を赤く彩り始めた。榮子は次第に落ちついて、涙に濡れた美くしい濡れた面を上げた。

「判つたかね。俺れ達はこれからいつも一緒に働らくのだよ」道は泌々言つた。

「エヽ」榮子は強く頷いた。

「さア、夜明け前の歌を唄はふか？　一緒にね、勞働の前に‥‥」

もう一度、熱烈な長い〳〵接吻の後に、二人は祈りつゝ合唱し始めた。

あゝ俺れ達の時が來た。
五時半の鐘が中空に。
友よいざ歩まんかな‥‥。

二人は心地よげに呼吸した。元氣のいゝ彼等の眸は、恰も無際限の宇宙を讃美してゐるやうであつた。二人はしつかりと、曙の燦爛たる光輝の中へ歩み始めた。目を覺ました曠野が小春の緣と焰に燃え上つた時、大空の圓天井が輝やいた時、又、二人の眼前に白熱の太陽がのつと雲中へ昇つた時、彼等は恰もその太陽の中に對抗して進み行くやうな氣がしたのである。彼等は桃園を見返つた。そしてそこには何物もなかつたやうであつた。彼れ等は前方を見た。そして無限の路を、互ひに手を取り合つて、しつかりと步いて行つた。(すべて、新らしき農夫には、斯の如き幻想があるものであらう?)

(完)

後文

日出づる大聖の地よ、美くしく懐かしい故郷に住む人衆よ、なんとまあ美くしい天然を持つ所よ、私は其處へ歸つて行かねばならない。そして、清く叫び教へねばならぬ。

あゝ美くしい故郷よ！　世界一の聖地。

愛するみんなよ！　私と一緒に其處へ行かう。美くしい生が持つてる。

火に祭らるゝ少年少女よ、赤兒よ！　火に燒かるゝ青年よ、處女よ！　爾等の聖い胸の火は何處へ消したか！　現代の呪はれたる文明を持つ汝等の顏色は灰色に力無いではないか。心を靜かにし、來つて、若き野の豫言者（火に祭らるゝ農夫）の全員に燃え上がる熱火の焦點に身を投ぜよ。やがて、小さき爾等の胸に聖き祭りの火は燃燒し始むるであらう！

大聖二十一年三月一日

トモノ。タイセイ

創作　新しき農夫　奥附

大正十二年五月二十日印刷
大正十二年五月廿三日發行

定價　二圓二十錢



著者　伴野大聖

發行者　仲摩照久
東京市麹町區山元町一の三

印刷者　三澤善哉
東京市麹町區飯田町二丁目三十三番地

東京市麹町區山元町一ノ三
發行所　新光社
（振替東京四三二四〇）

〔兵林館印刷所印刷〕